熊本県文化財調査報告　第82集

# 神水遺跡 II

## ―江津湖公園整備に伴う文化財調査―

1986

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第82集

# 神水（クワミズ）遺跡 II

## ―江津湖公園整備に伴う文化財調査―

1986

熊本県教育委員会

# 神水遺跡出土舶載青磁と緑釉陶器

右端下　緑釉陶器

# 序　　文

この報告書は、熊本県教育委員会が県土木部の依頼を受けて実施した、江津湖公園整備事業に伴う神水遺跡調査の記録であります。

この調査では弥生時代の住居跡及び墓地、さらに奈良時代とみられる多数の遺構が検出されました。出土遺物の中には特にわが国では、初例の弥生時代の青銅製鉇があり、また中国から輸入された青磁・越州窯が多数含まれており、各方面から注目されているところであります。

報告書公刊にあたり、これらの調査成果が学術研究及び、広く埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるための一助となれば幸いです。

なお、当遺跡の調査にあたり、専門調査員の御指導、県土木部関係者の協力をうけ、さらに調査に参加された各位に対し、深く感謝します。

昭和61年３月20日

熊本県教育長　　伴　　正　善

# 例　　言

1. この報告書は、昭和59年度に熊本県教育委員会が県土木部の依頼をうけて、画津湖公園整備事業に伴って実施した「神水遺跡」の調査記録である。
2. 本書の執筆には緒方勉があたった。
3. 掲載した遺構及び遺物写真は緒方が撮影したが、一部の遺物写真については吉田正一氏の協力があった。
4. 実測図の作成は緒方が専念したが、弥生甕棺の実測については、坂口圭太郎君の手を借りた。
5. 本書の編集は緒方が行った。

# 本 文 目 次


第一章　序　説……1

(一)　神水遺跡の位置と環境……1

(二)　調査に至る経緯……3

(三)　調査の組織……4

第二章　調査の経過……7

第三章　調　査……17

(一)　調査の計画、調査地の土層層序……17

(二)　第一調査区……21

1　弥生時代の遺構と遺物……21

(1)　1号住居址……21

(2)　2号住居址……21

(3)　3・4号住居址……21

(4)　5号住居址……24

(5)　溝・その他……30

2　歴史時代の遺構と遺物……31

(1)　道路遺構……31

(2)　そ　の　他……33

(三)　第二調査区……38

1　弥生時代の遺構と遺物……38

(1)　1号住居址……38

(2)　2・7号住居址……39

(3)　3号住居址……40

(4)　4号住居址……41

(5)　5号住居址……43

(6)　6号住居址と溝……43

(7)　貯蔵穴……45

(8)　円形周溝……47

(9)　溝遺構……47

(10)　甕棺墓……48

(11) その他の第二調査区出土弥生式土器……49
2 歴史時代の遺構……49
道路遺構……49
(四) 第三調査区……61
1 弥生時代の遺構と遺物……61
2 歴史時代の遺構と遺物……67
(1) 貯蔵穴（土壙）と出土遺物……67
(2) 道路遺構……79
(3) 溝遺構……79
(4) 貯蔵穴周辺の硬化面その他……80
(5) 第三調査区出土遺物……81
(五) 第四調査区……98
1 弥生時代の遺構と遺物……98
(1) 溝状遺構……98
(2) 土　　壙……103
(3) 木棺墓……103
(4) 甕棺墓……107
(5) 第四調査区遺構以外の発見遺物……133
2 歴史時代の遺構と遺物……136
(1) 道路遺構……136
(2) 溝遺構……143
(3) 土　壙……143

神水遺跡出土の縄文土器……164

第四章　神水遺跡調査の成果と課題
(一) 調査の成果……166
(二) 弥生時代の遺構と遺物について……169
(三) 歴史時代の遺構、貯蔵穴に関して……172

附論　熊本市神水（くわみず）カメ棺弥生人骨……北條　暉幸……195

# 挿　図　目　次


第１図　神水遺跡と周辺主要遺跡……2
第２図　調査地の現況……5～6
第３図　神水遺跡土層模式図……17
第４図　第一調査区遺構分布……19
第５図　第一調査区１・２号住居址……20
第６図　第一調査区３・４号住居址……23
第７図　第一調査区５号住居址……24
第８図　第一調査区出土弥生式土器１……25
第９図　第一調査区出土弥生式土器２……26
第10図　第一調査区出土弥生式土器３……27
第11図　策一調査区出土弥生式土器４……28
第12図　第一調査区出土弥生式土器５……29
第13図　第一調査区道路遺構断面……32
第14図　第一調査区出土土師器……33
第15図　神水遺跡出土瓦１（第一調査区道路遺構）……34
第16図　神水遺跡出土石器……35
第17図　神水遺跡出土石器玉類……36
第18図　第二調査区遺構全体図……37
第19図　第二調査区１号住居址……39
第20図　第二調査区２・７号住居址……40
第21図　第二調査区３号住居址……41
第22図　第二調査区４・５号住居址……42
第23図　第二調査区６号住居址と２号溝……44
第24図　第二調査区土壙・円形周溝発見時の遺物出土状態……45
第25図　第二調査区土壙（貯蔵穴）……46
第26図　第二調査区円形周溝……47
第27図　第二調査区甕棺出土状態……48
第28図　第二調査区出土弥生式土器１……50
第29図　第二調査区出土弥生式土器２……51
第30図　等二調査区出土弥生式土器３……52

第31図　第二調査区出土弥生式土器４……53
第32図　第二調査区出土弥生式土器５……54
第33図　第二調査区出土弥生式土器６……55
第34図　第二調査区出土弥生式土器７……56
第35図　第二調査区出土弥生式土器８……57
第36図　第二調査区出土甕棺……58
第37図　第二調査区出土石皿……59
第38図　第二調査区道路遺構……60
第39図　第三調査区表土削去後の状況……62
第40図　第三調査区硬化面下出土弥生式土器（Ｃ－４Ｅ）……63
第41図　第三調査区出土弥生式土器……64
第42図　第三調査区遺構発見状況……65～66
第43図　第三調査区１号貯蔵穴……68
第44図　第三調査区２・３号貯蔵穴……70
第45図　第三調査区４号貯蔵穴……71
第46図　第三調査区５号貯蔵穴……73
第47図　第三調査区硬化面上の遺物出土状態１……75
第48図　第三調査区硬化面上の遺物出土状態２……76
第49図　第三調査区溝４……77
第50図　第三調査区硬化面撤去後のピット群……78
第51図　第三調査区出土土師器１……83
第52図　第三調査区出土土師器２……84
第53図　第三調査区出土土師器３……85
第54図　第三調査区出土土師器４……86
第55図　第三調査区出土土師器５・須恵・黒色土器……87
第56図　第三調査区出土土師器６・須恵・黒色土器……88
第57図　第三調査区出土黒色土器・須恵器……89
第58図　神水遺跡出土墨書銘土器……90
第59図　神水遺跡出土瓦２（第三調査区）……91
第60図　神水遺跡出土瓦３（第三調査区）……92
第61図　神水遺跡出土越磁・緑釉陶器……93
第62図　神水遺跡出土金属器１（鉄器）……94
第63図　神水遺跡出土金属器２（鉄器）……95

第64図　神水遺跡出土金属器３（鉄器・青銅器）……96
第65図　第三調査区出土石鍋……96
第66図　第四調査区遺構分布図……99
第67図　第四調査区溝５および11号土壙……100
第68図　第四調査区15号土壙……101
第69図　第四調査区12・13・14・17号……102
第70図　第四調査区18号土壙……104
第71図　第四調査区１号木棺墓……105
第72図　第四調査区２・３号木棺墓……106
第73図　第四調査区１～３号甕棺出土状態……108
第74図　第四調査区１～３号甕棺……110
第75図　第四調査区５号甕棺出土状態……111
第76図　第四調査区５号甕棺……112
第77図　第四調査区12号甕棺出土状態……113
第78図　第四調査区12号甕棺……114
第79図　第四調査区11・12・14号甕棺人骨出土状態……115
第80図　第四調査区13号甕棺と人骨出土状態……116
第81図　第四調査区13号甕棺……117
第82図　第四調査区14・15号甕棺出土状態……119
第83図　第四調査区14号甕棺……120
第84図　第四調査区10・15・16号甕棺他……121
第85図　第四調査区４号甕棺出土状態……122
第86図　第四調査区４号甕棺……123
第87図　第四調査区６号甕棺出土状態……125
第88図　第四調査区６号甕棺と上甕にのっていた壺の口縁……126
第89図　第四調査区16号甕棺出土状態……127
第90図　第四調査区７号甕棺出土状態……127
第91図　第四調査区７号甕棺……128
第92図　第四調査区８号甕棺出土状態……129
第93図　第四調査区８号甕棺……130
第94図　第四調査区９号甕棺と人骨出土状態……131
第95図　第四調査区９号甕棺……132
第96図　第四調査区10号甕棺出土状態……133

第 97図　第四調査区11号甕棺出土状態……134
第 98図　第四調査区11号甕棺……135
第 99図　第四調査区弥生式土器 1 ……137
第100図　第四調査区弥生式土器 2 ……138
第101図　第四調査区弥生式土器 3 ……139
第102図　第四調査区弥生式土器 4 ……140
第103図　第四調査区弥生式土器 5 ……141
第104図　第四調査区歴史時代遺構……144
第105図　第四調査区 1 号土壙……145
第106図　第四調査区 3 号土壙……146
第107図　第四調査区 7 号土壙……147
第108図　第四調査区 9 ・10号土壙……148
第109図　第四調査区16号土壙（貯蔵穴）……149
第110図　第四調査区 2 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 8 ・11号土壙……150
第111図　第四調査区19号土壙……151
第112図　第四調査区出土土師器 1 ……156
第113図　第四調査区出土土師器 2 ……157
第114図　第四調査区出土土師器 3 ……158
第115図　第四調査区出土土師器 4，黒色土器……159
第116図　第四調査区出土須恵器……160
第117図　神水遺跡出土瓦 4 （第四調査区）……161
第118図　神水遺跡出土瓦 5 （第四調査区）……162
第119図　神水遺跡出土瓦 6 （第四調査区）……163
第120図　神水遺跡出土瓦 7 （第四調整区）……164
第121図　神水遺跡出土縄文土器……165

# 表　目　次

表１　弥生甕棺墓一覧……142
表２　第四調査区各土壙計数……155

# 図 版 目 次


図版 1　神水遺跡調査前景観……175
図版 2　第一調査区弥生時代住居址……176
図版 3　第一調査区道路遺構……177
図版 4　第二調査区遺構の検出確認作業……178
図版 5　第一調査区 1 号住居址……179
図版 6　第二調査区の各遺構 1 ……180
図版 7　第二調査区の各遺構 2 ……181
図版 8　第三調査区遺跡景観 1 ……182
図版 9　第三調査区遺跡景観 2 ……183
図版10　第三調査区発見の貯蔵穴……184
図版11　第三調査区溝 4 と遺物出土状態……185
図版12　第四調査区甕棺出土状態 1 ……186
図版13　第四調査区甕棺出土状態 2 ……187
図版14　第四調査区発見の木棺墓……188
図版15　第四調査区道路遺構と土壙……189
図版16　神水遺跡出土金属器他……190
図版17　神水遺跡出土石器他……191
図版18　神水遺跡出土甕棺……192
図版19　神水遺跡出土土師・黒色土器及び須恵器……193
図版20　神水遺跡出土縄文・弥生土器及び布目瓦……194

# 第一章　序　　説

## (一)　神水遺跡の位置と環境

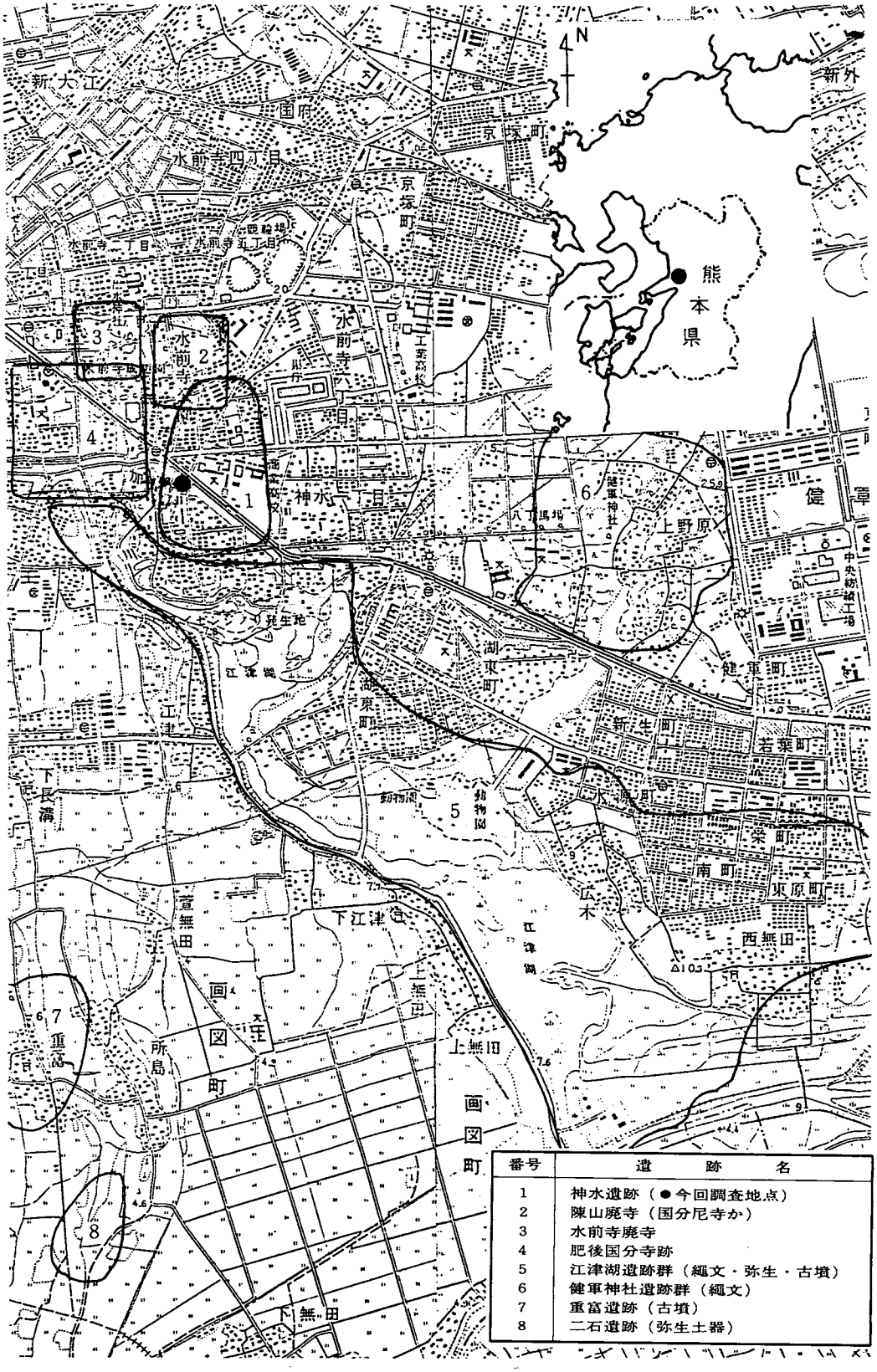
神水遺跡は託麻台地の南縁、加勢川（上江津湖）の北岸上に占地し、熊本市の甕棺遺跡として早くから注目されたことが記録に残されている。しかし、これまで殆んど学術調査が行われたことはない。大正5年1月11日付、九州日日新聞の写真によれば、アルコール会社（協和発酵跡地）前で甕棺一基が出土している。ついで、昭和7年刊の「熊本市史」にも甕棺出土が記載され、昭和20年には県立熊本商業高校前の軌道敷工事中に破砕された甕棺のあったことが知られている。また昭和29年9月には水道工事の際甕棺が出土、7基の甕棺の調査がなされている。その後も昭和46年9月には協和発酵敷地内での用水池工事の際にも甕棺が出土している。

この様に神水遺跡は、弥生時代の甕棺遺跡として一般に知られており、この一帯が市街地ということもあって、発掘調査することの困難さも伴い本格的な発掘調査に至っていない。

昭和57年には、神水遺跡の周辺にあたる「江津ボーリング場」跡地に県立図書館が計画され、その地域の発掘調査を県教育委員会が実施した。続いて、昭和58年度には熊本市が体育館及び青年会館を協和発酵跡地に建設を計画するに及び、現地を熊本市教育委員会の手で埋蔵文化財の発掘調査がなされている。この時の調査では神水遺跡に各時代にわたる遺構や遺物の存在することが文化財関係者に知られるに至った。

神水遺跡周辺の重要遺跡として、加勢川を挟んで両側の地域に、肥後国分寺跡が、また本遺跡の北側には陳山廃寺の各寺院址がある。前者は奈良－平安の肥後国分僧寺で、後者は国分尼寺と推定されている。昭和58年度の本遺跡試掘の際、布目瓦、土師埦等の出土は、これら寺院址と無縁でないことを物語っている。

なお、熊本市教育委員会発行の「熊本市内遺跡地図」によれば、神水遺跡は、国土地理院発行五万分の一「熊本」、北より11㎝、東より1㎝の交点あたりの東西500ｍ、南北600m位の範囲の地域を想定しており、今次の調査地点は、北より11.1cm、東より2.1cmの交点に相当する。




| 番号 | 遺　　跡　　名 |
|---|---|
| 1 | 神水遺跡（●今回調査地点） |
| 2 | 陳山廃寺（国分尼寺か） |
| 3 | 水前寺廃寺 |
| 4 | 肥後国分寺跡 |
| 5 | 江津湖遺跡群（縄文・弥生・古墳） |
| 6 | 健軍神社遺跡群（縄文） |
| 7 | 重富遺跡（古墳） |
| 8 | 二石遺跡（弥生土器） |

**第1図　神水遺跡と周辺主要遺跡**

## (二) 調査に至る経緯

昭和57年３月、熊本市の水前寺江津湖公園の一部として整備される協和醗酵跡地を試掘した。その結果を次の様に報告している。

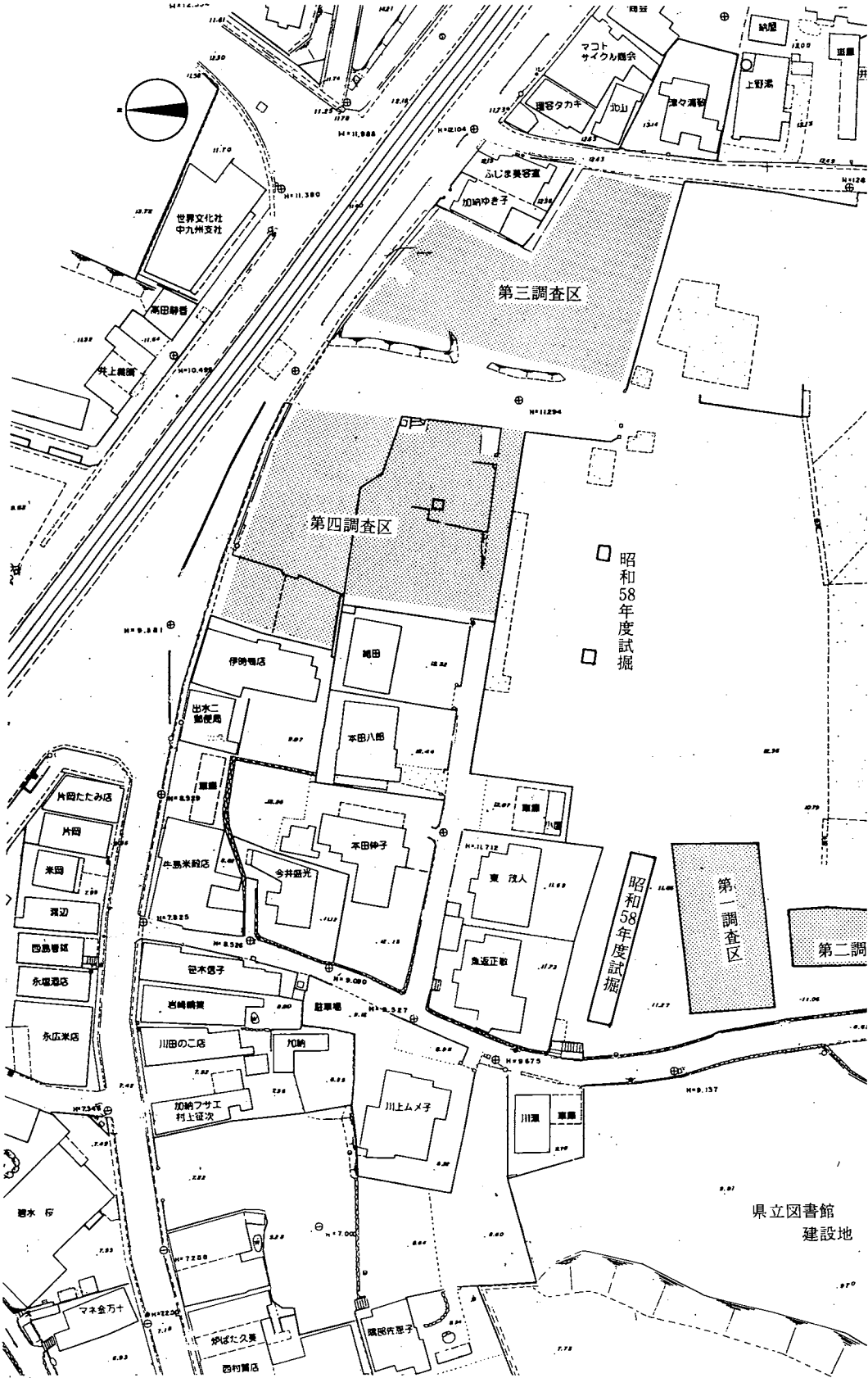
「ついで協和醗酵跡の試掘をする。１・３・５の各グリッド及び進入路にあたる正門との間の二地点を発掘する。ここでの調査結果は、部分的に上からの撹乱があるものの遺構の残りは良好で、とくに３・５グリッドでは弥生時代の住居址の一部とみられるものが検出された。従って、この一帯には弥生時代の住居址群が埋没しているものとみられる。また意外なことに、３グリッドでは縄文前期と見られる曽畑式土器の破片が多数発見された。調査により縄文期の遺構検出も期待される。」

その後、昭和59年度にいよいよ県立図書館建設着工となり、３月から早急に工事のための進入路にあたる地点から調査を始めて欲しい……として、４月に至り予算の令達を受け、事務処理のうえ現地調査に入った。

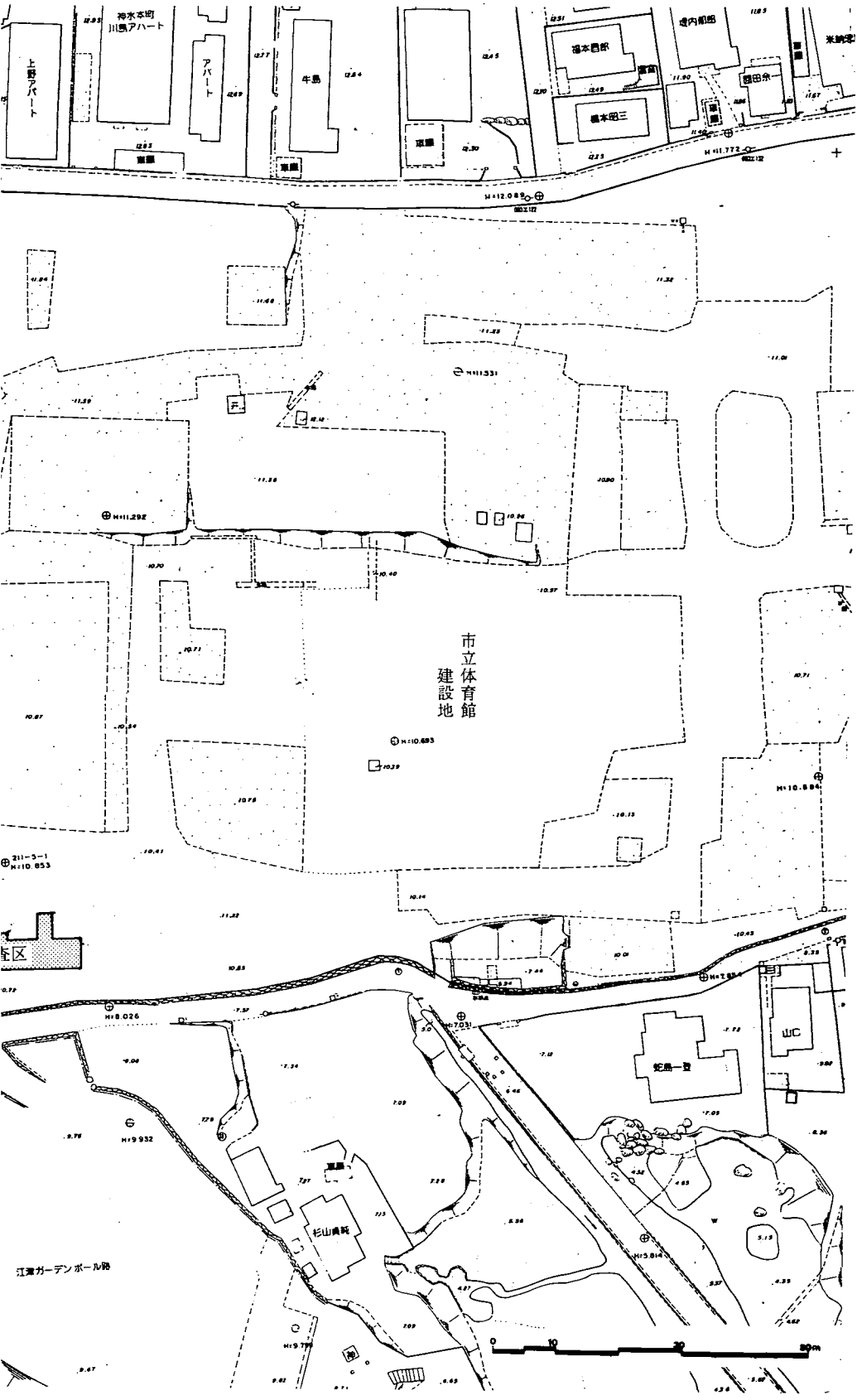
注　『神跡遺跡』－県立図書館建設に伴う文化財調査－　熊本県文化財調査報告第69集1984　熊本県教育委員会

## ㈢　調査の組織

| | | |
|---|---|---|
| 調査責任者 | 前文化課長 | 米村嘉人 |
| | 文化課長 | 森　一則 |
| | 前文化課長補佐 | 佐々木正典 |
| | 主幹(文化財係長) | 隈　昭志 |
| 専門調査員 | 産業医科大学教授 | 北條暉幸 |
| | 奈良文化財研究所<br>考古第一調査室長 | 工楽善通 |
| 調査事務担当者 | 前文化課主幹<br>(経理係長) | 大塚正信 |
| | 文化課主幹 | 柴田和馬 |
| | 前文化課参事 | 花田隆二 |
| | 文化課参事 | 森　貴史 |
| | 文化課主事 | 谷　貴美子 |
| | 文化財保護主事 | 西沢八朗 |
| | 前土木部都市<br>計画課主事 | 松岡洋臣 |
| | 土木部都市<br>計画課主事 | 椛田律雄 |
| 現場担当主査 | 文化課課付 | 緒方　勉 |
| | 嘱　託 | 山城敏昭 |
| | 臨時職員 | 安達武敏 |
| | 〃 | 島津陽子 |
| | 整　理 | 穴見恵美子 |
| | 〃 | 塩田喜美子 |
| | 〃 | 後藤直美 |


第三調査区
第四調査区
昭和58年度試掘
昭和58年度試掘
第一調査区
第二調
県立図書館
建設地
世界文化社
中九州支社
高田静香
井上義弘
マコト
サイクル商会
理容タカキ
北山
上野湯
ふじま美容室
加納ゆき子
伊納電店
出水二郎使局
浦田
本田八郎
本田伸子
今井盛光
牛島米穀店
東 孜人
魚返正敏
笹木信子
岩崎時雄
駐車場
川田のこ店
加納
加納フサエ
村上征次
川上ムメ子
川瀬
片岡たたみ店
片岡
米岡
渡辺
四島書店
永塩酒店
永広米店
碧水 桜
マネ金万十
炉ばた久美
西村酒店
磯岡内豊子

第２図　調査地の


上野アパート
神水本町
川島アパート
アパート
牛島
福本昌郎
橋本昭三
市立体育館
建設地
杉山貞蔵
蛇島一登
山口
江東ガーデンポール路
0
10
20
30m

現況

# 第二章　調査経過

前年度（昭和58年）、協和発酵跡地の南半に市立体育館及び青年会館の建設予定地の発掘調査が行われ、予想を上回る大規模遺跡であるため59年度まで調査を持越していた。画図公園の一部として整備が予定されている協和発酵跡地の北半分の地域には、58年度のこの地区の試掘の結果とも合せて、全域の遺構のひろがりが予想された。公園整備地の調査は、結果的に建設工事と併行して実施することになり、土木部の要請に基づき逐次発掘調査を実施した。

まづ、県立図書館建設工事に必要な進入路にあたる地区の調査を早急に実施し、完了して欲しいということで、その地区から発掘調査をはじめることになった。以下調査日誌をもとに主な調査経過をたどることにする。

**4月**に入り、**4日**には建築課の要請に基づき図書館建設に必要な現場事務所を建設するということで、地点撰定のため計画課松岡主事、文化課より緒方参事、西沢主事が立会う。

一方、調査準備のため資材の集積、プレハブ及びバックフォーのリース等の事務処置、土木部からの予算の令達を待って現地調査に入った。

**昭和59年4月16日**　月　快晴　第Ⅰ調査区にある樹木の伐採、当該地区の測量(1/100）にかかる。測量図は既に出来ている業者の1/500図に合わせる様に配慮する。

**4月17日**　火　快晴　現地に調査資材の保管と作業員の休息のためにプレハブ小屋をつくる。

**4月18日**　水　くもりのちはれ　重機のバックフォーを搬入、線で囲った27m×13mのところの表土はぎにかかる。地表から約80cm下げるが、元々工場跡地であるため、産業廃棄物（焼酎ガメ、その他）が多量に埋められていて土層を確認しながら機械を誘導する。産業廃棄物は南北方向の溝を利用して、南側にコンクリート擁壁を設け埋められていることが分る。この時発見の溝状の遺構は、後刻の調査で道路遺構ということになる。

機械による表土はぎの後、数日間は遺構確認のため上土を除去する。

**4月25日**　水　くもり　この日、溝状遺構の南側断面を削ることにより地表約下2.3mに硬化面があることがわかり、その延長は東西方向に延びており道路遺構としての可能性が強まる。

**4月26日**　木　小雨　道路遺構の北側には弥生住居址を検出、本日より発掘をはじめ併せて道路遺構の発掘を行う。

**5月**に入り、住居址及び道路遺構の発掘、遺物出土状態の実測、写真撮影を急ぐ。やっと遺構が出かかったというのに、土木部としては早くこの地区を明け渡してくれという催促があり、発掘調査と土木工事を併行して実施することの困難さを痛感する。

**5月11日**　金　快晴　道路遺構では遺物（主として布目瓦）の発掘、写真撮影、実測、遺物取上げを繰返す。3号住居址では土器に混って磨製石鏃が発見される。

**5月15日**　火　くもり小雨　前日雨で水たまりを除いて道路遺構発掘、3号住居址の遺物実測。

**5月19日**　金　晴　この頃天候不順で作業を中断することも多い。道路遺構の南側への遺構検出をする。この一帯は広域にわたり、深いところまで工場操業時の撹乱が入っている。しかし、西側には元の地層が残っていて住居址(5号)、焼土、柱穴が検出される。また南側の壁ぞいのところから溝遺構もあらわれる。

**5月21日**　日　くもり　調査は引続き第一調査区の道路遺構と住居址の発掘、遺物の実測取上等である。道路遺構の調査は手順として西から順次はじめるが、本日で中に埋っていた瓦礫、焼酎甕等の除去を終わる。道路遺構は硬化面（道幅）3m余、深さ2m余りの凹道で、北側に段のあることが知れる。調査は肩口付近の精査をする。

**5月23日**　水　くもり後はれ　道路遺構及び道路遺構北側の住居址の精査、午後3時には土木部（計画課、建築課）職員と現場で今後の現場処理について話合う。

**5月30日**　水　くもり後はれ　第一調査区での道路遺構の床面露出、作図と発掘を急ぐ。一方第二調査区は公園のトイレ予定地ということで、先日のバックフォーと排土運搬用のダンプカーの起案、決裁のうえ作業に入る。計画課が指定した土置き場(構内100mばかり北）に移すため、排土の作業効率も大きく落ちる。

**6月4日**　月　はれ　第一調査区3～5号住居址及び溝状遺構発掘。この日5号住居址から石包丁出土。第二調査区はバックフォーで排出した残土の処理。土木部との打合わせで、上旬までに第一調査区の現場を引渡すことになる。工事と併行して発掘調査をするため、排土処理一つにしても時間がかかり、調査効率が悪い。また別して、今年の5月は雨が多く、水たまりが出来作業を中断することも少なくなかった。この頃、これまで調査にあたっていた山城敏昭君に代って安達武敏君との交替の話が出る。12日には業者側に明け渡した第一調査区の工事がはじまる。塡圧の後またたく間に簡易舗装が出来る。

**6月14日**　木　くもり　第一調査区の南に第二調査区を設定し、機械による表土はぎの後、遺構の検出と作業を進めるが、この地区も第一調査区に劣らず工場操業時の撹乱が多い。コンクリート基礎、水道管、避雷針のための埋設物などで、それ等の撹乱土の確認から作業を進める形になった。この日、北西コーナー付近に1号住居址（弥生）その東側に第一調査区の溝の延長とみられる溝状遺構（弥生）があらわれる。また中央付近には東西方向に走る幅30cmばかりの歴史時代の踏分け道が検出される。

なお、第二調査区の南側の東半には、もともと工場のアルコールタンク（二基）があったところで、堅固なコンクリート基礎を残していた。ここに最早、遺構そのものの残っている可能性がないので発掘を断念した。

**6月15日**　金　くもりのちはれ　1号住居跡の南側には2号住居址のあることが知れ、遺構のプランの一部と焼土が検出された。漸次スライスして遺構の確認につとめたが不明確であった。そこで遺構の端と床面をおさえるため焼土の付近は幅20cmの試掘溝を十文字に設定、移植

ごてで慎重に発掘を進めた。

**6月18日**　月　くもり時々はれ後雨　踏分け道上には布目瓦の小片があり、ほぼ時期も推定出来る状態であった。北から延びる溝状遺構の末端は途中で調査域外に消えるとみられるが、数次にわたる土層の撹乱がみられ、2号住居址同様遺構のプランがはっきりしなかった。本日より山城君は安達君と入れ替った。

**6月21日**　木　くもりのちはれ　前日が雨で足場悪し。踏分け道の実測、写真撮影、また一方では1号住居址の出土遺物の実測。本日より建設資材としての鉄筋搬入、クレーン車、大型トラックが行きかい、終日騒然として周囲の環境が急にあわただしくなった。

**6月22日**　金　くもり　第二調査区は地形のうえから南の方になるにしたがい漸傾している。そこで同じ水平面では南の方の遺構の検出は難かしい。そこで調査区の北端から10m位のところから、遂次10cm位づつ掘下げ遺構の確認につとめる。

**7月3日**　火　快晴　これまで土木部と接渉の末、次に県道（電車通り）に接した入口の北側の調査をする様にということで、ここを第三調査区としてバックフォーを搬入、ダンプカーで表土を運び出すことにする。ここでは覆土が深く、排土に数日かかりそうである。

**7月4日**　水　はれ　第三調査区1号住居址調査中、住居址内の柱穴横から青銅器小片を発見した。この青銅片は白銅質の3×2cm位の小片でそれが鏡鑑でないことは確かで、この遺跡から出土する土器が弥生中期のものだけに、青銅器の種類については余計に興味がひかれた。後刻、奈良文化財研究所の協力により、それが青銅製の鉇（やりがんな）であることが判明するが、思いがけない発見であった。時に午後4時のことである。

第三調査区では、県道（電車道）進入路の付近の表土はぎを行うが、地表から約1m、ローム層のところまで現代の撹乱があり、遺構検出の可能性のないことを見極めた上で埋め戻す。

**7月10日**　火　くもり　第三調査区の表土はぎの作業を引続き行う。第二調査区では3号住居址のプラン確認のうえ、中央に十字形の土層観察のための畦を残して掘下げを行う。夜の電話では、調査員の安達君怪我のため入院との知らせあり、第二調査区の発掘を残務処理の後一時凍結。同君の回復をまってあらためて調査を再開することにした。

**7月12日**　木　くもり　引続き第三調査区の表土はぎと、ダンプカーにより排土の搬出をする。第二調査区では3、4号住居址の発掘をすすめるが、4号住居址内から滑石製勾玉(弥生)が発見される。

**7月13日**　金　くもり時々雨、一時豪雨　第三調査区ではバックフォーによる排土をするが第四調査区では前以って雑木を伐採する。

**7月16日**　月　快晴　本日梅雨明け、早々と酷暑に見舞われる。第三調査区の表土はぎを終え、引続き遺構確認作業。ここから布目瓦など出土するが、土に慣れないせいか遺構の状態がはっきりしない。

**7月17日**　火　快晴　梅雨明け後の酷暑。第三調査区の土層確認のためのテスト掘りを3か所する。この日、東の境界域ぞいに溝状の遺構そして中央部に踏分け道のあることが判明。

**7月18日**　くもり後快晴　第三調査区では表土はぎを終わり、遺物が出土しかかったところで10m方眼のグリッドを設定、10m毎北から南へ1～6、東から西へA、B、C、Dとし区割りをした。

**7月25日**　水　快晴　上土除去の後現代の撹乱土の範囲を捉え、D－5区あたりを手始めにC－5区、C－6区と遺物の露出にかかる。このうちC－5区では遺物の出土量が多く、布目瓦、土師器片のほか、鉄釘、鉄鏃などの出土が相次ぐ。これらの各区では10m方眼の中をさらに2m方眼に細分し、東北隅の1から南西隅の25までに番号をふり、遺物の出土状態を1/20の図でとることにした。

**7月26日**　木　快晴　第三調査区では・布目瓦・須恵器片・土師器片が次々と発見されるが、鉄刀子・石製紡錘車各1点も検出される。また飴色の釉のかかった越磁一点が出土する。越磁については、その後出土する量がふえてくるが、明代まで時期の降るもののないのは注目すべき現象である。

**8月2日**　木　はれ　第三調査区では引続き発掘、実測、遺物の取上げをする。C－5、D－5及びC－6、D－6の交点あたりでは焼土のひろがりがあり、一つの生活面であることを示していた。また同一面から木炭、スラッグなども出土した。

**8月7日**　火　くもり　蒸し暑い　C－5、B－5、6のあたりを発掘。遺物取上げ後のC－5では引続き遺構の確認をするが、硬化面のひろがる中、点々とピットがあらわれ、さらに5m×5m位の範囲にわたり何等かの遺構(掘込み)の存在を示す状況があらわれた。

**8月8日**　水　快晴　前月に検出しかかった遺構のプランを確認、慎重を期すため、東西南北に1～1.5mの桝をつくり、1/4カット方式により発掘を進めた。この様にして掘り進めたところ、径1.5m前後の円形土壙（土壙1～3）が3個あることが判明した。

**8月9日**　木　快晴　酷暑　第三調査区発見の土壙は形状からいって、古代の井戸の可能性を考えて発掘を進めたが、同一場所に集中するところに難点があった。各土壙は40～80cm掘下げたが、層中には須恵・土師器の破片のほか、布目瓦等が含まれていた。

**8月27日**　月　快晴　第三調査区ではこれまで遺構の確認と共に、検出した多数のピットを掘りはじめる。ピット中から土師器（歴史時代）のほか、磨製・打製の石鏃なども出土する。

安達調査員は8月から出勤することになったが、事故後の体調の回復をまって本日より第二調査区の調査再開をすることにした。まず調査域内の草取り、清掃ををする。

**8月28日**　火　くもり　第三調査区では1～3号土壙のほか、D－5から4号土壙が検出されその発掘をする。この土壙、布目瓦、土器片のほかに鉄釘が出土する。第二調査区では住居址の確認5基のほか、さらに1基が顔を出している。

**8月29日**　水　晴　第三調査区の4号土壙では不明鉄器が発見された（後でそれが燧鉄（ひうちがね）であることが判明）。1、2号土壙では発掘実測を繰返す。第二調査区では3号住居址の実測をする。

**9月3日**　月　くもり時々小雨　第二調査区では小雨のため作業中断、第三調査区では遺物取上げの後、硬化面の露出、ピット掘りをする。

**9月6日**　木　くもり時々晴　9月になって酷暑も和らぎ、涼風が吹き抜ける様になる。第二調査区では各遺構の実測にかかる。第三調査区ではB－6の一帯を精査の結果、硬化面の下位とみられ3層から多数のピットがあることが判り、他のところでも硬化面を撤去して発掘を進める必要が出てきた。

**9月7日**　金　くもり後雨　第二調査区では4号住居址のプラン確認に努めたが、南と東側は撹乱のため一部のみ判っただけである。4号住居址は3号住居址と重なり、4号の方が後の住居址ということも判明した。第三調査区ではピットの図面をとり、番号を付し中の遺物も取上げる。

**9月11日**　火　晴　第二調査区では3号住居址の西側は、北から延びる溝と競合し、不鮮明であるためその検出につとめる。4号住居址では3号住居址との切合うあたりと中央部の床から少量の朱とみられる顔料があった。また、4号住居址の南東部は工場の建物で検出不可能。

**9月12日**　水　くもり　第二調査区では前月に引続き3、4号住居址の調査。3号住居址でもプラン検出をする。第三調査区では、C、D－4あたりで二条の小溝（溝1・3）が硬化面の外側にあらわれた。

**9月13日**　木　くもり時々小雨　第二調査区では2号及び4号住居址発掘。第三調査区では溝2の追跡及びその発掘。

**9月20日**　木　くもり　第三調査区の1～4号土壙の発掘は、ほぼ終わり約1mで底に達し、井戸としての可能性は全く消えた。1号土壙では精査の結果、壁面下に柱穴のあることが判明した。そこから貯蔵穴ではないか、という疑問が出てきた。第二調査区では2号住居址は別の住居址と重複していて、その床面の検出作業。3、4号住居址は断面図を作成する。また水道管敷設の際の撹乱土の中から曽畑式土器があらわれる。

**9月27日**　木　快晴　第二調査区ではこれまで4号住居址の南側の上土を取除き、遺構の検出確認をする。4号住居址はほぼ方形のプランをしており、中央に炉とみられるものが検出される。第三調査区では1～3号土壙の実測、A、B－6のあたりでは約20cm掘下げ、下位のピット群の検出を続ける。

**9月28日**　金　晴午後小雨　第三調査区では前日の作業の継続。第二調査区では4号住居址の東南に5号住居址が一部確認された。第三調査区1号土壙から完形の須恵埦が出土する。

**10月1日**　月　くもり　月が変わったが蒸し暑い日が続く。第二調査区の南に一辺 2.5m位の遺構を6号住居址（発掘の結果、後に住居址でないことが判明、貯蔵穴として処理した）とみら

れるものを確認、その南に円形周溝の一部があらわれる。この周辺の遺物包含層から磨製石鏃、黒髪式土器が出土する。

**10月3日**　水　くもり時々小雨　第二調査区では貯蔵穴の発掘、中から黒髪式土器などが出土。また円形周溝は西半を調査区域外に残して全容をあらわす。第三調査区では下位のピット群の検出と発掘、調査区の東端の溝4の検出につとめるが、近くに住む人の話では、元協和発酵の東を画する道路は、神水町と出水町の境界になっていて、50年程前には掘切道が砂取小学校西側を通り北へ延びていた。この掘切道は現在は平坦になっているが、雨の日は水路に変り南へ流れていた、ということで証言をもとに考えれば東端の境界域ぞいに延びている溝4のラインは、掘り切道の肩を示しているものとみられる。

**10月4日**　木　くもり　第二調査区では円形周溝の東側に甕棺墓一基を確認、発掘の結果、やがてそれが頭位を東北に向けた合口の壺棺であることが判明した。また調査区の最も南から住居址一基検出、あらためてこれを6号住居址として処理することにした。第Ⅲ調査区では溝4の発掘により、調査域外からの道路の崩壊を考慮に入れ、A－5の張出し部分を発掘、その他B－5附近の下位のピット群の発掘。

**10月8日**　晴　第四調査区を第三調査区の西に設け、バックフォーとダンプカーを使用して表土はぎをはじめる。この地区も現代の撹乱が広範囲に及んでおり、現地表下約1mの地下げが必要である。第二調査区では貯蔵穴と甕棺の発掘により、6号住居址とみていた貯蔵穴は、住居址の可能性が全く消えた。壺棺は下甕に複合口縁の、胴部に突帯をもった壺を使用し、上甕には口縁を打ち欠いた壺を使用していることが判かる。第三調査区は引き続きピット掘り。

**10月11日**　木　晴　県文化財保護審議員の白木原和美、原口長之の両氏、及び元県文化課長田辺哲夫氏を招いて神水遺跡調査についての助言を乞う。第三調査区の各土壙について、「いもの貯蔵穴」ではないかの意見も出るが、埋土の深さ、包含する遺物、土質からいってその可能性はないと説明をする。作業は前日に引続き第二調査区の甕棺の発掘と実測、第三調査区のピット掘り、第四調査区の土木機械による表土はぎをする。

**10月16日**　火　くもり　前日より奈良文化財研究所より工楽善通技官を派遣してもらい、神水遺跡についての助言指導をお願いする。

第四調査区では表土はぎが終わり、甕棺、その他の遺構の検出につとめる。

**10月17日**　水　晴　第二調査区では4号住居址の実測、円形周溝の発掘清掃、貯蔵穴の精査を続けるが、貯蔵穴の底面より8cm位の上位から素文の重弧文土器とみられる破片が発見される。この遺構内には黒髪式土器を主体とした弥生中期の土器が大部分であるのに、後期とみられる土器の発見には戸惑った。

**10月18日**　木　晴　第二調査区では貯蔵穴の実測、その結果深さ約65cm2.1×2.4mの歪んだ角丸方形であることがはっきりした。6号住居址（南端）は住居址内に溝が一条発見される。

第三調査区では下位のピット群は1/50測量図をつくる。

**10月24日**　水　くもり　第四調査区では表土はぎ後の残土除去により、南北方向の三条の踏み分け道を検出についで引続き土壙確認に努める。第三調査区では５号土壙の中から越磁の小片、完形の土師埦などが中より出土するが、床面には白色粘土がしかれていた。25日には熊本市建築課（境博明参事）及び県土木部都市計画課と作業工程について打ち合わせをする。

**10月31日**　水　快晴　第二調査区では遺構全体図1/50を作成。第三調査区では１～５号土壙の発掘がほぼ完了。土壙内に柱穴とみられるピットの存在が確認された。土壙中からこれまで布目瓦、土師・須恵器、鉄釘、越磁などが出土し、およそ奈良～平安期のものとみることが出来る。土壙の周りの硬化面の撤去もはじめるが、硬化面は20～30cmの深さにまでかたくしまっていた。

**11月５日**　月　快晴　第三調査区では硬化面の撤去、そして掘り下げる。第四調査区では10m方眼のグリッドを作成することにし、南側のブロック塀と平行線を求めることとし、東からA・B・C、北から１・２・３とする。その一方、本日より露出した１～５号の小形甕棺を発掘しはじめる。

**11月６日**　火　快晴　10月10日以降、降雨なし。乾燥で遺構とした土壙の検出が困難になる。第三調査区では硬化面撤去後のピットの検出につとめるが、殆んど発見されることなく、B－６あたりと様子が違っている。C－４のあたり弥生後期の土器が一括出土、住居址の可能性が出てくる。第四調査区では２号甕棺を実測のうえ取上げる。

**11月８日**　木　晴　第三調査区では硬化面の撤去、発見されたピット掘りをする。第四調査区では１～３号甕棺を発掘、実測、取上げ、５号甕棺の発掘をする。ここの甕棺の合口の部位には粘土で目張りのあるのも特徴の一つである。

**11月９日**　金　くもり　土木部との打合わせで現場事務所の移転、中の資材の撤去で一時作業を中断、第三調査区は前日の作業の継続、第四調査区では５号甕棺の実測をするが、上・下甕の合口のところの粘土目張りは、甕棺埋置後、黄色の粘土を横から押込んだものとみられた。

**11月13日**　火　くもり　11日には久方ぶりの雨、遺跡も適度のしめりをみて遺構検出に好都合である。第四調査区では上土を除去の際、B－１より片刃磨製石斧などが出土する。取上げ後の１・３・５号甕棺は現場小屋を空けるため収蔵庫に運ぶ。

**11月19日**　月　くもり　調査の重点は第四調査区に移る。引続き上土除去、そして遺構の検出を急ぐ。道路遺構は南北方向の三条（都合四条）の小路と、A－２の東端には更に一条、東西方向の道を発見した。またここから大形甕棺（７号）を発見した。

**11月29日**　木　快晴　第三調査区では硬化面の撤去、新に発見されたピットの発掘をする。第四調査区では上土除去が終わり、検出された遺構のプランを 1/50 図を作成する。埋土などから判断して、現代の攪乱土、奈良期のもの、或いは弥生時代のものと識別し、今後の遺構の発掘に具える。この地区でも住宅跡ということもあって、さく井をはじめ広域にわたって現代の

撹乱があり、この部分については原則的に発掘をしないことにした。

**12月3日**　月　快晴　第三調査区ではD－5附近の硬化面撤去により、4号土壙によって切られた道路遺構一条を検出した。第四調査区ではC－1のピット中から布目瓦、土師器椀の破片と共に越磁の底部が出土した。

**12月6日**　金　くもり時々はれ　第三調査区では検出遺構の作図の一方、ピット掘りを続ける。第四調査区でもこれまで年代の新しいピットを掘り終わり、残りのピットを掘る。C－2、C－3では掘り終わったピットを1/20の実測図でとる。

**12月10日**　月　はれのちくもり　第三調査区では先日発見した、C－4の弥生後期の土器だまりの写真撮影及び実測をはじめる。第四調査区ではC－1よりC－2にかけて弥生時代の溝4が検出され、その一部を発掘。またB区とC区とをまたいだかたちで土壙1が検出され、中に焼土と灰が詰まっていることが判明、これは歴史時代の遺構とみられるものである。

**12月20日**　木　はれのちくもり　第四調査区では検出した土壙、溝を次々と発掘した。溝1の延長は溝2につながるものとみられるが、溝2の北側は現代の撹乱土の中に消えている。この撹乱土の下位から一部重複した形で土壙16を発見した。これらの土壙の発掘と併行して弥生の甕棺の発掘をなし、大型の4号棺も本日取上げる。

**12月21日**　金　くもり　第四調査区では土壙16の発掘をすすめるが、溝4の東側には6号甕棺があらわれこの発掘にかかる。6号甕棺は小形の甕と壺の合口棺で、ほぼ水平に埋置してあり、壺の肩部の突帯に特徴があり注目された。4号甕棺の北側には、別の土壙（1号木棺）が切合った形であらわれる。

**12月26日**　水　くもり　第四調査区ではC－1区土壙7の発掘及び実測。土壙中には須恵・土師の破片、布目瓦、礫、そして焼土、粘土などが出土、同じ土壙としたものの中でも機能等にいくつかの類型があることがわかる。7号甕棺（大型）及び8号甕棺の実測のうえ取上げ、B－2、3区ではピット掘り及び残りの遺構の確認をする。本年は今日で現場作業を終わり、正月以降残りの遺構を発掘することになる。

**60年1月9日**　水　くもり時々はれ　調査区を第四調査区にしぼり、9・10号甕棺の発掘をはじめる。9号甕棺は大型の合口甕棺で、10号甕棺は進入路付近に発見した小型の甕棺である。また、4号甕棺の土壙に北接する土壙（1号木棺）の掘下げもはじめる。

**1月10日**　木　小雨　楕円形皿状の土壙が次々と発見されるが、その性格についてはもうひとつはっきりしない。しかし4号甕棺に接する土壙は、中央の箱形（長方形）のところの土が軟かく、そこに木棺のあったことを示していた。この1号木棺墓の北側には円形の土壙15があるが、これは弥生期のものとみられる。溝1に接すようにして発見された9号甕棺は実測と併行して発掘を進める。

**1月11日**　金　くもり　いよいよ寒に入り凍結するようになる。9号甕棺の実測がすすみ、

上甕を取上げたところ下甕には人骨がよく残っていた。10号甕棺は実測も終わり取上げる。1号木棺墓は木質は残っていないが、板の組合せの雌型を損なわない様、土壙の中を慎重に掘下げる。さらに木棺横の埋め土発掘により、この中から弥生土器片が出土する。また今日より11号甕棺の発掘をはじめる。

**1月17日**　木　はれ時々くもり　朝から強霜に見舞われ、作業前の霜柱の除去が一仕事である。遺構の上にシートを覆ってもそれ程の効果がない。個々の遺構の発掘実測も、11時近くにならなければ取掛かれないのが実情である。土壙9は第三調査区の5基の土壙と同形で中から完形の椀が出土した。これは機能的にも同一のものとみられる。この発掘もほぼ終わり実測写真をとる。11号甕棺の実測、発掘を繰返す。

**1月18日**　金　くもり　11号甕棺は9号甕棺と共に人骨の遺存状態がよいことがわかる。C－3の西南端に溝5が発見され、8号甕棺はこの肩口のところにのる形で出土していることが判った。また第四調査区の遺構分布を把握するため、各区毎に1/20図をつくる。

**1月24日**　木　くもり一時小雨　9号甕棺は周辺の土を取り除き、写真撮影、実測をはじめる。また12～15甕棺の発掘をはじめ、12・13号は西向きで、14・15号は反対の東を向いていた。12号を除き合口で、12号は木蓋の単棺であることが判かる。また、12号～14号は大型甕棺であるが、15号は上甕に壺を用いた中型の甕棺である。

**1月28日**　月　はれのちくもり　12・13号甕棺の実測、甕棺中の人骨実測をはじめる。12号甕棺は単棺であるが、口縁部は粘土で木蓋との密封のあとが残っている。そして板の厚味だけが粘土の中にスタンプとして残っていた。

**1月29日**　火　はれ　13～15号甕棺の実測をはじめる。また溝5の実測をするが、この日午後別府大学賀川光夫教授見学のため来訪。

**1月30日**　水　快晴　強霜　かねて依頼していた産業医大北條暉幸教授に各甕棺の人骨の取上げをお願いする。取上げ時の所見によると、11号甕棺は成人男性、9号甕棺は女性（推定30歳前後か）ということが判る。本日は各報道機関の取材で終日現場は混雑する。

**1月31日**　木　くもり時々はれ　人骨の取上げは本日までかかる。12号甕棺の口縁部正面観の実測、この甕棺は土圧により歪み、横径84cm上下径70cm位になっていた。本日は新聞、テレビの一斉の報道により一般の見学者多数あらわれる。

**2月4日**　月　くもり　第四調査区もほぼ全域の遺構の発掘が進み、調査の終末処理にかかる。9号、11号甕棺の断面実測、取上げにそなえる。5日には12号甕棺を慎重に発掘の結果、埋土の中に頭骨が残っていることが判明、続いての13号、14号甕棺内にも人骨があることが判り、折からの天候不順とも重なり意外と人骨の露出に手間どる。その後の調査で木棺、土壙墓とみられるものは、C－3区から相次いで発見されるが、各区遺構の調査の終わったところでは、残存遺構確認のため掘下げを行う。C－3区1号木棺の西側には焼土のひろがりをおって精査

するが、弥生式土器が混入しているほか顕著な遺構の検出はなく、土壙17（弥生）のみ発見された。

調査後の作業として、現状恢後のため第三調査区と第四調査区の埋め戻しをして、3月中旬には現場を撤収する。

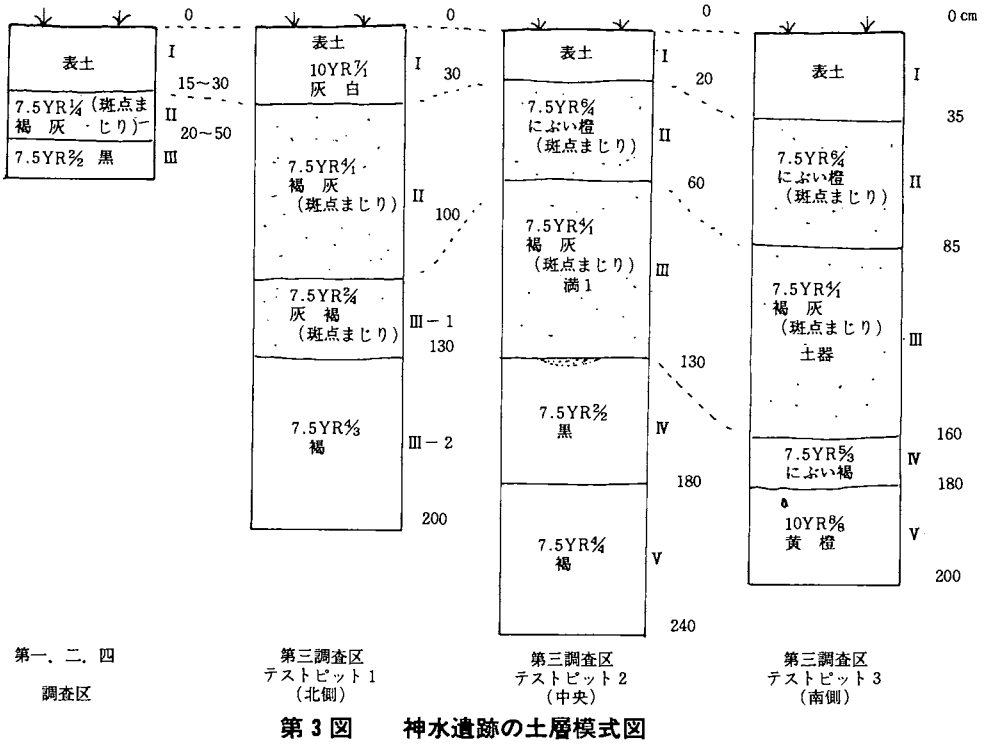
# 第三章　調　　査

## (一)　調査の計画、調査地の土層層序

今回の神水遺跡の調査は、前以って調査について連絡を受けたものの、結果的に施工者側の要請に基づき、これと併行して調査の必要な地点を選んで発掘調査をすることになった。そこで、前以って一定の計画をたてて当該地の発掘調査を実施するということでなしに、場に応じての対応が迫られた。まず第Ⅰ調査区からはじめ、ついで第Ⅱ調査区を、引続き第Ⅲ・第Ⅵ調査区の発掘を実施した。

調査地の土層については、昭和56年度の試掘により判明していた。即ち、第3図に示した神水遺跡土層模式図の第Ⅰ、Ⅱ、Ⅵ調査区の分がそれに相当し、第Ⅰ層が表土で層厚15～30cm、場所によりⅡ層、Ⅲ層以下への落込みが多いのも、元工場用地としての特徴といえる。第Ⅱ層は黄褐色の斑点まじりの土で、土色は褐灰色を呈している。この中には布目瓦や土師埦などの歴史時代の遺物を包含する。第Ⅲ層は黒色土で弥生以前の遺物の包含層である。第Ⅱ層の遺構はその層中で発見されることは少なく、第Ⅲ層への掘込みとしてしばしば発見されている。

熊本平野での火山灰の一般的土層層序は以上のとおりであるが、第Ⅲ調査区を発掘するに及んで、これとはかなり異なっていることが判った。そこで土層検索用のテストピットを北、中、南と3カ所設け観察した。第3図に挙げた模式図がそれである。このうち北の県道側にあげたテストピットでは第Ⅰ層の表土約30cm、ついで第Ⅱ層褐灰の火山灰土となる。この中には多数

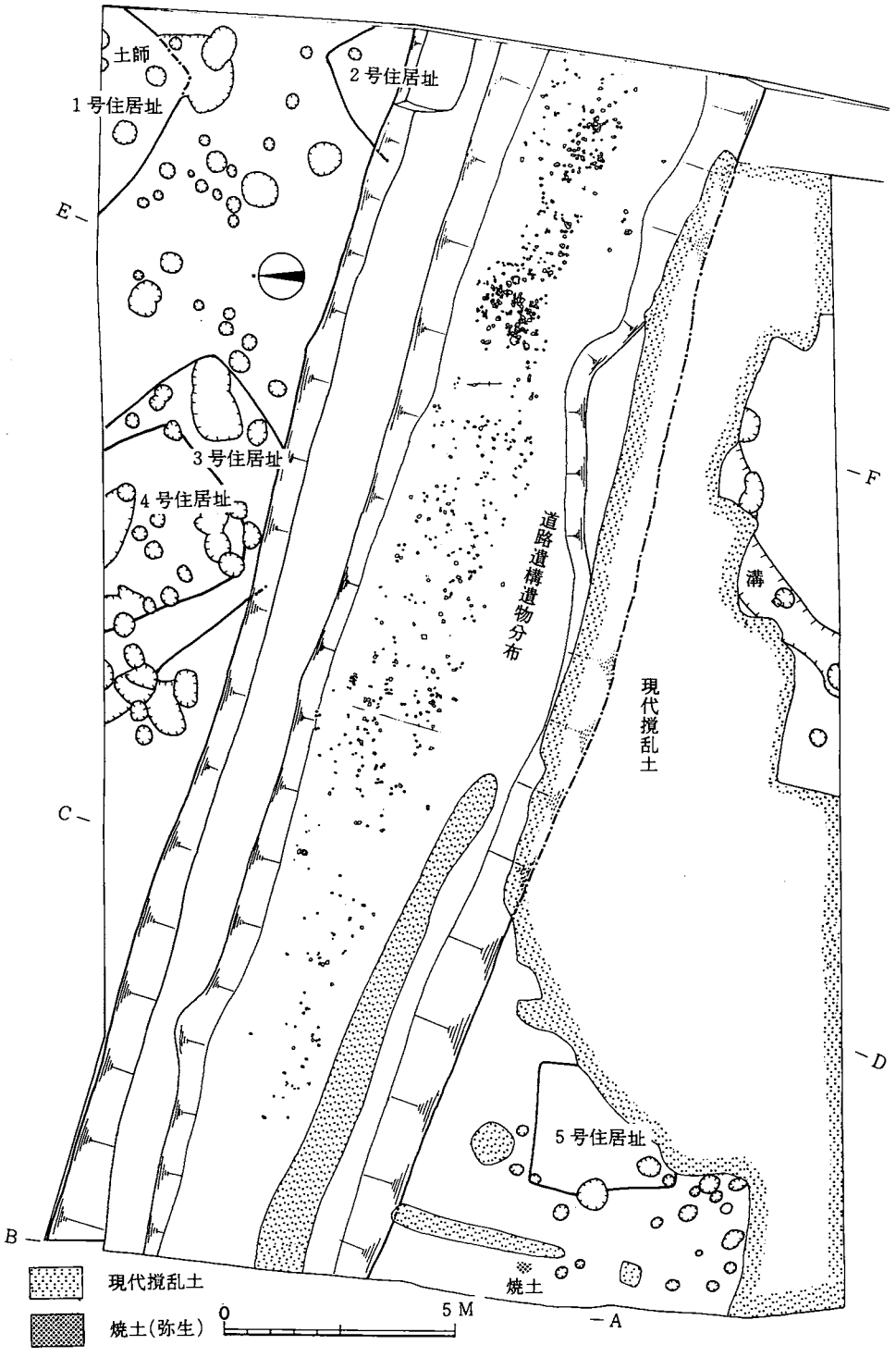



**第3図　　神水遺跡の土層模式図**

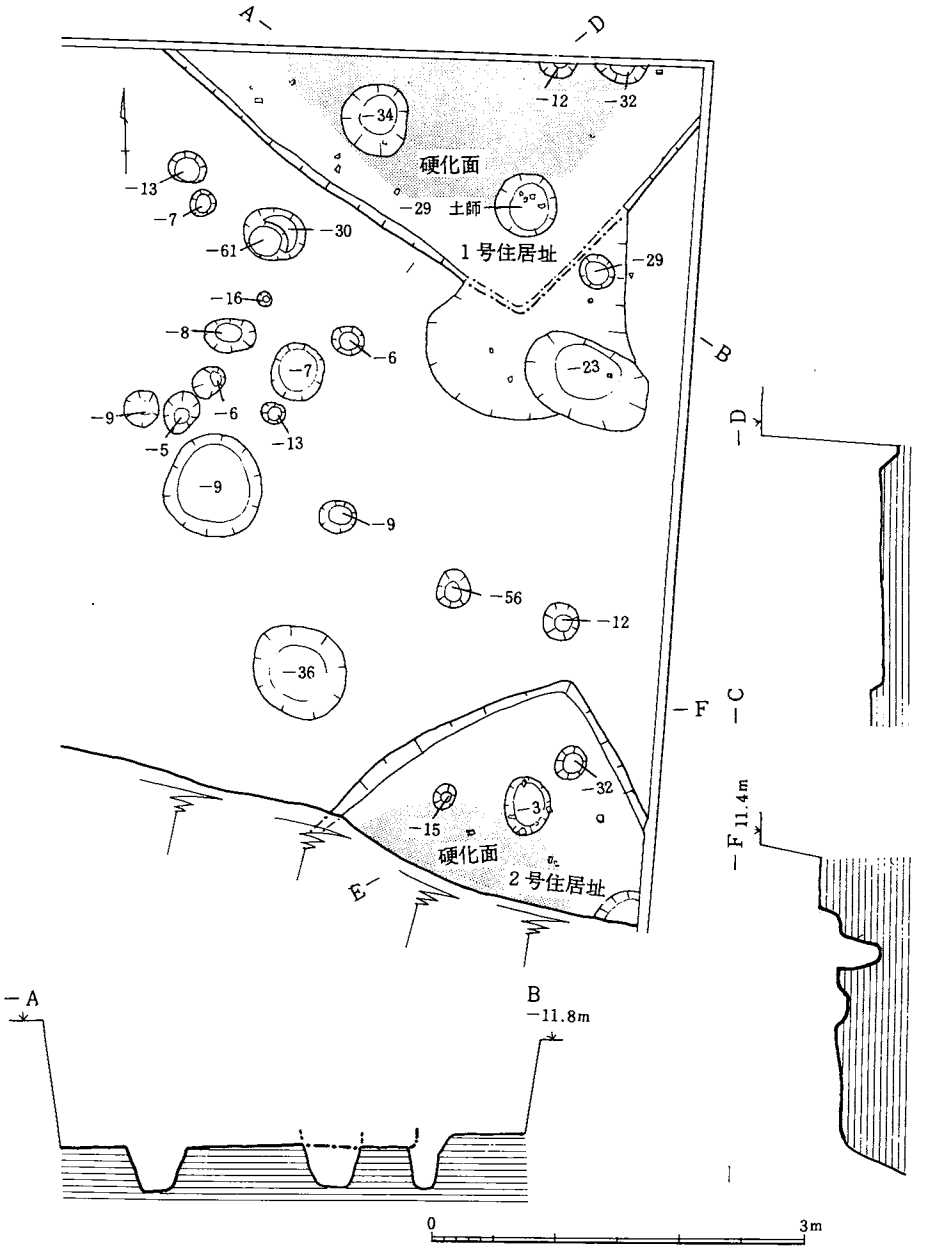
の黄褐色の斑点が混入しており、層厚約70cmである。第Ⅲ層の1は第Ⅱ層よりいく分明るい色調の灰褐色の火山灰土で層厚約30cm、この中には黄褐色の斑点のまじりはいく分少ない。ついで、この下に第Ⅲ層の2とした褐色火山灰となるが、斑点のまじりも少なくなる。この北側の爾後の調査で判るように、遺構が検出されていないところから、埋め土の可能性が強い。県道をはさんだ北側（現在砂取小学校敷地）との間に谷が入っていて、古代から中世にかけられて埋まったものとみられる。

テストピットの2は中央部の人家に接する東側の土層を示しており、第Ⅰ層表土でこの中には砂利などが混っている。層厚約20cm。第Ⅱ層はにぶい橙色の火山灰で、黄褐色の斑点の混入が多い。層厚約40cm、第Ⅲ層褐灰色の火山灰土で、斑点の混入は第Ⅱ層に比べて少ない。層厚約70cmに達する。この第Ⅲ層下位が古代の遺構の検出面で溝1の延長をこの断面に捉えられている。テストピットの2の地点では第Ⅵ層は黒色の火山灰土で層厚約50cm、この中に弥生、縄文の各時代の遺物が含まれるものとみられる。第Ⅴ層は褐色の粘質土で深くなるにしたがって黄橙色を帯びてくる。

第Ⅲ調査区のテストピット3は南側の土層断面を観察したが、基本的にテストピット2の地点と同じで、各層の厚さが多少異なっている。第Ⅰ層表土、層厚35cm、第Ⅱ層はにぶい橙色の火山灰土、層厚約50cm。第Ⅲ層は褐灰色をした火山灰土で、この層には土師器が混入しており層厚約75cm。第Ⅳ層はにぶい褐色土で層厚約30cm。第Ⅴ層は黄橙色粘質土で、いわゆるローム層である。




第4図　第一調査区遺構分布




第5図　第一調査区1・2号住居址

## (二) 第一調査区（第4図）

第一調査区は早急に県立図書館建設のための工事用道路を建設するということで、施工者側の要請に基づき最初に発掘調査をすることになった。この地点は、昭和56年度に予め試掘した地点の南側で、試掘の結果にあらわれた弥生時代住居址があることが推測されていた。その様な予想のもとに発掘した結果、弥生時代の住居址と歴史時代の道路遺構が発見された。

### 1．弥生時代の遺構と遺物

ここで発見された遺構は5基の住居址、それに溝、柱穴群がある。

(1) 1号住居址（第5図）

第1調査区北東隅から1号住居址の一部が発見された。竪穴は現地表下約1ｍのところからあらわれ、方形又は長方プランをなすものとみられるが、両側の壁のそれぞれ2ｍ、3.5ｍが発見された。床面には硬化面がひろがるが、周りの壁には及んでいなかった。住居の内外に柱穴が発見されているが、大部分は調査域外になることもあって上屋の構造は分からない。ここでは調査域から炉についても発見されていない。

1号住居址では住居内に弥生式土器片が散乱していたが、そのほとんどが浮いていた。

**出土遺物**

土　器（第8図）1～3が1号住居址内出土の土器片で、1は器台とみられる。2・3は甕形土器の口縁部で、2は黒髪式土器で3の口縁は2より古い様相の土器である。

(2) 2号住居址（第5図）

1号住居址の南から2号住居址が発見された。ここでも大部分は歴史時代の道路遺構にて切断され、その一部を検出したに過ぎない。遺構の検出は現地表下約50cmの竪穴とみられるが、コーナを含め両側の2ｍと1ｍの壁面が確認した。ここでは住居内で柱穴4個と中央部に硬化面が検出されている。

遺物は弥生中期とみられる土器が発見されたが、いずれも図示困難な小破片であった。

(3) 3・4号住居址（第6図）

1号住居址の西から、少し離れたところで3・4号住居址が重複した形で発見された。3号住居址は方形又は長方形プランの竪穴とみられるが、東壁の3ｍ、南壁の2.7ｍが検出された。住居内には土器片が多数発見され、恐らく住居廃絶の後中に放り込まれたものとみられる。ここでも住居の中央部には硬化面があり、住居使用時の床面の硬化とみられる。

4号住居址は3号住居址の内側に検出され、東壁2ｍ、南壁3.6ｍ、西壁3.5ｍが確認された。このうち東と西壁は調査域外に延びているところから、もう少し長くなるものとみられる。4号住居址の床面は3号住居址より約10cm低くなっていて、中央付近の半径2.5ｍ範囲が硬化していた。ここでは焼土が確認され、あたりに木炭が散乱していた。4号住居址の西壁外に住居

の掘込みを示すようなラインが検出されているが、これは3号住居址の西壁の可能性がある。

3・4号住居址内外から多数の柱穴や落込みが検出された。とくに3号住居址西南隅の土壙内から多量の土器が出土した。

**出土遺物**

**土　器**（第8～9図）　第3・4号住居址の出土遺物の大部分は床面より浮いていたが、住居址について考えるのに興味ある資料が多数あった。4～52は3号住居址内から出土した土器で53～72が4号住居址内より発見されたものである。

3号住居址内出土のうち4～10、12、13は壺形土器とみられ、7は住居内の柱穴より出土している。このうち4～8、12、13は複合口縁の壺で、上面にふくらみのある7、平坦な5、6 13、そしてしゃくれている4、8、12があるが、これらの遺物は遺構の中で分層することは困難であった。9は単純口縁であるが外面の上下方向に暗文がある。10は壺の胴部につく突帯で、二条つけている。

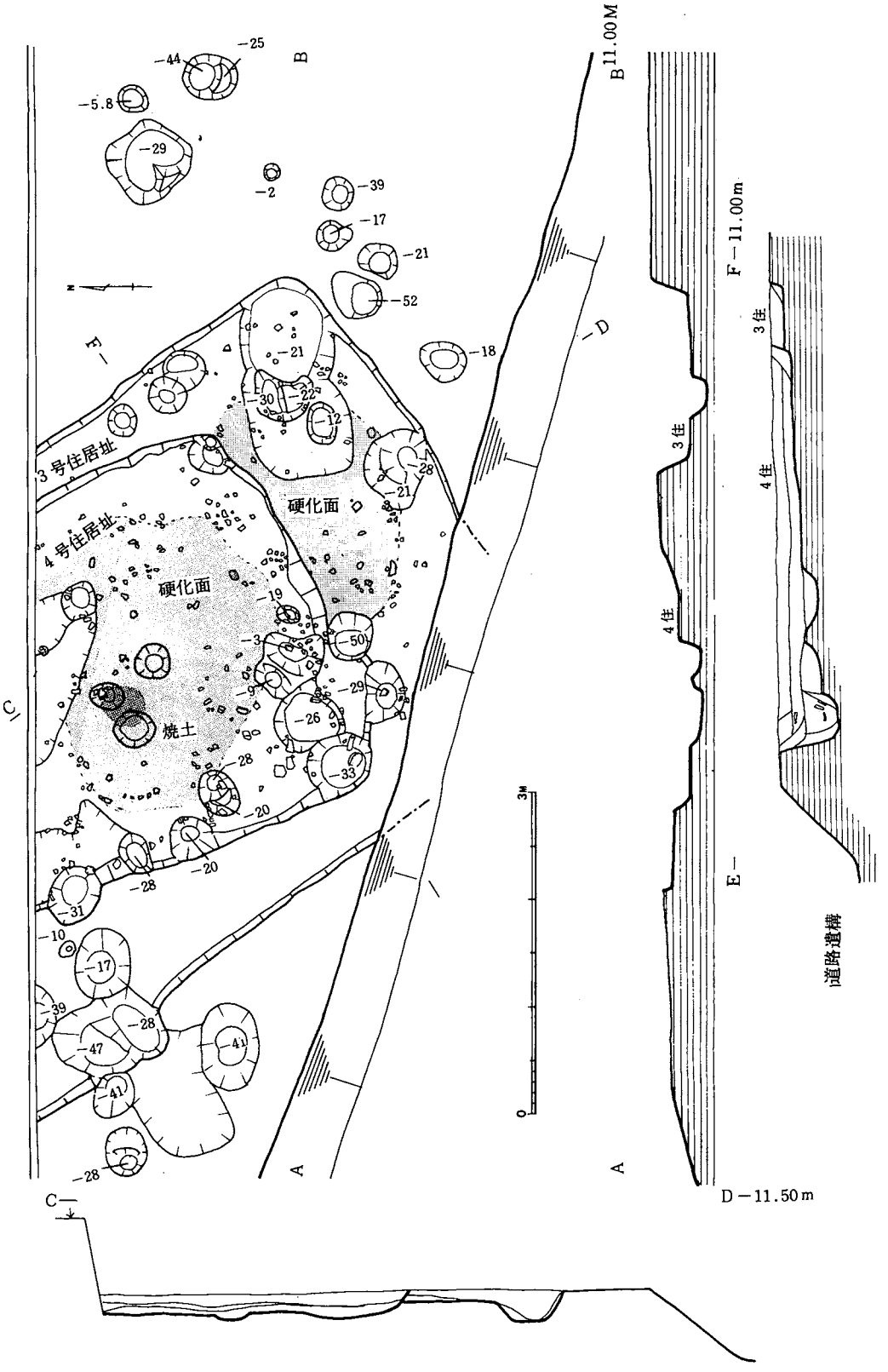
11、16、17は高坏で、11は坏部、16、17は脚部である。18～52は甕形土器の破片いづれも完好なものはない。甕の口縁も、壺も、壺他の器種と同様かなりの変化がある。大きく分けて口縁上面にふくらみをもつ24～26、上面が平らになる19、20、27、38～40、更に上面がしゃくれているいわゆる黒髪タイプの18、21～23、30、31～37、41、43がある。こでも柱穴内から19～21、28、29が出土しているが、異なったタイプの器形が分層出来る状態ではなかった。しゃくれ口縁の甕にしても、ここでは口縁下に突帯をもつもの、沈線のあるもののほかに、これらの突帯や沈線のないものもあった。44～46の突帯一条をもった土器片は甕というより壺の可能性がある。

甕形土器の底部として28、29及び47～52を図示した。いづれもあげ底で高台を付しているが、いわゆる弥生後期の甕の脚とは明らかに見分けがつき、形状、製作技法を異にしている。器面は箆様なもので整形しているもの（28、29、5152）と比較的繊細な器面に整形痕をのこすもの（49、50）、或いは殆んど整形痕をのこさないもの（47、48）があるが、推測はつくもののここでは甕形土器の口縁部のつくりとの相関関係形を見出すまでにはいたっていない。

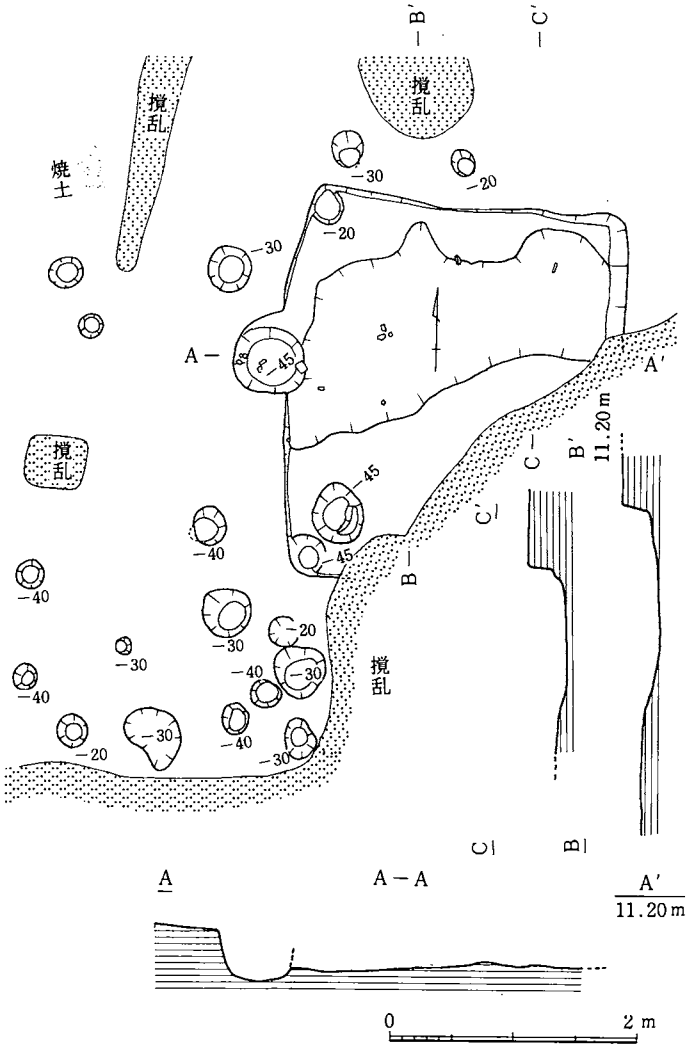
53～72は4号住居址出土の土器である。このうち53～55及び72壺形土器の口縁部である。53、54は複合口縁で上面に平坦面をつくっている。53の外面にたて方向の暗文を描き、54はその大きさからかなり大型の壺と推定できる。また55は上面に形ばかりのしゃくれ面がある。72は推定口縁径46.5cm、単純口縁下の外面に暗文が描かれている。56は高坏の坏部口縁の破片とみられ、57以下の図は甕形土器である。

4号住居址出土の甕形土器も3号住居址出土のものと大差なく、上面にまるみのある60、61、68、平坦面をつくる57～59、62、66、そしてしゃくれ口縁の63～65、67、69、70がある。71は平底の甕の底部とみられ、器面に磨きがかかっている。

3、4号住居址は出土遺物は形状からして弥生中期を下らないことは確かで、土器の形態に




第6図　第一調査区3・4号住居址



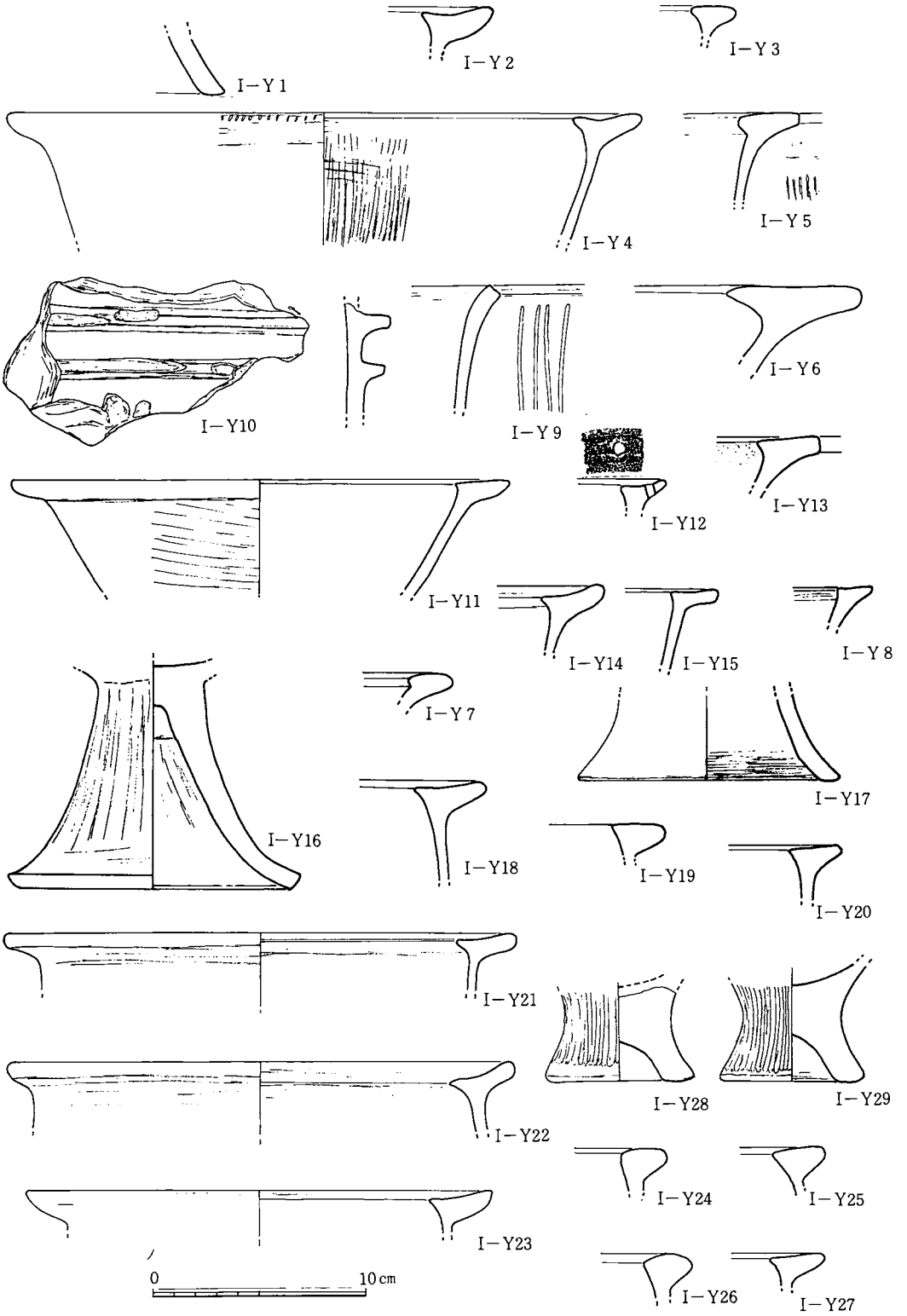

**第7図　第一調査区5号住居址**

バリエーションがあるものの、ある時代、時点における生活の実体を示している可能性を残しているものとみられる。

**石　器**（第16・17図）13、23の石鏃及び10の石包丁破片が3号住居址から出土した。13の打製石鏃は全長12.3mm、重量0.4gの小形の石鏃で床上15cm位のところから出土した。23は全長32mmのスレート質の磨製石鏃で、厚さ1.8mm、重量2.1g、刃の一部が欠けている。同種の磨製石鏃は第二調査区からも出土している。

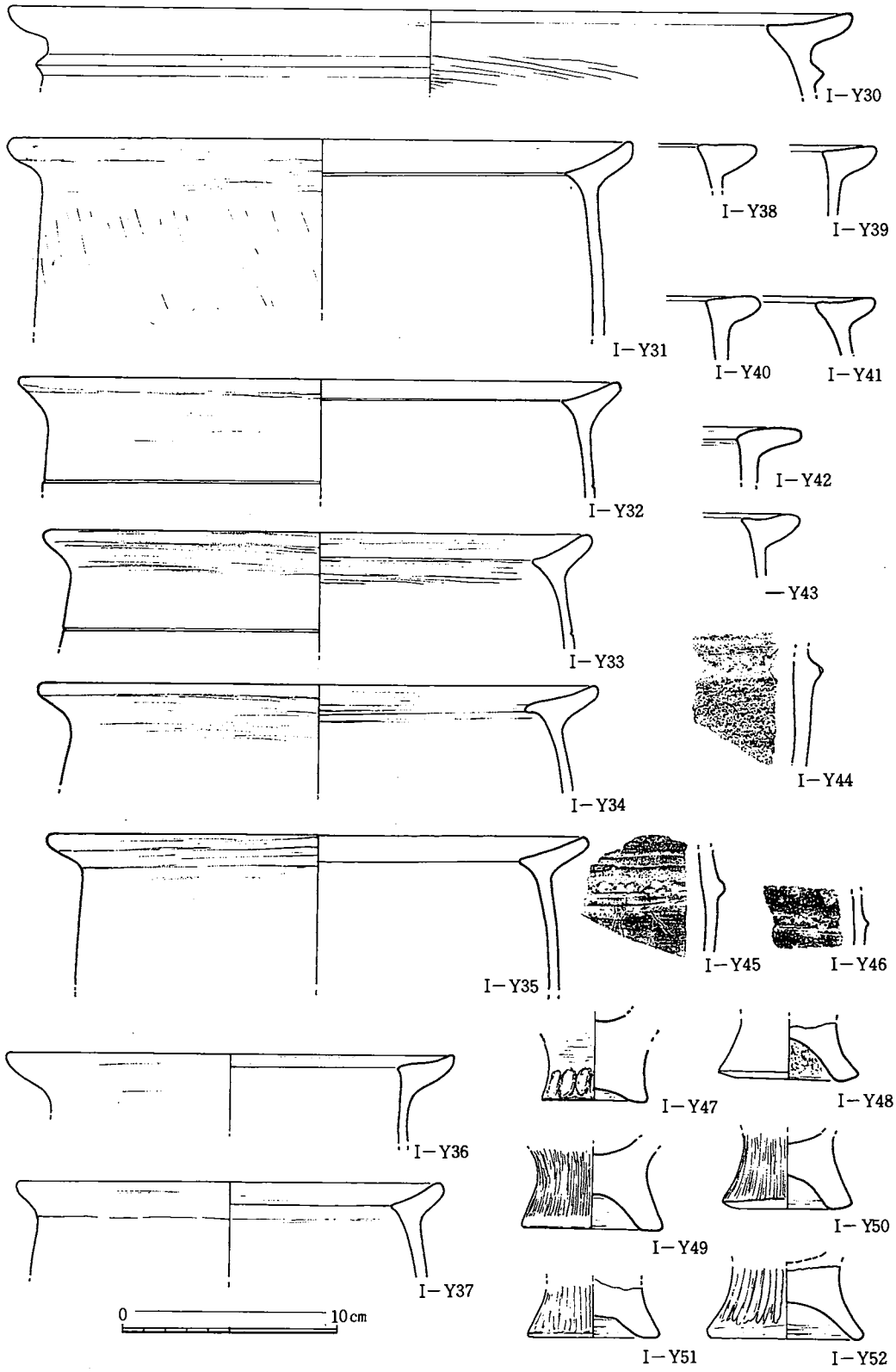
(4)　5号住居址（第7図）

5号住居址は道路遺構をはさんで南側に発見された。住居址の東側は工場操業等時の堀込み

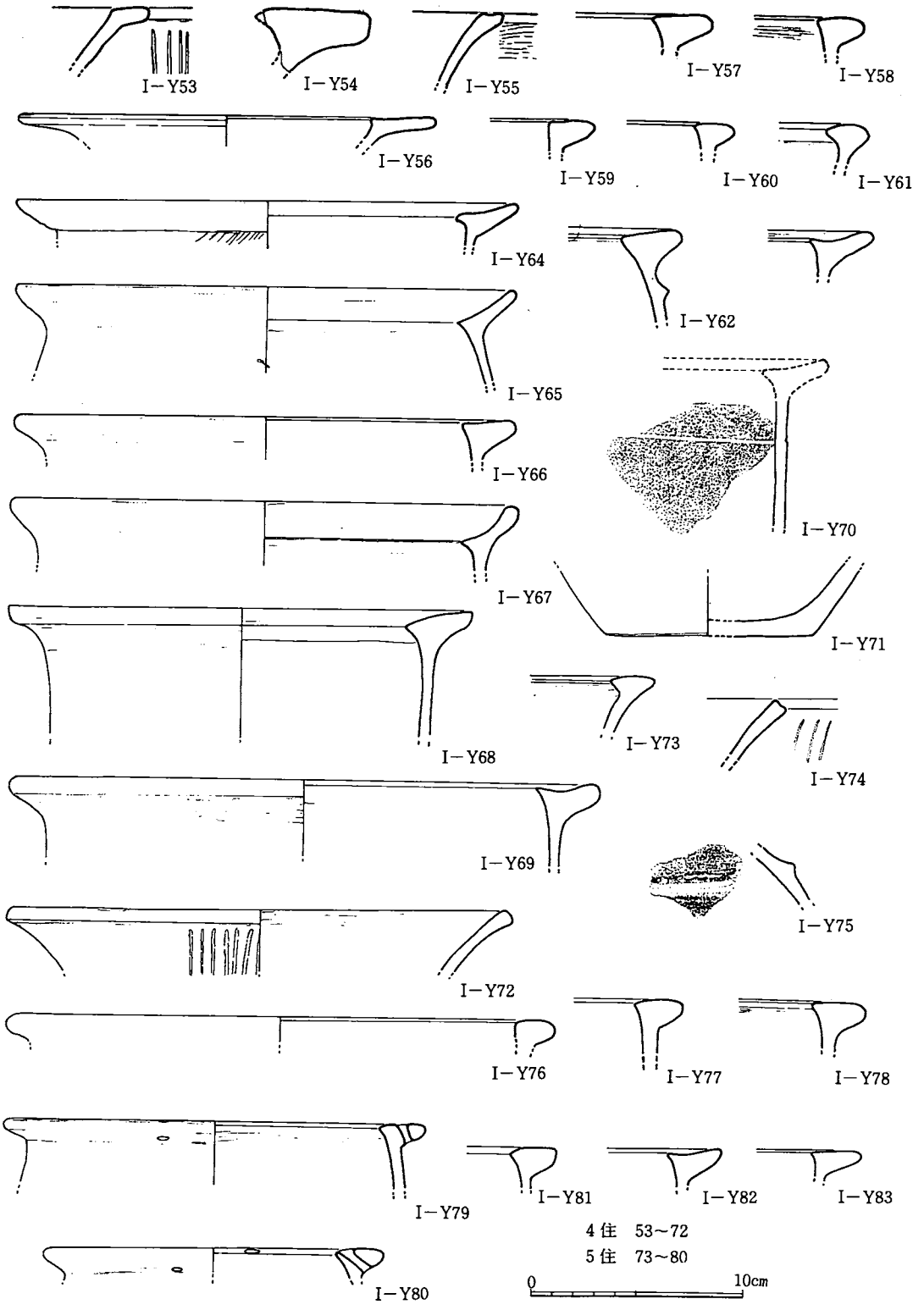



**第 8 図　第一調査区出土弥生式土器 I**

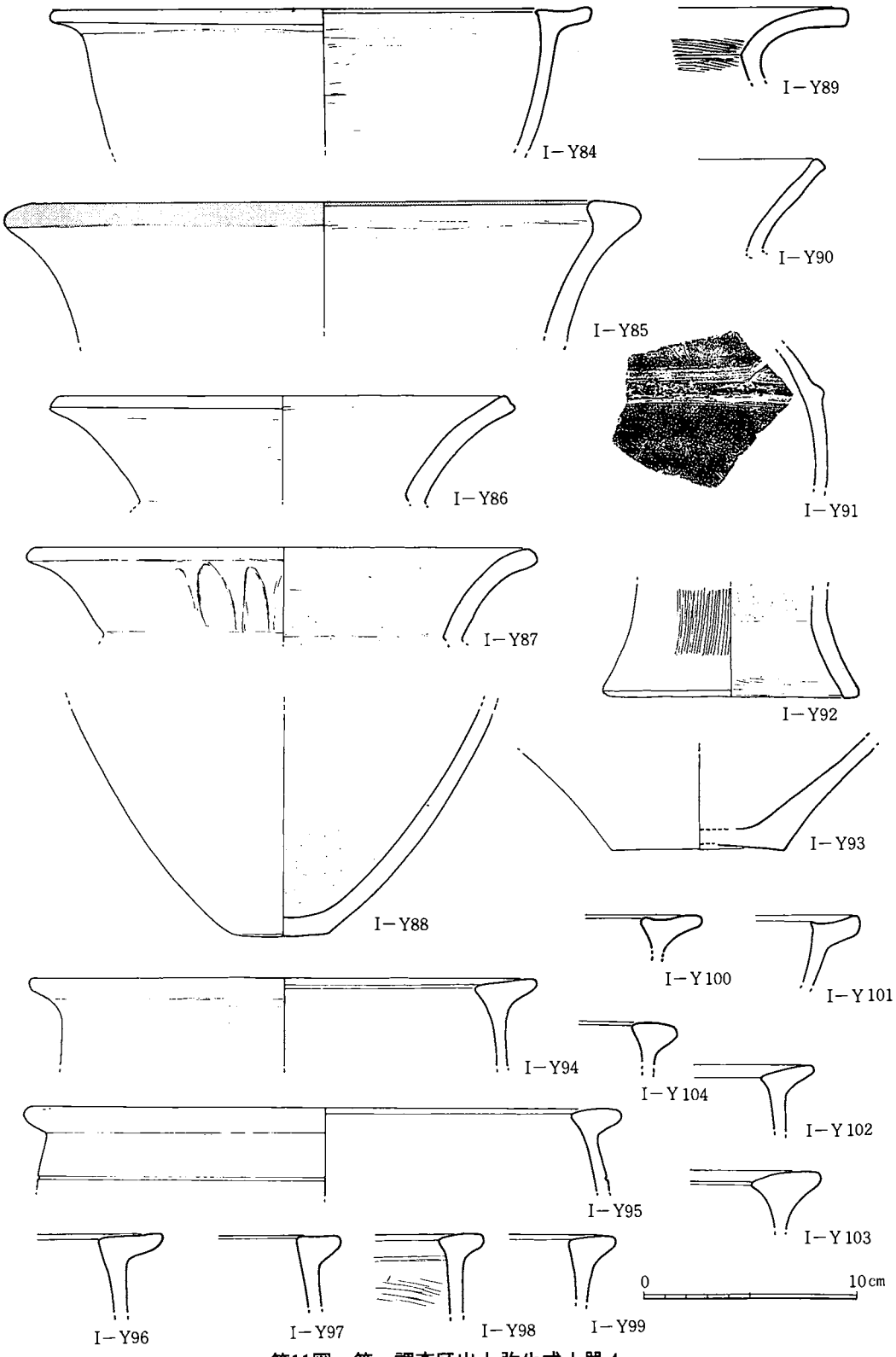
1 住　Y 1 ～ 3
3 住　Y 4 ～27



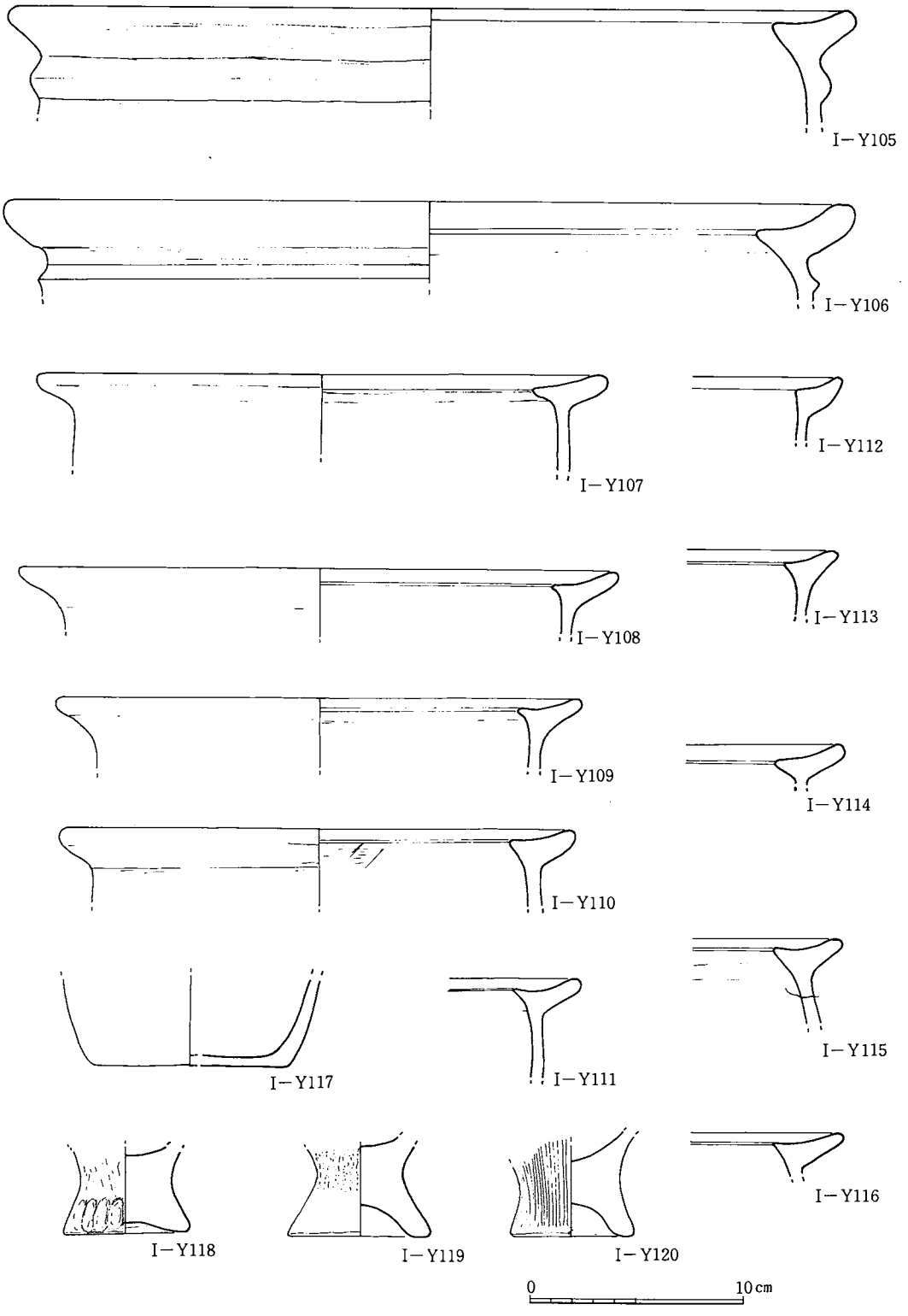

**第 9 図　第一調査区出土弥生式土器 2**　　3 住　Y 30～52




**第10図　第一調査区出土弥生式土器 3**




第11図　第一調査区出土弥生式土器 4




**第12図　第一調査区出土弥生式土器 5**

が広範囲に及んでいて、５号住居址の東壁の大部分を切断していた。

５号住居址は北壁2.5m、西壁約3mで、東壁と南壁は一部を残して切られている。この住居址は方形に近い長方形の竪穴住居址のプランのものと見られる。堀込みは表土はぎの段階で削ったため正確には計測出来ないが、残りからして30cm前後のものとみられる。住居址内の中央部附近がかるく浮いており、二次的に撹乱を受けているものとみられる。

**出土遺物**

**土　器**（第10図）　73～80が５号住居址内出土の土器で、完好なものはなかった。73～75は壺形土器の破片で、73は口縁端末が複合口縁となり、上面が肥厚している。72、74は口縁端末がいく分厚くなり、外面に上下方向の暗文がつく。75は壺の肩の突帯の部分で、突帯はつまみ出しによるものと見られる。

76～80はいづれも甕形土器の破片で、ここでは上面にまるみのあるもの、平坦なもの、さらにしゃくれをもつものが出土している。79、80の口縁部には孔のあることから、二孔一対をなす穿孔がつくものとみられる。

**石　器**（第16図）７、８は両刃の石包丁で約半分が打損している。いづれも砂岩質のもので、８はとくに器面の風化がはげしい。

５号住居址出土の土器、石包丁はいづれも弥生中期と見てまず間違いなかろう。

(5)　溝、その他（第４図）

第一調査区では５基の住居址のほか多数の柱穴が発見された。遺構が重複し、発掘した範囲が小規模であること、加うるに後世の大規模の撹乱により弥生時代の遺構の調査も期待した割に充分な成果が望めなかった。溝遺構だけが、かろうじて道路遺構の南側で発見することが出来た。

溝は幅80cm～１mの浅いU字溝で曲がりながら北は撹乱土の中に、南は調査域外にもぐっている。南への延長方向はそのまま進むと第II調査区の溝につながるものとみられる。この溝中には弥生式土器片が混入しており、細片のためそれが図示できる程のものではないが、土器そのものは弥生中期のものとみてよかろう。

５号住居址の西1.5mのところには焼土のひろがりがあった。生活跡であることを意味するが、他の遺構とのかかわりは明らかでない。

**その他の第一調査区発見の遺物**（第11、12図）

第一調査区、第III層覆土中発見の土器等をここで一括して取上げ、図示したのが第11、12図の84～120の土器である。

84、101は鉢形土器とみられ、口縁の形のうえから、甕形土器と大差ない。二つともいわゆるしゃくれ口縁である。85～91、93は壺形土器である。85は壺の口縁で、複合口縁の上面がまるみを帯び、上面には丹彩が施されている。全体に磨きがかかり丁寧に仕上げられている。86、

87、89は口縁のつくりのうえから大きく「く」の字になり、新らしい様相の壺である。外面は磨研されて87にはたて方向の暗文がみえる。88は壺の胴から底への部分で、口縁は86、87の形態を想定することが出来よう。91は突帯をもった壺の胴部破片で、口縁には複合口縁が推定出来よう。93も複合口縁の壺の底部とみることが出来る。92はその形状からして器台形土器の特徴をもっており、その下半分とみられる。熊本の弥生中期の器台形土器は上、下はっきりしないのが多い。94～100、102～120は甕形土器で、117以下の底部を除き、他は甕の口縁部である。この中の口縁断面形にもいくつかの特徴があり、上にふくらみのあるもの95、98、103、次に上面が平らなもの94、96、97、99、上面が凹みしゃくれた感じのするものがある。ここではしゃくれたもの大部分を占め、比較的大形の甕105、106には口縁下に突帯を付している。神水遺跡の資料の中には沈線をもつものがあるが、この中には含まれていない。117は小形の甕の底とみられ、他にも類品が出土している。118～120は甕の脚部で、高台を付している。118は脚が低く、厚手に出来ており、指頭による整形圧痕がまわっていて、刷毛、箆などの調整痕はない。119は脚が高く、外に開く特徴をもっている。120は外面を箆様なもので均し、幅７～８㎜の箆痕を器面にのこしている。

## ２．歴史時代の遺構と遺物

### (1) 道路遺構（第４、13図）

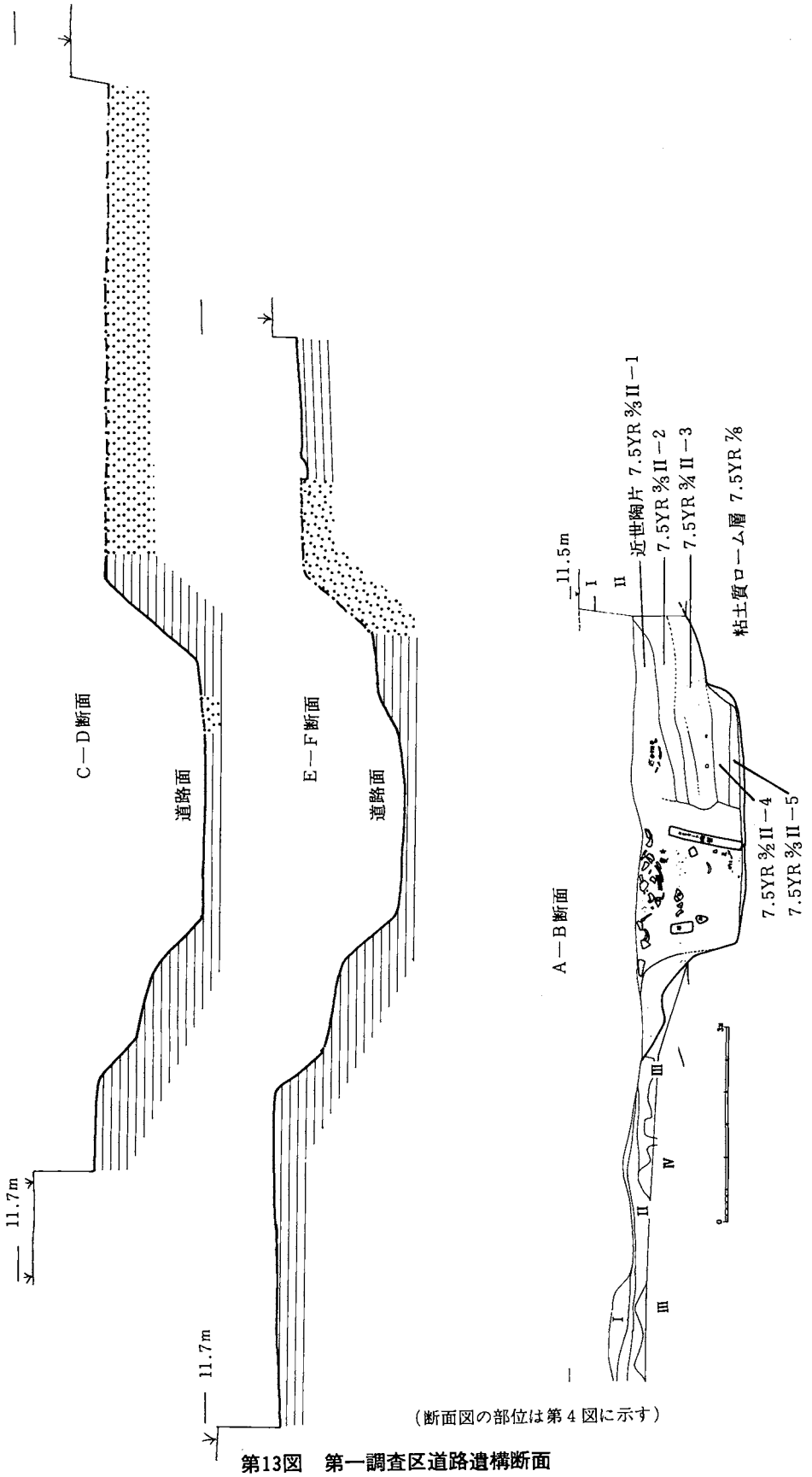
図に見るように、第一調査区を東西に横切る形で凹道が発見された。発見された道路の東西27mの範囲を発掘した。北は二段掘りとなり、最初の掘込みが現地表下約１mのところより法面をつけ約80cm下がり、そこで約１mの犬行りがつく、そして道路面までさらに約80cm下がる。南側は犬行りはついていない。

道路の床面は踏み固められ、硬化していた。道幅は3.7m前後で、床面上には多数の布目瓦と少量の須恵器や土師器の破片及び弥生式土器が点在していた。これらは道床に敷いたというより、周りの遺物が流れ込んだものとみられる。かつてこの種の道路遺構とみられるのが、元熊本女子大学跡の大江青葉遺跡で、東西方向の一条の道路遺構を調査した。その時は一側に側溝を伴っていた。ここではその様な側溝は発見されていない。

**出土遺物**

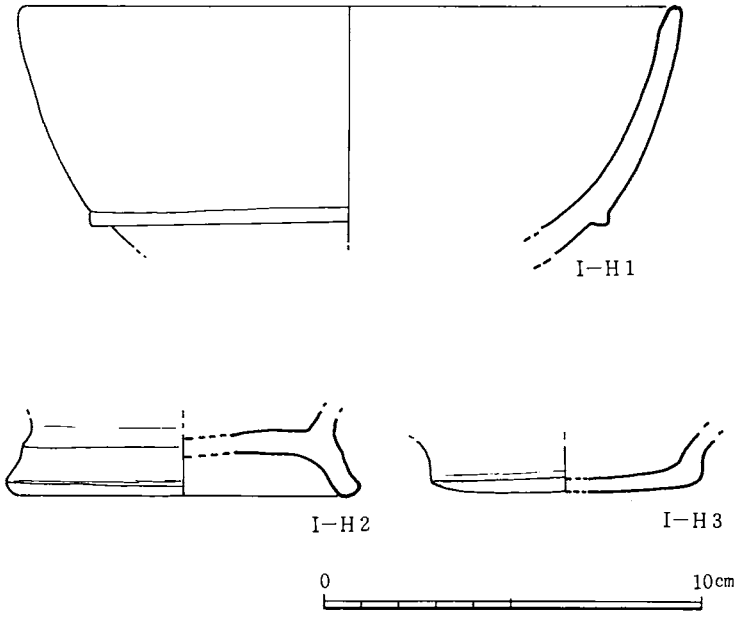
道路遺構上からの出土遺物は、前にふれたとおりであるが、布目瓦の一部については第15図に図示し、須恵、土師器は細片であるため、とくに図示しなかった。また出土した一点の青磁片（越磁）については、第三、第四調査区からの出土遺物と共に第61図の中に図示することにした。

**布目瓦**（第15図）　１～11及び13は平瓦で、上面に布目の圧痕、下面に縄目の叩打痕がつき厚さが２cm前後ということで共通している。12、14は丸瓦の破片である。これらの瓦は第４図の道路遺構の床面に分布している状態からもわかるように相当な量に達している。




（断面図の部位は第４図に示す）

**第13図　第一調査区道路遺構断面**



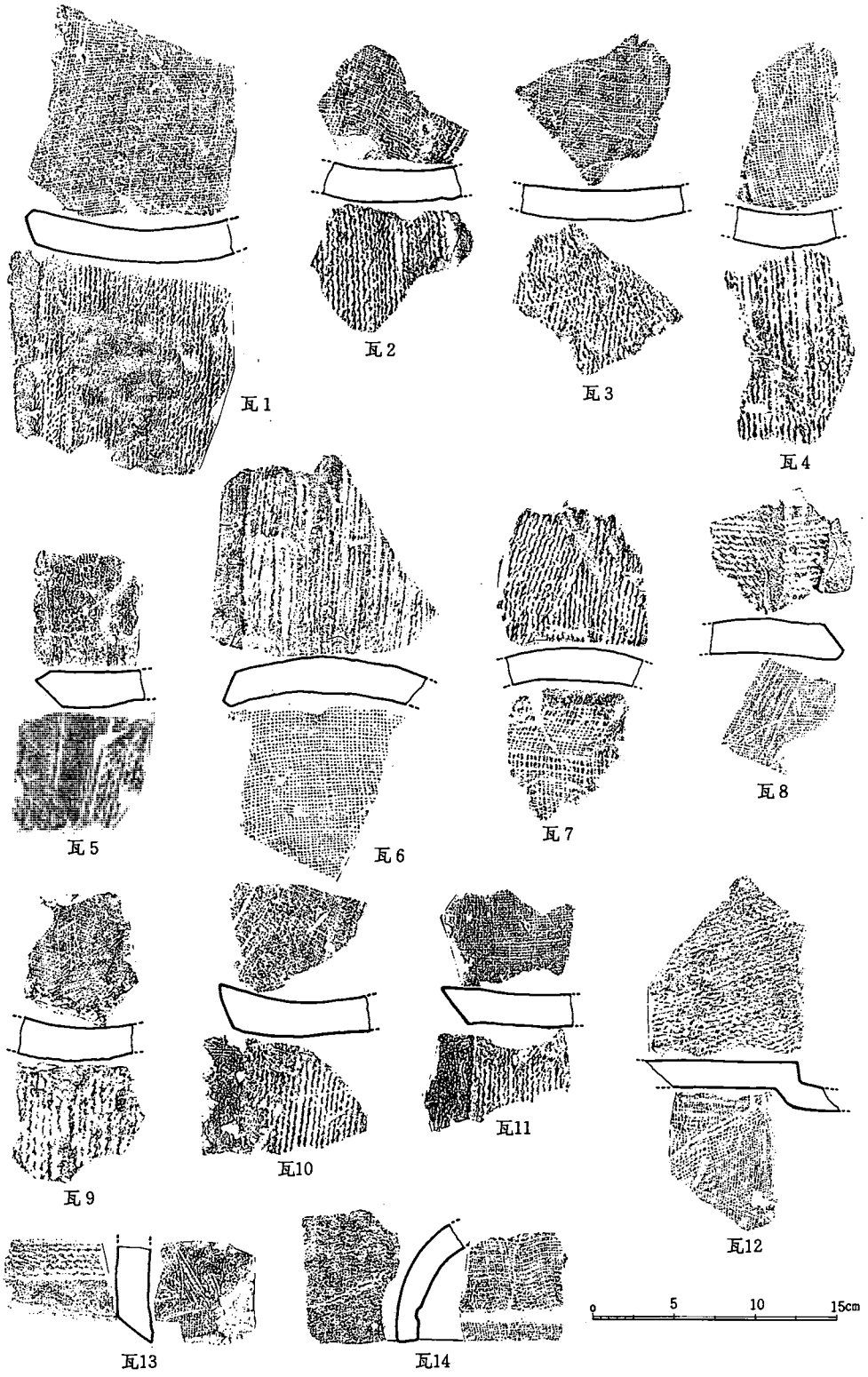

**第14図　第一調査区出土土師器**

**磁　器**（第61図）　15に図示したのは道路遺構上出土の越磁の皿で、同種のものが第三調査区からも出土している。蛇の目高台の畳付きには砂目の列がおかれ、内側にも同様に砂目がついている。この皿は第三調査区出土の同種の皿が釉が流れているのに対し、釉ののりもよい。

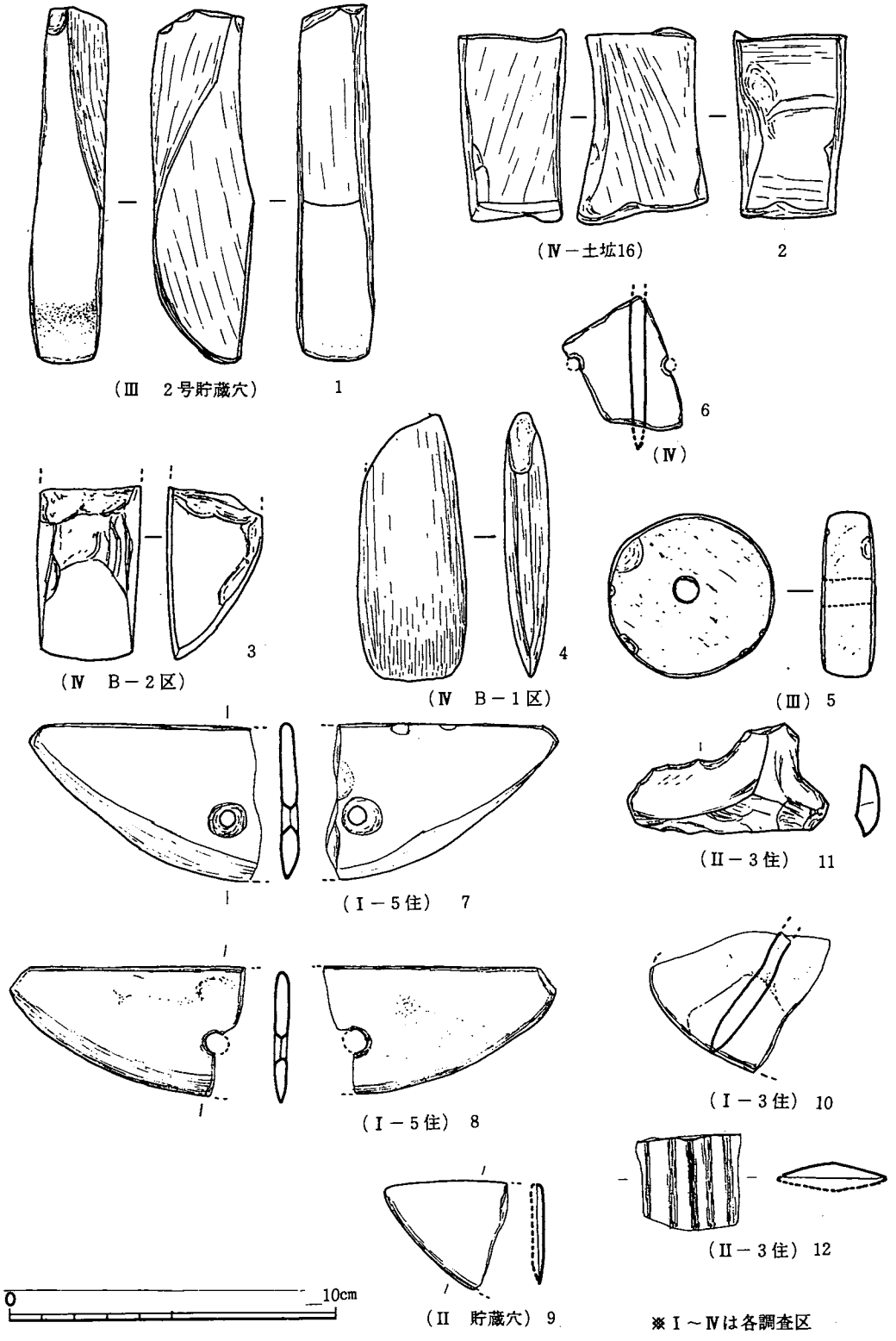
道路遺構について、その果たした役割、機能を考えた場合、条里との関りを考慮に入れる必要があるかも知れないが、その前に何故、この様な凹道を必要としたかの理由が出てこない。小規模の発掘で結論を出すことは無理かと思うが、発見された布目瓦や青磁などからして奈良～平安期まで上ることは確かである。

(2)　その他

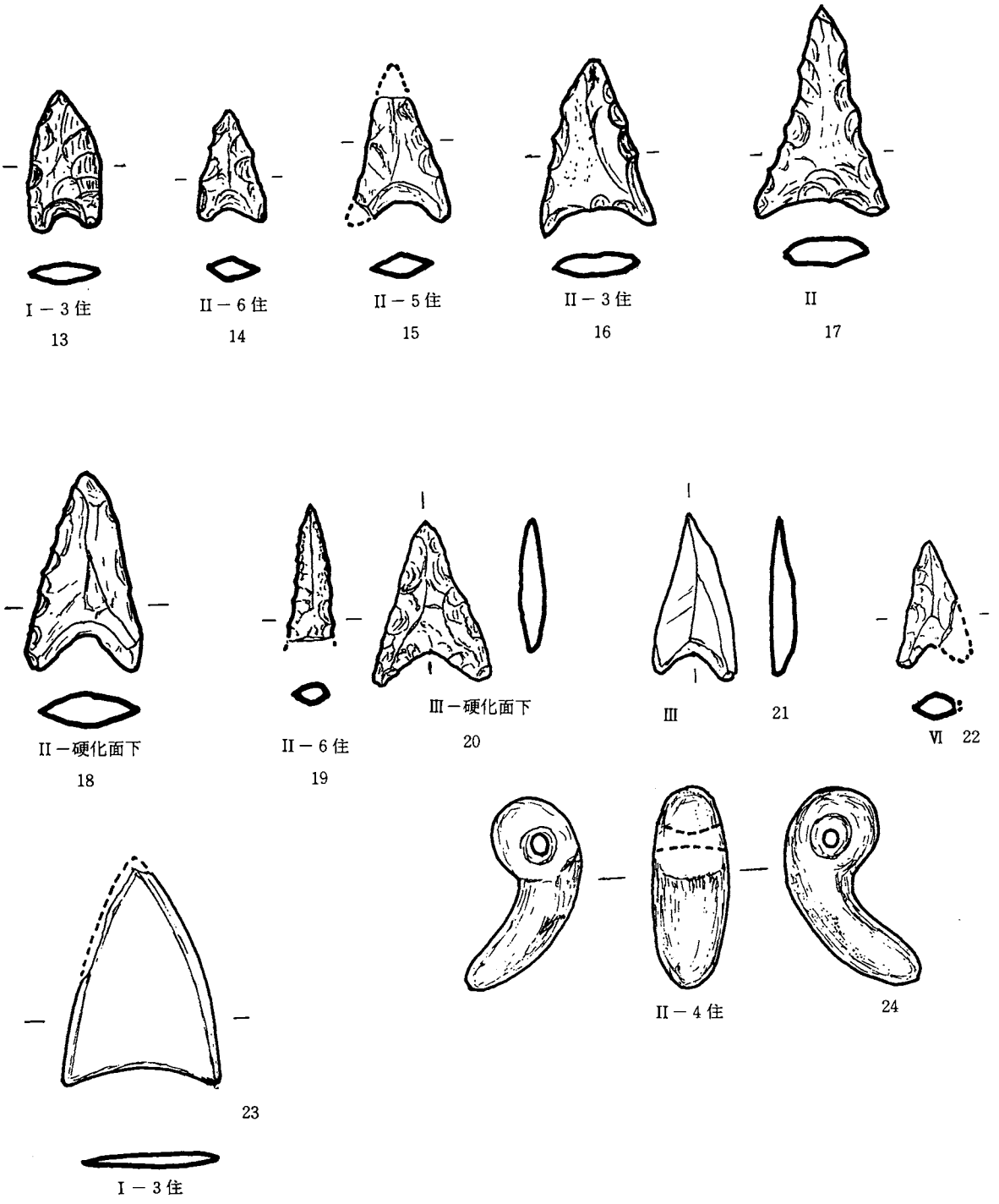
第一調査区の歴史時代の遺構として、柱穴の中に土師器を出したのがある。それは1号住居址の中の一つの柱穴で、柱穴の埋土も黄褐色の斑点混りの土で明らかに弥生とは異なった特徴をもっていた。この中に土師器の破片が埋没しており、第14図の2、3に図示したのがそれである。2は高台付椀、3は平底の椀の破片である。また1に図示した土師器は弥生3号住居址周辺の撹乱土中より発見された。口縁径17.4cm、胴のふくらみのあたりに一条の突帯がついている。この器形から高坏と見ることが出来る。



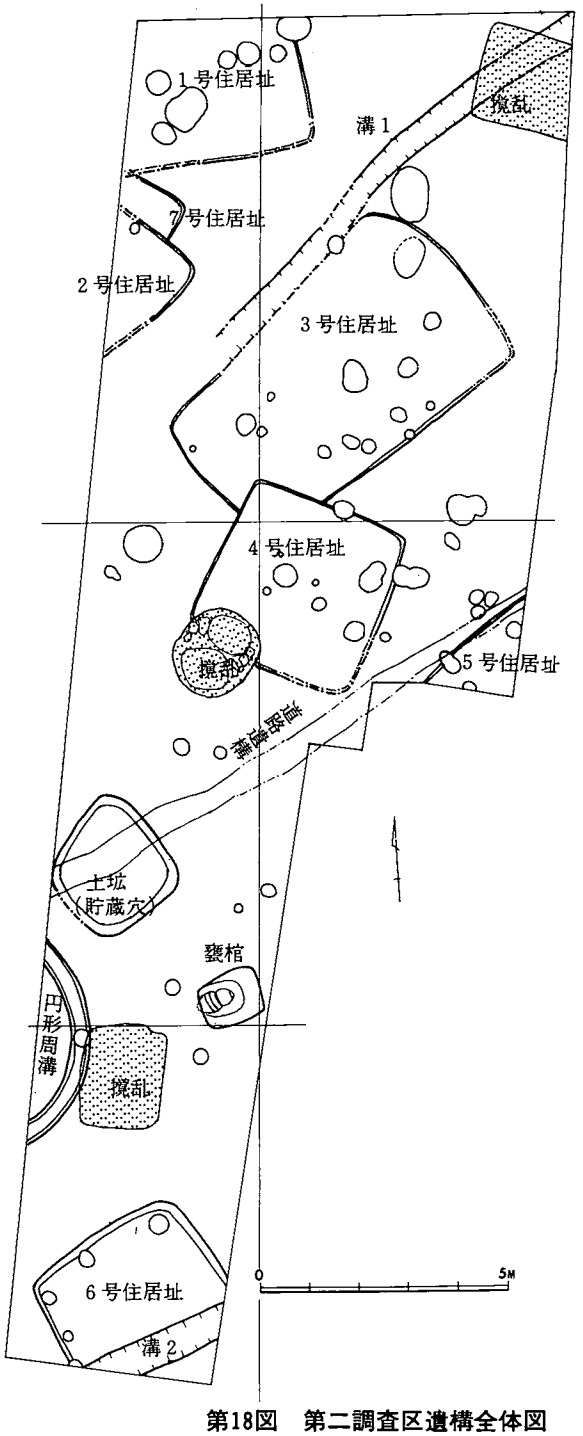

**第15図　神水遺跡出土瓦 1（第一調査区道路遺構）**




第16図　神水遺跡出土石器




第17図　神水遺跡出土石器、玉類




第18図　第二調査区遺構全体図

## ㈢ 第二調査区（第18図）

第二調査区は第一調査区の南に設定し、南北28m、東西９ｍの範囲を発掘した。しかし南側の東半は鉄筋コンクリートの基礎のため発掘することを断念した。

この調査区で発見した主要な遺構は弥生時代の住居址７基のほかに、土壙（貯蔵穴）１、円形周溝１、溝２及び甕棺墓１基があった。歴史時代の遺構として道路一条があった。

### １．弥生時代の遺構と遺物

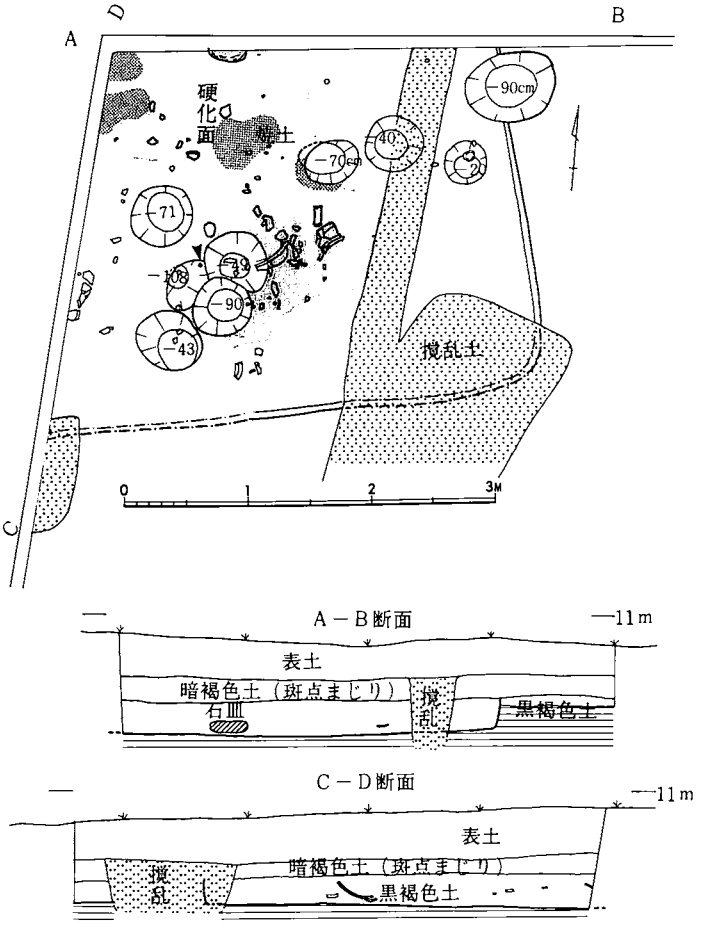
#### (1) １号住居址（第19図）

１号住居址は第二調査区の北西隅に発見したが、撹乱土にはばまれ、方形プランとみられる住居址の一隅を推定し得る程度に止どまった。また床面も、3m×3.5mの確認にすぎず、調査域外に未掘部分を残した。竪穴は現地表下約70cm、掘込面から約25cmのところに床面があった。床面は周辺を除いて硬化面があり、その上に焼土が点在していた。柱穴は発見されたものが９個、直径30～50cm程度のもので、深さも床面から浅いもので20cm、深いもので１ｍを超えるものがあった。出土遺物は必ずしも床面に密着していなくて、土器片や石皿が多量に出土したが柱穴の肩のところから青銅製鉇の破片が発見されたことは注目に値いする。また土器片や礫が柱穴の中に落込んでいるものもあった。

出土遺物

**土　器**（第28～35図）　図示した１～43の土器はいづれも１号住居址より出土したもので、器形にもかなりのバリエーションがある。１～６及び41は壺形土器で、１、２、５は複合口縁の壺で、口縁部上面は平坦面をつくっている。３、４、41は倒卵形をした胴部の壺で、口縁部が「く」の字になっていて時代的に新しい様相を示している。３は頸部に刻み目をもった凸帯がつくが６は同じく壺の胴部である。７と43は高坏の坏部とみられる。坏部口縁幅約4.7cm、4.6cm、いく分上面がしゃくれ気味になっている。その点、黒髪式土器の甕に近い。８～10は深鉢とみられ、器形の土器片で口縁上面が８、10がしゃくれているのに対し、９は肥厚気味である。11～40、42はいづれも甕形土器の口縁乃至は底部である。この中で19～23、33、35、38は住居内の柱穴中より発見されたもので、他は住居内出土であるが、断面図に見るように、必ずも床面から出土したものではない。甕形土器の中には口縁部上面が平坦であるもの（11～13、17 18、20～22）、上に膨らむもの（15、16、19）及びしゃくれているもの（14、23～31、33～39、42）があるが、しゃくれている甕形土器は黒髪式土器に属することが考えられる。土器形態の推移から16、17は古い様相を示している。32に図示した甕形土器の破片は、大形甕棺の口縁部で、赤焼きということも他の土器と色調が著しく異なっている。40は甕形土器の底部で、黒髪式土器とみられる。

**石　器**（第37図）　石皿一個が住居址内から坐った状態で出土している。石皿は厚さ11cm、




**第19図　第二調査区１号住居址**

底辺28cm高さ31cmの稜の丸い三角形をした重量15.220kgの平石で、上下の平坦面は磨耗している。

**青銅器**（第64図）　１号住居址内の柱穴脇から青銅器片が１個出土した。この青銅器は最大長3.0cm、最大幅1.9cmで厚さ0.2cmの破片である。この青銅片について奈良文化財研究所により検討を依頼した結果、鉈であることが判明した。また鉈は白銅質で舶載品とみられる。

(2)　２、７号住居址（第20図）

７号及び２号住居址は１号住居址の南に接するようにして発見された。２号住居址は方形プランをなすものとみられるが、発掘により確認されたのは一つのコーナーだけである。現地表下約65cmに床面があり、床面には焼土と木炭がひろがっていた。確認した床面から柱穴一個が発見され、柱穴は径28cm、深さ約80cmであった。遺物は土器の小片が点在したが、土層断面にそって土器の脚部を発見した。

７号住居址は、一部が１号及び２号住居址と切り合っているが、１号住居址との接点は撹乱土

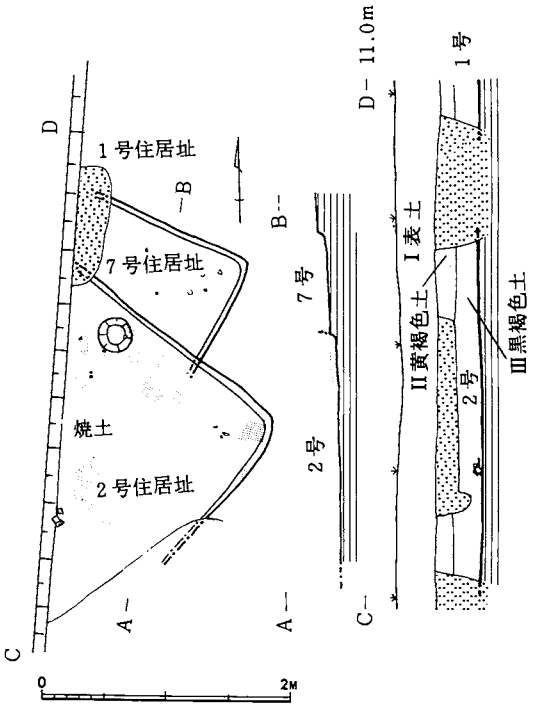
により切り合いの前後関係は不明であるが、床面の状態から２号住居より古いことが確認できた。遺物は床面上から土器片が出土したが、いづれも細片である。

出土遺物

**土　器**（第30図）　44は２号住居址出土の土器で甕形土器の脚部である。その形態から弥生時代後期とみられる。その他の土器片はいづれも細片であるが中期とみられるものである。

(3)　３号住居址（第21図）

３号住居址は２号住居址の東側の溝に接する形で発見された。この住居址の検出も他の各遺構同様上部からの撹乱が土中深く入り込み困難だった。しかも検出した竪穴の壁は僅かで、それ以外は推定にたよるほかなかった。




第20図　第二調査区２，７号住居址

３号住居址は長軸方向約2.8m、短軸方向が約４ｍの長方形のプランをしており、住居址の西側では溝と競合してあまりはっきりしなかった。また住居址の南コーナーは４号住居址により切取られていた。

住居内には北壁近くに直径約70cmの土壙が、その他大小の柱穴を検出したが、直ちに上屋を推定、復元可能な状態ではなかった。柱穴中より土器片もしばしば出土したが、住居の南側の一つの柱穴からは、数個の土器底部がまとまって出土している。

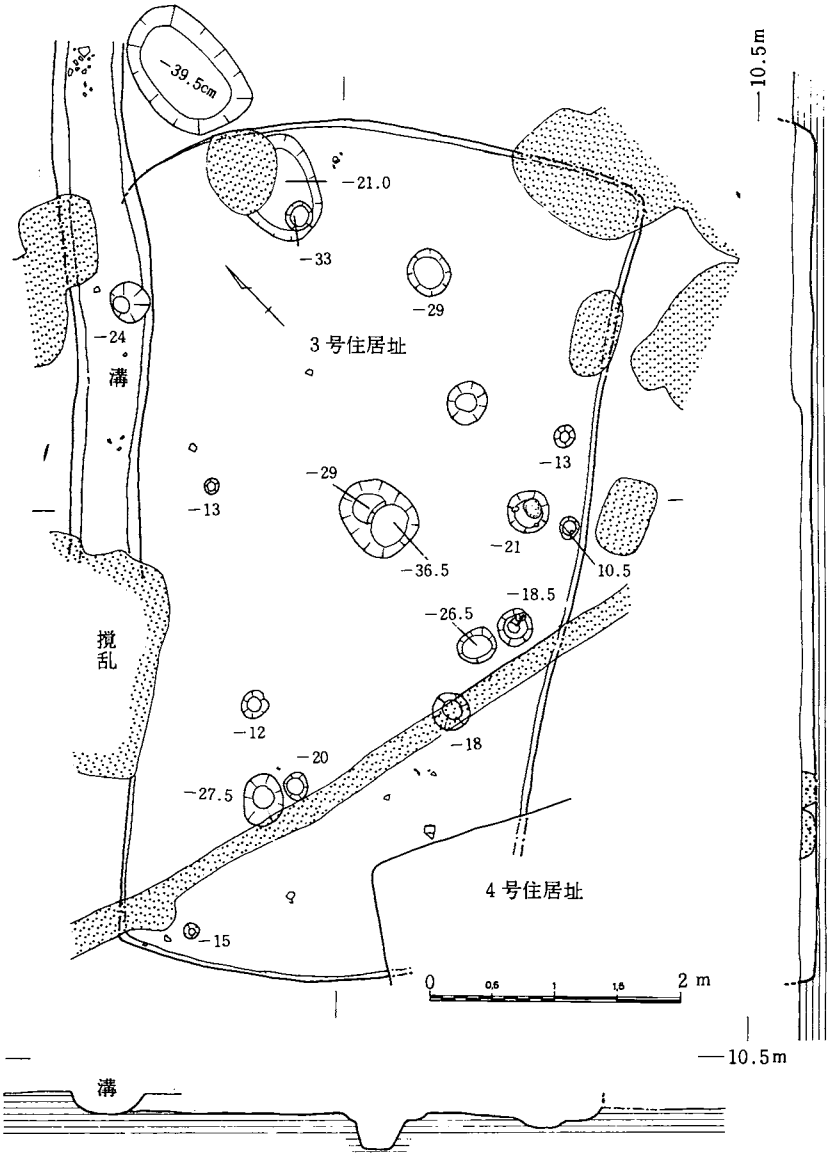
出土遺物

**土　器**（第30、31図）　図示した45～67は３号住居址出土のもので、45、46、49～52、56、63～65は住居址に床面又はそれに近いところから出土、66、67は住居址内柱穴より出土したもので、その他は覆土中から発見されたものである。このうち45は高杯の杯部の破片で、内面に暗文風の器面調整痕がある。47、48は壺の胴部や口縁部で、47は上部に平坦面をもつ複合口縁の壺破片である。46及び49以下いづれも甕形土器の口縁部又は底部である。この住居址出土の甕形土器の口縁は、覆土中発見の60、61を除き上面が上にはり出し気味で形態的に古い様相を示している。胴部の突帯（46、49）は弥生前期の甕形土器からの形態変化とみられ、推移の過程がたどり易い。仮に中期的なものとすれば古い時期に位置がけてもよさそうな取合せである。64～67は甕形土器の底部であるがいづれも部厚く、僅かに上げ底をもつ不安定な脚台である。

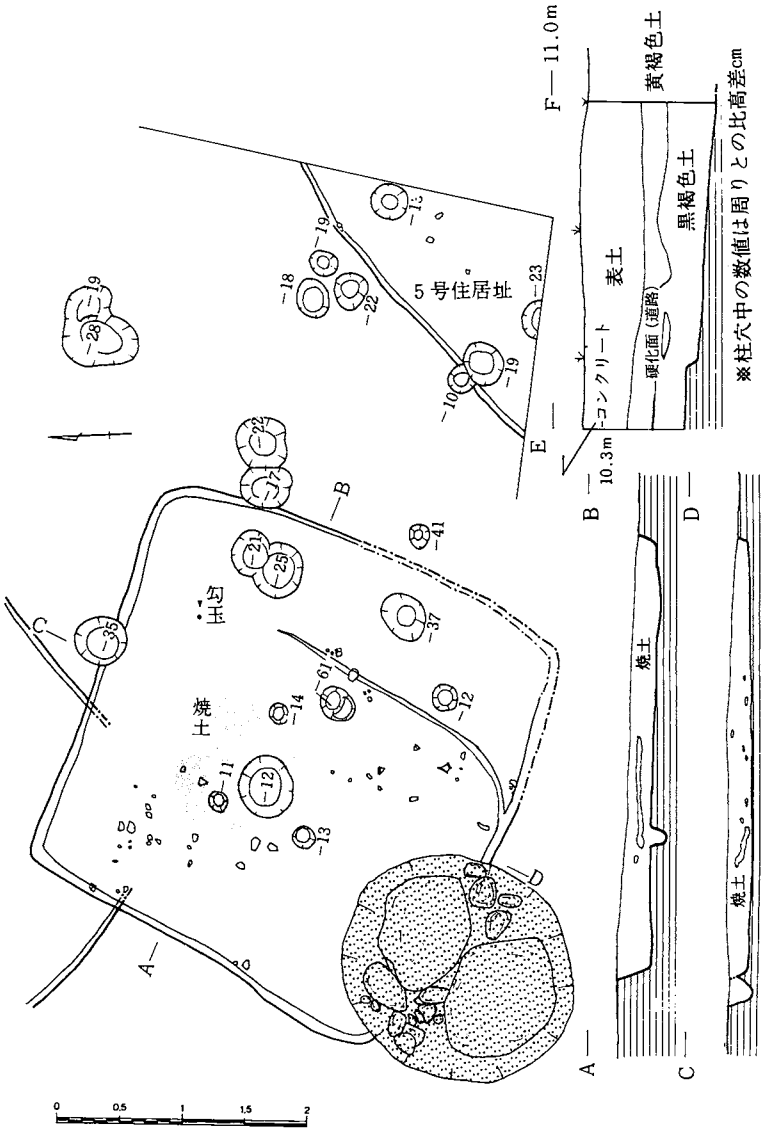
**石　器**（第16・17図）　3号住居址から土器のほか石器が出土している。第16図11の打製石匙、13の石剣破片、16の石鏃がそれで、13の石匙は玄武岩質重量13.95ｇ。石剣は幅3.3㎝、上下2.9㎝、半分に割れている。縦方向の石の節理を利用し石剣の面が縞模様として残っている。18の打製石鏃の石質はサヌカイトで重量1.61ｇである。

(4)　4号住居址（第22図）

4号住居址が3号住居址の一角を切る形で発見されたことは前に述べたとおりである。この住居址は南のコーナー附近の壁面が、後世の攪乱で検出出来なかったが、3.5mの方形プランの竪穴とみられる。住居址では中央部に焼土のひろがりがあり、柱穴として径30～50mのが住居内




**第21図　第二調査区3号住居址**




第22図　第二調査区4，5号住居址

に5個、東壁外に2個があり、小形の柱穴6個があった。住居内から土器片のほか勾玉が出土した。

出土遺物

**土　器**（第31、32図）　68～76は4号住居址内出土の土器で69、71、73、74以外は覆土中出土のものである。68は壺形土器で、住居内土器の中でも器形的に新しい様相をしているが、粗い器面調整に古い手法を残している。69、71～74は甕形土器で、69の高い脚台を74の「く」の字になる口縁は、住居内出土の他の土器に比べ新しい様相として捉えることが出来る。甕形土器の中でも71の上に肥厚する口縁部には古さがあり、72、73は黒髪式土器の特徴をもってい

る。75は深鉢形の土器で、70はその大形のものである。胴部がまるくふくらみ、丸味のあるわづかな平底のつくことが考えられる。76は壺形土器の頸部から肩への移行部の破片で、そこに櫛目波状文が施文されている。

以上図示した9個の土器は形態上古い様相を示す71ついで72、73があり、それ以外の土器は弥生中期というより後期とするにふさわしい。

**玉　類**（第17図）　24にあげた勾玉は滑石製勾玉で、最大長3.1cm、厚さ1.2cm、両側穿孔の孔径2.9mm、重量7.3gである。古式の様相をもっている。

(5)　5号住居址（第22図）

5号住居址は4号住居址の東側に一部が検出され、大部分は調査域外にかくれている。床面は現地表下約1mのところにあり、壁はわずかに10cmばかりの高さが確認された。住居址の上には歴史時代の踏分け道が重なっていて、住居址を斜断していた。住居址の発掘した範囲から7個の柱穴が確認され、住居址内には少量の土器片が散乱していた。

出土遺物

**土　器**（第32図）　77～81に図示したのは、79が住居址内の柱穴から、他はいづれも覆土中発見のものである。77は甕の底部、78は甕又は壺の一部とみられ、79、80は甕形土器口縁部で上面が平坦乃至はしゃくれ気味である。

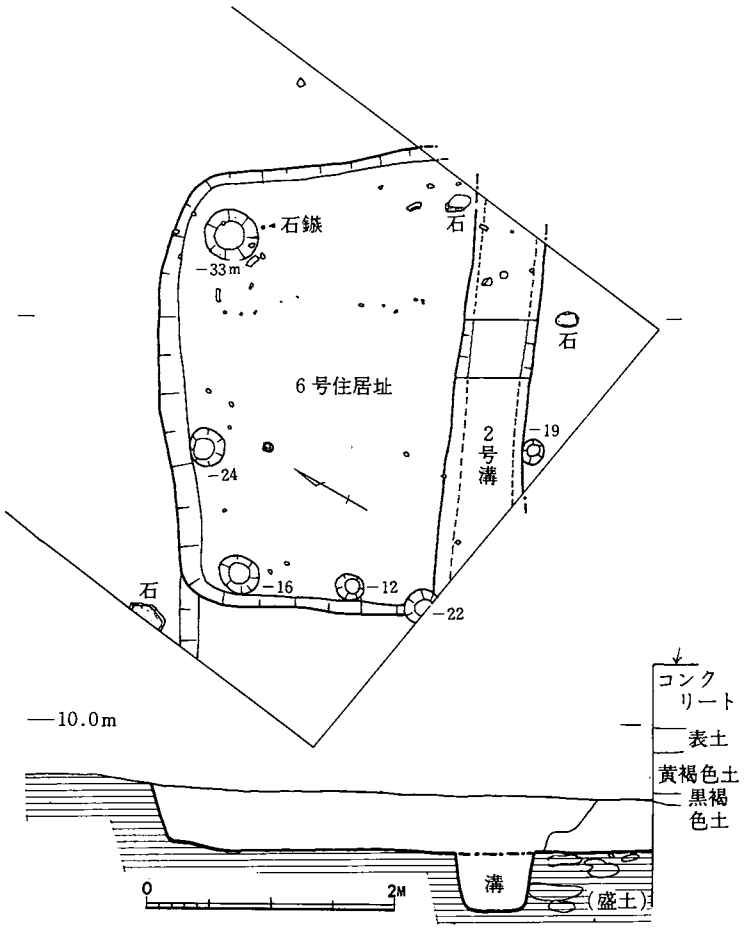
以上図示した土器は、いづれも弥生中期とみられるものである。

**石　器**（第17図）　15にあげた打製石鏃は5号住居址覆土中発見のもので、石質はサヌカイト、先端など欠損しており重量0.90g。

(6)　6号住居址と溝（第23図）

6号住居址は第二調査区の最南端の現地表下1m余のところから発見された。住居址の南半は調査域外に延び全体の平面プランの確認に至っていないが、北壁の長さが3m40cmをはかる。南北の土層断面に南壁が確認されなかったが、住居址を横切る溝より南の床面が地形の傾きがもとで盛土とみられるところから、南の壁は確認困難であった。しかし、他の壁の状況から方形又は長方形のプランであることが考えられる。住居址は北壁の高さが40cm余りで住居址内では柱穴とみられるもの6個が発見された。床面上から土器片のほか鉄器、石鏃等が出土した。

6号住居址の南寄りのところに東西溝一条が発見されている。溝幅は58～65cmで、住居床面からの深さが45cmの断面U字形の溝であるが、溝中からも弥生式土器片が出土している。




**第23図　第二調査区 6 号住居址と 2 号溝**

出土遺物

**土　器**（第32、35図）　図示した82〜85及び127のは6号住居址出土の土器である。127は上下を図示により復元したものである。この土器は口縁径25.3cm、底部は上げ底、器面にはあらいヘラによる調整痕をのこしている。推定高36cm弱である。これは一般に黒髪式土器といわれるタイプである。82〜85は口縁部上部断面の状態が平坦または一部上に肥厚するタイプのもので、器面に調整痕をのこしている。85は「く」の字形口縁の甕で、これもあらく器面調整痕がある。器形のうえから新しい様相が認められる。出土した土器の中で 127の甕の一部が貯蔵穴の破片と接合したことは、遺物の在り方を考えるうえで注意してよい。

溝中から少量の弥生式土器片と一個の完形の土器が発見された。86がそれで溝の底より18cm上のところから出土した。この土器は直径5.2cm、高さ2.7cm、厚さ 1.3cmの部厚い土器で、内外に漆がぬられていた。そこで、漆の容器ともみられる。

**石　器**（第17図）　14、19の石器が出土している。いづれも黒曜石製の打製石鏃であるが、19は一部折損している。重量はそれぞれ0.40ｇと0.30ｇをはかる。

**鉄　器**（第64図）　44は3.0cm×2.6cm、厚さ約5㎜ののみ状のもので、重さ15.9g鉄製品である。

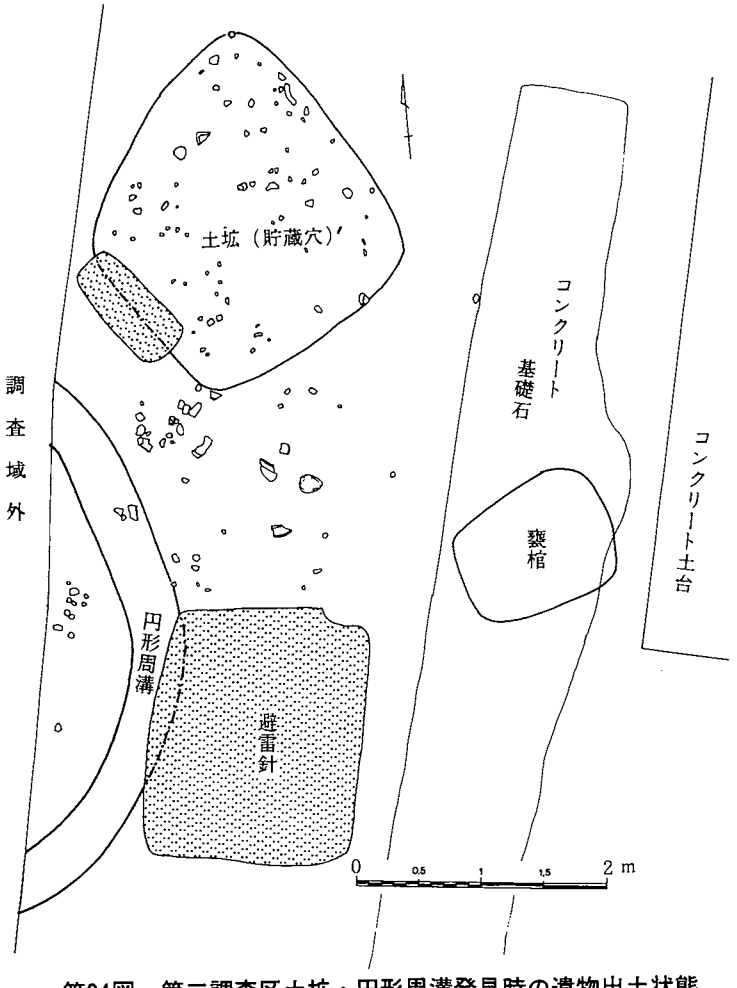
(7)　貯蔵穴（第25図）

貯蔵穴とみられる土壙が4号住居址の南から発見されている。発見時掘下げの過程で周辺の遺物包含層から多量の土器片が散布していた。

貯蔵穴は2.15m×2.2mの隅丸の不正形で、確認面から急傾し底までの深さ60cmであった。この中には鉄器のほか土器片が多量に出土したことは、以下図示したとおりである。

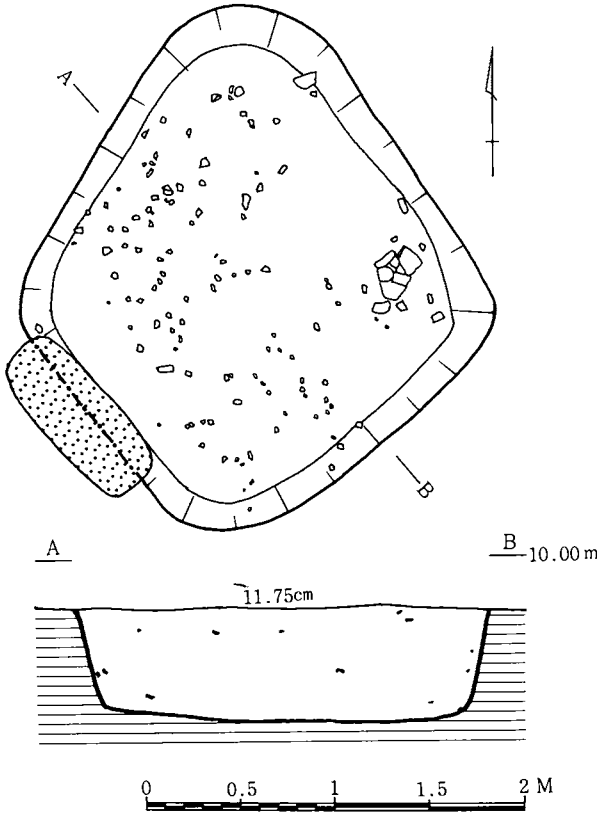
出土遺物

**土　器**（第33～35図）　87～122及び127は貯蔵穴出土の土器で、127の破片は6号住居址の土器と接合している。このうち93は底直上より、87～89、90、94、99、101、103、106、108、110、112、116～119、121、122は底近くに発見されたもので、これ以外は覆土中発見のものである。




**第24図　第二調査区土坑・円形周溝発見時の遺物出土状態**

このうち87～106、127は甕形土器の口縁部又は底部とみられるものでそれぞれの器形にかなりの変化がある。このうち古い様相の口縁部とみられるものに87～93があり、断面形が平坦もしくはしゃくれているのに94～103がある。また断面形「く」の字をなすものに106と115～118があるがこれらは壺形土器とみられる。107、108、119は甕の脚部で、器面調整が粗く弥生後期の土器にない古い様相をもっている。114は平底の甕でこれも様式的に古さを感じさせる土器底部である。109、110は複合口縁の壺で、内側にはり出した鋤形の尖り、上面は平坦というよりいく分しゃくれ気味である。口縁径をそれぞれ27.3cm26.6cmを測り、109には頸部に上下方向の暗文の器面調整痕をのこしている。また112は壺の頸部から肩にかけての部位で、刻目をもった突帯一条が頸基部にまわっている。121は壺の底部で不安定な平底で、中央部が薄く出来ている。111及び120は高坏形土器の坏口縁及び脚部とみられるものの破片で、111の内外面に丹彩が施されている。113は鉢形土器の口縁部破片で、図示による複元口径27.6cmである。口縁下に一条の突帯あり、上面平坦な口縁には沈線文があり、10本の線が外に向かって放射状に描かれている。122に図示したのは素文の重弧文土器とみられるもので、胴部に鋭い稜線があり、この稜をさかいにして上方が磨研されており、内面の粗いタッチの横方向の器面の調整文、さらに外面が




第25図　第二調査区土坑（貯蔵穴）

黄褐色土器の色調と内面の黝黒色（壺内部の還元焔によるか）の色合から長頸壺と見るのに充分である。この種の破片は同一遺跡の他の地点からも出土している。

**石　器**（第16図）　9の石器は石包丁の破片で、半面が剝離している。これは粘板岩の石質である。

**鉄　器**（第64図）　43は4.1cm×3.7cm、厚さ約6㎜の鉄片で、銹着しているが折返しのみられるところから鉄斧とみられる。重さ19.0gである。

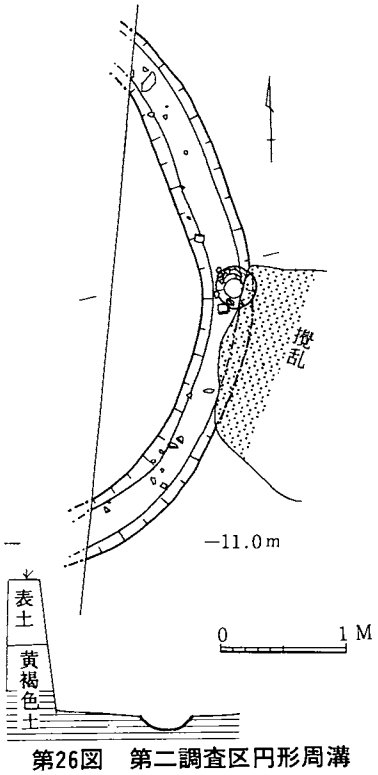
(8)　円形周溝（第26図）

第二調査区で発見された貯蔵穴とみられる土壙の南側から円形周溝の一部が検出された。前年度の熊本市による神水遺跡の発掘調査で、埋納施設を伴わない円形の溝が発見されており、それと同類の遺構とみられる。ここではそのまま円形周溝としての呼称を用いることにした。

検出された溝は径40cm位のゆるいU字形の溝で、一部を避雷針埋設により削られていたが、東側の約1/3ほどを発掘した。この溝は現地表下約1mのところに発見され、確認面からの掘込みは20cm余りの浅い溝で、図上復元によれば、外側の半径2.5mの円を描くものとみれる。溝中に柱穴も確認されており、平地住居の周溝の可能性もあるが現状から確定すること困難である。

出土遺物

**土　器**（第35図）　128～134は周溝中出土の土器で、130、131が覆土中、132～134は底に密着していた土器片である。このうち128～130及び 133は甕形土器の口縁や口縁下の突帯の部分で、ここにもいくつかの態様がある。131は丹塗高坏の坏部口縁、132は壺の頸部から肩への移行部である。頸部には刻み目をもった突帯一条がある。



第26図　第二調査区円形周溝

(9)　溝遺構（第18図）

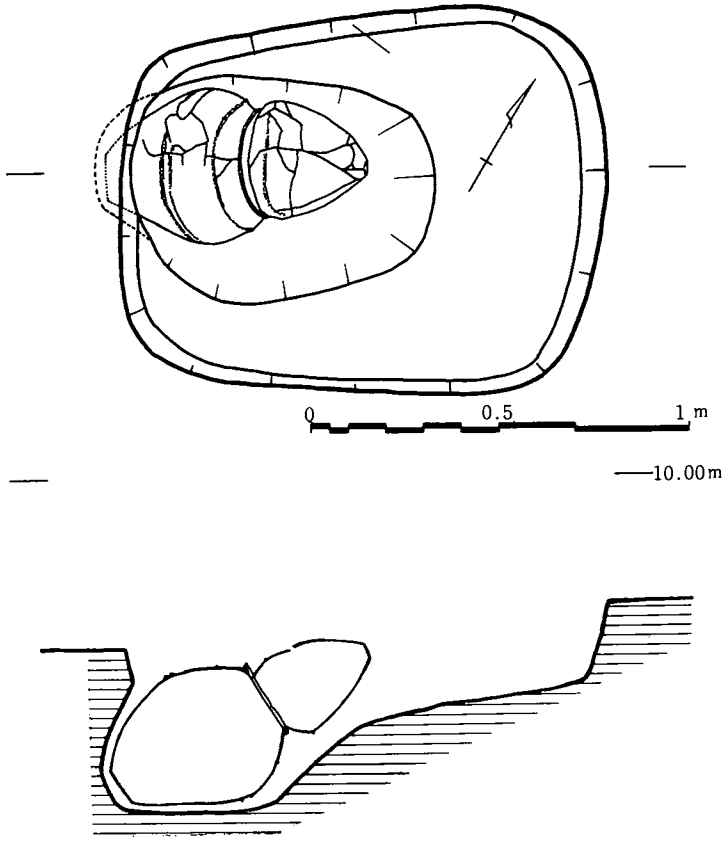
溝は第二調査区を斜断するかたちで1号住居址と3号住居址の間に一条ある。さらに6号住居址の中の一条については、すでに6号住居址のところに述べたとおりで再述をしない。この溝は溝幅50cm余りの断面U字形をしており、北の方は比較的はっきりしていたが、3号住居址の西側ではこれと重複し、それぞれの輪郭があいまいになる。さらに南に延びるものとみられるが、後世の撹乱土によりいよいよ不明瞭になる。この溝はまた北に延びて、第一調査区の溝に連結するものとみられる。

溝からの出土遺物として土器片があるが、いづれも弥生式土器の破片で、図示に堪えるものはない。

⑽　甕棺墓（第27、36図）

第二調査区から甕棺墓一基が発見されている。発見の部位は円形周溝の東側で、まず97cm×127cmの隅丸方形の土壙があらわれ、土壙の西側を斜めに掘込み合口甕棺を埋納していた。甕棺の埋納角度は32°、方位は上甕をN-30°Eの向きを示していた。合口には粘土の目張りはなく、棺内を精査したが人骨、副葬品は残っていなかった。

甕棺は上・下に壺形土器を使用しており、下甕は高さ45.7cm、口縁径25.5cm、底径12cmの平底の土器で、最大胴径39.9cmの倒卵形の胴腹部には二条の貼付突帯があり、突帯上に刻み目を付している。また同様の突帯が肩部にも一条ある。口径18.2cm、口縁部は断面が「く」の字形に内側に鋭く曲がっている。さらに口縁上面にはたて方向の２孔一対の焼成前穿孔があけられている。この種の穿孔せる壺は蓋を組合せて使用するものとみられるが、この種の深めの壺に穿孔のある例は珍らしい。器面には外面磨研による下から上へ横方向の箆痕が残っている。焼成良好である。




第27図　第二調査区甕棺出土状態

上甕にも壺形土器を使用しているが、この壺は頸部より上を欠いで甕棺の蓋としている。壺は平底であるが、立上がりのところがまるい。倒卵形の器形は現高25.5cm、最大胴径26.8cmでこの部位につまみ出しの突帯一条がつき、突帯帯上には刻み目を付している。突帯と頸部の間に逆綾杉文状施文がある。頸と口縁部は欠失しているが、ゆるく外反するものとみられるが、上端が複合口縁になることも考えられる。この上甕の口縁部とみられる破片が、第四調査区6号甕棺と一緒に発見されている。

(11) その他の第二調査区出土弥生式土器（第35図）

遺構出土の遺物の他に、黒色土、いわゆる遺物包含層出土の土器がある。第35図135～139に図示した土器がそれで、135は口縁径23.2cmに達する甕形土器で、口縁上面のしゃくれの状態から黒髪式土器とみられる。138は同種の甕の脚部で器面には箆による調整痕をのこしている。135は丹塗り高坏の坏部口縁とみられるもので、137は鉢形土器とみられる。また139は甕形土器とみられるもので、突帯一条がある。外面を磨研のうえ丹彩を施している。

## 2．歴史時代の遺構

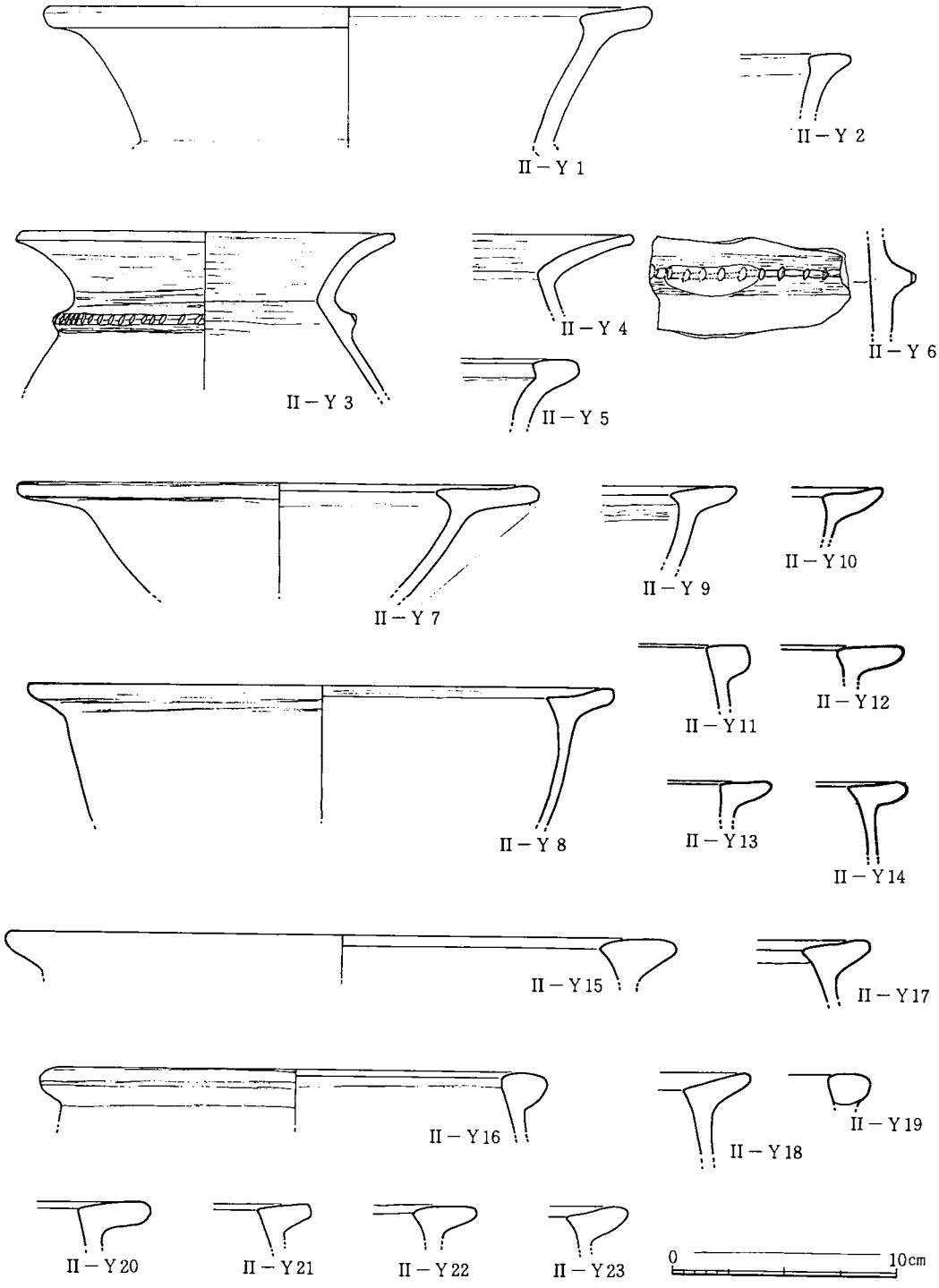
道路遺構（第38図）

歴史時代の遺構として、一条の道路が発見されている。発見の場所は第二調査区の中央附近を斜断する形になっていて、これの延長をおって調査をした。

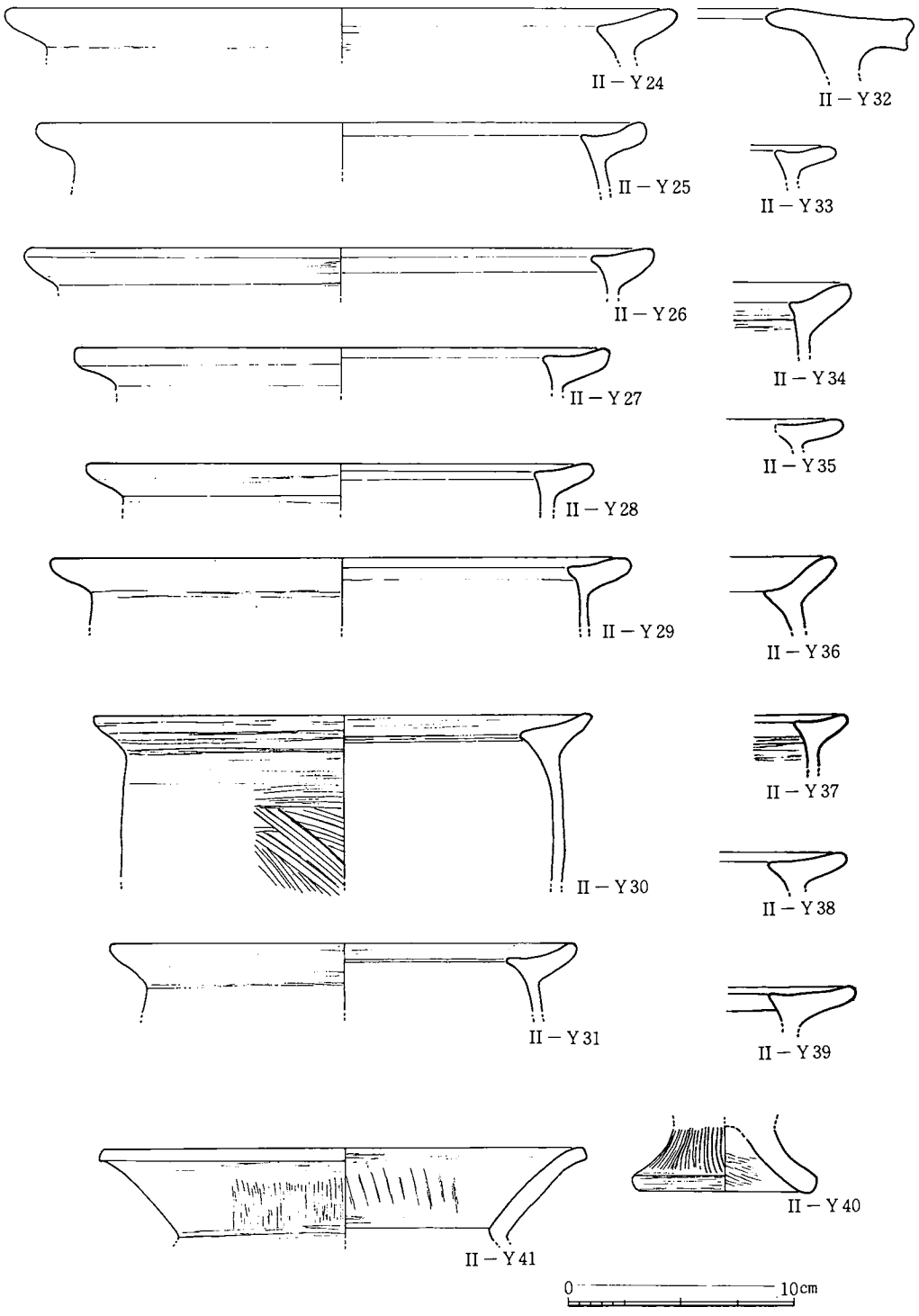
道路遺構は弥生時代の遺構の上にあって、5号住居址の附近では地表下約70cmのところに道路の硬化面があった。

道路は硬化面の幅40～60cmで、東北より南西に直線的に延びており、部分的に建物の基礎工事で壊れていたが、約12mの延長を調査した。

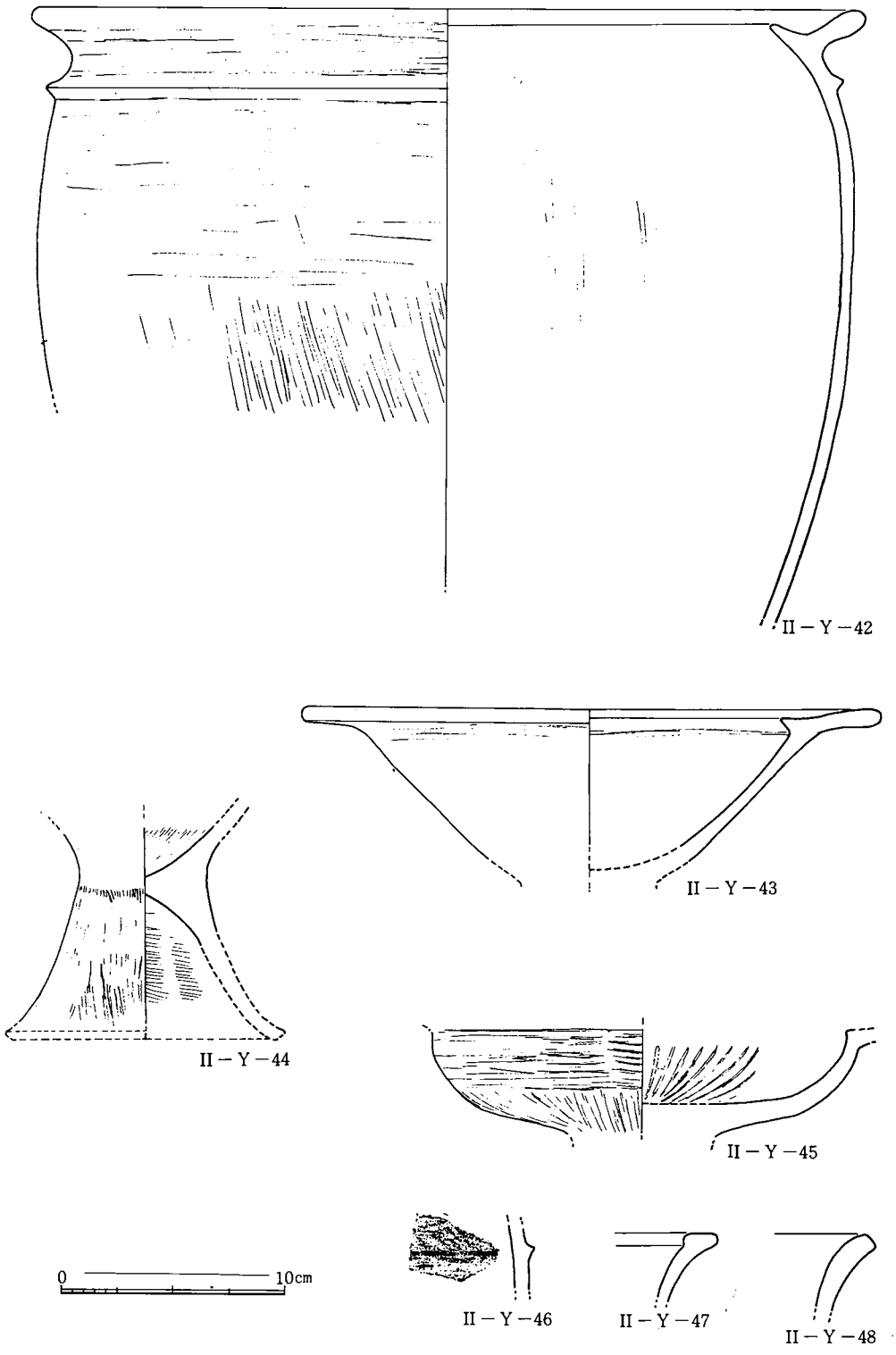
この道路遺構は発見時の層位と硬化面上などに残っていた布目瓦、土師器の埦の破片から、奈良～平安期の遺構とみてよかろう。




**第28図　第二調査区出土弥生式土器 1**　　1住　1～23

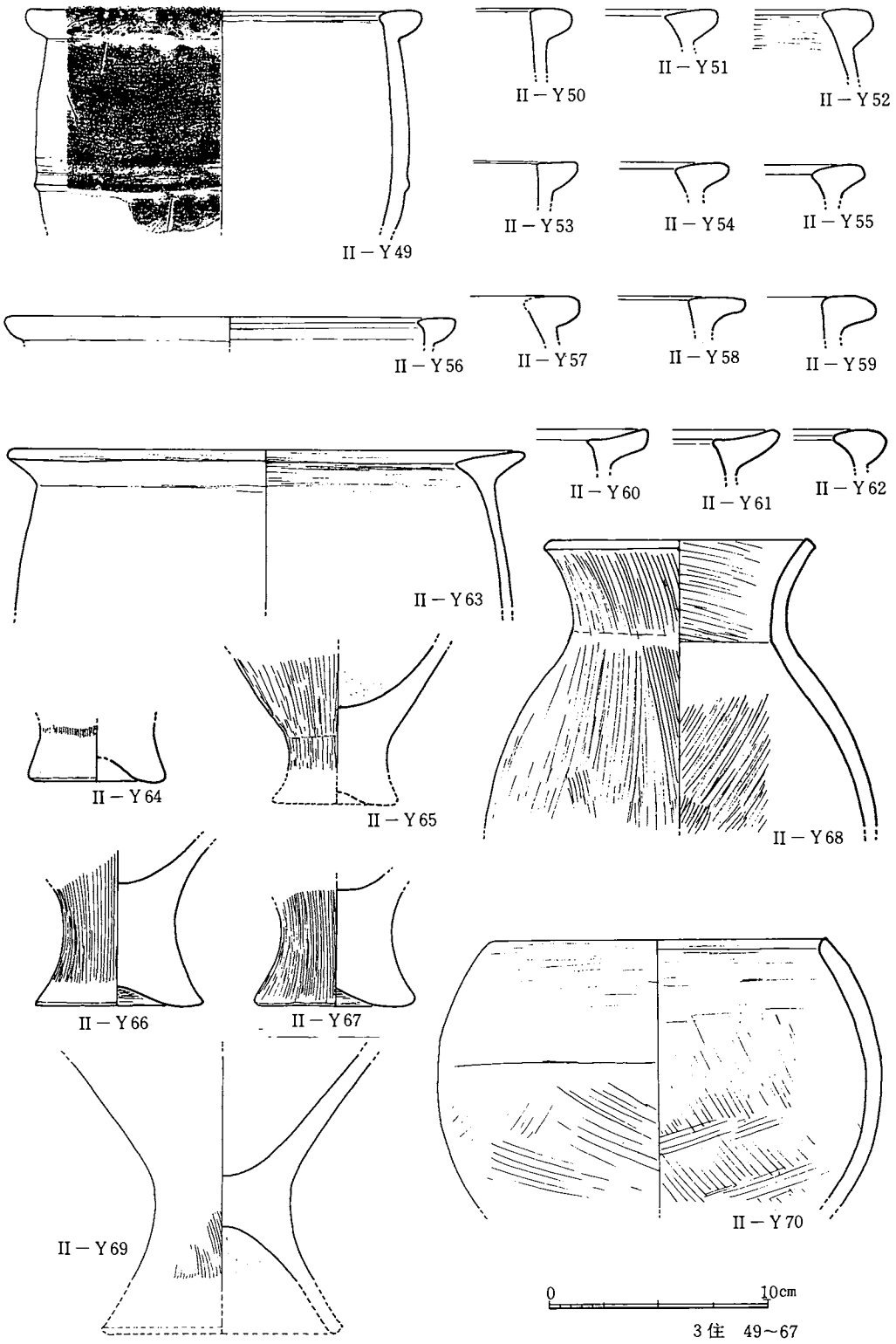



**第29図　第二調査区出土弥生式土器 2**　　1住　24～41



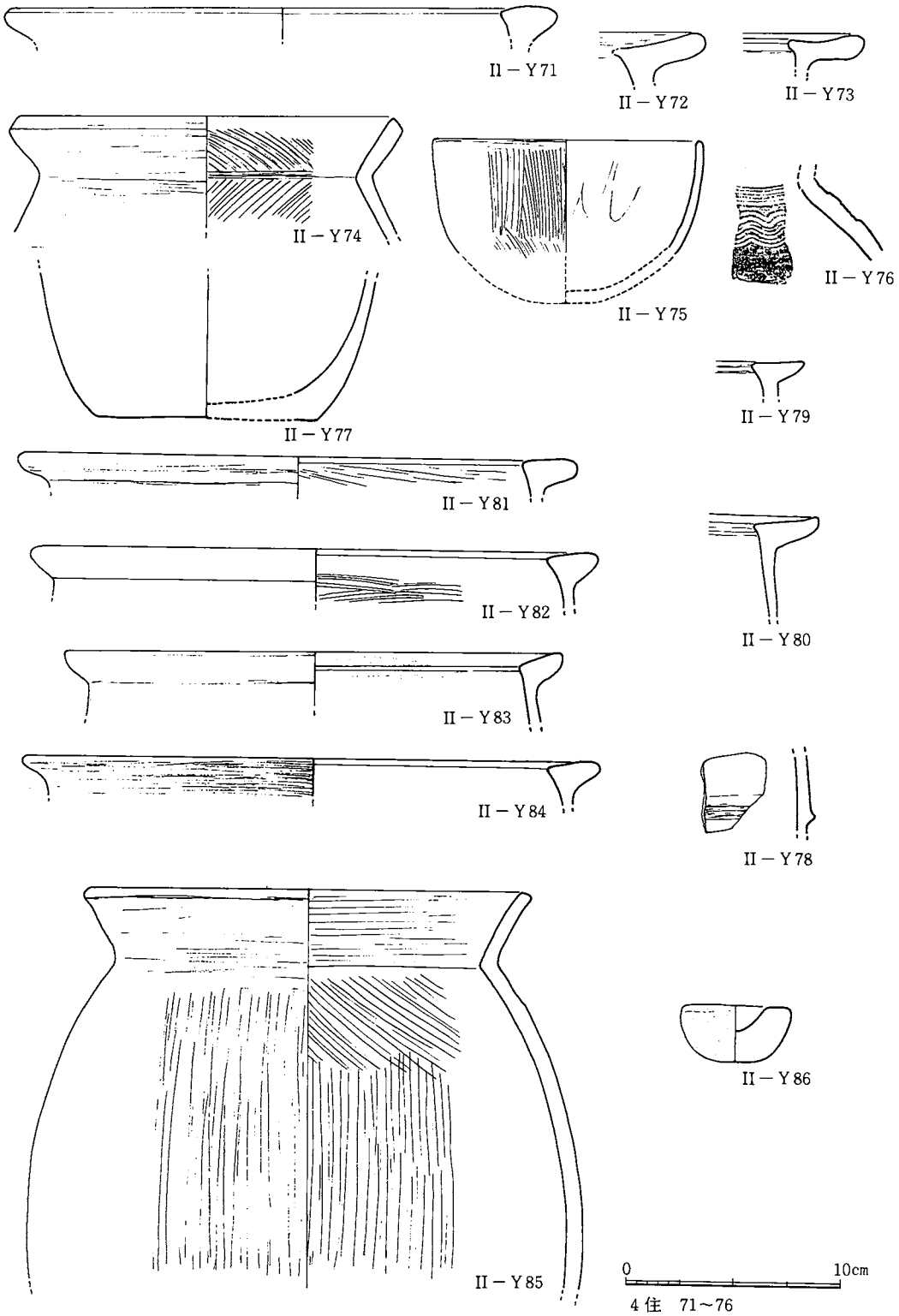

**第30図　第二調査区出土弥生式土器 3**

1住　42，43
2住　44
3住　45～48



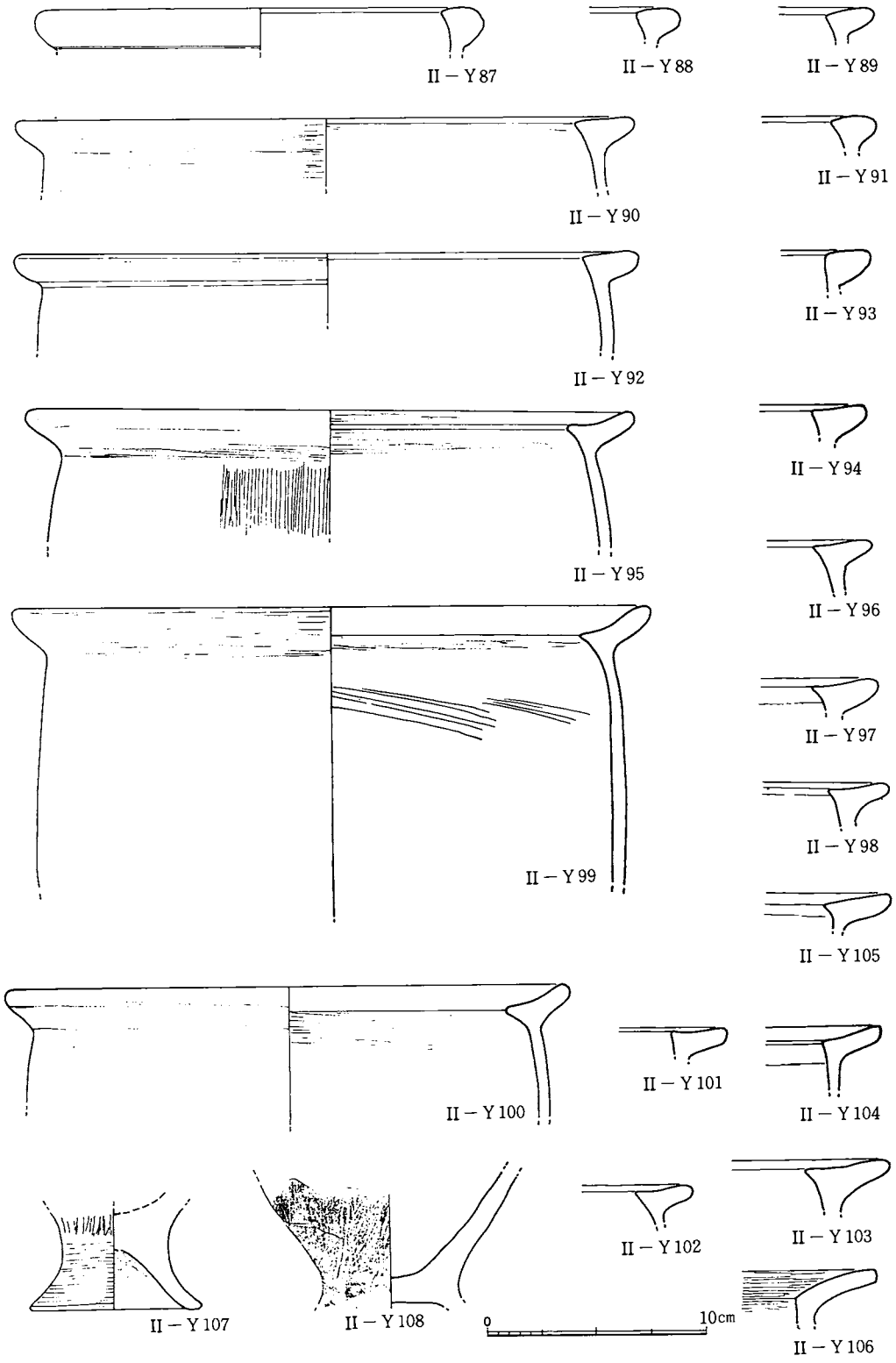

3住　49～67
4住　68～70

**第31図　第二調査出土弥生式土器 4**

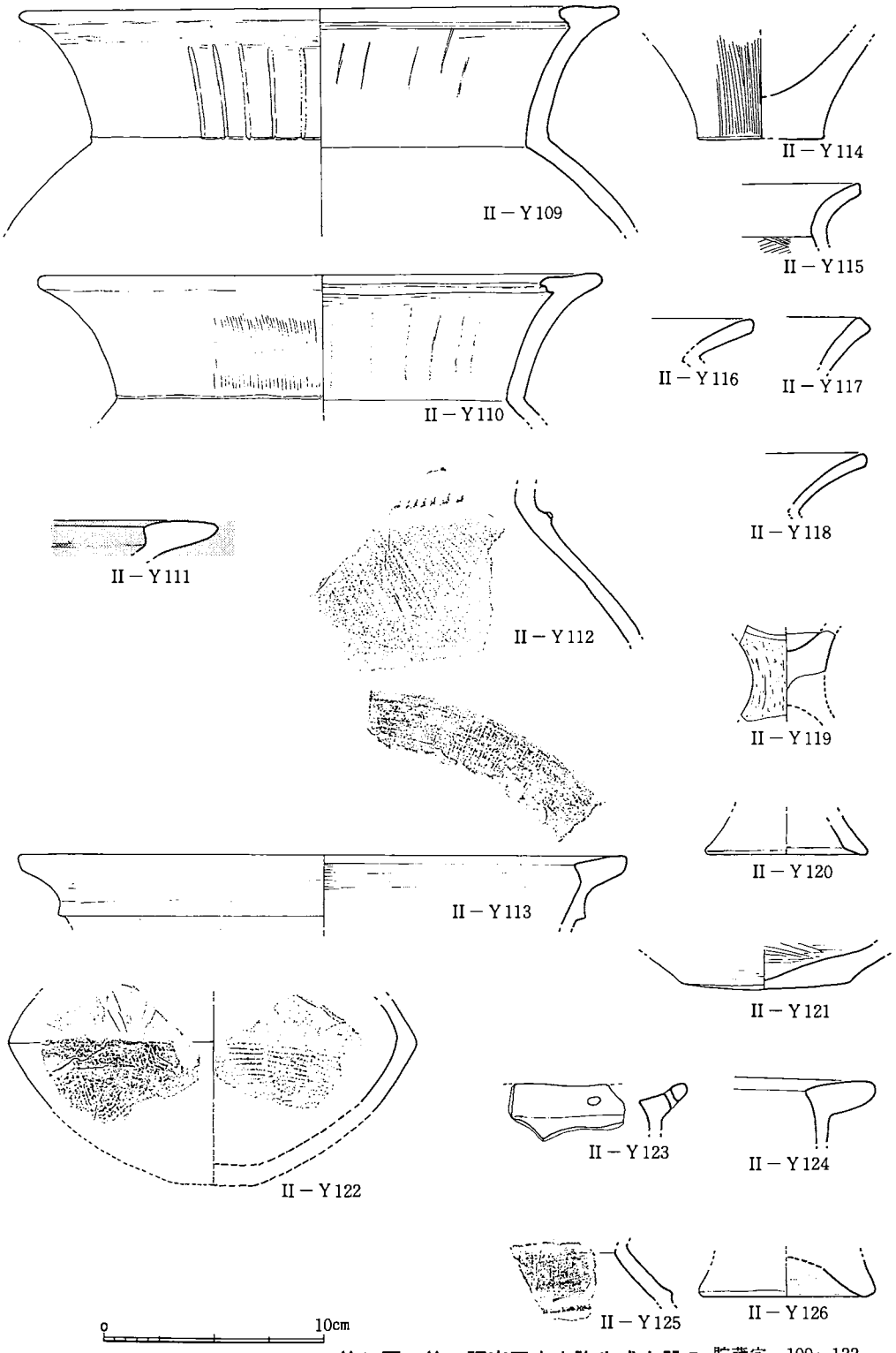



4住　71～76
5住　77～81
6住　82～85
6住内溝　86

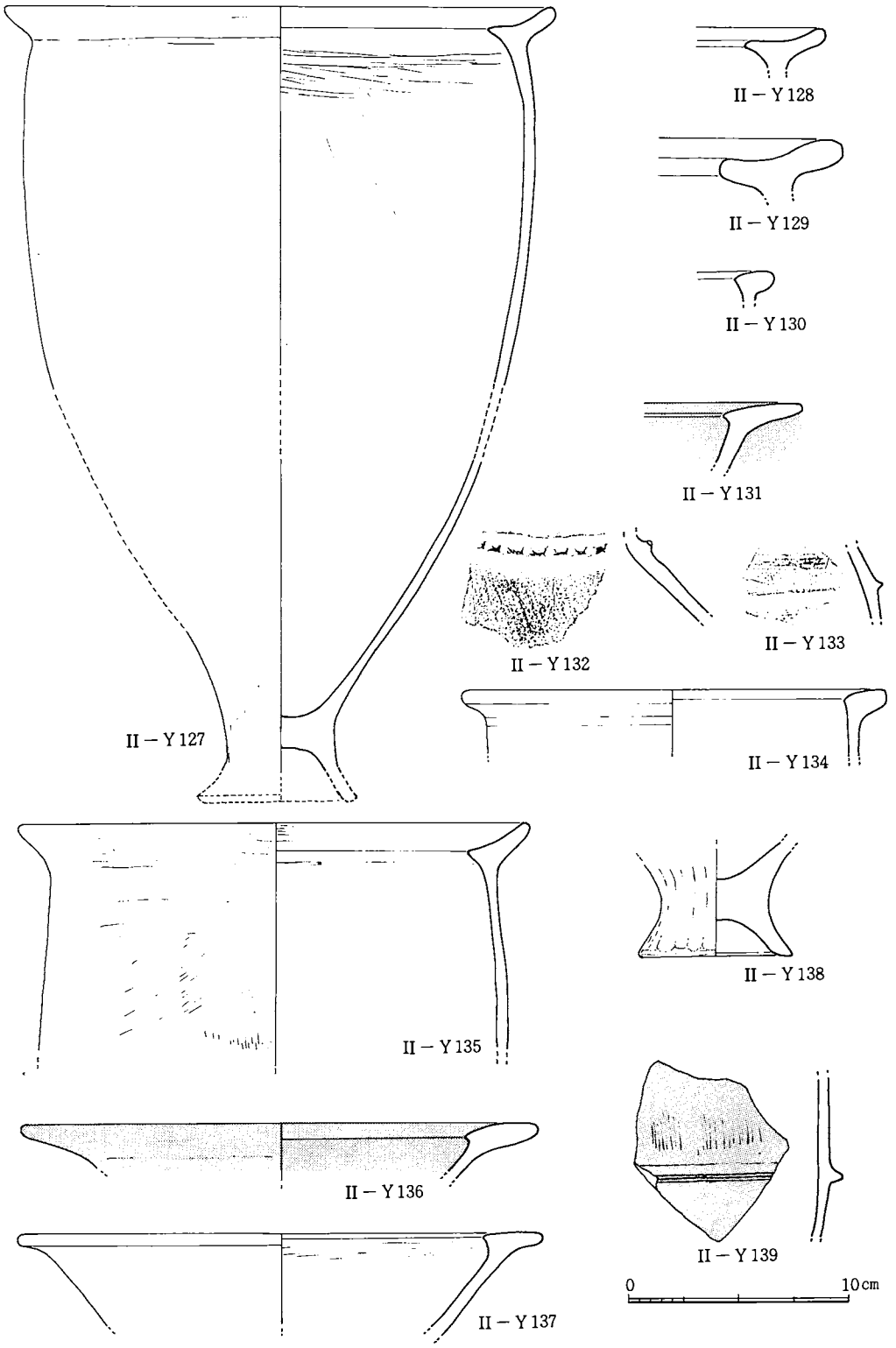
第32図　第二調査区出土弥生式土器 5




**第33図　第二調査区出土弥生式土器 6**　　貯蔵穴　87～108

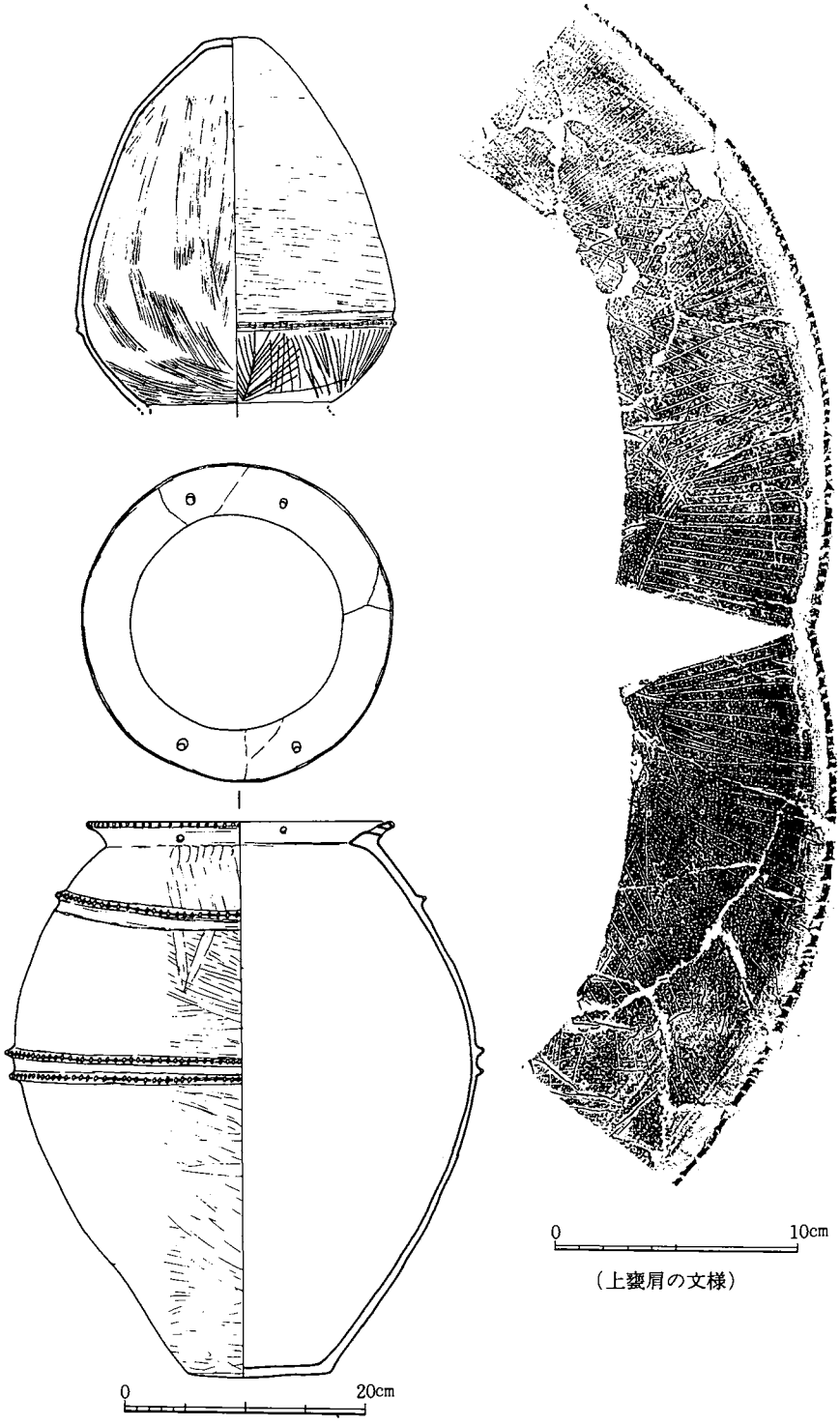



**第34図　第二調査区出土弥生式土器 7**　貯蔵穴　109～122
溝　123～126



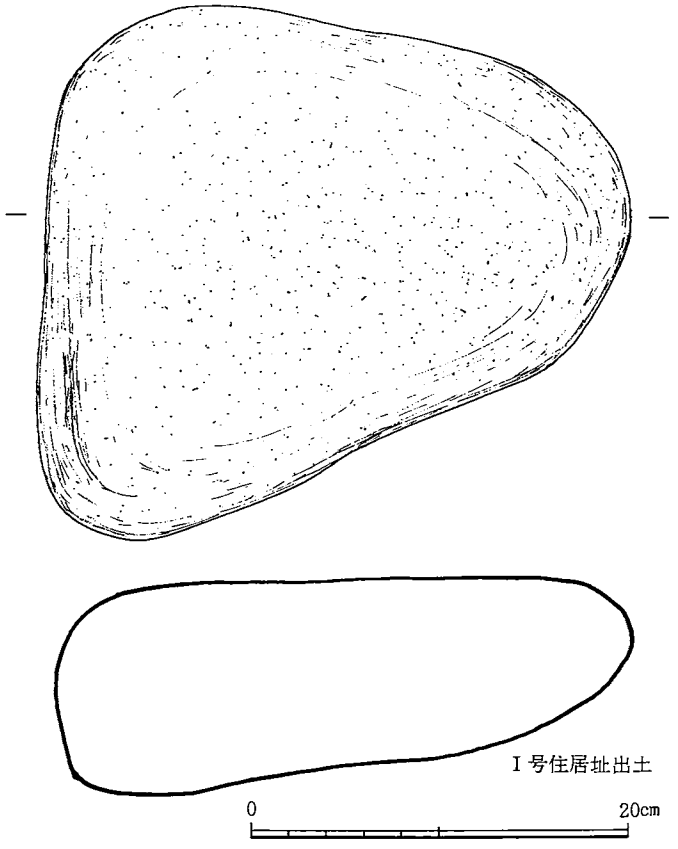

**第35図　第二調査区出土弥生式土器 8**

貯蔵穴及び 6 号住　127
円形周溝　128～134
他　135～139

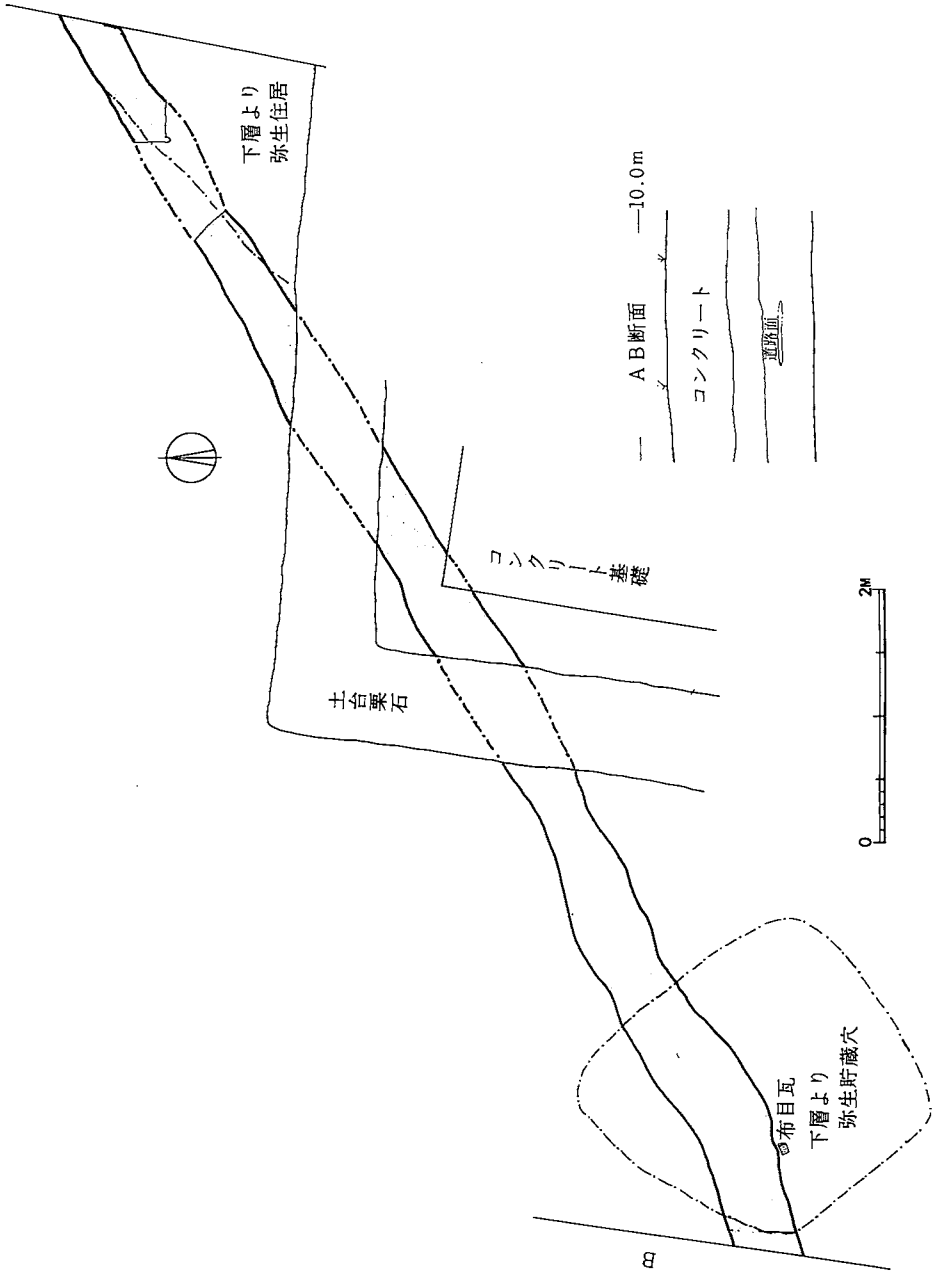



（上甕肩の文様）

第36図　第二調査区出土甕棺




第37図　第二調査区出土石皿




第38図　第二調査区道路遺構

## (四) 第三調査区（第39図）

主要地方道熊本－高森線より、元協和発酵敷地への進入路東側の約1000m²のところを第三調査区とし、反対側（西側）を第四調査区として発掘調査を実施した。したがって第三調査区は北と西が道路に囲まれ、東は民家や道路に接していた。そこで境界域に調査余地をのこし、バックフォーとダンプカーを使用して表土はぎを行った。この附近は遺構検出面までの推積土が意外と深く覆土が１m以上に及んでいた。第39図は表土削去後の状況であるが、ここに至るも随所に現代の撹乱が及んでいた。

表土削去後10m毎のグリッドを組み、東からA・B・C・Dとし、北から１・２・３・４…とした。これをもとに遺構の確認作業をしたが、C－１、C－２の各区は撹乱がローム層に達しており、最早や遺構発見の期待がもてないところから初期の段階でこれ以上の調査を断念し、ついでB－２、B－３、C－３の各区でも、数個の柱穴の検出はあったものの、残りが悪くこれ以上の成果が望めないところから、４列以南に調査の重点をしぼった。以下、各時代毎の遺構及び遺物について述べる。

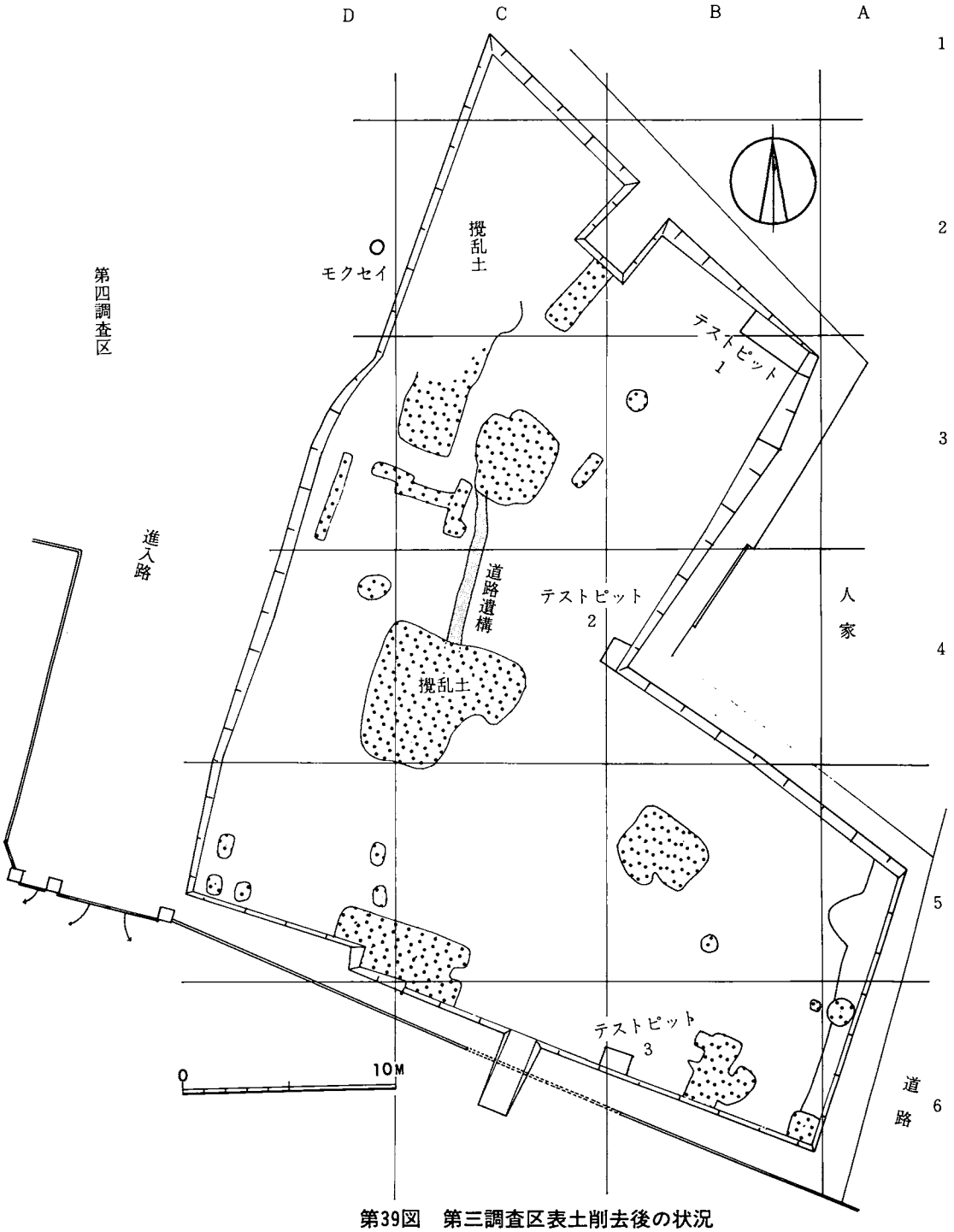
### １．弥生時代の遺構と遺物

第三調査区D－４区の西側壁面硬化面下から弥生式土器が一括出土していた。第41図１～８に図示した土器がそれで、１～３及び８は壺、４～７は甕形土器である。１、２は複合口縁の壺で、いく分外反した壺の口縁上面には平坦面があり、２の頚部には突帯一条がつく、いづれも器面は磨研され焼成良好な土器である。３は壺の平底の底部で、これも磨研により器面が堅緻にしまっている。８も壺形土器の一種で肩より胴にかけての破片である。胴部にはつまみ出しによる突帯二条がある。器面は堅くしまり橙色をしている。４～７はいづれも甕形土器の底部で、４、５の外面は淡くせん細な刷毛目による器面調整があり、底は上げ底でわずかに外反する脚がつく。６も同種の底部であるが、外面は箆均らししている。７はやや大型の底部で外面を粗い刷毛目による器面調整をしている。底はわずかに上げ底となり、形態的に他の三個の底部と異っている。

以上D－４区から一括出土した土器は弥生中期の比定されるもので、興味ある資料である。

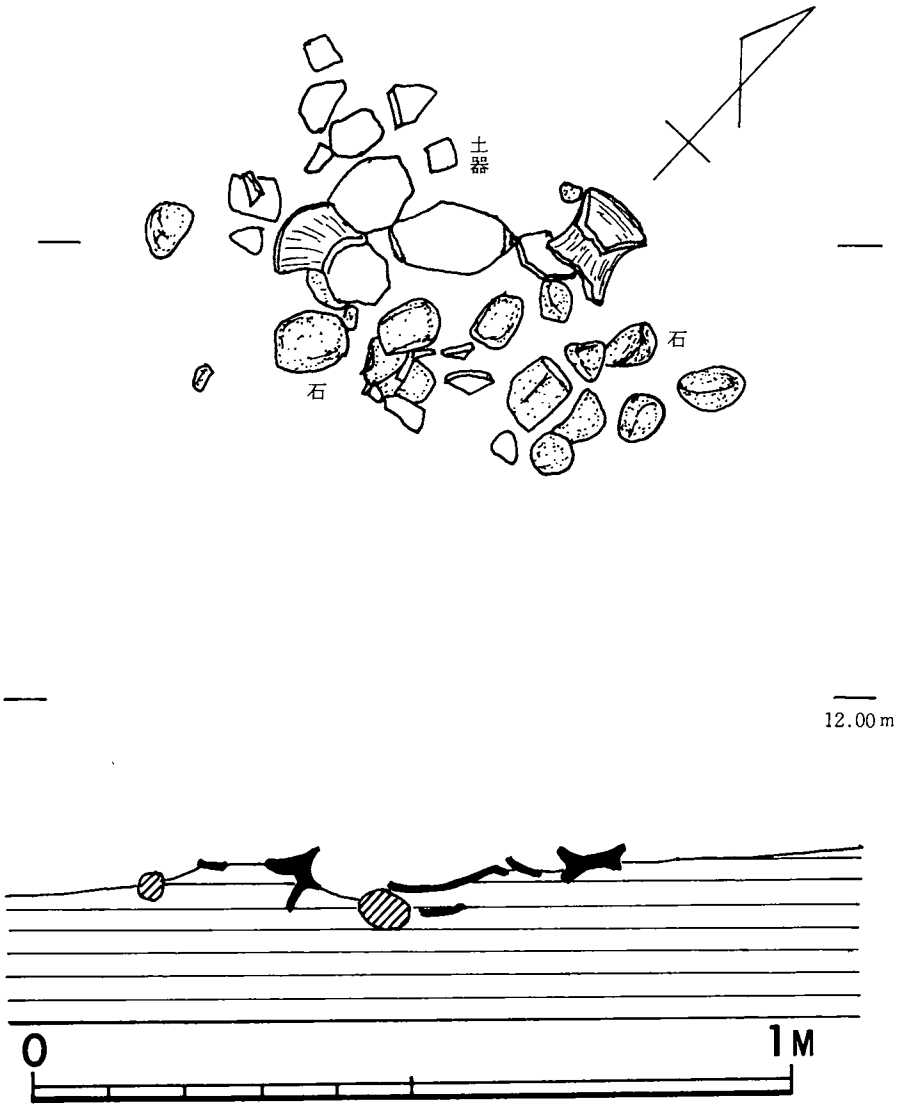
第三調査区ではC－４区硬化面から弥生式土器が、礫と共に一括出土している。ここでは１m四方位の範囲のところに拳大の礫に混って大小の土器片が散乱していた。遺構の性格ははっきりしないが、土器の様式に大きな相違がなく、一括資料として処理した。

C－４区出土の土器は第41図９～10がそれで、甕・壺・鉢の各種器形があり、ここでの在り方を考えるうえに好都合である。９、10は甕形土器でとくに９は底部から口縁部まで全体の器形を知るによい資料である。底には大きな安定した脚が付く、脚径11.0cm、底までの高さ3.6cmで、内面は横に器面を均らされている。胴部はまるくふくらみをみせ、ほぼ中央部に最大径

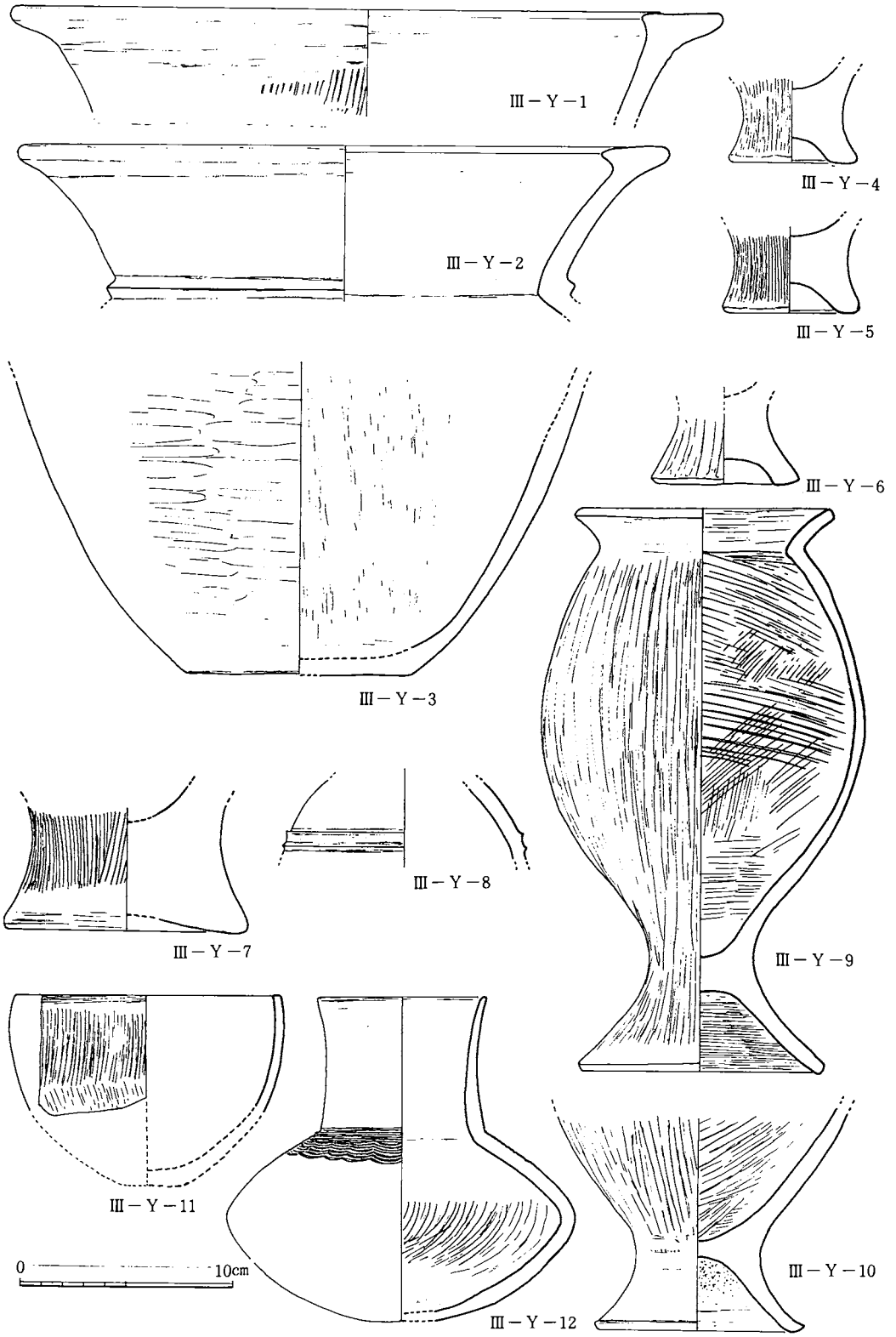



第39図　第三調査区表土削去後の状況

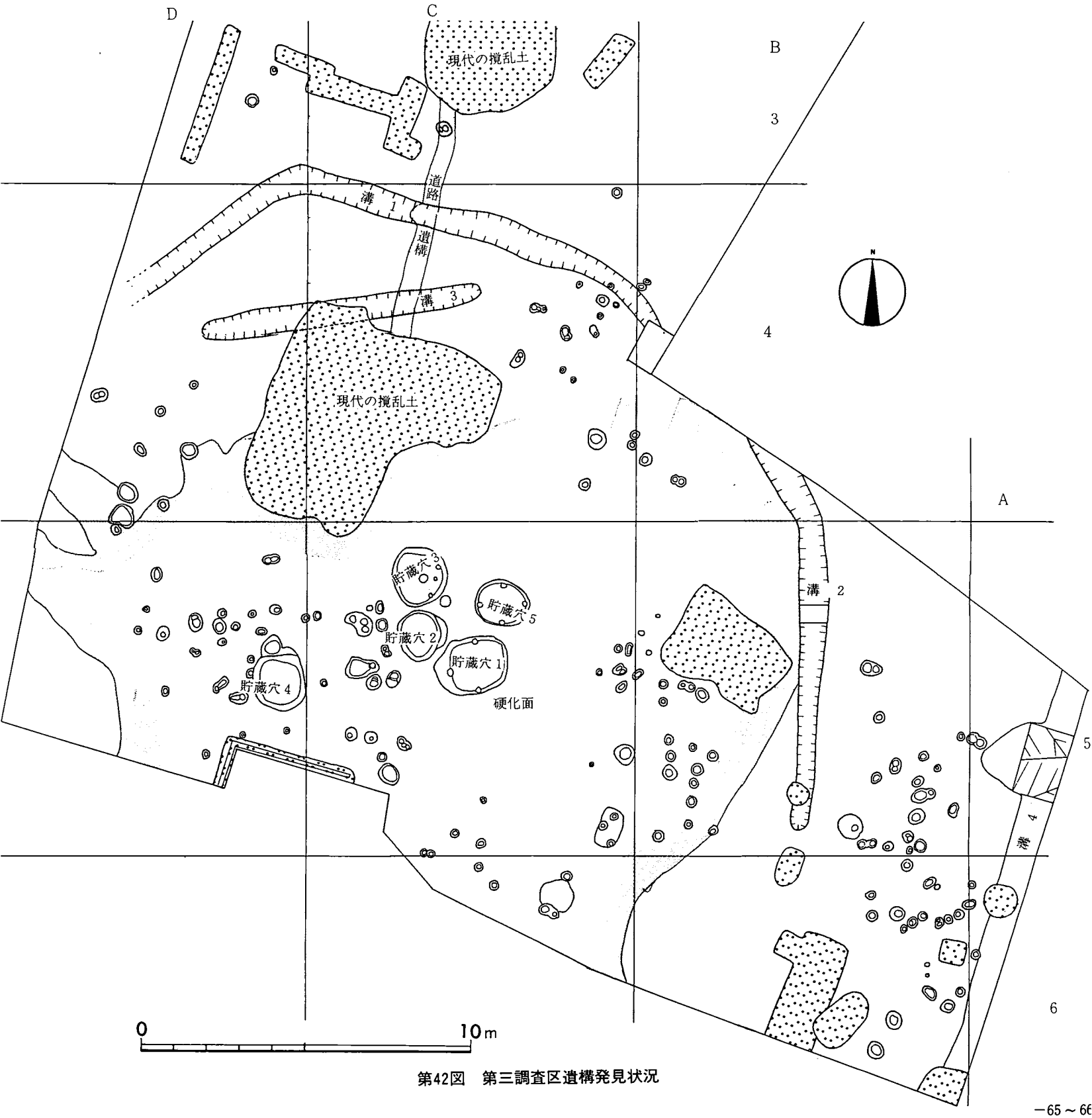
(15.2cm)がくる。頸部は「く」の字形をなし、口縁部にむかって大きく外反する。口縁径11.6cm全体高26.2cmである。土器の外面は縦方向、内面には斜の刷毛目調整痕があり、さらにまた胴部から口縁部にかけて使用痕というべき煤が付着している。10は9と同形の甕形土器であるが、これがいく分粗豪である。脚部末端が9と異なりゆるく外反りになり、器面の調整痕もあらい。そして最も違うところは底部内面に砂粒が付着していることで、これは脚付土器製作時の離れ砂とみられる。11は深鉢形の土器の破片で、12は頸基部に櫛目波状文のある長頸壺であ




第40図　第三調査区硬化面下出土
弥生式土器（C－4区）




**第41図　第三調査区出土弥生式土器**　1～8　D－4区一括出土
9～12　C－4区括出土




第42図　第三調査区遺構発見状況

る。長頸壺は高さ15cm余り、胴径16.7cm口縁径8.0cm、頸長6.3の胴部の楕円形に急角度に曲るが、そこに重弧文土器にみるような稜はない。櫛目文は頸基部よりに平行線文が7本、その下に同じく同じく7本の線が波状文をなしている。これは同一施文具による条痕の単位である。なお器の外面は淡黄褐色を呈しよく磨研されており、内面は底部に指による押圧痕、胴部に下から上への粗い整形痕が観察される。

このC－4区硬化面から礫と共に一括出土した9～12の弥生式土器は、その形態製作技法からして同時期のものとみられ、弥生後期の比較的古い段階のものと思ってよかろう。

## 2．歴史時代の遺構と遺物

第三調査区で発見された歴史時代の遺構は、貯蔵穴とみられる土壙5、道路及び溝などがある。またこの調査域から柱穴を含む多数のピットのあったことも注目すべきことで、ピットは硬化撤去後も発見され、とくにA、B－5、6区では硬化面同レベルを掘下げ後に多数発見された。この中には柱穴の配列からして幾棟かの掘立て家屋の存在も予想されたが、ピットが輻輳(ふくそう)しておりさらに工事と併行しての調査で現地での検討が困難であった。

### (1) 貯蔵穴（土壙）と出土遺物

第三調査区C－5区から4穴、C－6区から1穴の径1～1.5mの土壙があらわれ、当初単に土壙として処理し、若しかしたら上代の素掘りの井戸ではないか、と疑念を抱きつつ発掘に当ったことはすでに調査経過の中でも述べたとおりである。発掘の結果、土壙の深さが1m前後と浅いということが判り、必然的に井戸としての可能性は消え、土壙内に柱穴が発見されるに及び、一定の使用目的をもった窖(あなぐら)との見方を強め、ここでは貯蔵穴とした。

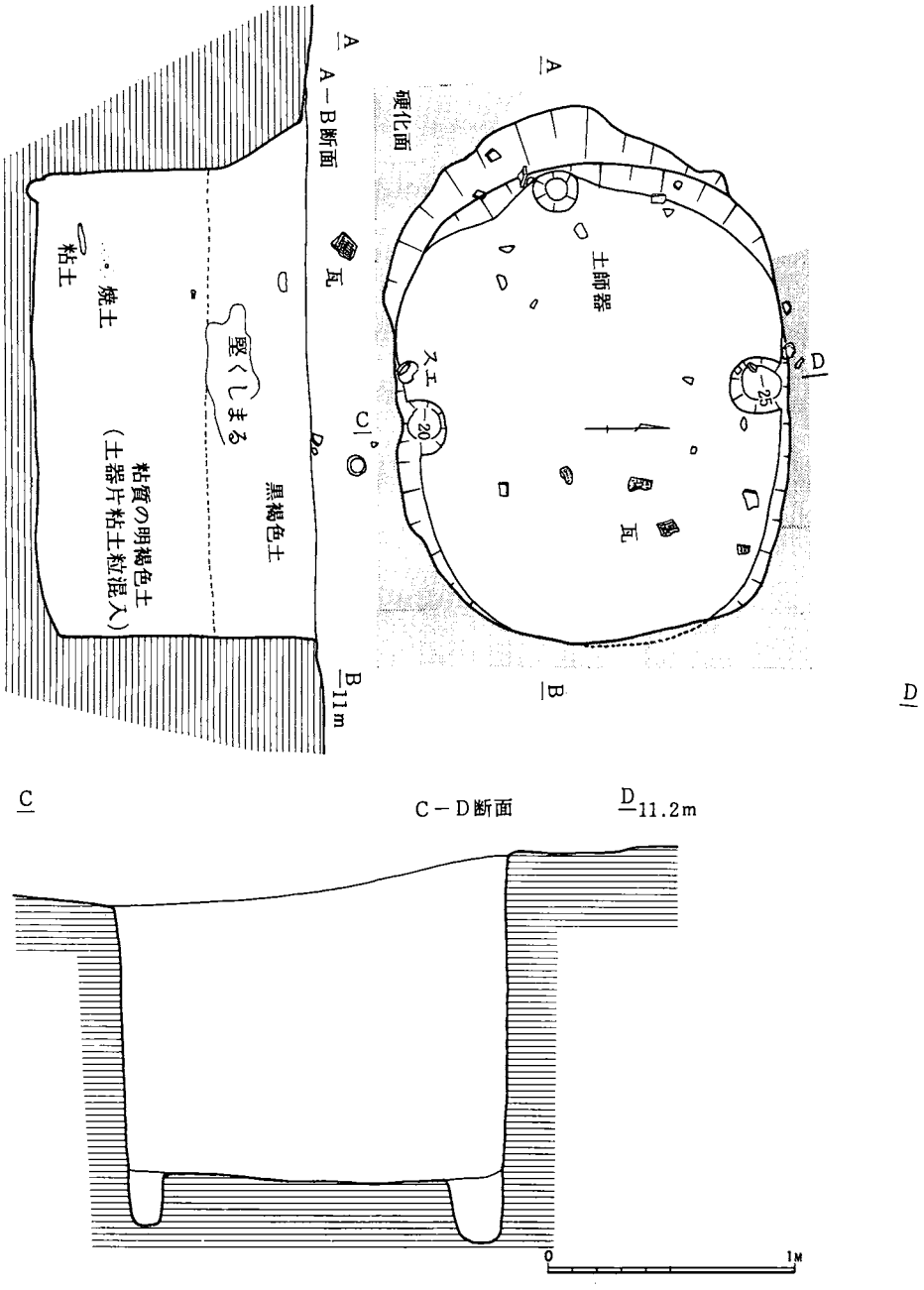
貯蔵穴の中は1～5号のいづれも埋土でうまり周辺の地面は踏み固められ、硬化面で覆われていた。貯蔵穴の中の埋土中には布目瓦、土師器、或は鉄釘等が埋没していた。

1号貯蔵穴（第43図）

1号貯蔵穴はC－5区のほぼ中央部に発見され、東西1.92m、南北1.6mの隅丸の穴で、西側の上場が崩れているが、ほぼ垂直に約1.2m掘られていた。埋土は上が黒褐色を呈し、その中に堅くしまりのある土がブロック状に入っていた。約40cm掘り下げると土色が変り明褐色土なるが、この間一線を画りするほどの状態でなく漸移的な変化であった。下位の土層には土器片や赤いつぶつぶをした粘土粒が混入し、部分的に焼土や粘土がひろがっていた。

穴の底は平坦であるが、硬化面はなかった。また柱穴が壁面直下に三個発見された。このうち北壁下の柱穴は21×24cmのまるい穴で、周りとの比高差（深さ）が30cmであった。南壁下の柱穴も22×20cmまるく掘込まれていて、比高差22cmであった。また西壁下の一つも16×18cm位の柱穴で比高差17cmであった。

遺物が埋土中にあったことは既に述べたが、その中には土師器（椀）、須恵器及び布目瓦、さらに鉄器があった。南壁ぞいの床面にほぼ完形須恵鉢、北壁上にはスラッグが発見されたこ




第43図　第三調査区１号貯蔵穴

とは注目される。

1号貯蔵穴出土遺物（第55図）

**土師器**（第55図）　79～82などビニール大袋約一ぱい出土している。このうち79・82は甕形土器、80、81は高台付埦である。79の甕は図形復元によれば口縁径27cm、口縁下頸部がしまり、水引きによる仕上げ、胴部はたて方向に刷毛目がつく。82の甕は79と形態を異にしており口縁が大きく外反する。80の埦は高台が外反し、81は厚手に出来ている。

**須恵器**（第55図）4点が出土し17の鉢形の須恵器は貯蔵穴底部から出土したものである。ほぼ完成で口縁径12.3cm、高さ7.0cm、底は高台がわずかに外反し、径7.6cm。

**布目瓦**　細片を含め10点が出土している。

**鉄　器**（第62、63図）9、14の鉄器が1号貯蔵穴中より出土したもので、いづれも釘である。9の釘は完好な形を残しており、14は釘の先端部である。9は全長15.5cm、断面は頭部より4～5cm下のところで1.1×1.2cmの長方形をしている。釘の先端は尖がり、頭の部分6mmほど曲げている。

2号貯蔵穴（第44図）

2号貯蔵穴はC－5区1号貯蔵穴の西北に隣り合わせて発見された。直径1.23～1.28mの歪みのあるまるい土壙で、硬化面からの深さ約70cmいく分傾斜して掘られていた。貯蔵穴内の土層は上から40～45cmのところで二層に分れ上層の方がいく分明るい色調を呈していた。この上層には多量の遺物を包含していて、布目瓦、土師器、鉄釘については図示したとおりである。

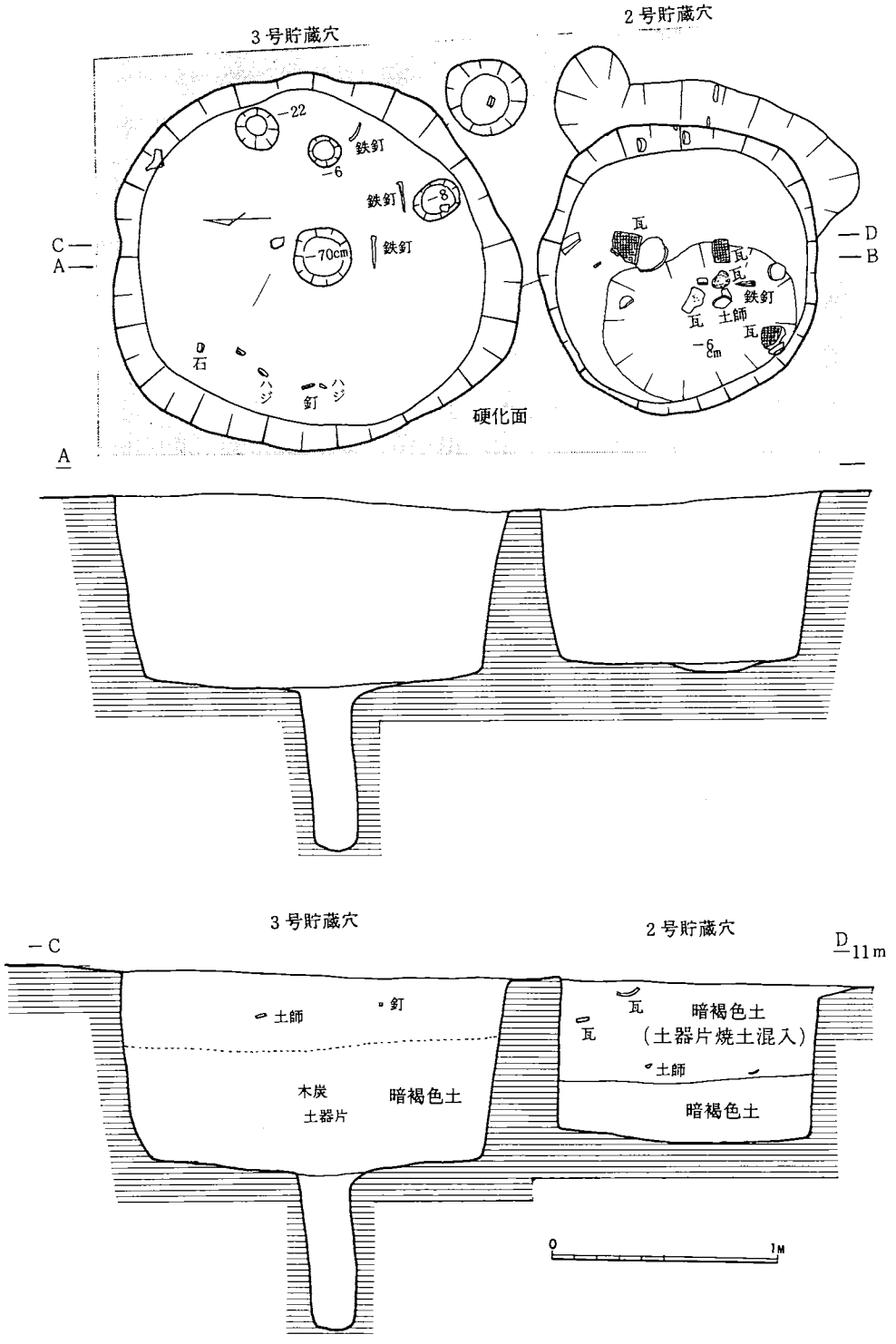
2号貯蔵穴出土遺物（第16・55・59・60・62・63図）

**土師器**（第55図）ビニール袋中袋約一ぱいが出土している。83～90は2号貯蔵穴出土の土師器で、83は甕形土器、84～90は坏・埦又は鉢形の土器である。83は口縁径18.8cmと小ぶりの甕で、頸部が鋭角的に内側にはり出している。また器面に粗い調整痕が斜に入る。84、87は坏の口縁部で、それぞれ径11.8cm、9.8cmを測る。85・86の高台付の土器は85は埦形を、86は鉢形の器形をなすものとみられて、85の高台の高さが2.2cmと他に比べて著しく高い特徴をもっている。88～90は埦又は坏の底部であるが、88、89は薄手で89は厚く安定した平らな底をなしている。

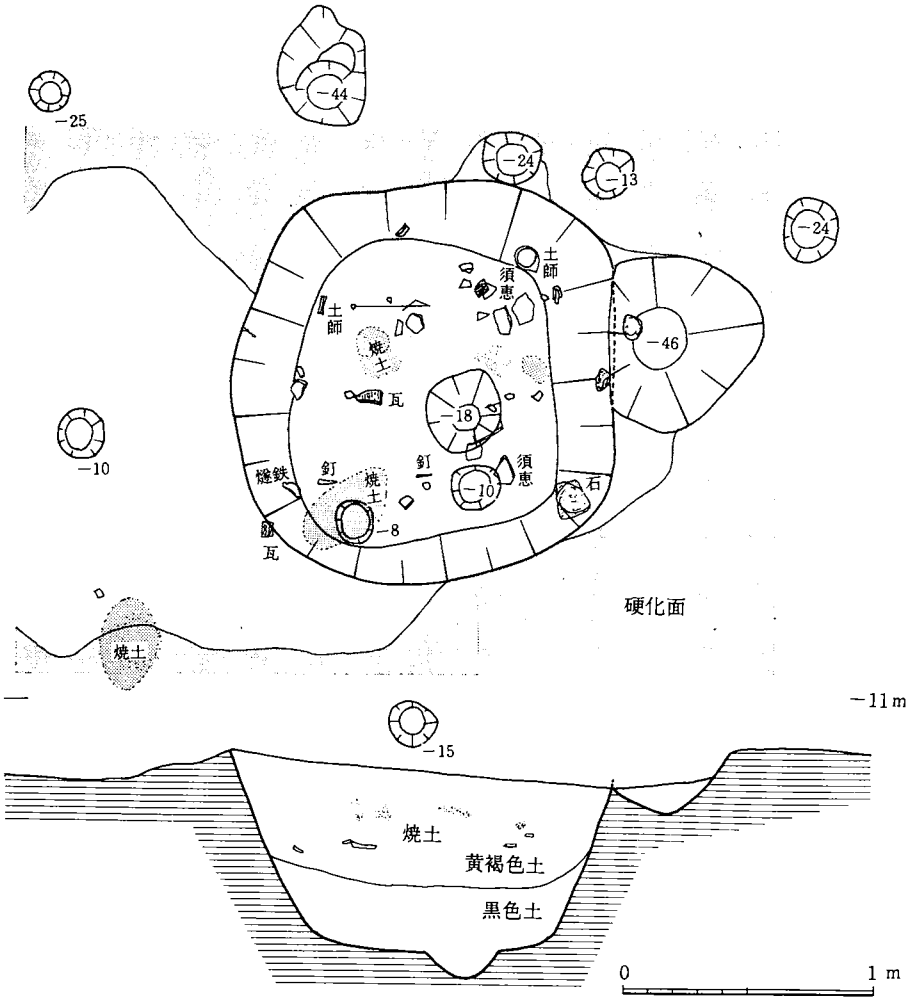
**須恵器**（第55図）3片出土し18、19は坏の底部であるが18が斜めに立上がるのに対し、19は底部から立上がりのところに段がつく。

**布目瓦**（第59・60図）5点出土し20、26、27は2号貯蔵穴出土の主要な布目瓦を図示したもので、20は平瓦、26、27は丸瓦である。いづれも内側に布痕外側には縄目の叩打痕がある。

**鉄　器**（第62・63図）13、29に図示した鉄釘二点が出土している。13は1cm四方位の角釘で、先端から8.4cmのところで折損している。29も釘の先端で3.5cmばかりで折れている。




第44図　第三調査区 2・3 号貯蔵穴




**第45図　第三調査区４号貯蔵穴**

石　器（第16図）　１にあげた石器一点が２号貯蔵穴中より出土した。長さ10.7cm、厚さ2.8幅2.2cmの細長い石器で、石質は流紋岩である。四面に使用痕とみられる研ぎ減りがあるところから、砥石として使われたものである。ちなみに重量119.3ｇ。

３号貯蔵穴（第44図）

３号貯蔵穴はＣ－５区の２号貯蔵穴の北に並ぶようにして発見された。貯蔵穴は南北1.75m、東南1.65ｍのまるい平面プランをしていて、深さ約85cmで底面に達する。この貯蔵穴の最大の特徴は中央部に径25cm、深さ70cmの柱穴のあることで、他の貯蔵穴にみない現象である。この他にも浅い柱穴が３個ほどあった。この貯蔵穴内の土層は硬化面から35cm位掘り下げたところら二層に分れるが、層の移り変りは漸移的で、埋土色調は殆んど変らない。上、下層とも遺物

が混入しているが、上層に鉄釘や土師器の破片があり、下層には土器片のほか木炭などが混入していた。

3号貯蔵穴出土遺物（第55図）

**土師器・黒色土器**（第55図）ビニール袋約一ぱい半出土した（丹塗り土器を含む）91～96は土師器で、黒11は内黒土器である。91～95は平底の坏で、91がほぼ完形である以外、破片からの図示復元である。これらはほぼ同形の坏で口縁径高さがそれぞれ91が10.8cm、4.2cm、94が11.8cm、3.9cm、93が9.8cm、4.6cm、94が10.2cm4.1cmである。96は土器の支脚又は把手とみられるもので、長軸3.2cm、短軸1.8cm位の楕円形の断面をしていて、先端がまるくなっている。この土器は先端より8cmのところで折損している。黒色土器は5点出土、黒11は高台付の坏で内面だけくろくなっている。その他、須恵器片2点、布目瓦8点も出土している。

**鉄　器**（第62・63図）　3号貯蔵穴から数個の鉄器と鉄滓が出土した。2、10、12、15に図示したのがそれで、2は6.3×2.3cmの不正形をした厚さ4mm位、重さ10.9gの銹膨みのある鉄片で、形態的に4号貯蔵穴発見の燧鉄に近いが、銹により変形し元の形がはっきりしない。10、12、15は角形の鉄釘で、10、11は完好な形を保っている。10は全長12.8cm、釘頭が大きなふくらみをみせ、頭の下あたりで1.0×0.9cmの角形、先端になるにしたがい細くなり釘先は尖る。12は全長11.4cm釘頭が少し曲っている。頭の下あたりでこれも1.0×0.9cm位の角形をしている。15も同形の角釘で釘の先端より7.7cm位のところから折損している。ここではさらに小形鉄滓も1点出土している。

4号貯蔵穴（第45図）

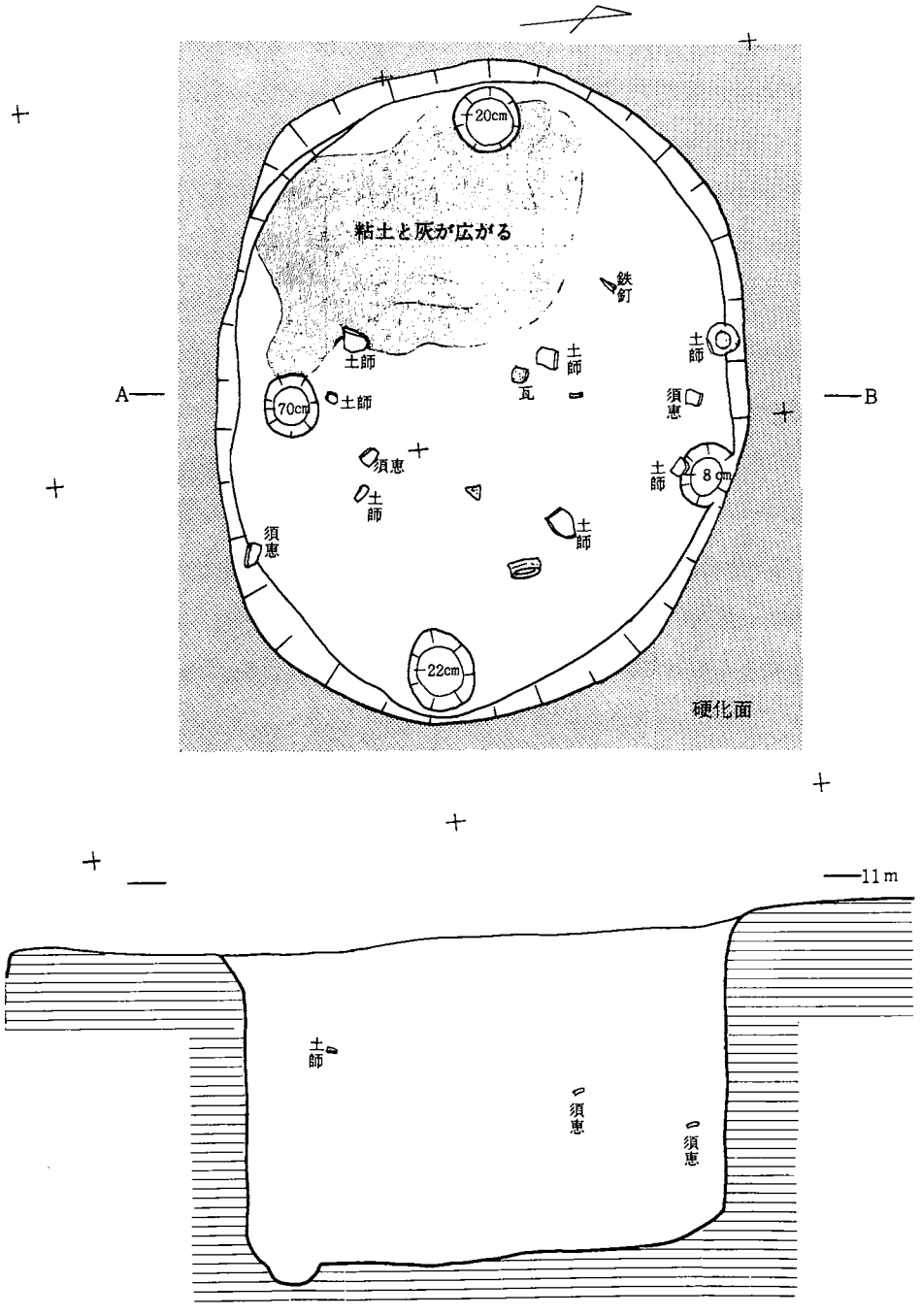
1～3、5の各号がC－5区にまとまって発見されたのに対して、4号貯蔵穴にD－5区から単独に出土した。この貯蔵穴は南北1.54m東西1.57mの歪んだ隅丸方形の平面形をして、硬化面からの掘込み73cm、掘込みの角度は他の各号貯蔵穴に比べて法面がはるかにゆるい。

4号貯蔵穴のまわりは図に見るように固くふみしめられ、いわゆる硬化面がひろがっていた。穴の中の埋土は上から45cm位のところで二層に分れ、上層の黄褐色土には遺物が多量に含まれており、焼土も点々とまじっていた。遺物は布目瓦、須恵器及び土師器の破片のほかに鉄器があった。釘、燧鉄もここから出土している。下層は黒色土で層厚約28cm、この中には殆んど遺物を含んでいなかった。

貯蔵穴内には3個の柱穴があるが、周辺にも多数の柱穴がある。他の貯蔵穴にも同様に覆家可能性を示すものとして注目される。

4号貯蔵穴出土遺物（第51・56・58・62・63図）

**土師器**（第51・56・58図）　1、97～106などビニール大袋約2はいの土師器（中に丹塗り土器あり）が4号貯蔵穴中より発見されている。1は口縁径27.3cmの甕形土器である。口縁部は外反し、頸部は横に水引きのあとがあり、くっきりとしまっている。外面にはたて方向に粗




第46図　第三調査区５号貯蔵穴

0　1 m

い櫛歯状の施文器による調整痕がつき内側は斜方向に胎土をけずられている。97～105は坏又は埦状の土師器で、100と104は高台を付し埦に近い。このうち98は小形で、口縁に向かって体部がゆるくなるところが他のものと異なっている。復元口径は97が11.0cm、98が8.8である。106は土器の把手の一部で、器体の接合部と把手の端が欠けている。把手は基部で幅4.2cm厚さ1.6cm、先になるにしたがって幅が狭くなり上方にそりが出てくる。第58図の墨書土器の中で116もこの貯蔵穴出土のもので、甕形土器の肩に墨をのせているが、破片であるため内容ははっきりしない。

黒色土器（第56図）　黒色土器片は全部で6点あり黒12～16の5点を図示している。14は口縁部の破片でその他は高台を付している。黒色土器の高台にも違いがあるが、顕著な違いは12、14、16が内面だけがくろくなっているのに対し、13、15は内外面ともくろくなっていることである。

**須恵器**（第56図）　須恵器の破片は11点、甕や鉢が出土したが、器形の復元可能な20の1点のみ図示した。これは復元口径14.4cmの鉢で内外面にロクロの目がのこっている。

布目瓦　13点の布目瓦が4号貯蔵穴から出土しているが、第三調査区出土の他の瓦と大差ないところから、ここではとくに図示しなかった。

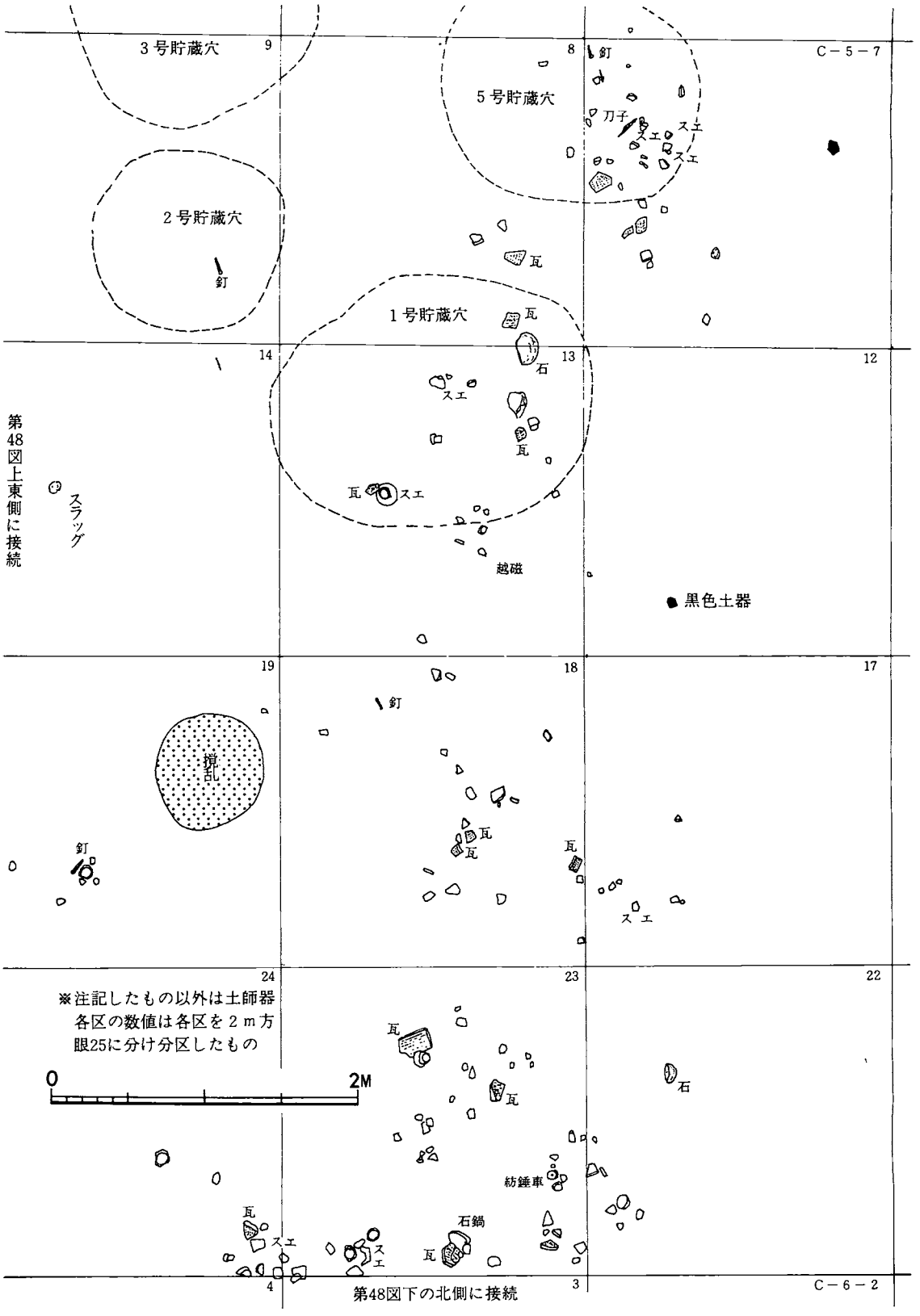
**鉄　器**（第62・63図）　鉄器3点が出土した。1は燧鉄で出土例として県内では初出と考えられる。最大長8.4cm、最大幅2.8cm、厚さ約5㎜の鉄で、中央部の石との擦り合せる部位がふくらみ。両端がまるくなっている。重量38.3g、完形。11と16は鉄釘でいづれも折損している。11は釘頭が一側に曲がり、0.9×1.0cm位の角釘で、現長11.9cm、先端が欠けている。14も同様の釘で釘先6.8cmだけで釘頭が折れている。

5号貯蔵穴（第46図）　C－5区から1～3号の貯蔵穴が発見されたが、さらに1個それぞれが重ならない形で1号貯蔵穴の北、3号貯蔵穴の東側に5号貯蔵穴があらわれた。この貯蔵穴は南北177cm、東西145cmの長円形の平面形をしておりほぼ垂直に深さ87cmが掘り込まれていた。この貯蔵穴の埋土は一層で、層中には遺物が点在していた。貯蔵穴の床面近くには白粘土が5～10cmの厚さでひろがっていて、その上に灰と木炭が混りあっていた。柱穴は壁面下の四方に4個あって、北壁下の柱穴は径約15cm、深さ8cm。東壁下の柱穴は径約18cm、深さ22cmであった。西壁下の柱穴は径約17cm、深さ20cmで、南壁下の柱穴は径約14cm、深さ70cmであった。

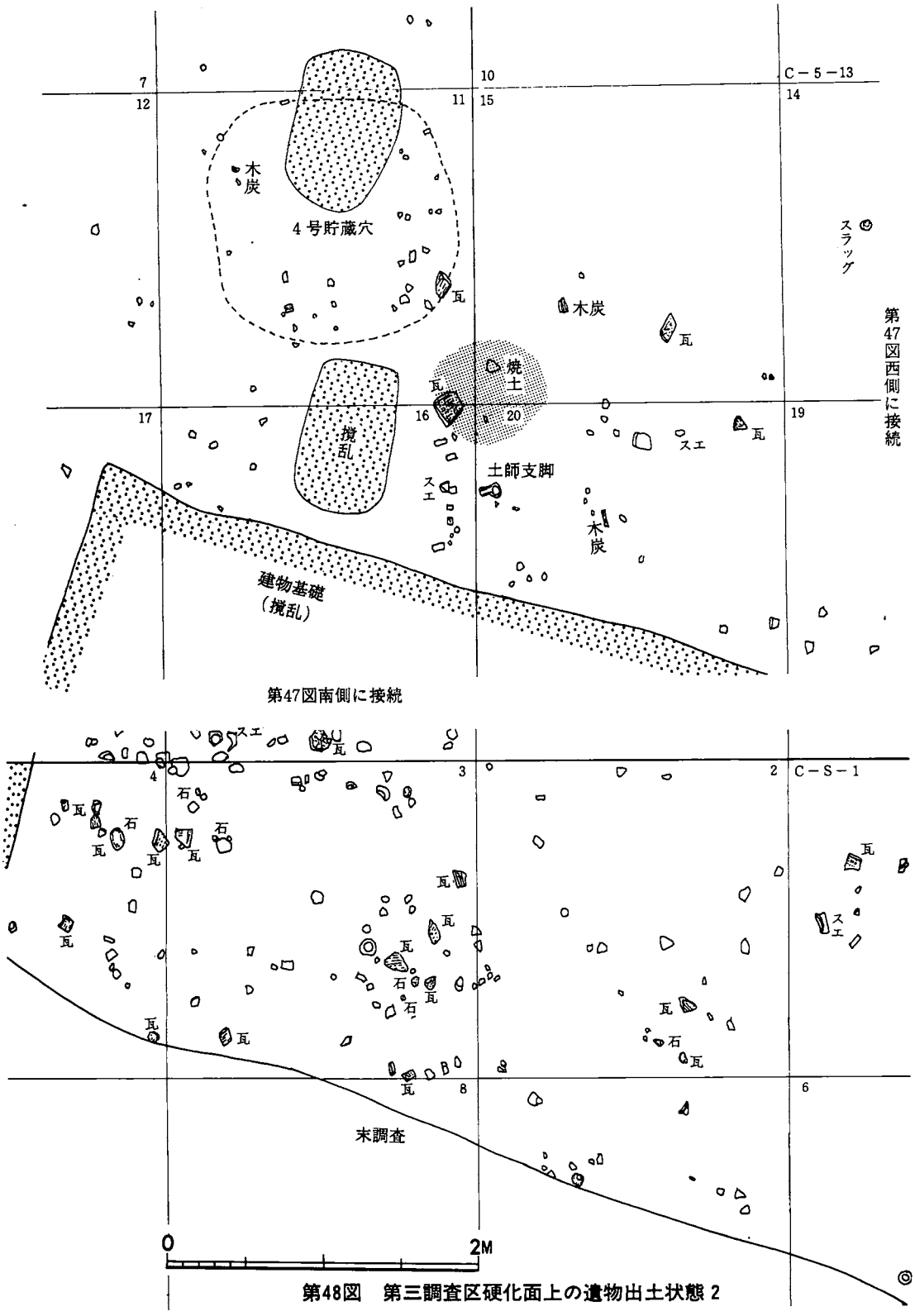
5号貯蔵穴出土遺物（第56図）

5号貯蔵穴からビニール大袋1ぱい位の遺物が出土しているが、その多くは細片である。

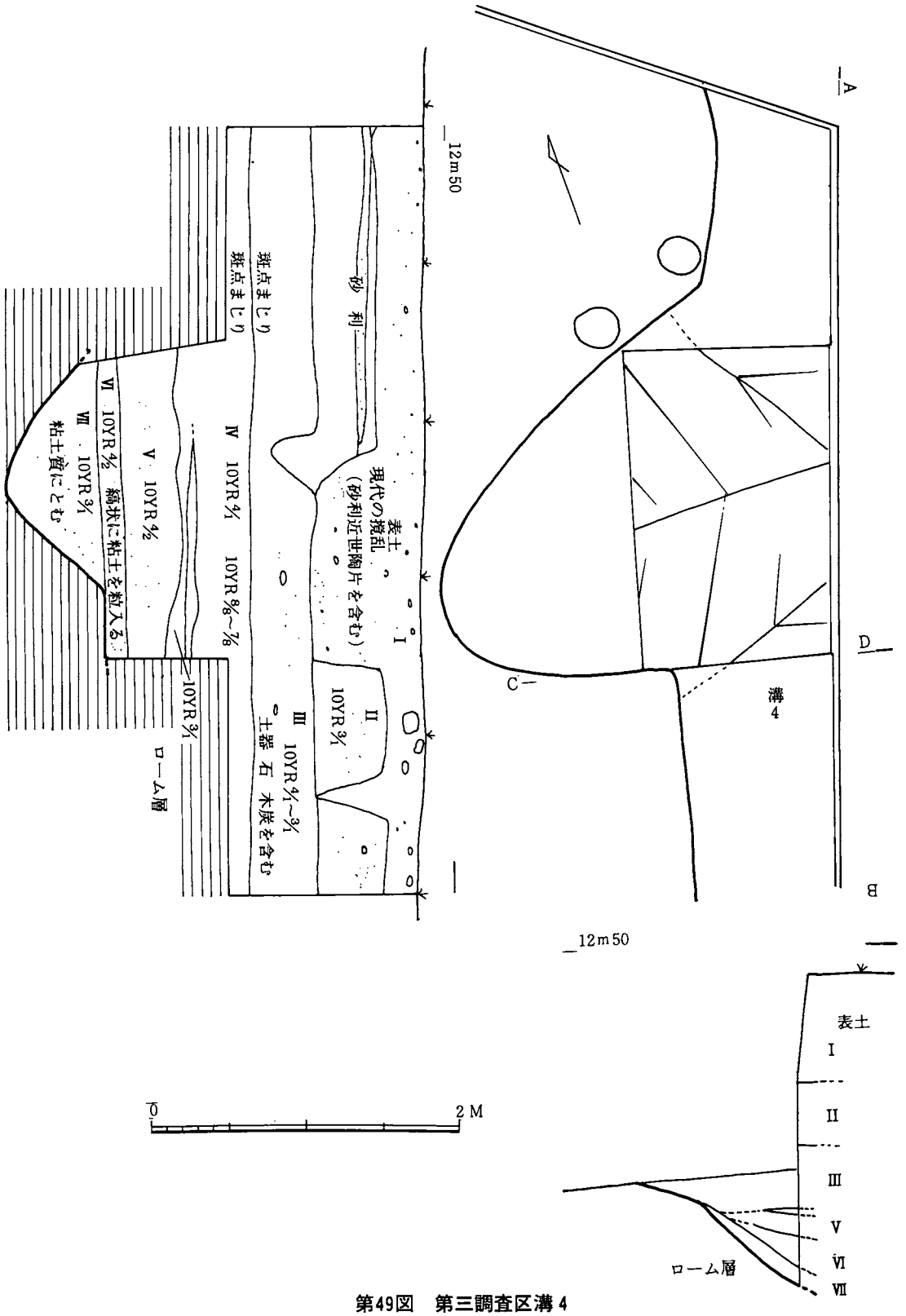
**土師器**（第56図）　107～111がそれで、107は甕形土器の口縁である。これは形態、器面の整形、内面の削りなど甚だ定形的なものである。108は平底の坏で、110はこれに高台を付したものとみられる。109の高台付埦形の体部のまるい完形土器は東壁下床面から出土したもので、111とは異なった形をしている。口径13.2cm、高さ6.9cmである。111は口縁部に向かって直上す



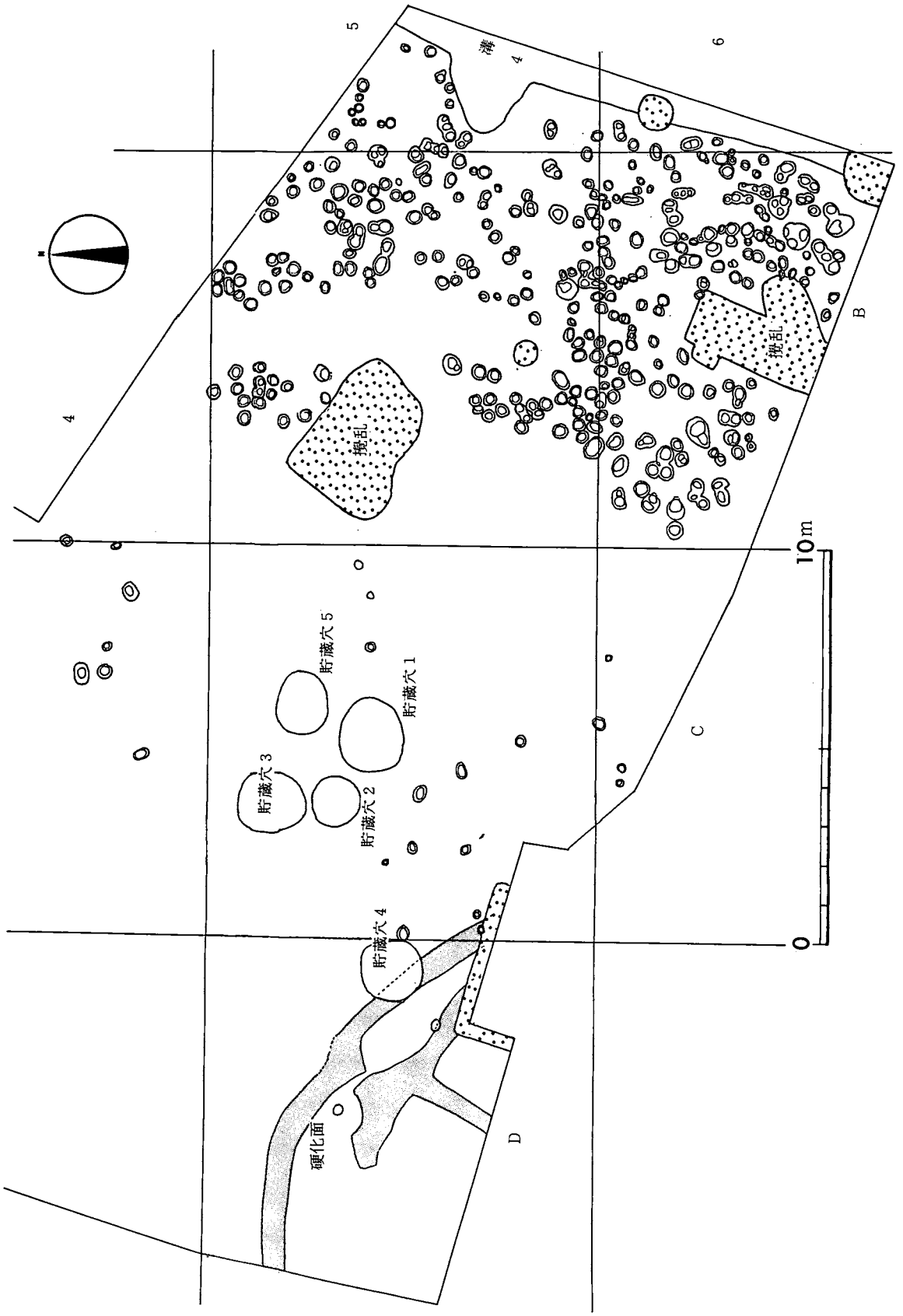

第47図　第三調査区硬化面上の遺物出土状態1




第48図　第三調査区硬化面上の遺物出土状態 2




第49図　第三調査区溝4




第50図　第三調査区硬化面撤去後のピット群

るタイプの埦で、復元口径12.0cm高さ7.1cmである。

土師器の中には丹塗りの土器片があるが、この他出土遺物に黒色土器数点の小破片、須恵器片31片及び布目瓦の破片がある。さらに鉄器として、第63図17に図示した鉄釘がある。長さ4.7cmの鉄釘は両端が折損している。

(2) 道路遺構（第39図）

表土はぎの段階で最初に発見されたのがC－3区とC－4区の両区にまたがる道路遺構である。この遺構は南北の方向に通じているが、南北両端が現代の撹乱（ごみ溜）により切断されているため検出されたのは7m余の延長だけである。しかし南は撹乱土を隔てて硬化面があることから、その硬化面に通じるものとみられる。路上の幅50cm前後が固くしまり、路上は標高11m10cm～11m20cmで南北に高低差はあまりなかった。道路遺構のうえから布目瓦、土師埦片及び須恵器各1点が発見されたことは、埋没前に道路としての利用の時期を示すものと考えられ、ここで発見された他の多くの遺構と同様、平安期までさかのぼることを示唆している。この他道路遺構とみられるものに、D－3区とD－5区から幅1m余の二条の硬化面が西に延びている。これもその延長をたどることができれば、道路遺構である可能性が極わめて強い。

(3) 溝遺構（第42図）

溝は合計4条の溝が検出された。溝1は第三調査区D－3、C－3、A－3と第三調査区で発見された。それは硬化面をかこむ形で、検出面での溝幅50～80cm深さ10～15cmの断面U字形の浅い溝であった。また溝3は溝1の南に幅70～80cmの浅い溝が東西方向に延び、延長を8.5m検出した。この溝1、3について、発掘中溝中に土師等の土器細片があったもののその時期を示すものは少ないが、その上にのる南北の道路遺構より古いことは確かで溝の一部を埋めて道路の硬化面が続いているのはこのことを示している。しかしその状況から大きく時期を異にするほどのものではなかろう。

溝2はB－4、B－5と硬化面の東を画する形で発見された。溝幅は溝1とほぼ同様の50～80cmで断面形U字形の浅い溝であった。溝2は南北への延長12mを発掘したが、南はB－5区で止どまり、B－6区には及んでいなかった。北の方は調査域外の民家の敷地へと延び、B－4区ではいく分カーブをつけ西に弯曲するところから溝1と結合するのではないかと考え、溝1の東端の壁面を精したがはっきりした結論が出なかった。このことはなお、民家の敷地内で、両方（溝1、2）の溝が消える可能性を残している。

第三調査区東の端、A－5、A－6区に一部発見された溝状の遺構を溝4とした。この遺溝は境界域に接し、土手が崩れるおそれがあるのでA－5区の一部のみを発掘し、他はプラン検出で断念した。第49図はこの溝4の発掘地点の状況を示すもので以下図によって説明したい。

溝4の2×1.2mのところ掘り下げた溝は約50°の角度で掘られ、地表下2.25mまで達しても底に達しないところから中央部は更に深くなるものとみられる。この溝内の土層はⅦ層に分け

られる。Ⅰ層は砂利・コンクリートなどが層中に混じり、勿論現代の撹乱土である。層はⅡ、Ⅲ層と地表下１m10cmになっても、埋土の状況から現代に近い時期の堆積土と考えられる。発掘地点ではさらにⅣ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層と続くが、この溝状遺構がどこまで時期を上らせることが出来るか、小発掘でははっきりいって困難である。これ以上現地を掘下げることが出来ないことから、ここで視点をかえて別の方向から考えてみたい。全体図でみれば、この調査地点の東には南北道路が通じている。丁度この道路が町内の境界線となり、東が神水町、西が出水町ということになっている。前に調査経過の中にも述べたとおり、近くの老人の話によると今から50年ほど前まではここは掘切道になっていた。雨の日にはそれが水路に一変し、南の江津湖へと流れていた、ということを元にして考えれば首肯(うなず)くことも出来る。この溝４の埋没の時期が戦後であるとしても、境界域の設定は案外古くからの名残りを止どめているのかもしれない。

(4) 貯蔵穴周辺の硬化面その他（第42図）

Ｃ－５区の貯蔵穴群をかこんだ周辺の土が堅く踏み固められ、面的にひろがりをみせていた。発掘した範囲でおよそ200m²に達しており、ここが日常生活場、即ち生活面であったことは確かである。この硬化面上から確認された遺構として、さきにあげた５基の貯蔵穴があるが、その他多数の柱穴が発見されている。柱穴の発見は掘立ての建物が考えられるが、硬化面上にはＣ－５区とＤ－５区の境界域付近には焼土が検出されたことは、生活の臭いを如実に示したものとして注目される。焼土はＣ－５区15、Ｃ－５区20、Ｄ－５区11、Ｄ－５区16と分区した交点では直径70cm位のひろがりをみせ、木炭や焼土が周辺におよんでいた。なお焼土は４号貯蔵穴の上面から内部に及んでいたことは、貯蔵穴の項でふれたとおりである。Ｃ－５区13、Ｃ－13、Ｃ－５区20及びＤ－５区６から長さ4.5cm～10cmの木炭の固まりが発見されたこと、すでに発見されているスラッグや鉄釘と鍛冶場との関連の有無について興味をひくところであったが、それが遺構として見極わめるに至らなかった。

硬化面や遺構（貯蔵穴等）が検出されるまで遺物が面的にひろがりをみせていた。とくに遺物の分布の多いところはＣ－５、Ｄ－５及びＣ－６で、主要の地点について第47・48図に図示したとおりである。遺物は第三調査区でコンテナ４はい分位の量であるが、その大部分は土師器で、ついで布目瓦、須恵器があり少量の黒色土器があった。またここから越磁が出土したことは注目される。出土遺物として、この他変わったものとして石製の紡錘車、滑石製石鍋の破片があり、また鉄器として釘、刀子、鏃があったが、中でも釘の出土が多かった。

遺物の出土状況の中で注目されるのは、貯蔵穴の図を合せることにより１号、４号、５号の各貯蔵穴の遺構発見前、即ち埋没後の上面に遺物が多量に分布していることである。とくに５号貯蔵穴では集中的に発見され、鉄鏃、鉄刀子といったものまで放棄されていた。

柱穴は硬化面と同レベル東～北には及んでいたが、遺物の出土量は少なかった。

硬化面上での調査を終わり、全域的20cmほどの地下げを行い、新たな遺構の有無を確かめた。そ

れが第50図の硬化面撤去後のピット群である。柱穴とみられるピット群は硬化面の東側B－5、B－6区に集中的に発見された。これらは径10～20cmの前後の大きさのもので、数が多いことがかえって遺構の推定をむずかしくした。

ここで一つ注目すべきことでD－5区の状況である。D－5区の西南には硬化面は存在しなかったが、西に延びる幅1m余りの硬化面があり、それが反対側にも曲りながら延び、4号貯蔵穴で切断されC－5区のあたりでは南へ延びているようである。またD－5区の中程から南に延びる幅1m位の硬化面があるが、これらは貯蔵穴形成以前の道路遺構の可能性が強い。

(5) 第三調査区出土遺物

貯蔵穴中より発見された遺物については、すでに各貯蔵穴のところで述べたので、それ以外の遺物について述べたい。

出土した土器の量はコンテナ4はい分あるが、このうち硬化面下から土師器、布目瓦などビニール中袋1ぱい分位があるが、大部分は第3調査区の柱穴中を含め第III層の硬化面上位又はこれに相当する層から出土したものである。

**土師器**（第51～56・58図）　図示した土師器のうち7・19・55は硬化面下から発見された。また9・21・27・35・46・58・61・63はそれぞれ柱穴中より発見されたもので、それ以外の土器は硬化面上又はこれに相当する層から出土した。2～12は甕形土器とみられるもので、2～9は器形及び製作技法に共通点が多い。即ち、口縁径25cm前後で、ゆるく外反する口縁の端末はまるくなり、頸のあたりは水挽きによりくぼみが出来、外面は上下、又は斜方向の器面の調整痕がつく。調整痕も幅2㎜と大きく、間隔は粗い。器体内面には胎土の削りのあとがあらくのこっている。11は頸にくびれがなく、多少趣きを異にしているが壺に近い器形をなすものとみられる。10・12は小形の甕で深鉢に近い。13は土器の把手であるが、この種の把手は甕又は甑（こしき）の両側につくことが多い。これは古墳時代の土師器の把手にも似ている。20は支脚とみられるものであるが、器体そのものについては明らかでない。現長11.3cm、先端が欠損している。支脚とみられるものは3号貯蔵穴出土の96があるがこれと同形のものとみられる。15・16は高台付皿で、15は全体の1/2を残している。皿は水平に近い形に開き径11.7cm、高さ1.8cmである。16の破片は大型で、口縁径15cm余りに図示復元出来る。112は同じく高台付皿であるが、ほぼ完形で柱穴中より出土した。皿が深めで口縁径12.7cm、高さ3.2cm、器形に歪みがある。17～19は坏で、19は硬化面下出土である。17は口縁径11.5cm、高さ3.8cmの厚ぼったいつくりで、底に箆切りのあとを残している。18、19は同形の坏でそれぞれ口縁径12.0cm、10.8cm、高さ3.7cm、3.6cm、18は底には箆切りのあとがのこり、19の器面には磨耗のあとが少ない。

第三調査区では椀形土器の出土が多い。この中には平底のものと高台付のものがある。22～39、41～47、68は平底で、53・55～67、69～78はいずれも高台を付すものである。40・46、

48～52、54は底部の状態は定かでない。 器の大きさは必らずしも一定せず径10cm程度のもの（68）から15cmの大型のもの（51）があり、高台についても一定せず55のように高さ数mmの低いものと58などのように高さが1.5cmを超える高いものとがある。64は丹塗り土器で、この種の土器は他にも破片が数点出土している。21は柱穴中より出土したミニチュア土器の破片で、形からして高台にあたる部位であるが、上半を失なっているのでその形がはっきりしない。14も底を失なっており、皿状の器形が考えられるが定かでない。第三調査区出土の土師器には墨書銘のあるものが数点ある。第58図に図示した113・114そして116がそれで、113は椀の口縁下に横に「子」を行書で書かれている。114は皿状の器形の底面に墨書のあとがあるが、一部に筆跡を残すのみで、解読困難である。116は4号貯蔵穴内出土の甕の破片で、これも解読困難である。これらの墨書土器は、ここから円面硯（S－3）が出土しているのと考え合わせ、この遺跡の性格を考えるうえの興味ある資料である。

黒色土器として第57図の黒1～10を図示した。このうち内外面とも黒いのは黒3のみで、他はいずれも内黒土器であるが出土層位に違いはない。これらはいずれも椀形の土器で器形にもかなりの変化がある。口縁径も3が10.3cm、1が12.8cmであるが、6は15cmに達している。底も9が平底であるが、高台を付すものに1～3、5～7がある。

**須恵器**　（第57図1～16）　1は壺の口縁から肩への部位とみられる小破片で、焼成良好、かたく焼きしまっている。

2は壺の口縁とみられる須恵器で、胎土はやや粗く、仕上げは比較的雑である。

3は円面硯の破片で、脚部に四角の透しのあるもので、陸部は磨耗し、つるつるとなっている。

4～13は椀で、平底のものと高台を付すものとがある。大きさも口縁径11cm程度のものから、14cmをこえるものがある。

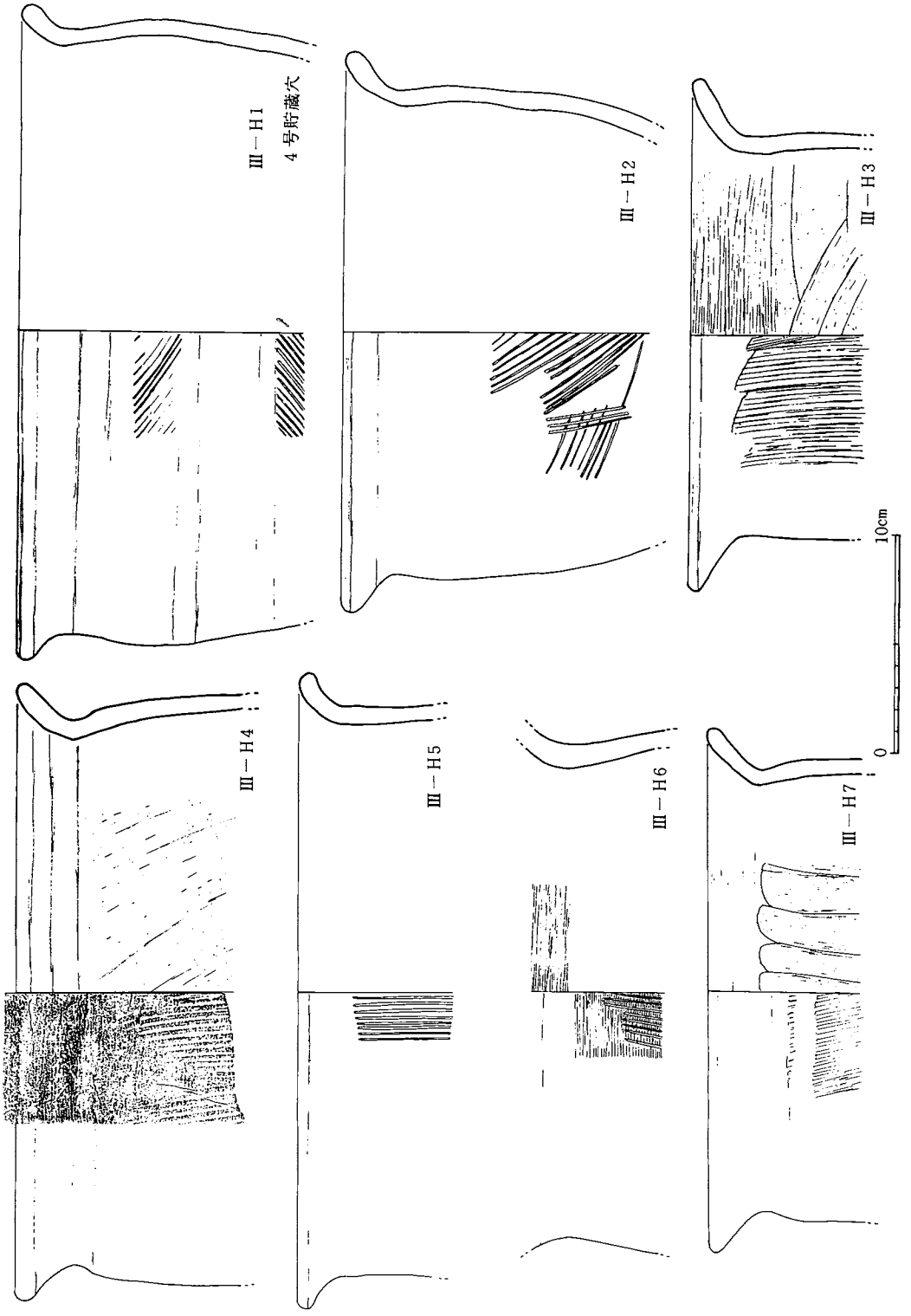
14・15は坏の破片で、いずれも口縁径14.5cm、高さ3cm程度のものである。いずれも平底であるが、14の口縁部が内側にまるくなるのに対し、15は外側に反っている。

16は盤の1/4ばかりの破片で、口縁径が17cmにおよぶ。

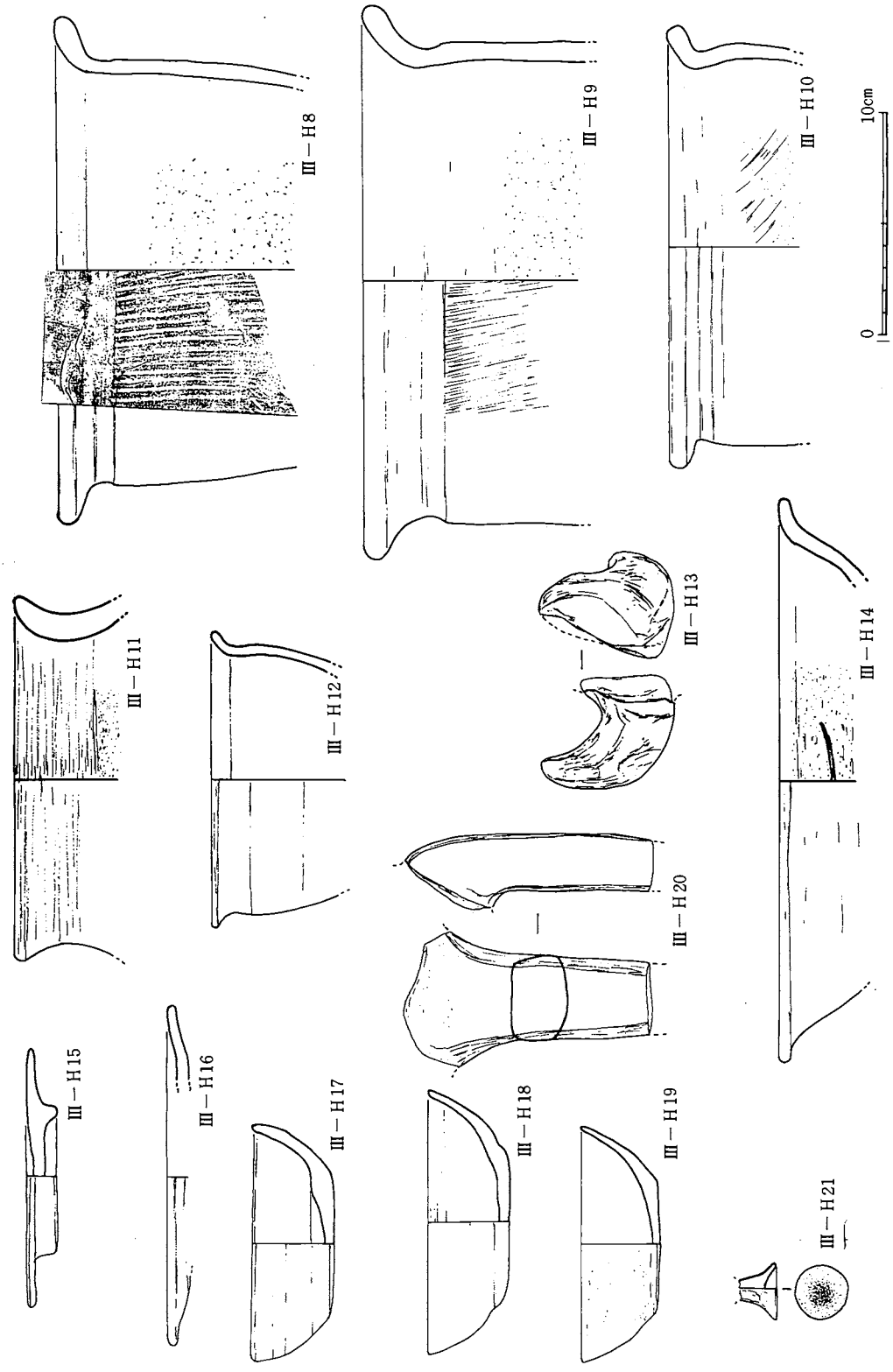
**布目瓦**（第59・60図）　第三調査区から布目瓦の破片が多量に出土したが、この中に軒瓦は一点も含まれていない。図示した15～27は第三調査区出土の主なもので、23までは平瓦、それ以下が丸瓦である。いずれも内側に布目が外面には縄目の叩打痕があるが、丸瓦の場合上からなでて叩打痕を消しているのもある。

**磁　器**（第61図）

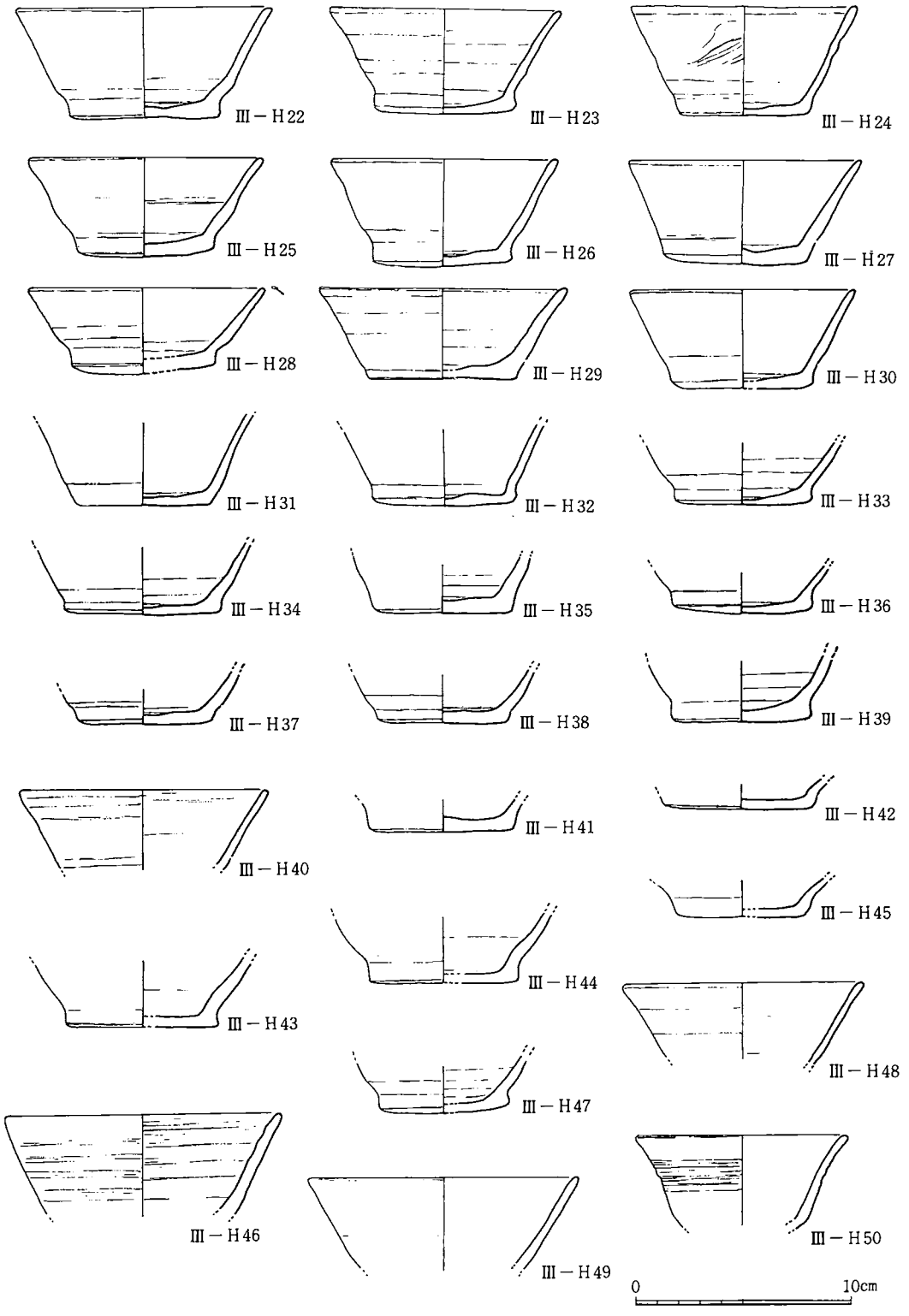
第3調査区から5点の磁器が出土した。1、5、6、11、12がそれで、いずれも独特の飴色に近い青色をしており越磁とみられるものである。1は口縁径14.7cmの復元出来る椀で、内外面に釉をかけているが、外面底部への移行するあたりからネズミ色の生地と内側にロクロ挽きの



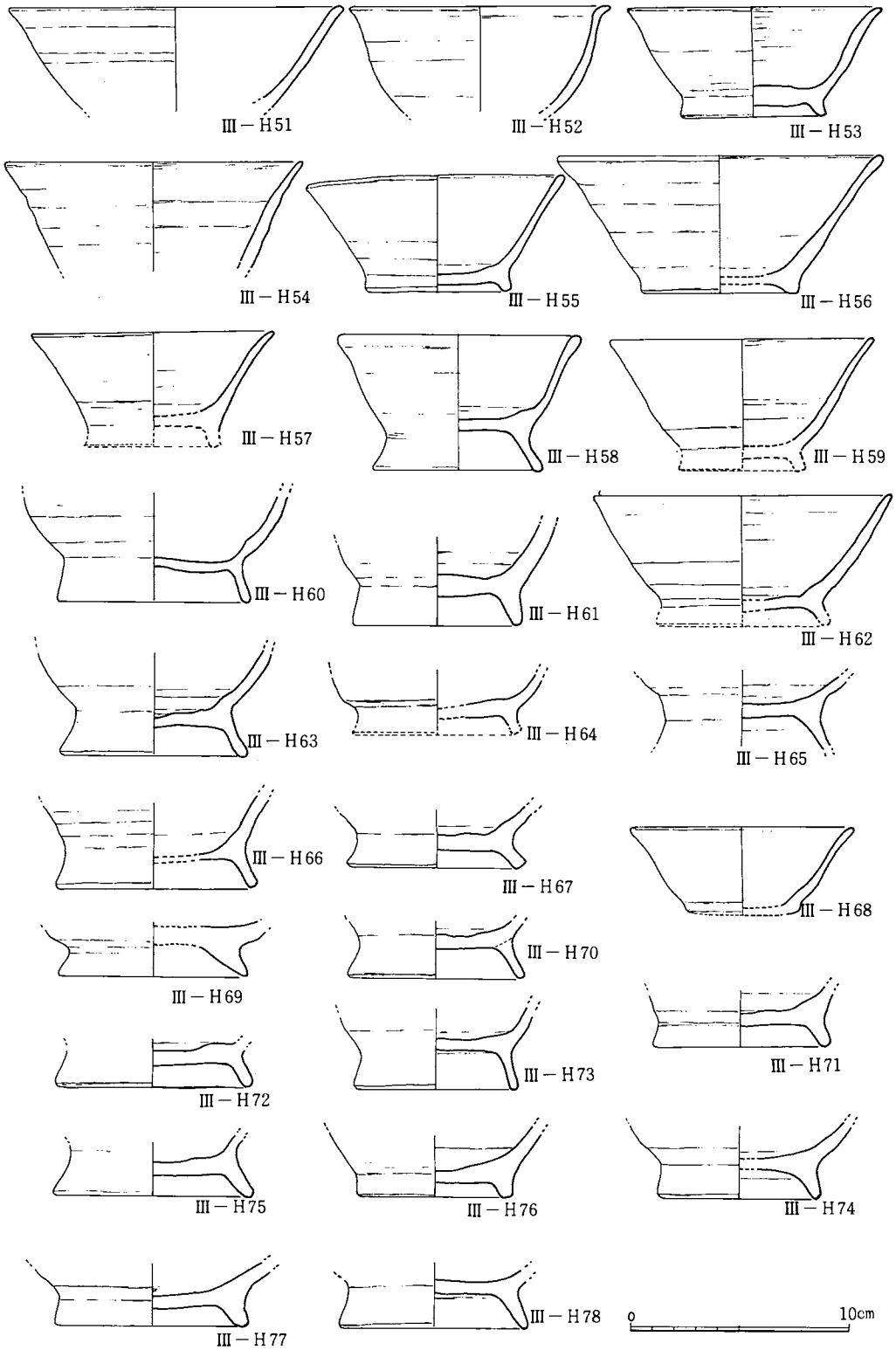

第51図　第三調査区出土土師器 1



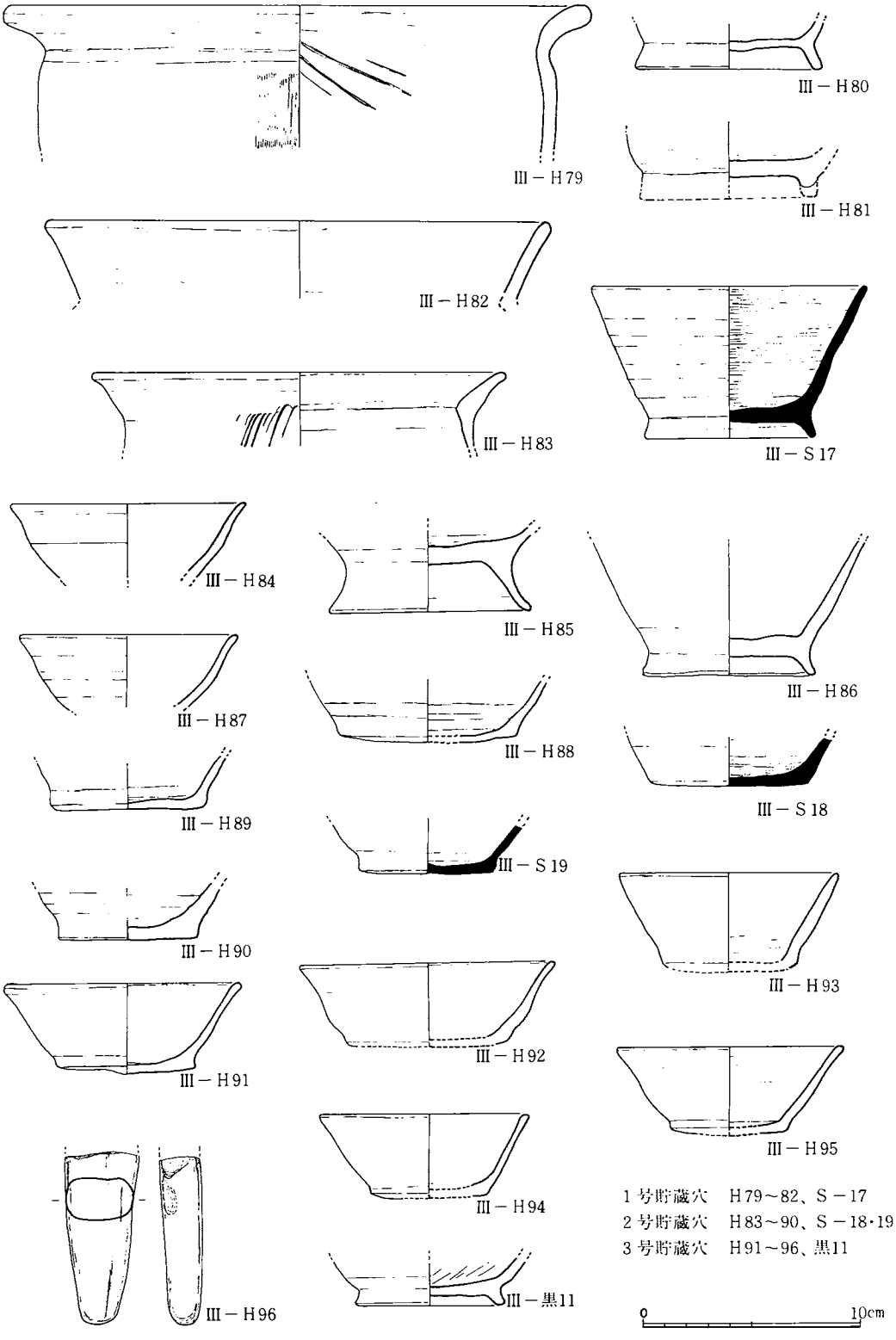

第52図　第三調査区出土土師器 2



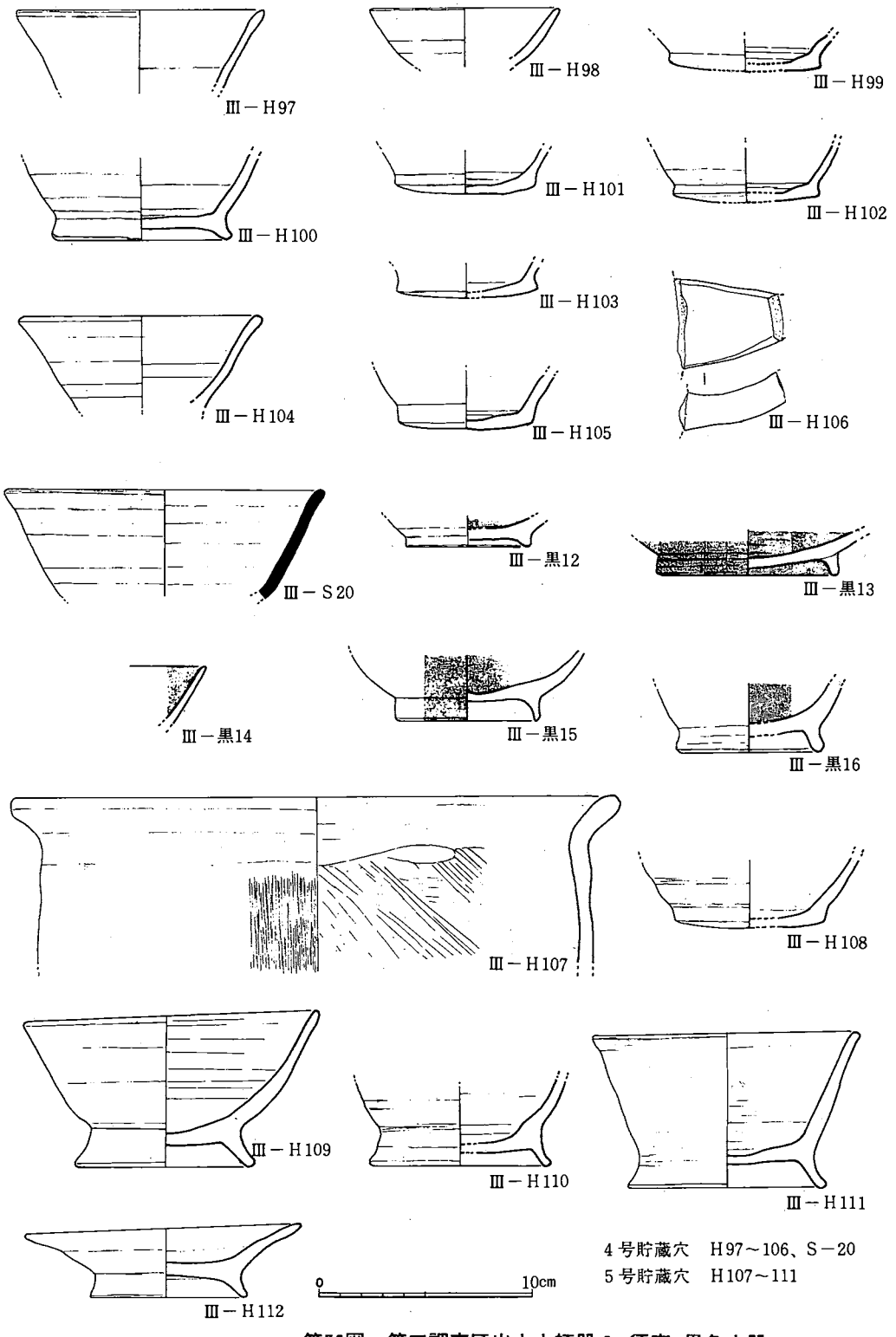

第53図　第三調査区出土遺物土師器 3



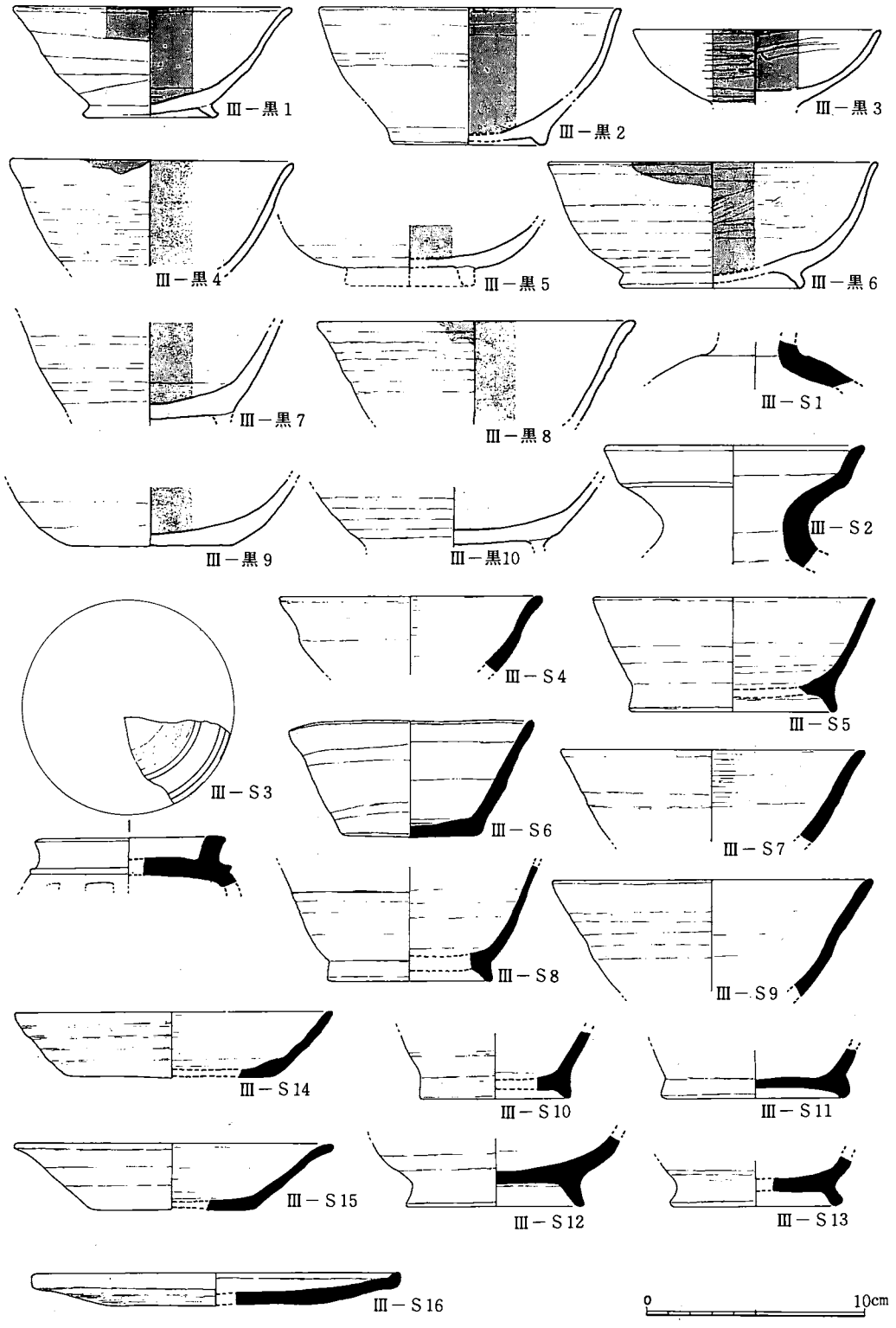

**第54図　第三調査区出土土師器 4**



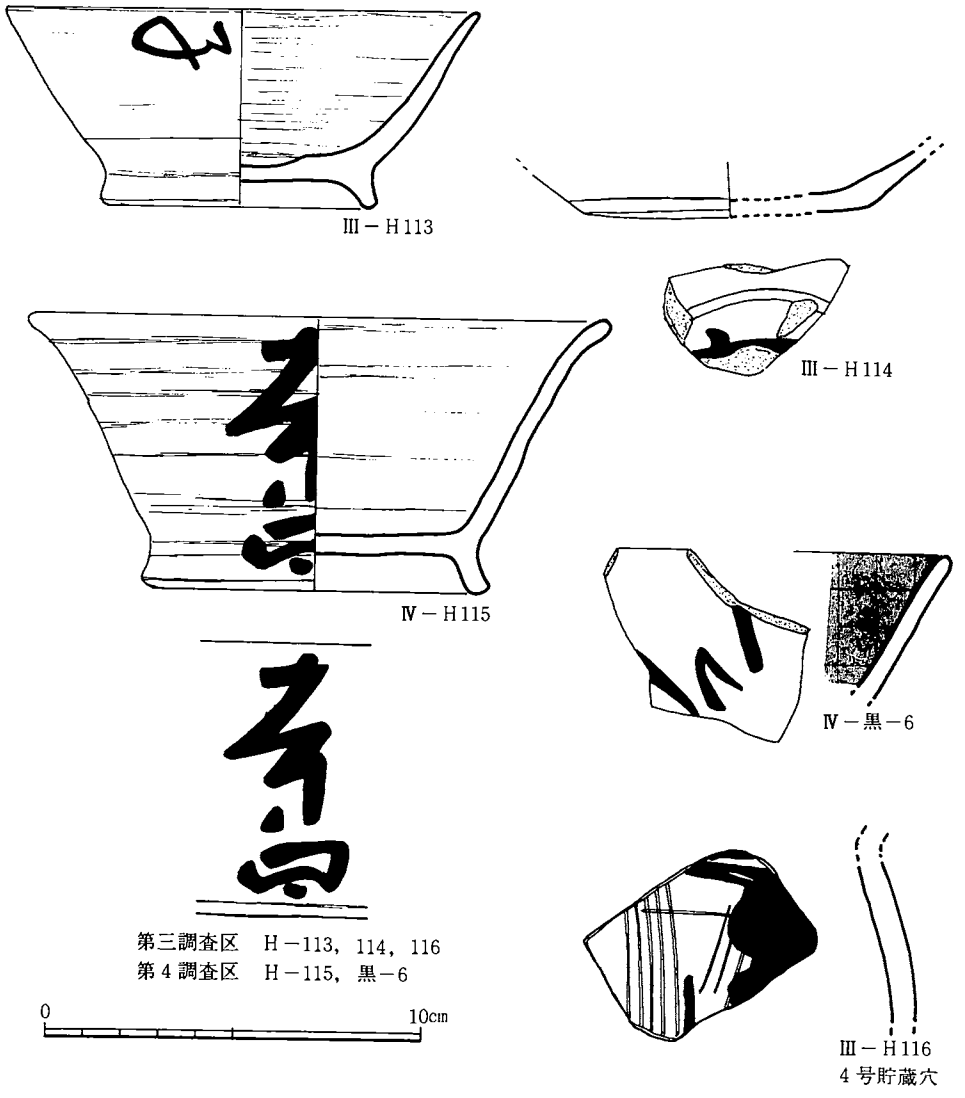

**第55図　第三調査区出土土師器5・須恵・黒色土器**



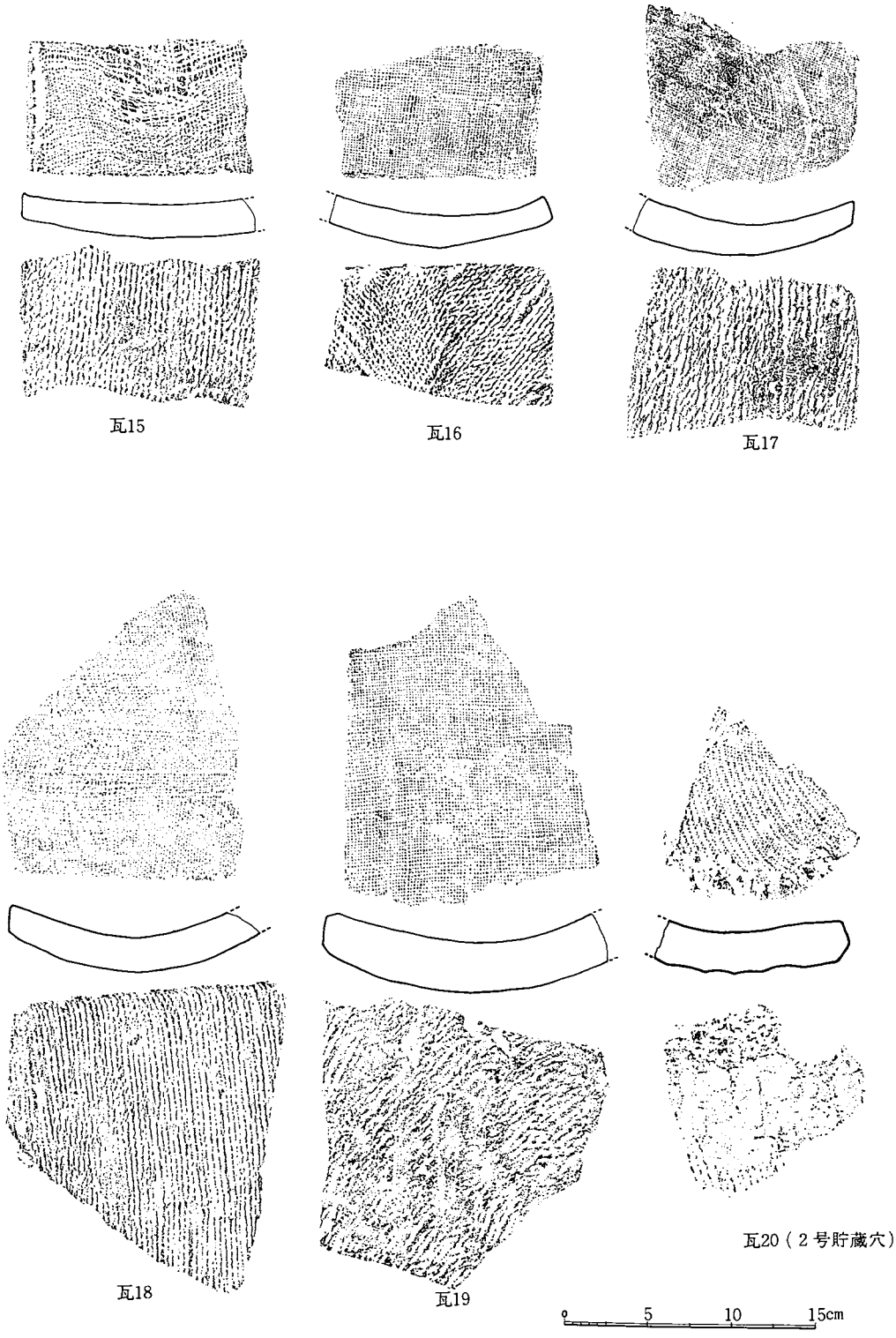

**第56図　第三調査区出土土師器6・須恵・黒色土器**



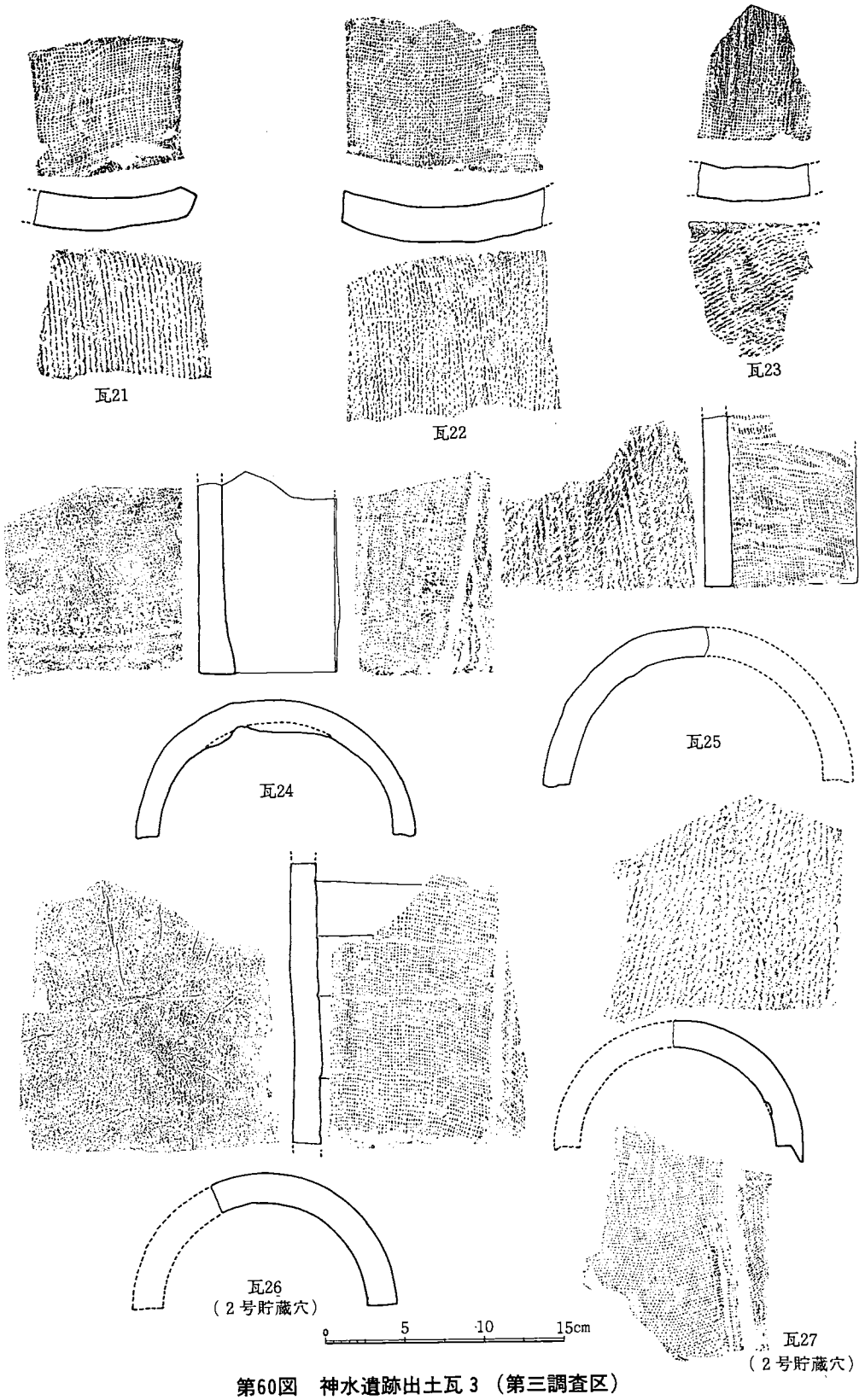

第57図　第三調査区出土黒色土器・須恵器



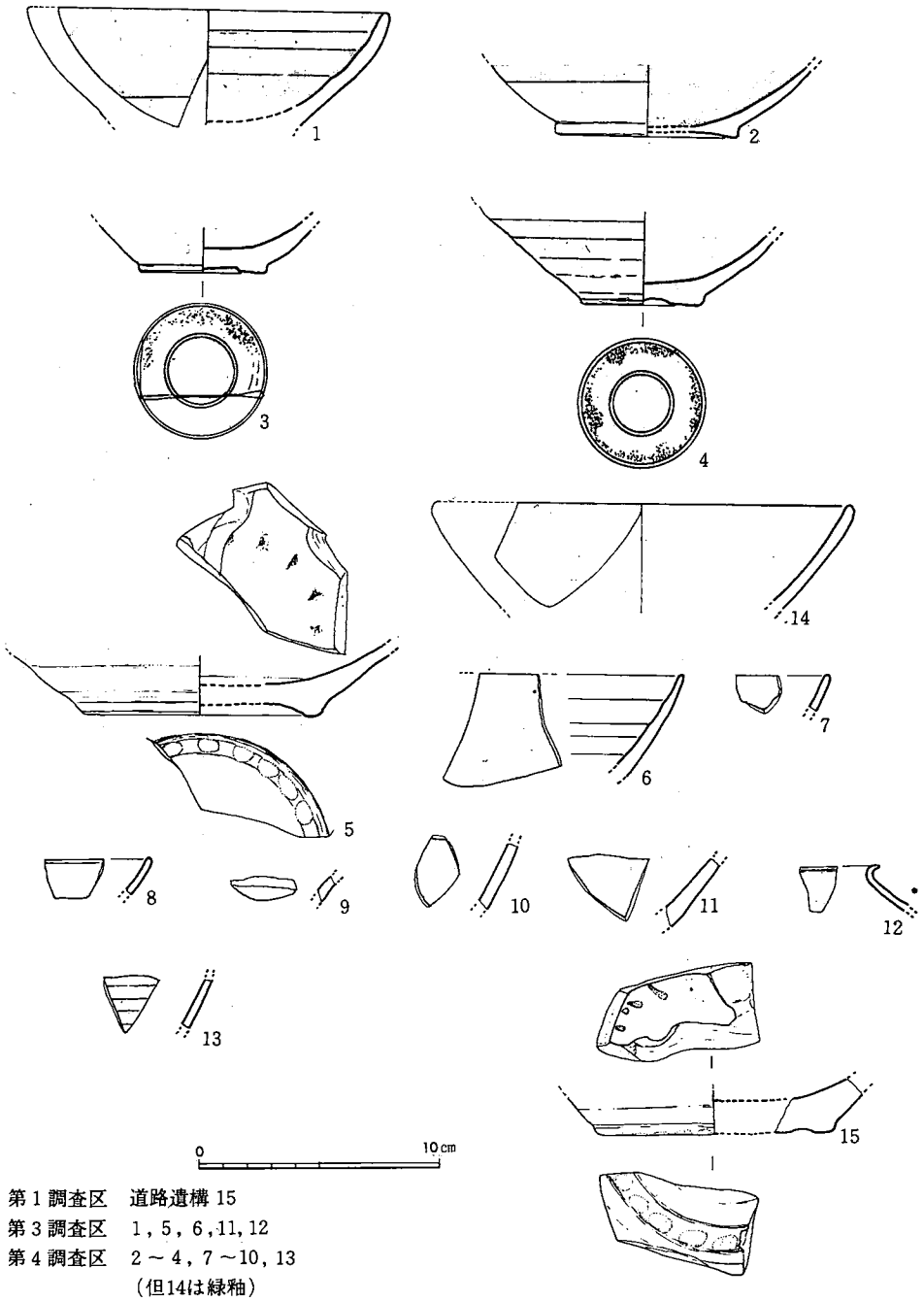

第58図　神水遺跡出土墨書銘土器




第59図　神水遺跡出土瓦２（第三調査区）

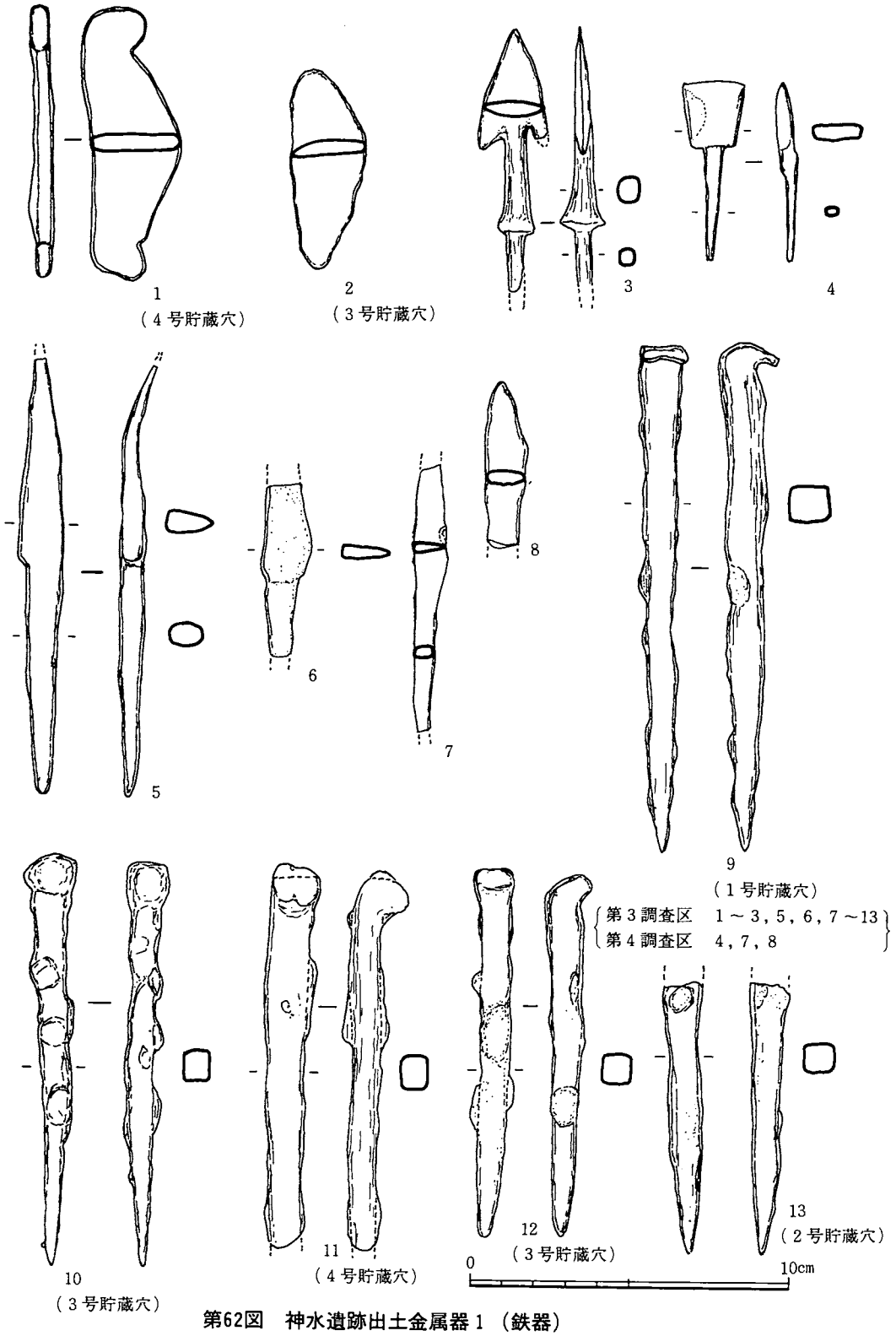



**第60図　神水遺跡出土瓦 3（第三調査区）**

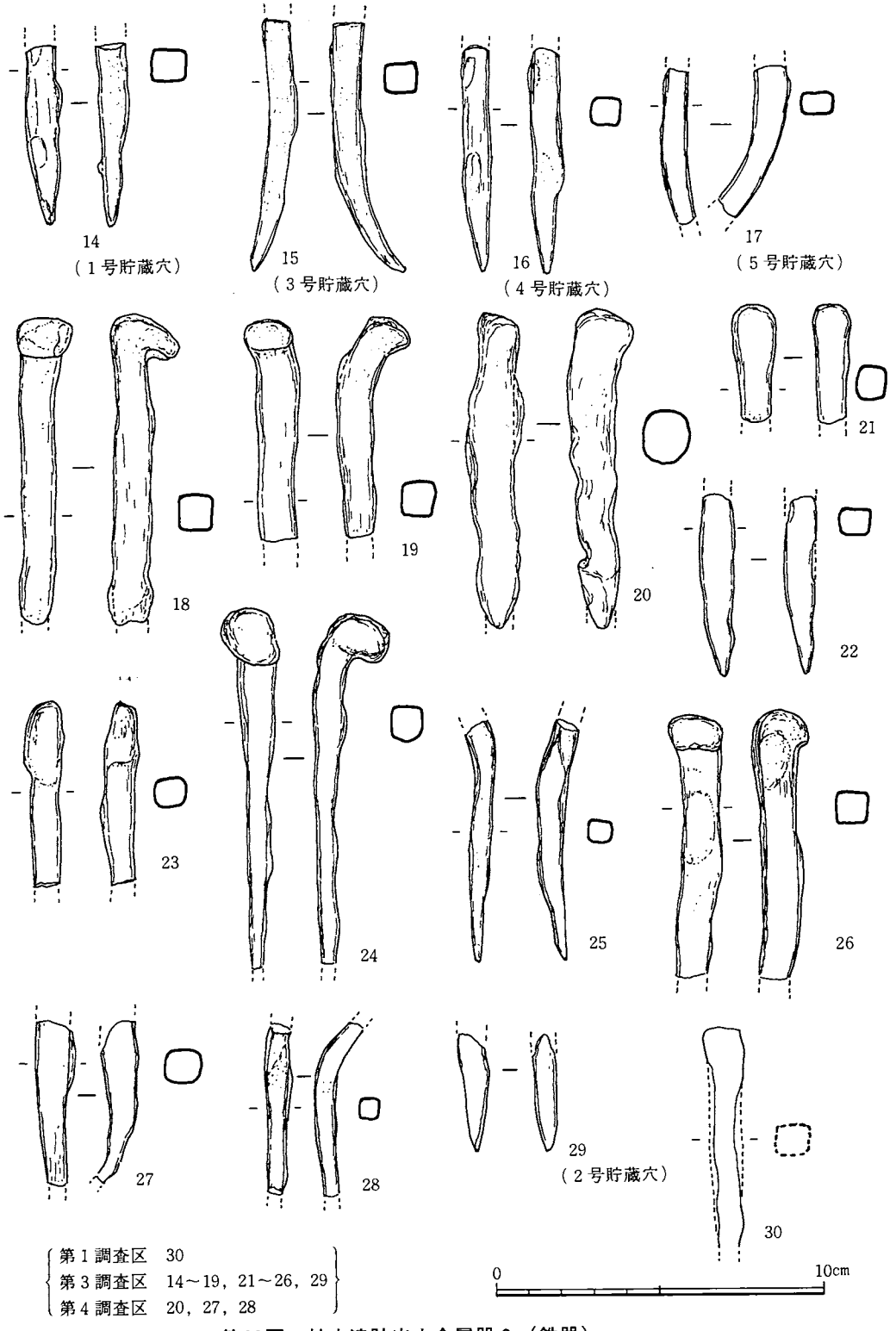



第１調査区　道路遺構 15
第３調査区　1，5，6，11，12
第４調査区　2～4，7～10，13
（但14は緑釉）

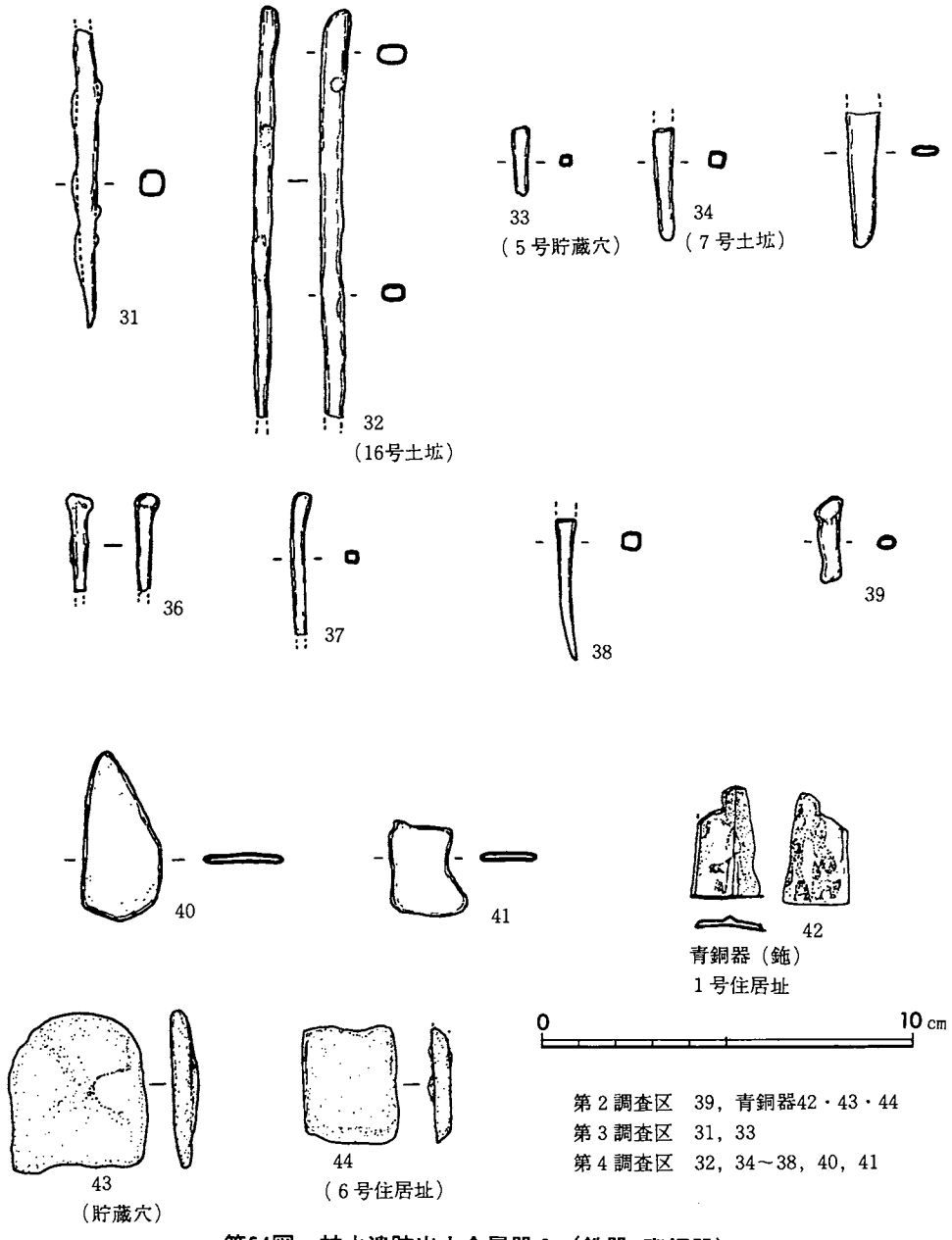
**第61図　神水遺跡出土越磁・緑釉陶器**



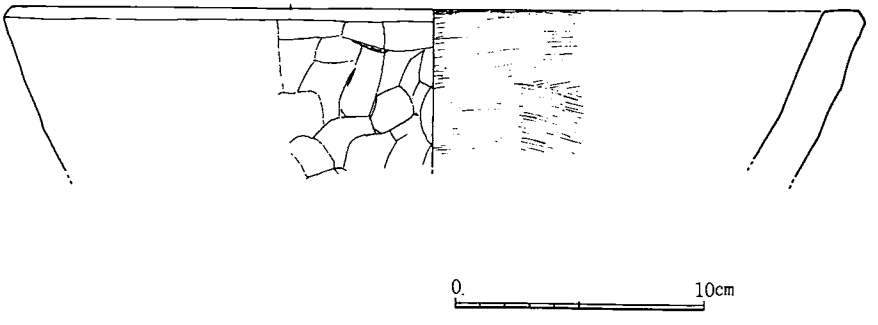

第62図　神水遺跡出土金属器1（鉄器）




**第63図　神水遺跡出土金属器2（鉄器）**




**第64図　神水遺跡出土金属器3（鉄器・青銅器）**




**第65図　第三調査区出土石鍋**

あとを残している。5は皿の底部で低目の高台と内面に重ね焼きの砂目を残している。釉はほとんど流れて青磁色を感じさせない。これと同形の皿は第1調査区の道路遺構上からも出土している。6、11も1と同形の碗の破片とみられ、12は小形の壺の破片である。

**鉄　器**（第62～63図）　第3調査区から多数の鉄器が出土したことはすでに述べたとおりである。貯蔵穴内以外にも第三層の硬化面上から各種の鉄器が出土した。3は三角形鏃で、腹抉（わたぐり）式の反り刃がつき、柄は断面形四角をしており、鏃頭との間にさかいの段がついている。柄の基部は折れ現長8cm。5は刀子で、3の鏃と共に第3調査区1号貯蔵穴上面から出土した。刃が曲がり、刃の先端が打損している。現長13.5cm。6も同様の刀子の一部で、長さ5.3cmを残し両端が打れている。7、8も同様の刀子とみられるもので、それぞれ8.2cm、5.2cmだけが残っている。9～17、29の鉄釘は各貯蔵穴のところで述べたとおりである。18、19、21～26も鉄釘で硬化面上・下及び柱穴中などから発見されている。いずれも欠損しているが、いずれも角釘で、頭を片方に打曲げたものとみられ、全長12～16cmに達するものとみられる。

**石　器**（第17図）　第III調査区から石鏃2、紡錘車1、石鍋1が出土した。18、20、21は打製石鏃で、18の石質はサヌカイト、重量2.1g。20は玄武岩質の打製石鏃で重量1.1g。20、21は硬化面下より出土した。21は黒曜石の石刃鏃とみられ、これらの打製石鏃はおそらく、歴史時代の遺物でなく、いずれも古い時代からの遺物の混入とみられる。5は流紋岩製の紡錘車で、硬化面上より土器や瓦と共に出土した。直径5.0cm中央に径8mmの孔がとおっている。厚味は中央部が1.6cmで、周辺部が1.3cmといく分薄くなっている。ちなみに重量は63.0gである。

**石　鍋**（第65図）　一点が第III調査区C－5区から出土した。厚さ1.8cm滑石製、図示復元によれば口縁径24cm、内面平滑、外面には加工のあとが残っている。

## (五) 第四調査区（第66図）

第四調査区は第三調査区の西、道路（構内への進入路）を挟んで一段高いところに設定した。高いところで標高12m50余りで、西の方へ小丘陵が続き人家が立ち並んでいる。また北側の県道に接する部分はすでに2m余りの地下げが行われ、ここに遺構の残っている可能性はなかった。

第四調査区の発掘にあたり、まずバックフォーとダンプカーを並行して表土はぎを行なった。ここでも市街地の中での屋敷跡ということもあって、井戸、その他構築物等による攪乱が、土中深いところに達し、地表から50～80cm削り去ったあとでも随所に攪乱のあとがあった。

この地域で発見された遺構は、歴史時代の道路、土壙があり、それらに伴ったとみられる土器や布目瓦等の遺物があった。さらに時代を遡れば弥生時代の甕棺墓、木棺墓があり、また数基の土壙や溝が確認された。縄文時代の遺構は確認されなかったが、遺物は発掘の途次発見されている。以下、弥生時代、歴史時代に分けて各時代毎の遺構遺物について述べることにする。

### 1．弥生時代の遺構と遺物

#### (1) 溝状遺構（第66、67図）

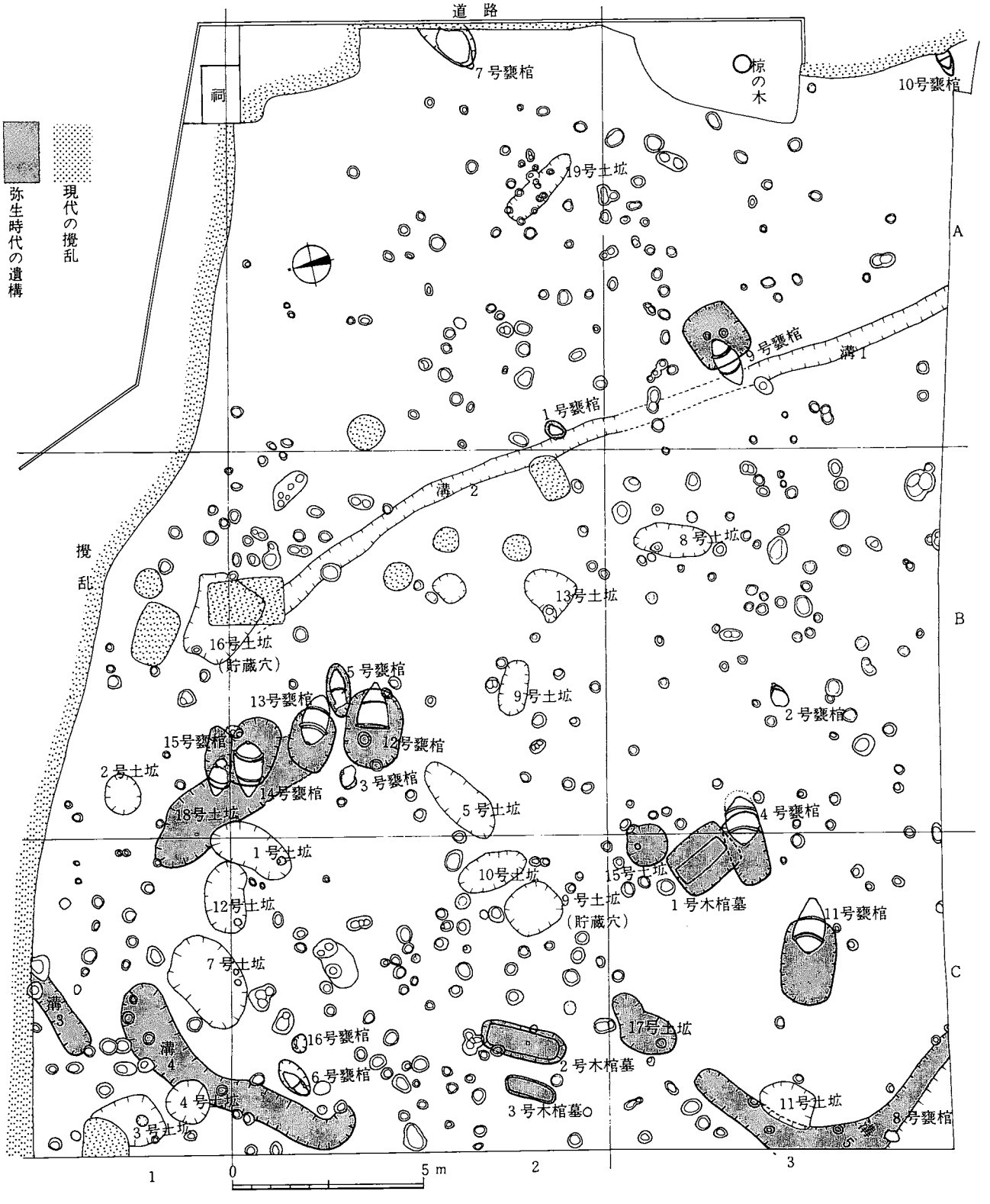
第四調査区から弥生時代の溝とみられる遺構が5条発見された。第66図に図示した溝1～溝5がそれであるが、溝1と溝2は溝中に布目瓦や土師器の破片が混入しているところから、その年代は歴史時代まで下るものとみられる。そこで弥生時代の溝となると3～5の溝ということになる。

溝3はC－1区から発見された。溝幅約60cm確認面からの深さ約13cmの断面U字形の溝であるが、北側は削り去られ約2m50cmの範囲を確認した。

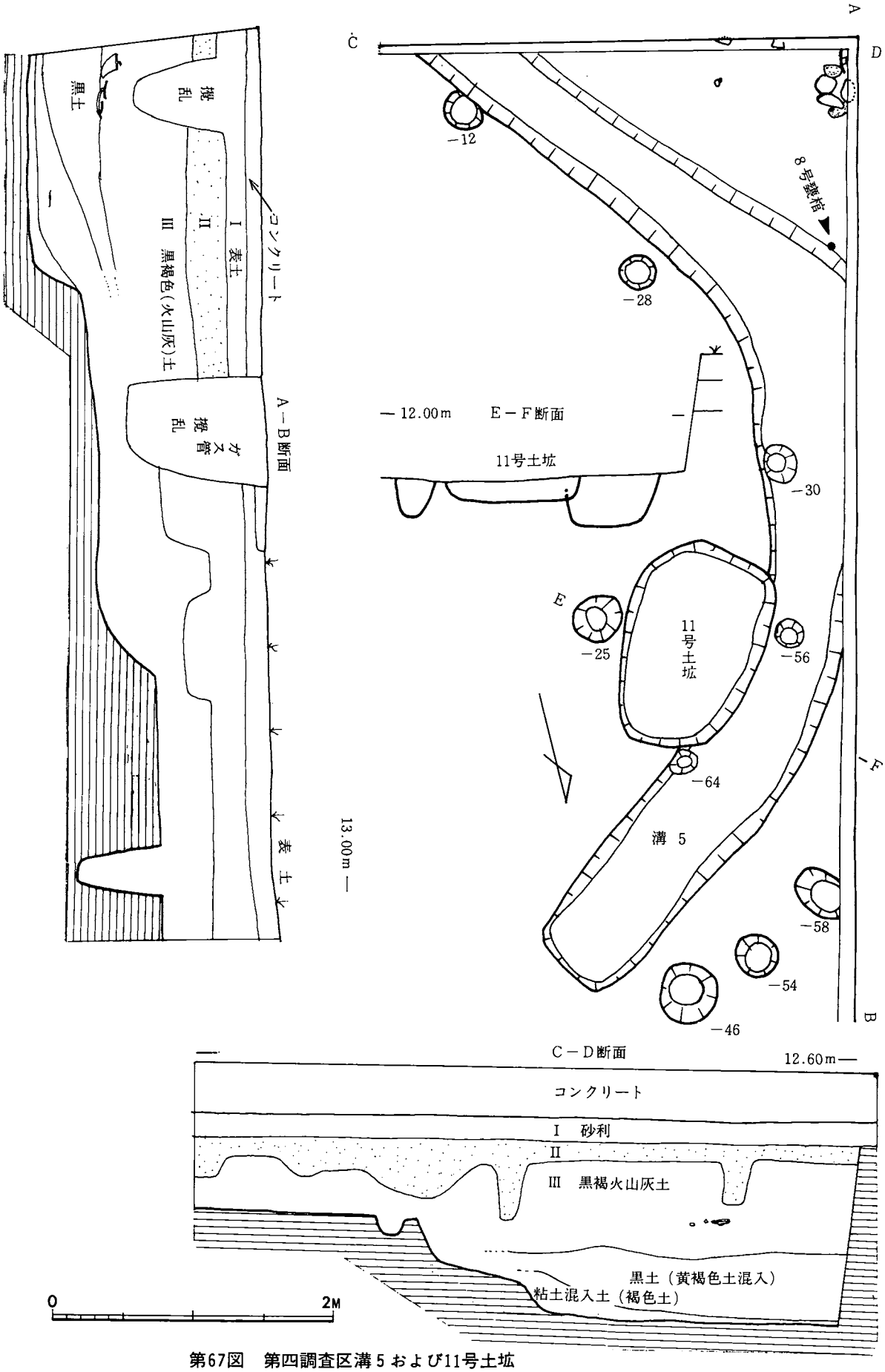
溝4は溝1と同じくC－1区にあって不規則にまわっていた。溝幅は80cm～130cm、確認面からの深さ約15cm、長さ約7cmの範囲を確認することが出来た。この溝には埋没後、歴史時代の土壙4のほか、多数のピットが溝中にあった。

溝5（第67図）はC－3区南東端で発見され、溝幅約75cm、深さ30～40cmであるが、北から約4m延びたところで溝の一部が調査域外に入るため、全体の形は不明瞭である。しかし、溝の片側の肩は迂曲しながら延び、第67図C－D断面図に見るように、反対側の肩はそこになく、更に段落ちとなって自然に傾斜している。その最も低いところで、現地表下1m25cmとなる。この傾斜が、全く別の遺構の中に溝が吸収された姿なのか、それとも土地の自然傾斜であるかということが考えられるが、断面図にみるところの土の堆積状況から、別の遺構とみてよさそうである。

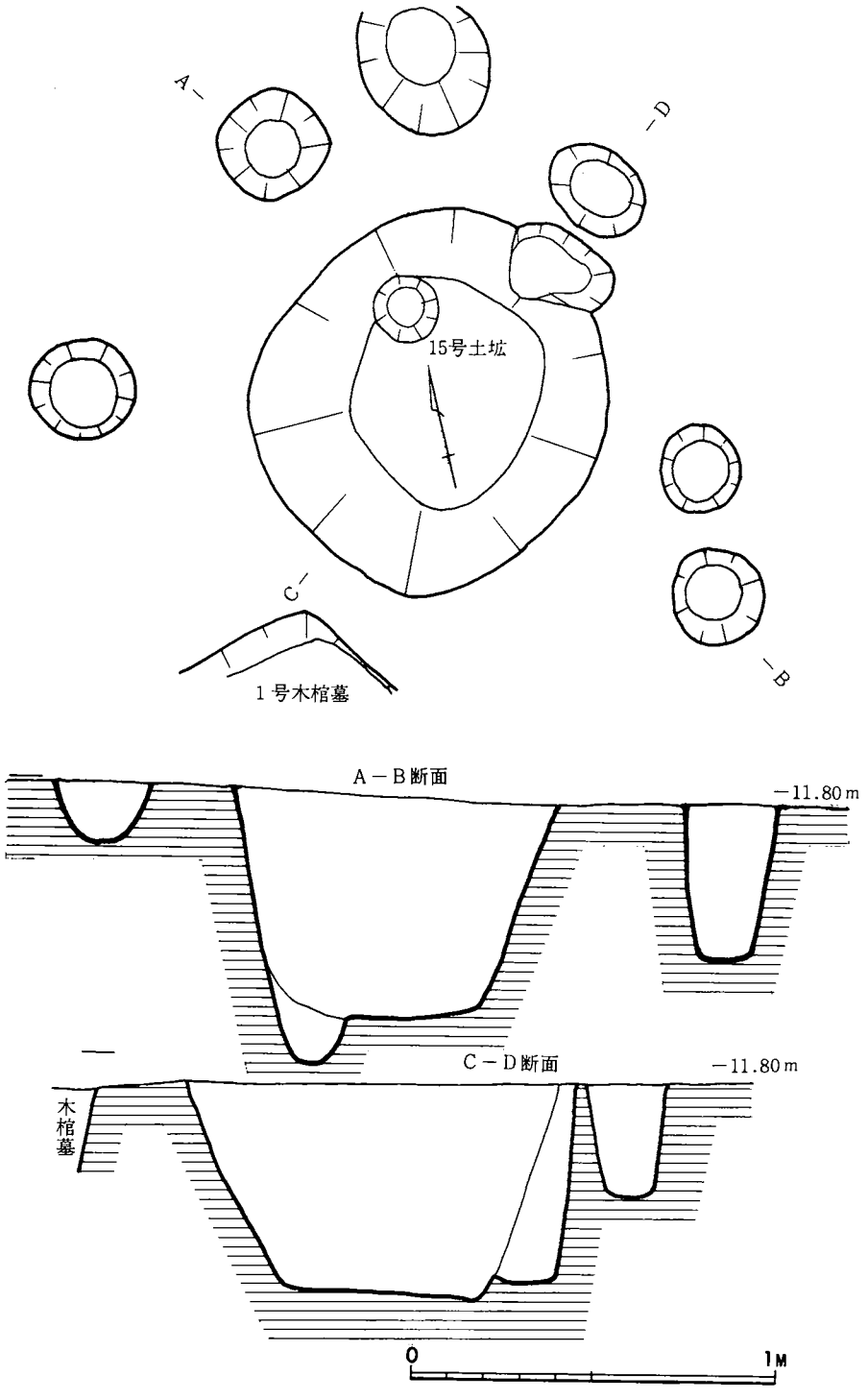
溝5の埋土中には8号甕棺がのっており、そのことから甕棺は溝埋没後埋置されたものと考えられる。また、新しいところでは土壙11が溝の肩にのっていて、これも同様のことが言える。ちなみに土壙11は歴史時代のものである。



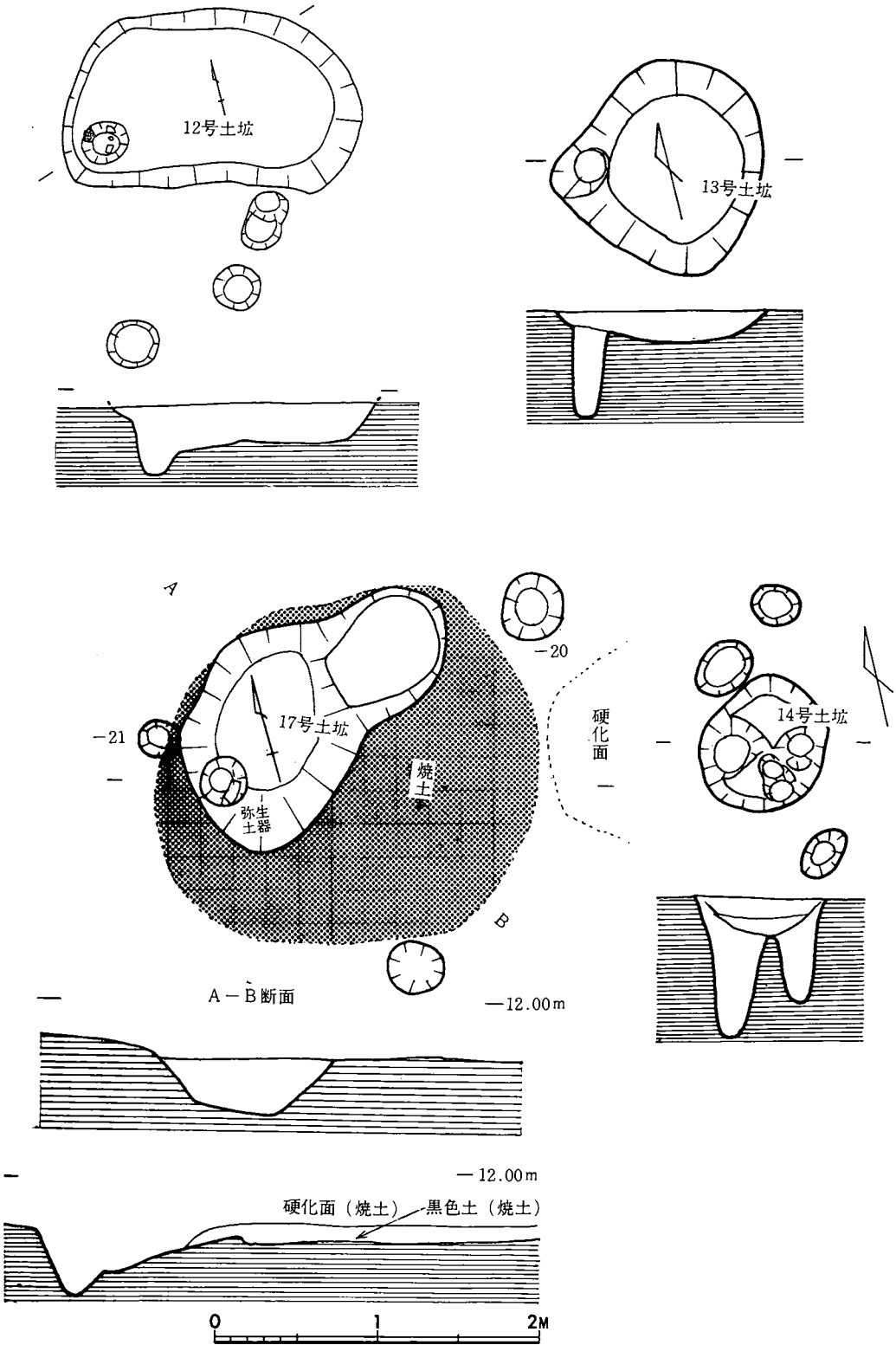

第66図　第四調査区遺構分布図




第67図　第四調査区溝5および11号土坑




第68図　第四調査区15号土坑




第69図　第四調査区12・13・14・17号土坑

**出土遺物**（第99～102図）

溝5及び8号甕棺周辺から多量に弥生式土器片が出土した1．3．5．6．8．21．22．26 29．36．39．41．42．44．47～49．51．52．60．62．66に図示した各土器がそれで、多種多様な土器が出土した。このうち甕形土器の1．3．5．6．8．21．22．26．29．41．42は口縁部で口縁断面の特徴をみても、上に膨らみのあるもの、平坦なもの、そして凹んでしゃくれるものなど多様である。39．44．47～49はいづれも甕形土器の底部で、脚が殆んど開かない39．44や外に開く47～49がある。51．52．60．66は壺形土器で、複合口縁の51があるほか、66のような「く」の字形口縁のものもある。

(2) 土　壙（第66図）

弥生時代の土壙とみられるもの、木棺土壙墓とみられる三基を除いて、土壙15、土壙17及び土壙18の三基が発見された。それらの土壙について述べる。

土壙15（第68図）　1号木棺の北側から円形土壙一基が発見され、これを土壙15とした。土壙は直径約1mの円い形をしており、急角度に掘込まれ深さ70cm、底は比較的平である。底の一隅に柱穴が一つあるが、土壙15は壙内の埋土の色調（黒色土）からして、弥生期のものとみられる。

土壙17（第69図）　土壙17は11号甕棺の北側に焼土がひろがっていることから、その一帯の精査の途次発見されたものである。土壙上には焼土が2～2.5mのまるい範囲にひろがっていて、この中にはところどころに黄色い粘土が混入していた。また焼土のひろがるあたりの土が、硬化していたのも一つの特徴であるが、あるいはこれが甕棺埋納に伴うところの挽火の可能性もあろう。

土壙は長軸で1.9m、短軸約1mの瓢形をしており、掘込みの深さも西の方が深く50cm程となる。土壙周辺及び土壙中には柱穴があり、土壙内から弥生式土器片が出土している。

**出土遺物**（第99、100図）

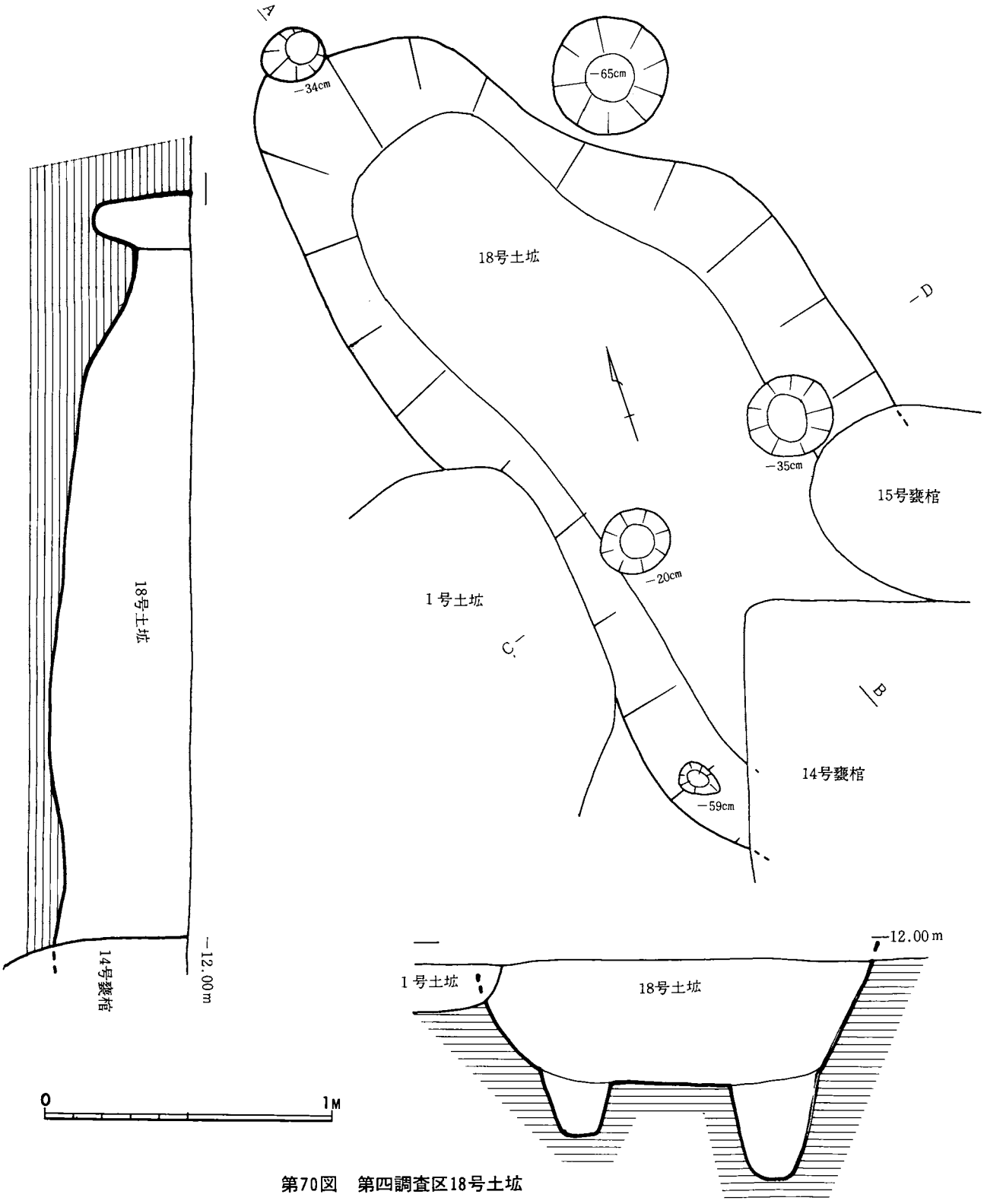
10及び28．32．33は周辺の焼土中より発見したもので、10．28．32は甕形土器の口縁の一部33は同じ甕形土器の脚台の部分である。

土壙18（第70図）　15号甕棺及び14号甕棺の下から溝状をした土壙が発見された。これは幅1m30cm、深さ約50cmの帯状の土壙で南の方は甕棺で切れており、また甕棺調査時の断面カットにより土壙の全体の形は不明。この土壙の西側には歴史時代の土壙1がのっていた。

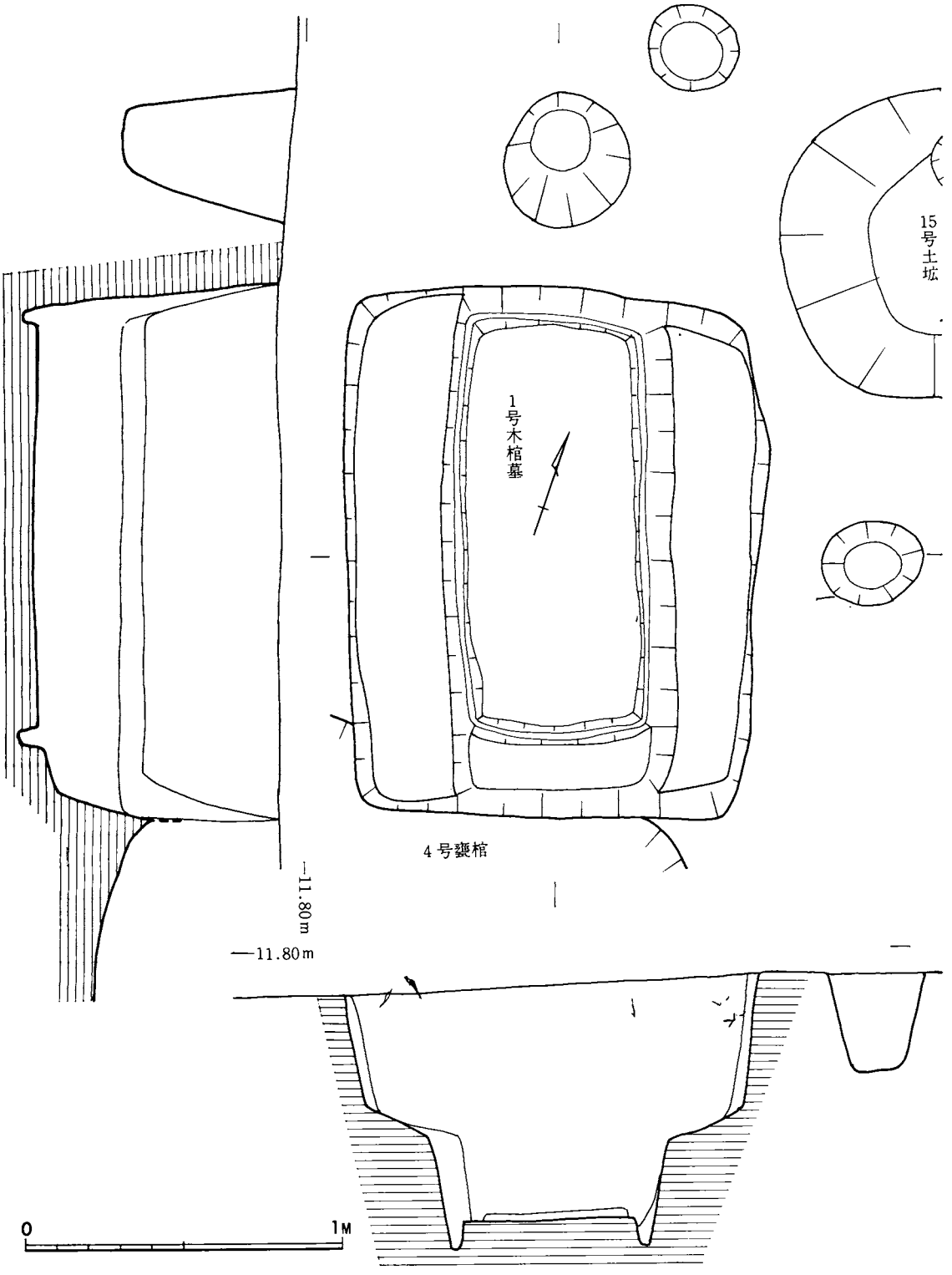
弥生時代の土壙15、17及び18の機能と性格についてそれぞれ異なっていることは確かであるが、今のところはっきりしない。

(3) 木棺墓（第71、72図）

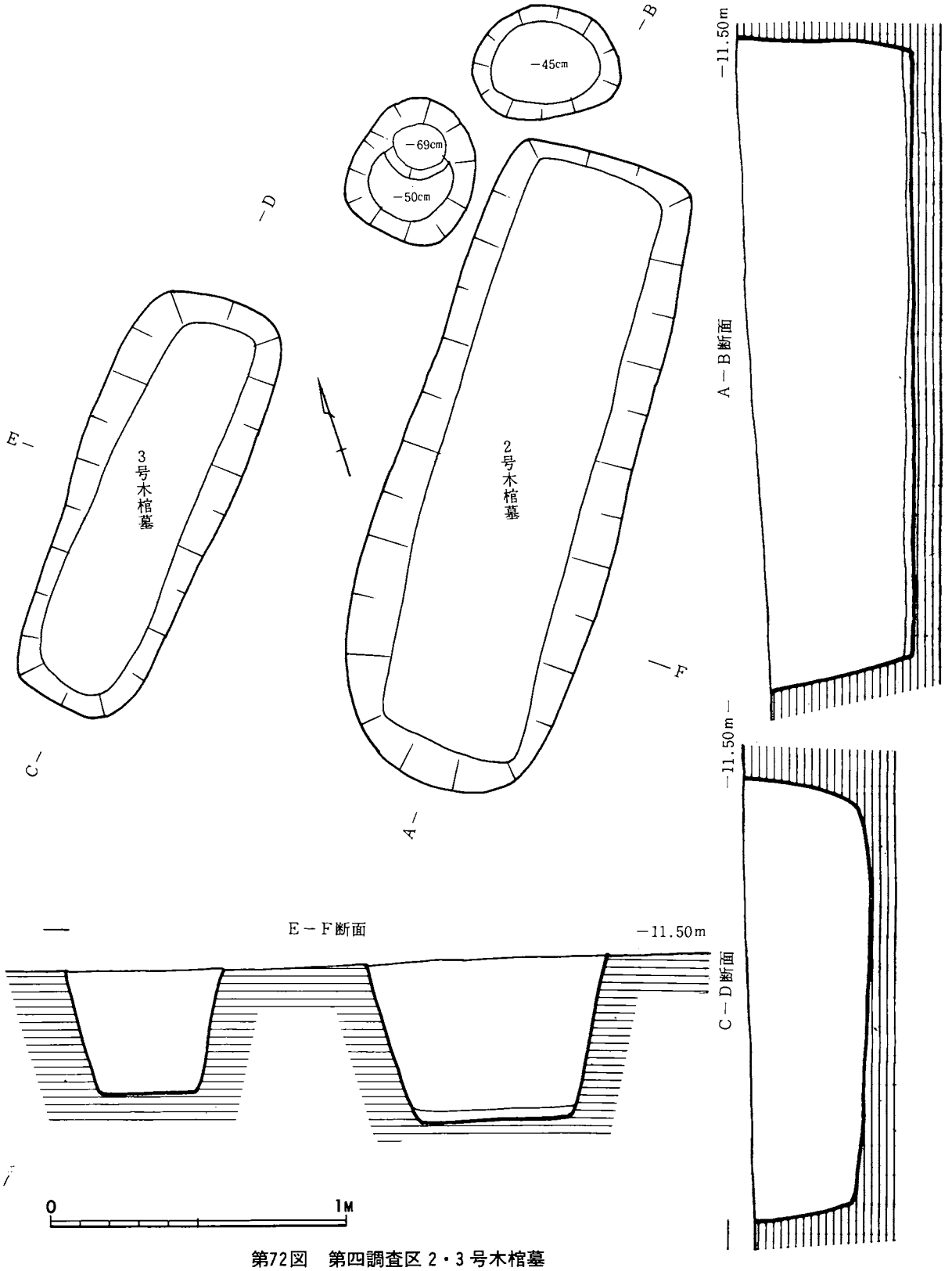
C－3区4号甕棺に接して土壙一基が発見され、さらに土壙17の北側に二基並んだ土壙が発見された。この三基の土壙は、その形状からして木棺土壙墓と考えられるもので、ここで木棺




第70図　第四調査区18号土坑




第71図　第四調査区1号木棺墓




第72図　第四調査区 2・3 号木棺墓

墓として取上げることにした。

**1号木棺墓**（第71図）

1号木棺墓は南北165cm、東西130cmの方形の土壙を掘り、約40cm下がったところで、さらに中央部に南北132cm、東西65cmのところを約30cm掘り下げ、組合せ木棺の埋納施設としたもので、木のあとが地山の中にくろくスタンプを残していた。木棺埋設の部位は北壁に殆んど接するが南の方は木棺との間に15cmばかりの余地があるが、これは木棺埋置の便を考えての空間とみられる。

木棺の長軸の方向は北側がN-21°-Wで西に偏していた。また隣接する4号甕棺とは土壙を共有しており、埋め土からその先後は判断出来る状態ではなかった。本体をこわしてないところをみると、相互にというより、この際あとの方が相手を意識しているものとみられる。甕棺そのものには直接触れていないところから、どちらが先としても埋設可能な状態である。

**1号木棺埋め土中の遺物**（第99、103図）　1号木棺の埋め中から7点の弥生式土器片が出土した。このうち図示出来たのは9．12．14．18．70である。9．12．14はほぼ同形の甕形土器の口縁部で、上面がふくらむ特徴をしている。18は上面がしゃくれ、口縁下に突帯一条をもつものである。70は内面の器面腐植の状態から甕棺の破片とみられ、胴部に刻み目を付した「コ」の字形突帯のある壺で、口縁部及び底部は定かでない。

1号木棺の埋め土中の遺物は、それを故意に埋めたものでなく、木棺埋設時その周辺に散乱していた土器片が埋め土の中にまぎれ込んだものとみられる。甕棺墓との先後関係もさることながら、木棺墓の時期を考える上に参考になる重要な資料である。

**2・3号木棺墓**（第72図）

1号木棺墓の西北7mばかりのところから2基の土壙が発見された。この土壙は第四調査区の発掘がほぼ終り、確認のための掘下げの際発見されたものである。1号木棺墓と異なり規模も小さく、木棺のスタンプはなかったが、土壙の形状からして木棺と推定した。

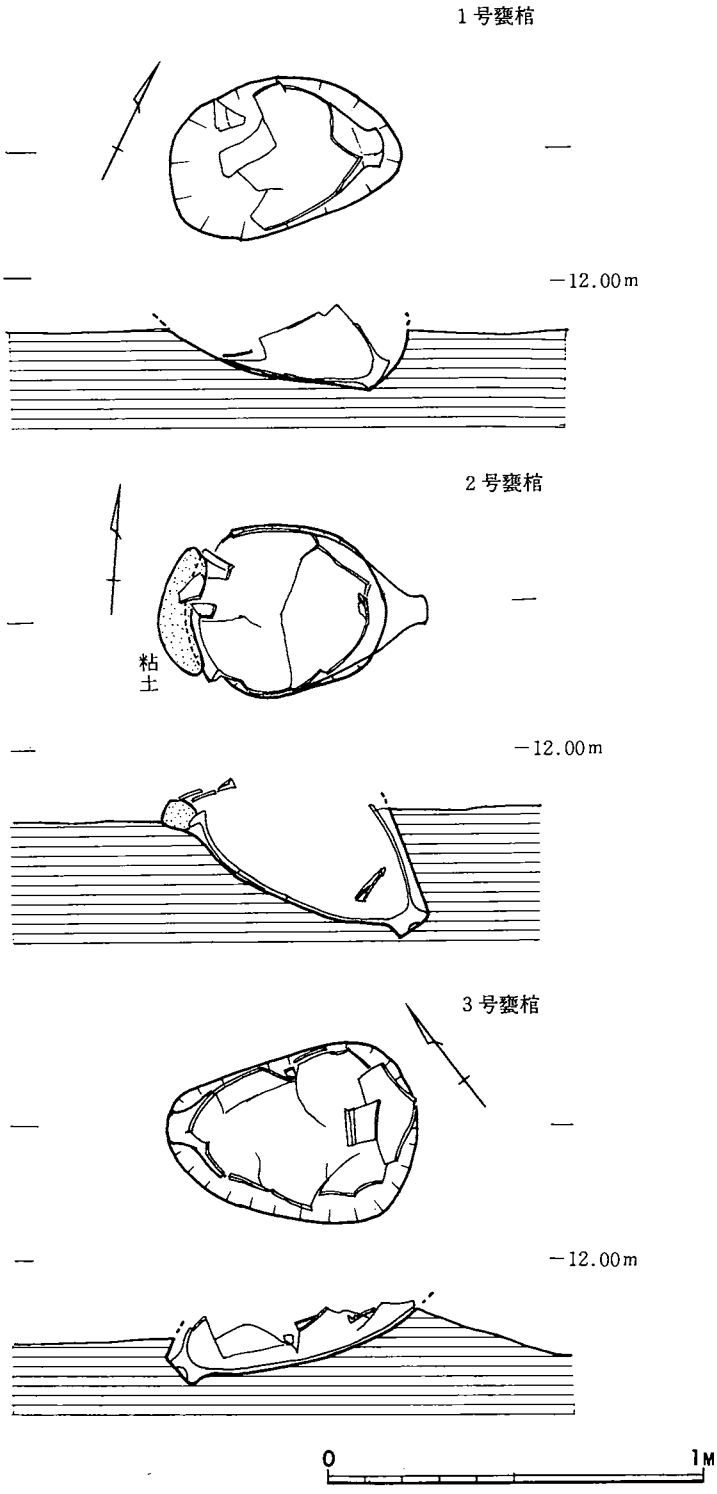
2号木棺の平面形は長方形をしており、長軸上場で2m15cm、下場で2m01cmである。短軸は上場で82cm、下場が53cmを測る。掘込みの深さは約60cmで底は平らである。

3号木棺は2号木棺と並んで発見された。こちらは2号木棺より小形で、長軸上場1m47cm下場132cmである。短軸上場が46～54cm、下場30～34cmである。

この2号及び3号棺は長軸方向が並んでおりいずれが頭位であるかはっきりしてないが、北側ではN-37°Eを向いている。なお、この木棺墓とみられる土壙には副葬品及び埋土中に土器等の混入はなく、時期を推定する決め手を欠くが、発見の層位埋土の色調からして弥生時代を下るものではない。恐らく弥生の埋葬遺構とみられる。

(4)　甕棺墓（第66図）

神水遺跡はもともと弥生甕棺墓として取上げられていた。協和発酵構内でも、かつて作業中




第73図　第四調査区 1 ～ 3 号甕棺出土状態

数基の甕棺が発見されている。今次の調査でも第二調査区では一基の甕棺が出土したが、ここではこれのみに終わった。いよいよ第四調査区では、本格的な甕棺墓の発掘である。

発掘した甕棺墓は合計16基、内訳は大型棺７基、小型棺９基である。以下これらの個々の甕棺について述べる。

**１号甕棺**（第73・74図）

１号棺はＡ－２区、溝２の肩にのる形で発見された。小形の合口甕棺とみられるが、下甕の一部を残して大部分を失なっていた。上甕の埋納方位はＳ－60°－Ｎで、棺の埋納角度は水平面に対しておよそ35°であった。

１号棺の下甕の上半を欠失しているが、口縁部は２号棺と近いことが考えられる。外面、底部近くは器面調整に箆均らしがなされ、底径9.5cm、わずかに開く程度で、平底に近い。底の厚味は5.3cmと極めて厚いのが特徴である。また甕の外面には煤が付着し、内面に焦げつきが観察される。

**２号甕棺**（第73・74図）

この甕棺も上甕を失くしていたが、合口の部位に目張りの粘土を残していた。そこで、これが合口棺であることは確かである。発見の場所はＢ－２区の中央付近で、頭位をＳ－84°－Ｗとして約42°の傾斜角をもっていた。

２号棺は口縁径38cm、上面がいく分ふくらみをみせ、突端が内側に鋭角的に突出している。口縁下４cmのところに突帯一条があり、胴部はややふくらみ、最大径が器高の1/2より上にくる。底はわずかに開き、いく分あげ底となり、厚さ3.8cmと厚い。高さ64cmのこの甕の器面はあらく箆均らしがなされている。これも外面には煤が付着し、内側の底に近い部分の器面は剝離している。

**３号甕棺**（第73・74図）

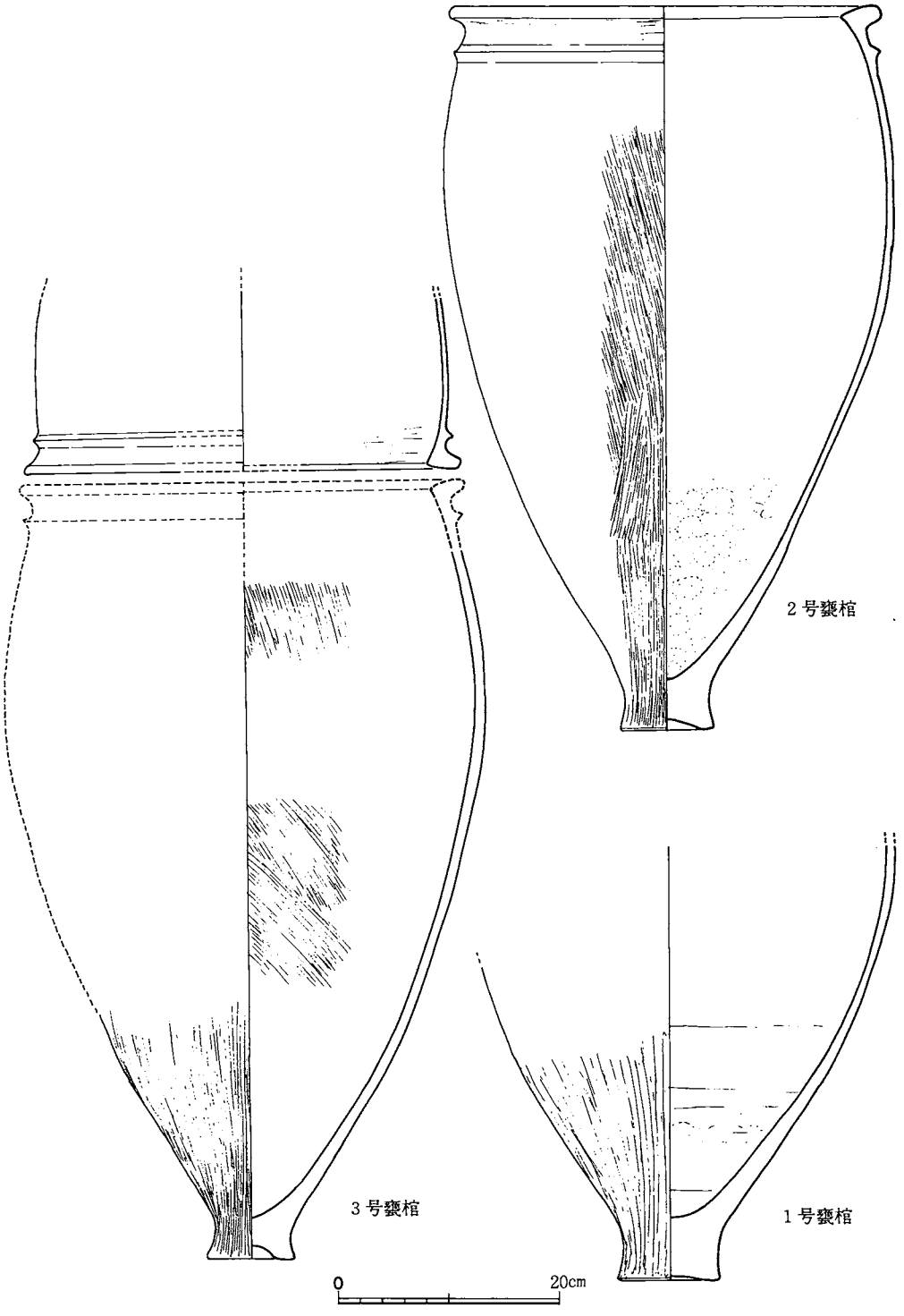
３号棺はＢ－２区で発見された。その後の発見で、この甕棺は５号、12―15号がまとまって存在することが知れ、今次調査した甕棺の中でも一つのまとまりのあるものとして注目された。

３号棺も他の小型棺と同様、埋没層位が浅いところから、甕の上半を失なっていた。上甕の方向はＳ－52°－Ｅで埋納角度は約42°の傾斜角をしていた。

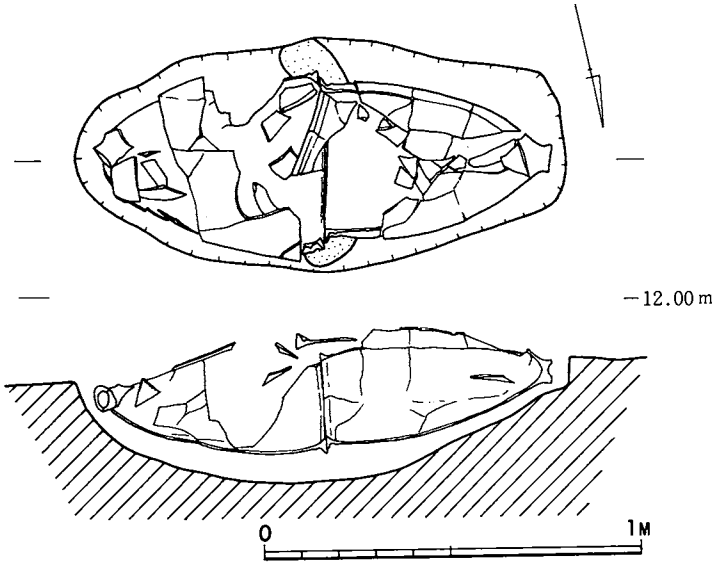
この甕棺は合口棺であるが、上甕の一部と下甕の口縁を失ないながらも約1/2残っていた。上甕は口縁下に突帯一条をもっており、残り具合から上・下同形の甕を使用していたことが考えられる。下甕の底部はいく分外に開き気味で、底の厚味は１・２号棺に比べて薄く2.5cmの厚さである。外面とくに上半にはくろく煤が付着し、内面には焦げつきの痕がある。下甕の推定高69cm。

**５号甕棺**（第75・76図）

５号棺は３号棺から約２ｍ離れ13号棺に重なる形で発見された。この棺は上・下棺とも比較




第74図　第四調査区 1～3甕棺




第75図　第四調査区５号甕棺出土状態

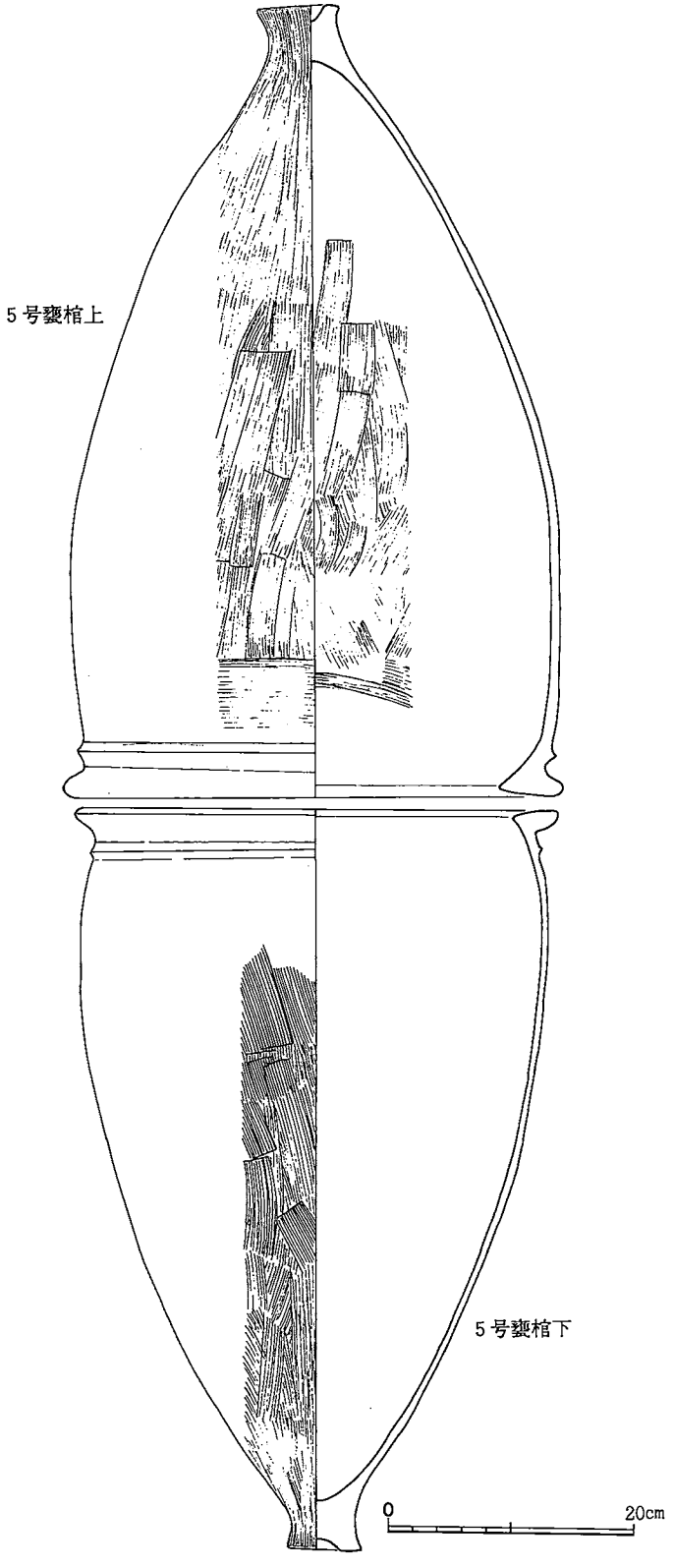
的よく残っていて、上甕の方向はN—76°—Wである。また埋納角度は水平に近く、約４度の傾きをもっていた。

５号棺はほぼ同形の甕形土器を使用している。上甕は上面がいく分ふくらみをもち、上面が内側に傾く。口縁下２cmのところに突帯一条、胴部の最大径は高さ2/3あたりにある。底はあげ底となり、いく分外反する。底の厚味は3.2cm、器面には調整痕が胴部以下に残っている。ちなみに口縁径40cm、高さ64cmである。

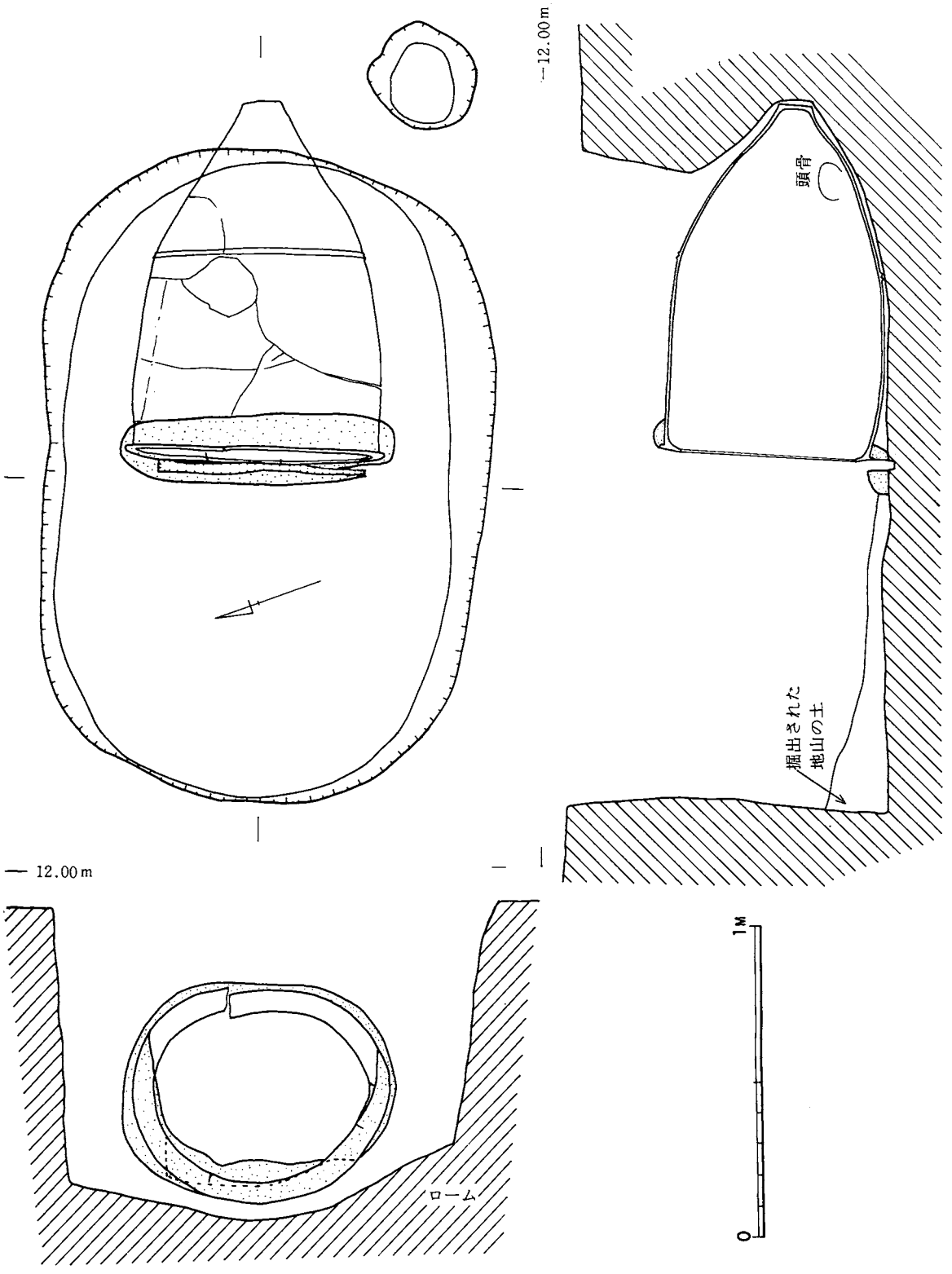
下甕は上甕と特徴的に大きな違いはないが、口縁の上面の平坦面が狭く平らになっている。また口縁下の突帯もいくらか細く、器面調整、底部のつくりに上甕と大差はない。口縁径38.6cm高さ60cm、上・下甕とも胴部に煤が付着している。

**12号甕棺**（第77～79図）

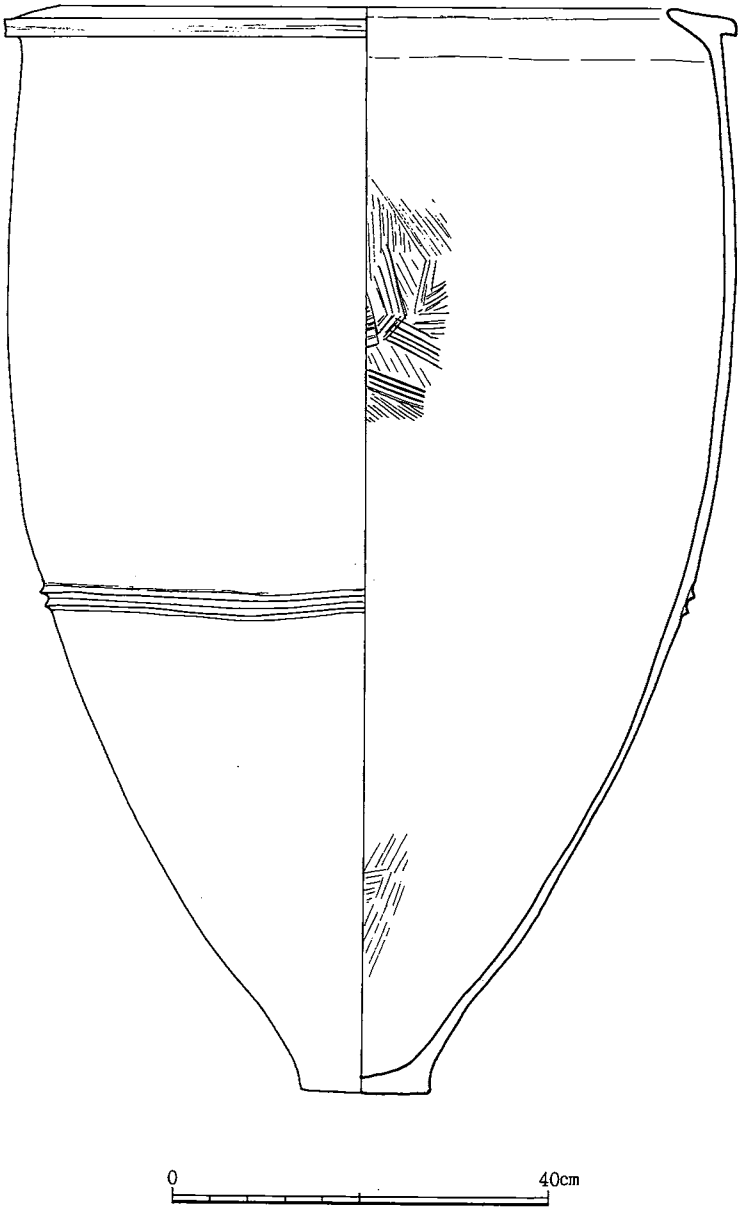
12号棺はB—２区より出土した大型の単棺である。この甕棺を埋納するにあたり、２m10cm×140cm位の土壙が掘られ、そこから横へ底部を入れるため約30cm掘り甕を埋置している。そこで死体を運ぶことになるが、頭の位置を甕の口と反対の底の方に向けて葬っている。四肢骨の残りが悪いので細部については明らかでないが、棺の構造上、膝を立て仰臥の形をとるのではないかと見られる。甕棺の口縁部には数枚の板を使用し、隙き間を粘土で密封したことが、粘土の残り具合から推知された。ここで12号棺の主軸の方向は口縁部がN—71°—Wを指し、ま




第76図　第四調査区5号甕棺




第77図　第四調査区12号甕棺出土状態



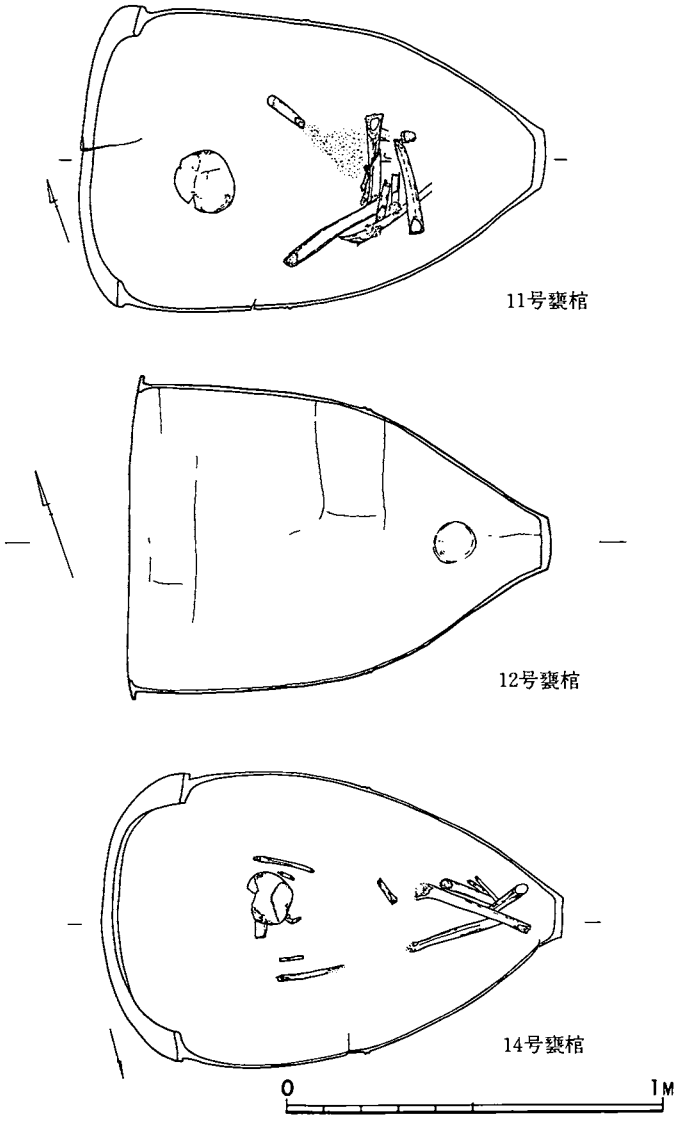

第78図　第四調査区12号甕棺

た埋納傾斜は水平に近く4度であった。なお、この甕棺には副葬品はなかった。

12号棺は、赤焼きの大型棺で、口縁部はT字形をなし、上面は外傾し、厚味のあるつば状の口縁である。胴部には二条の突帯があり、底は径14.2cmの円板状の平底である。器高113.4cm、口径64cm、北九州でいう須玖式と同タイプの甕棺とみられる。

**13号棺**（第80・81図）

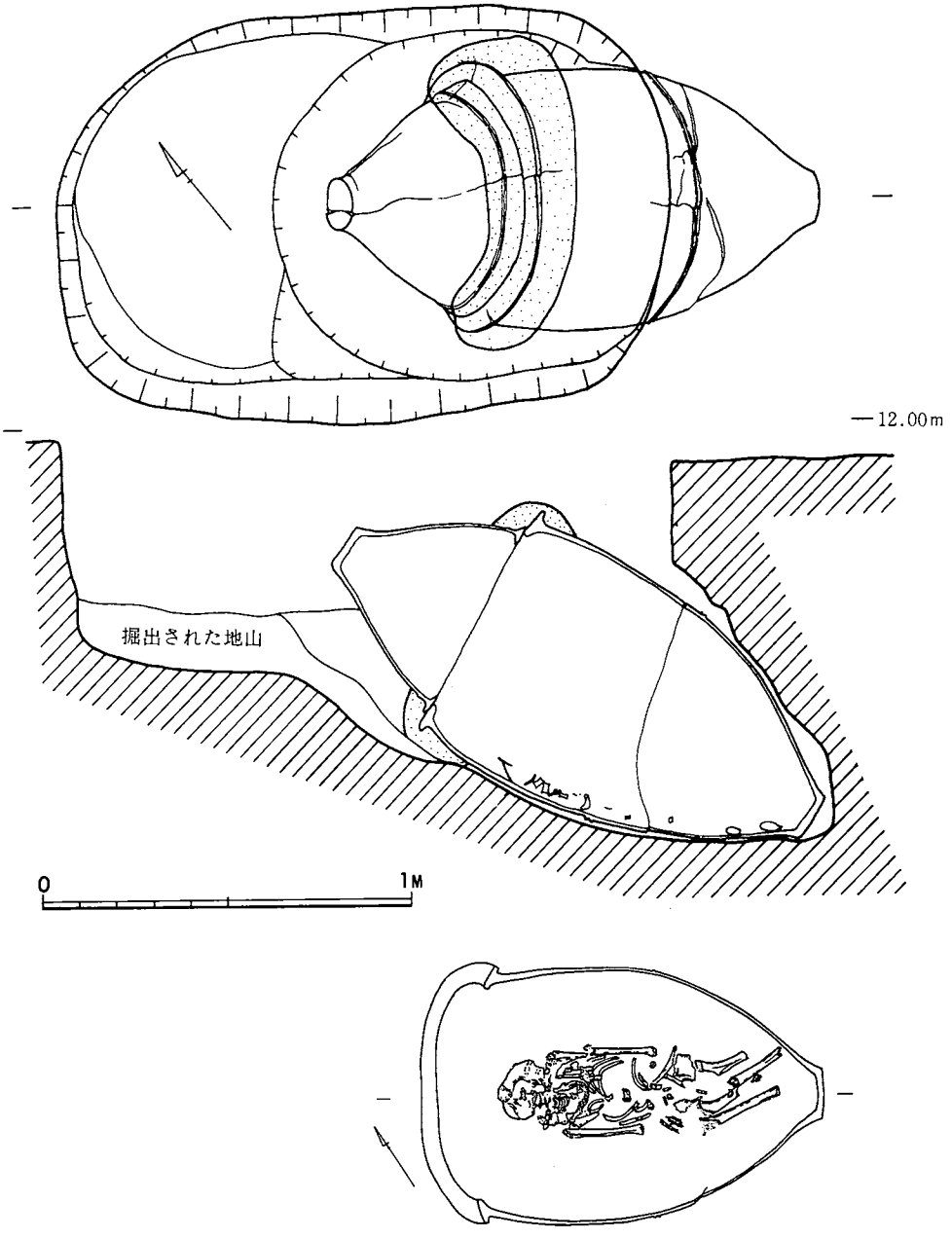
13号棺は12号棺の北にこれと並ぶようにして発見された。この甕棺も埋置にあたり166cm×110cm位の小判形の土壙を掘り、そこから長軸の一側を斜めに50cm程掘り、下甕を埋置している。下甕に人体の頭位を口縁側におき、仰臥、立膝の形で埋葬し、上甕に鉢を覆せ、口縁部に粘



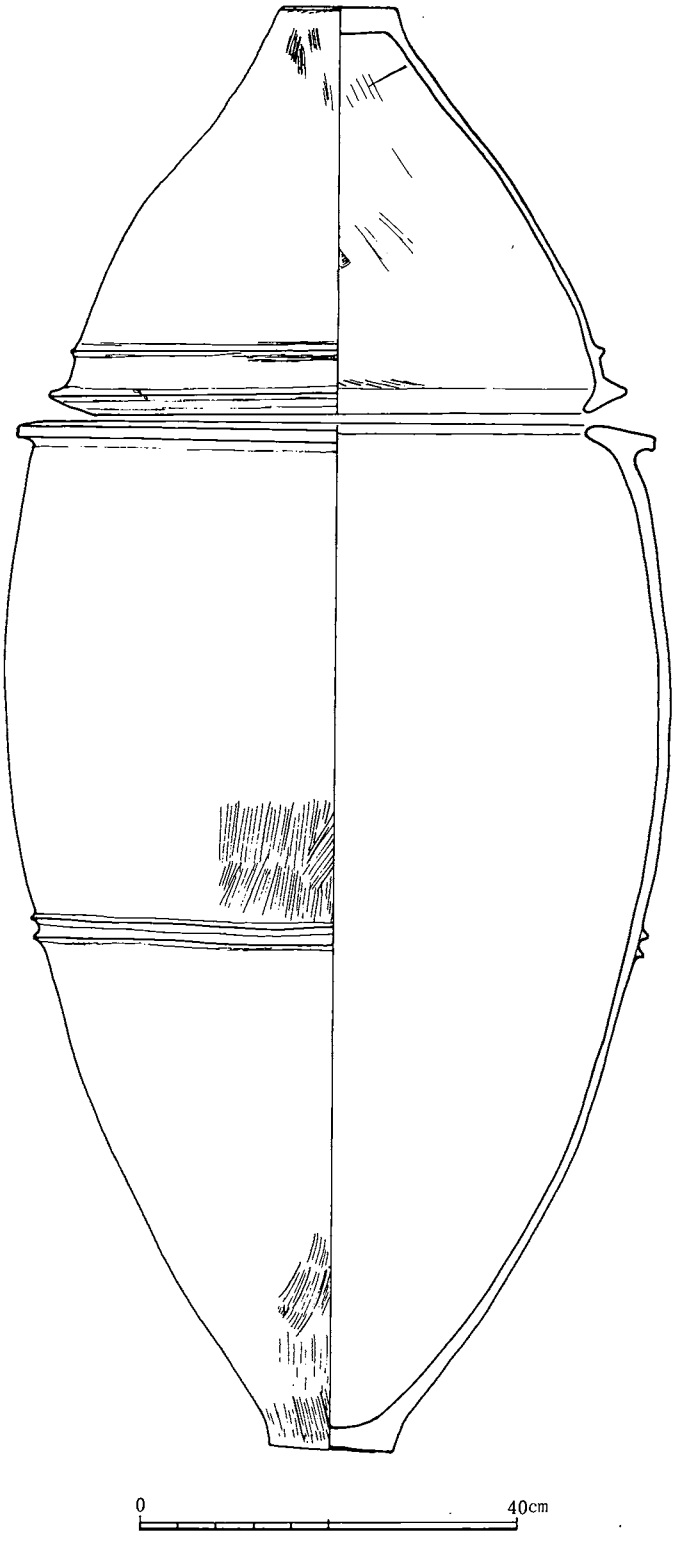

第79図　第四調査区11・12・14号甕棺人骨出土状態

土の目張りをしていた。この甕棺は甕のひび割れをしているほか破損してないところから人骨の保存はよかった。上棺の向きはN—53°—W、棺の埋置角度はおよそ31°であった。

13号棺は鉢と甕の合口棺である。上甕は内傾したT字形口縁をしており、口縁下4cmのところに突帯一条がつく。底は12.9cmの平底で、厚味が2.8cmと厚い。下甕同様赤焼きの土器で、高さ42.5cm、口径51.6cm。




第80図　第四調査区13号甕棺と人骨出土状態




第81図　第四調査区13号甕棺

下甕は上甕同様のT字形口縁、胴部に二条の貼付突帯がつく。底は径13.2cmの平底、厚味2.2cm。器面は刷毛目調整ののちなでにより仕上げている。

**14号甕棺**（第82・83図）

14号棺はB－2区、13号棺の北側から15号棺と並んだ形で発見された。この甕棺も他の甕棺と同様170cm×120cm位の土壙を掘り、さらに下甕埋置のため片方の壁を斜に掘下げている。ここで注目されたのは12、13号棺が下甕の口を西に向けているのに対し、14、15号棺は反対方向を向いていることである。また15号棺との土壙を共有しており、一部に埋土のダブリがあることは確かであるが、土色などから先後関係ははっきりしなかった。14号棺は上甕に鉢形土器、下甕に大型の甕形土器を使用していることは、隣接する13号棺と変わりはない。また合口の部分を粘土の目張りをしていた。甕は土圧によるひび割れを生じていたが、中の人骨は比較的良好で、第79図に見る様に四肢骨を残していたが、副葬品は確認されなかった。なお、14号棺の上甕の方向はS－76°－E、埋置角度は35°であった。既に触れたとおり、14号棺は鉢と甕からなる合口棺で、上甕はT字形口縁に一条の突帯があり、箆状工具による器面の調整がされた赤焼きの土器で、口径55.5cm、底径11.2cm、高さ40.2cmを測る。

下甕は内傾するT字形口縁の甕で、胴部に二条の突帯を付している。器面はたて方向の刷毛目調整のあと、なでにより仕上げている。口径56.4cm、底径12.0cm、高さ120.7cm、器面の色調は赤焼きの色調の土器である。

**15号甕棺**（第82・84図）

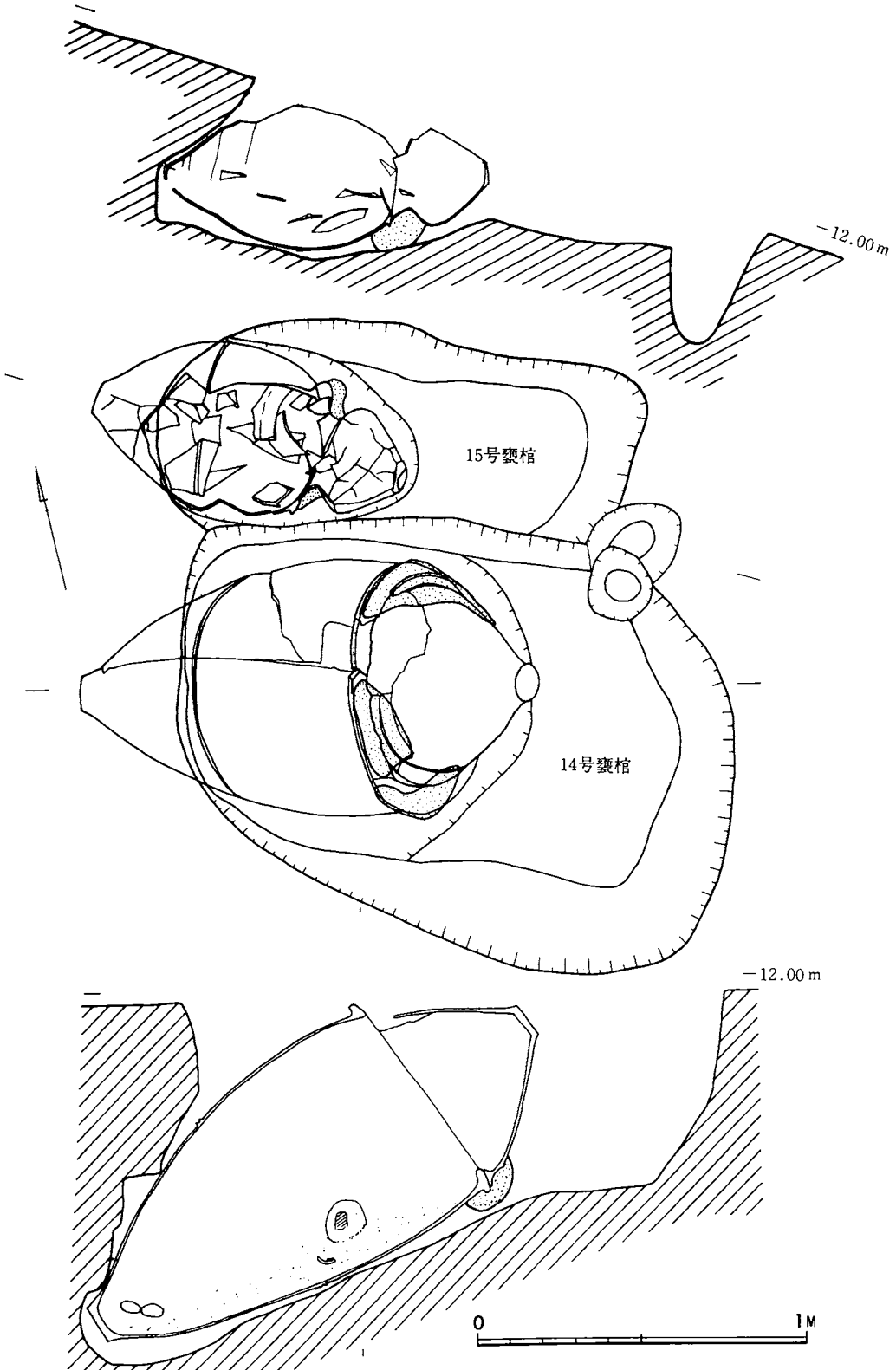
15号棺は14号棺の北側に並んだ形で発見された。この甕棺は14号棺と土壙を一部共有しており、およそ145cm×70cmの土壙を掘ったのち、西壁下を掘下げ下甕を埋設し、上甕に蓋をした後粘土で目張りしていた。ちなみに上甕の埋設方位はS－62°－Eで、埋設角度は約17°であった。土圧等により甕棺の上面は壊れ、人骨の残りはなく、また副葬品はなかった。

15号棺は上甕に壺を使用し、壺の底はわずかにあげ底になっている。胴の最大径は器高の半分より上位にあって、頸がしまり箆磨きにより一種の沈線文を形成する。頸から口縁にかけての立上がりは長くゆるく外反する。口縁端末はいく分肥厚気味で、単純口縁として終わる。また頸部から口縁までの立上がりの部位には、たて方向の暗文がはしるが、全面的に箆磨きがなされ精整された赤焼きの土器である。底径6.9cm、最大胴径31.7cm、口径30.8cm、高さ31.7cm。

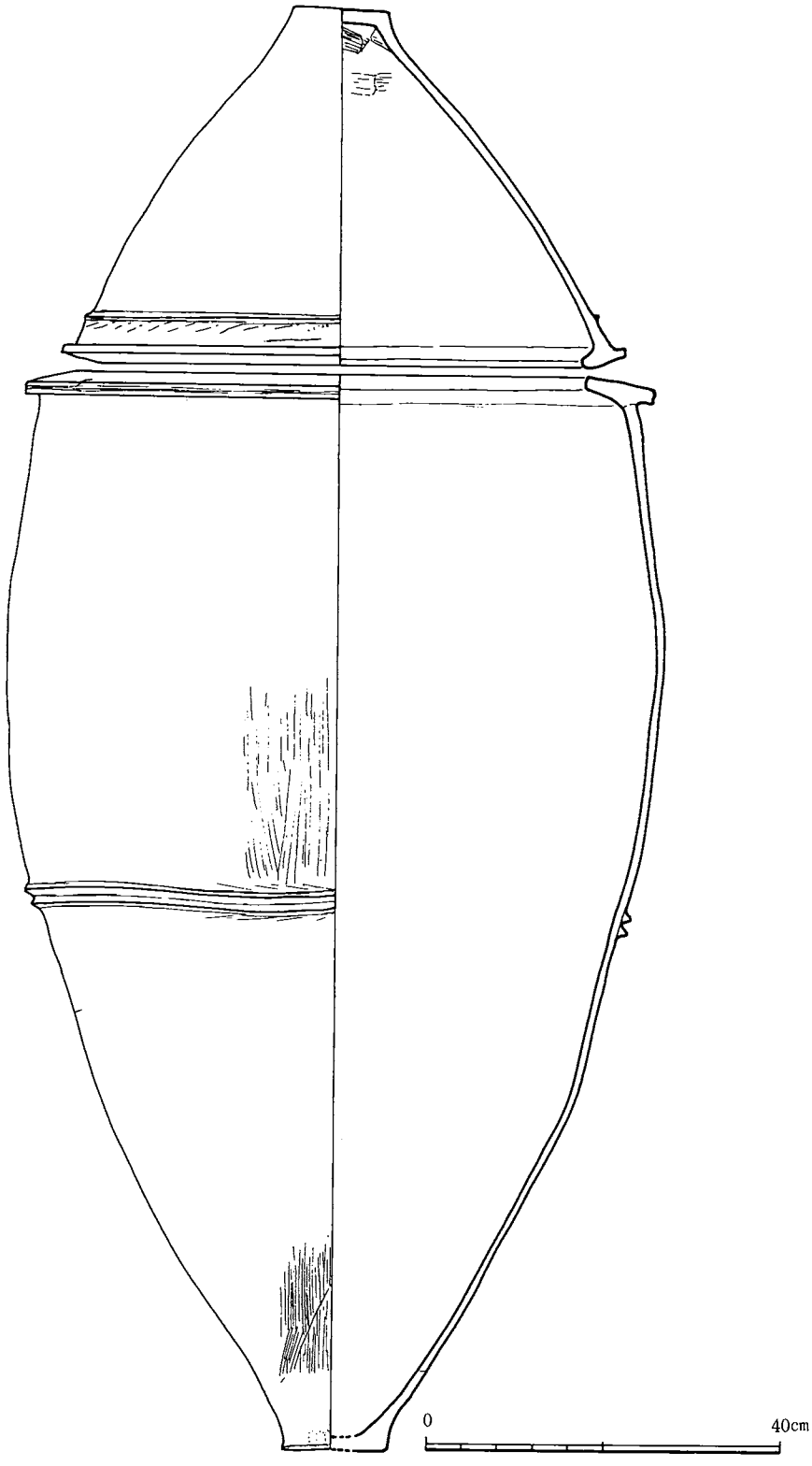
下甕は他の大形甕棺の下甕に比べ口縁部が窄まり、したがって胴張りのある甕となっている。そのことから口縁部の断面もT字形というより鋤形に近い形をしている。胴部には二条の突帯、底は平底、器面は平滑な仕上げである。この赤焼きの甕は、底径10.8cm、口径27.8cm、高さ68.0cm。最大胴径は51.8cmである。

**4号甕棺**（第85・86図）

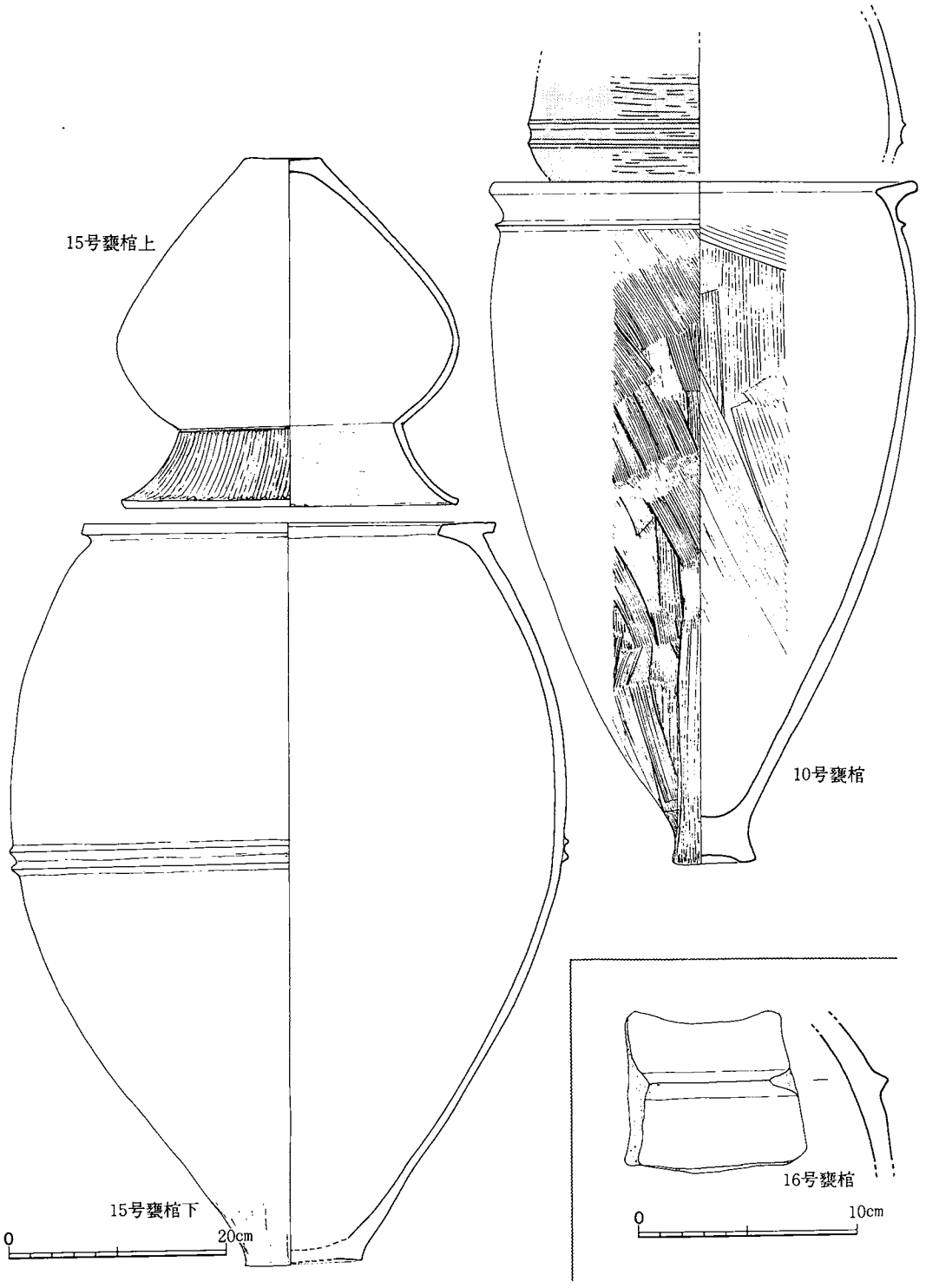
4号棺はC－3区で発見され、土壙の切合いから、後刻1号木棺墓との重なりが明らかになっ




第82図　第四調査区14・15号甕棺出土状態



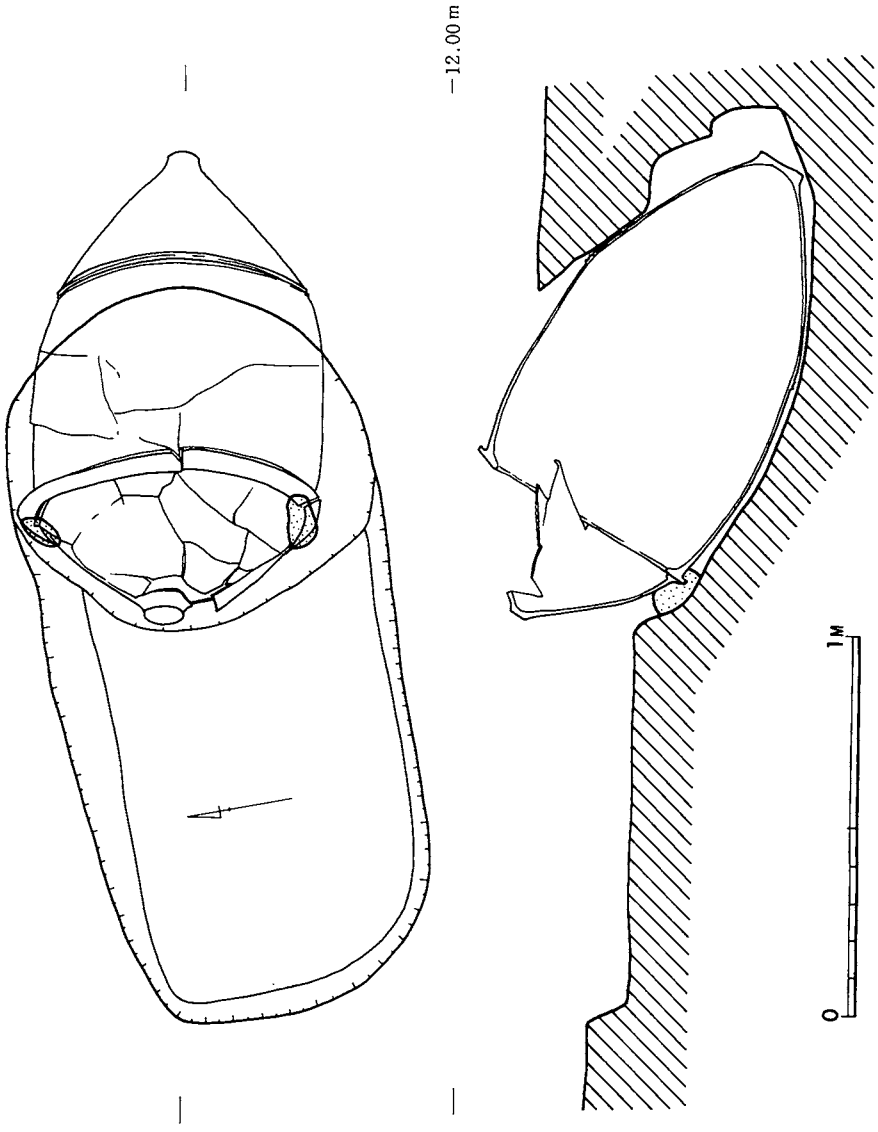

第83図　第四調査区14号甕棺



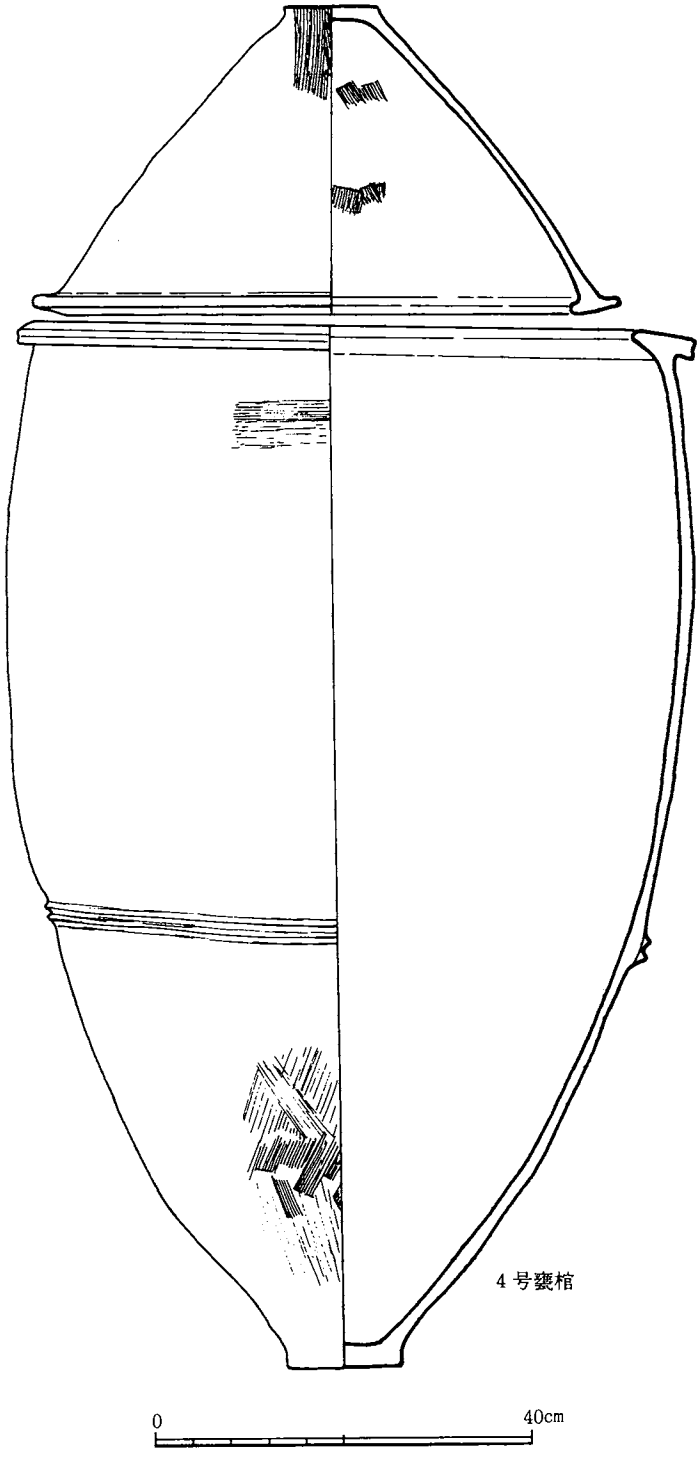

第84図　第四調査区10・15・16号甕棺他

た。この甕棺も予め、１m90cm×90cm位の隅丸長方形の土壙を掘ったうえで、更に一部を掘下げ西向きに下甕を埋置し、上甕を蓋した後接合部を粘土で目張りしていた。この甕棺の上甕の方向はN－79°－Wで、埋設角度は約43°であった。

４号棺は上甕に鉢形土器、下甕に甕形土器を使用した合口棺であった。上甕の口縁はT字形をなし、口縁下に突帯がないことが、むしろこの鉢の特徴である。器面は粗い刷毛目調整のあと大部分がなでにより消しており、底部近くに11本単位の条痕を残している。底は厚さ約2.5cmの平底、器体の厚さは２cm前後である。底径10.5cm、口径51.8cm、高さ32.2cmの赤焼きの土器である。




**第85図　第四調査区４号甕棺出土状態**




第86図　第四調査区 4 号甕棺

下甕はT字形口縁、胴部に二条の突帯があることは他の大甕と似ているが、貼付け突帯の部位が器高の1/2より底近くに下りている特徴がある。器面は他の甕と同様刷毛目調整の後なでにより消している。この甕の底は平底、厚さ2.7cm、径12.4cm。口径59.2cmの赤焼きの土器である。

**6号甕棺**（第87・88図）

6号甕棺はC－2区より発見された小形の合口棺で、西側に溝4が、東側に16号棺があった。この棺はほぼ水平に埋められており埋葬角度から上下の関係は明らかでなかった。しかし、第二調査区の事例からして口縁部を欠ぎ壺を上甕としているものとみられる。上甕はS－60°－Wの方向をむいていた。また他の甕棺も含めて、小形甕棺の場合、掘込みが浅いため大型棺にみられるような土壙の掘込みははっきりしなかった。6号棺の場合上、下の合口棺のほかに、上甕の上に壺の口縁の破片数片がのっていた。これは6号棺発見の状況からして、後から混入と見ることは困難で、埋葬時そのままの状態とみることが出来る。上甕は肩部に数条の突帯をもつ壺形土器で、胴部には二条単位の刻目をもった2組の突帯がめぐっている。この突帯は最大胴腹部に位置し、一番上の突帯のつまみ出しがとくに大きい。頸部とこの突帯の間には上下方向に8条の突帯があり、また上・下の横方向の突帯の間には二条単位にして8組の突帯がある。またこの突帯は、上位の縦方向の突帯の直下にくるように配置されている。上甕の頸より上は欠ぎ取られ、その破片は発見出来なかった。底径72.9cm、最大胴径38.3cm、現高40.6cm、薄手に出来たこの壺は器面がよく磨研され、文様、器形からこれまで出土している黒髪式の壺に一脈通じるものがある。

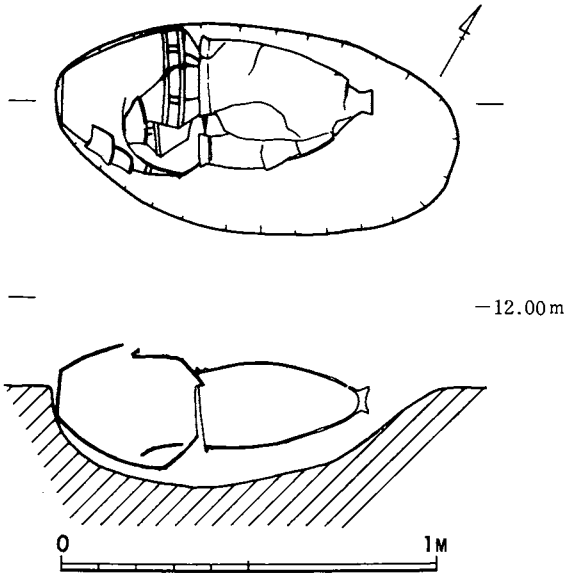
下甕は本遺跡出土の他の小形甕棺と共通している。口縁断面が平坦で口縁下に一条の突帯がつく。胴部のふくらみは全体高の上位にあり、底部に至って急に細くなっている。底にはあげ底の脚台があって、いく分外に開く。器面はあらくたて方向に均らされ、底径6.8cm、口径28.8cm、高さ44.6cm。

さきに述べたように、6号棺には上・下棺の他に壺口縁が別にあった。これは、壺の口縁2/3ばかりの破片で、堅緻に焼きしめられている。口縁は複合口縁の上面は平坦で、そこには沈線による斜格子目の文様があり、口縁端末には刻み目を付すことによりこの土器を特徴づけている。また内外面ともたて方向に暗文風の研磨痕が数cm間隔にあるのが観察される。

この壺口縁は、6号棺の上甕と接合を試みたが、全く別個体であることが確認された。しかし胎土、焼成、大きさ等が極めて類似した壺が第二調査区から出土している。出土した合口棺（第36図）を形成する上棺の壺がそれで、再三にわたって接合を試みたが、打欠いだのちの再調整のせいか不首尾に終った。恐らく、同一個体とみて差支えないのではなかろうか。

**16号甕棺**（第89・84図）

16号棺は6号棺と並んで発見されたが、甕棺自体の残りは悪く、一部の甕の破片と掘込みを




第87図　第四調査区６号甕棺出土状態

発見したに過ぎなかった。したがってここでは棺埋葬方向その他も不明で、憶測をたくましくすれば14号、15号棺の例のように同一方向に並べて埋められたことが考えられる。

16号棺として検出したのは、胴部に一条の突帯をもつ土器で、甕とすれば15号棺にみる様な口縁の窄まった中形の甕が考えられる。

**７号甕棺**（第90・91図）

７号棺はＡ－２区の東端、ブロック塀に接して発見された。この甕棺は上甕のほとんどと、下甕の上半はすでに土木工事のため失っていた。調査の結果、上甕をＮ－70°－Ｅに向けた合口棺であることが判明した。また埋葬角度は約24°であった。この甕棺について付言すれば、棺の北約７ｍの屋敷の隅に小祠がある。昭和26年３月12日牛島家建之とあるところから、この地を所有していた牛島氏が工事中にこの甕棺を発見、中より人骨の遺存しているのを知り、祠を設け奉祀したものとみられる。

７号棺の上甕は鉢形土器を使用していた。Ｔ字形口縁の上甕には４号棺上甕と同じく突帯がない。底の一部も発見されており、底径12.2cmの平底で、口径55.5cm、推定高約38cmの赤焼きの土器。

下甕は口縁平坦面が内傾し、内側にまるくふくらむなど他の大型棺と違った特徴をもっている。胴部の突帯は中ほどのところに二条の貼付突帯があり、底は平底で3.0cmと厚い。底径13.6cm、口径60.8cm、高さ112.8cmの赤焼きの土器である。

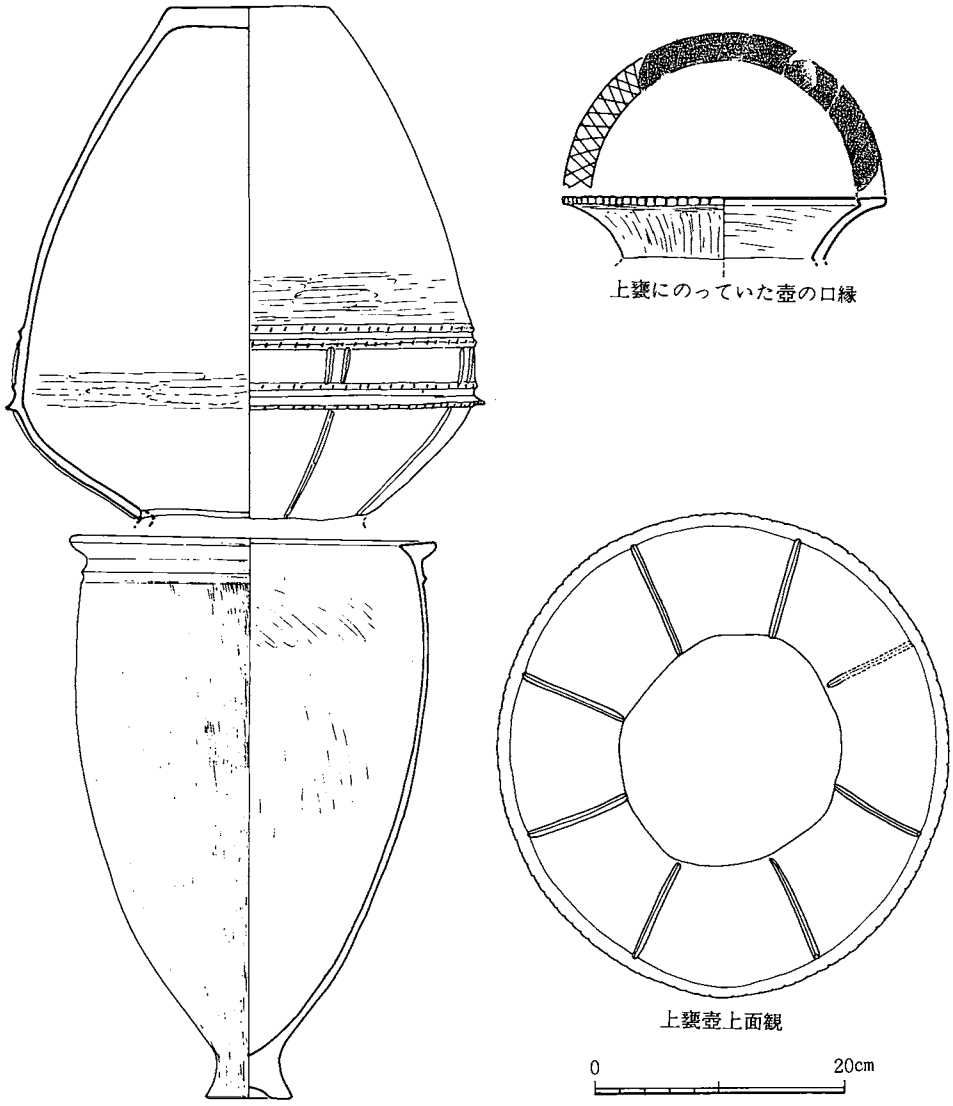
**８号甕棺**（第92・93図）

８号棺はＣ－３区の溝５の肩にのった形で発見された。ここで発見されたのは小形の壺で、

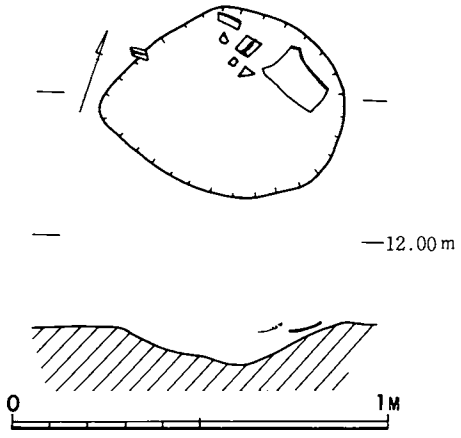
N－46°－Eの方向を向き、約25°の角度で埋没していた。この6号棺とみれる壺は、底径19.5cmの平底で、ほぼ中位に最大胴腹21.8cmがきて頚部はしまり、一見「く」の字形の口縁は外反する。口縁上端は平坦面をつくり、しゃくれ気味である。口径19.2cm、高さ23.1cmの黄褐色をした軟い焼成の壺である。

8号棺の横から93図に図示した頚を損じた壺一個が発見されている。内面が剝落しているところから、これ自体甕棺である可能性がある。

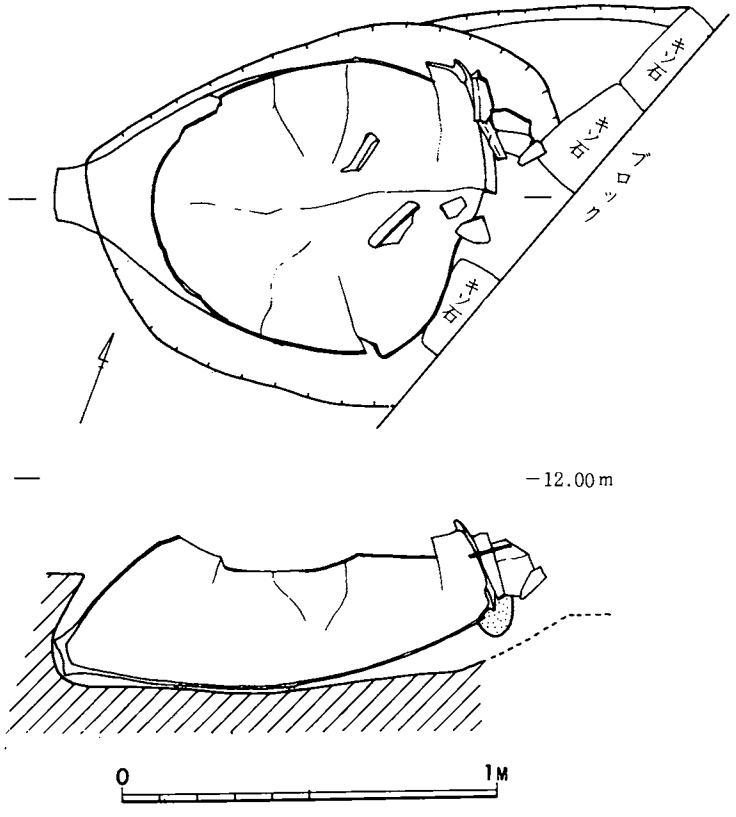
この壺は頚部に突帯一条があり、肩部と最大胴径のあたりに二条単位のつまみ出しの突帯がある。暗褐色の器面は磨研され、一部に丹の痕跡がある。底径7.1cm、最大胴径36.6cm、現高28.8



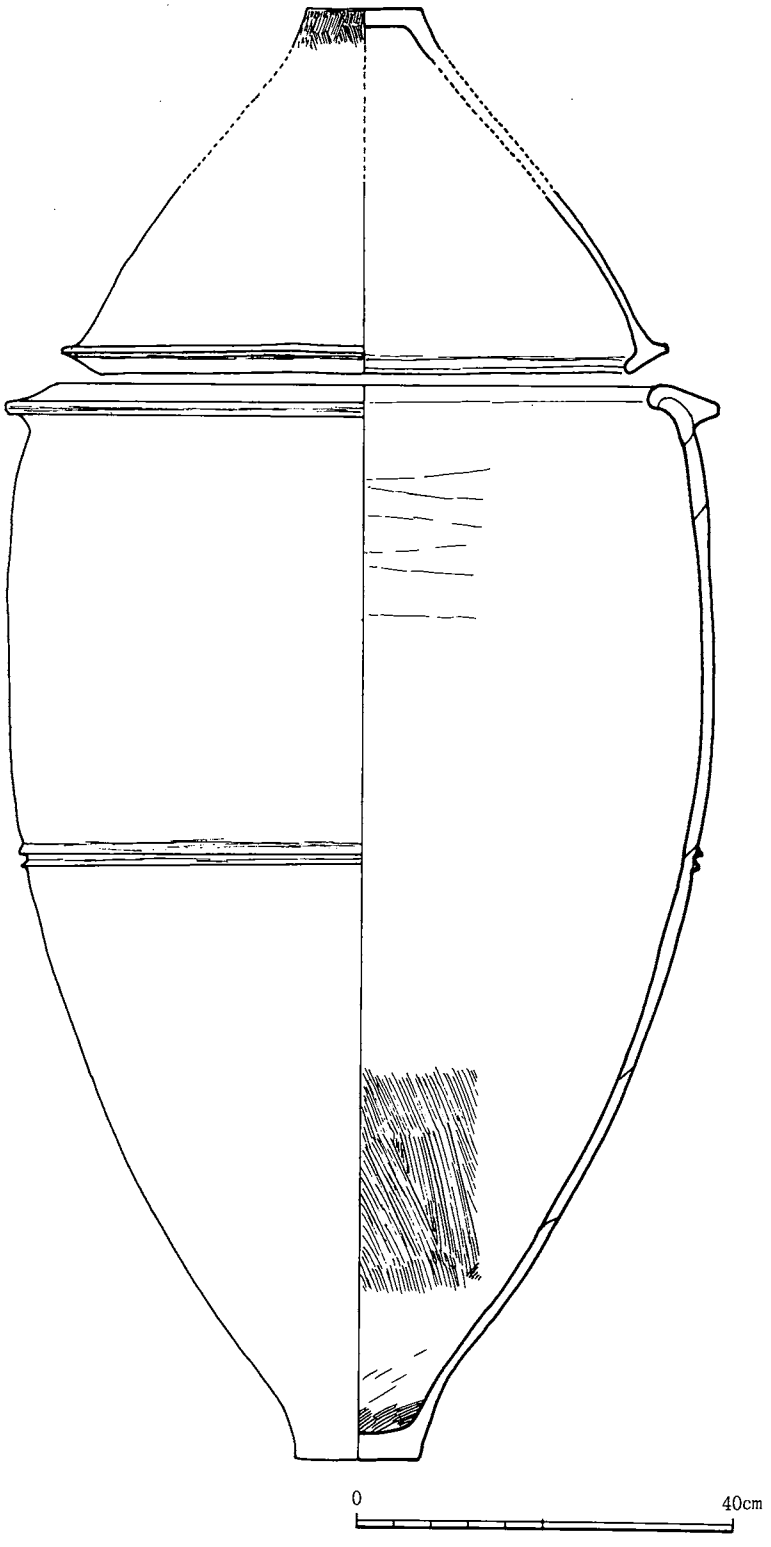

**第88図　第四調査区6号甕棺と上甕にのっていた壺の口縁**




第89図　第四調査区16号甕棺出土状態




第90図　第四調査区 7 号甕棺出土状態




第91図　第四調査区７号甕棺

cmである。

**9号甕棺**（第94・95図）

9号棺はA－3区溝1の近くから単独で発見された。この甕棺もまず140cm×150cm位の隅丸方向の土壙を掘り、土壙の一側を斜めに掘下げて甕棺を埋納していた。甕棺の埋納方位はN－79°－Eで、角度は約32°であった。この9号棺の保存はよく、上・下甕の間の目張り粘土もしっかりしていて、仰臥屈葬の形で葬られた人骨の遺存も極めて良かった。しかし、中に副葬品はなかった。

9号棺は上甕に鉢形土器を用いた合口棺で、上甕はT字形口縁、そして口縁下に一条の貼付け突帯がある。底は平底であるが、周りが揚げ底風に高くなっている。赤焼きの焼成良好のこの鉢は、底径13.8cm、口径48.8cm、高さ38.8cmである。

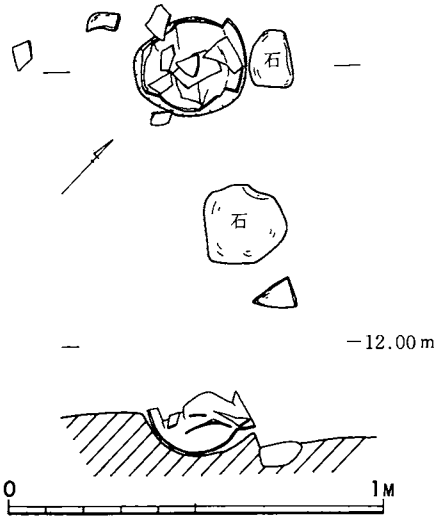
下甕は断面T字形口縁の一種とみられるが、内面に突き出す部分がまる味を帯びるのは7号棺と共通している。器高の1/2あたりに二条の貼付け突帯がつき底部は平底である。また製作手法を示す粘土の輪積みは、14～5cmの幅で接合部が観察される。この赤焼きの甕の底径13.4cm、口径49.5cm、高さ115.8cmである。

**10号甕棺**（第96・84図）

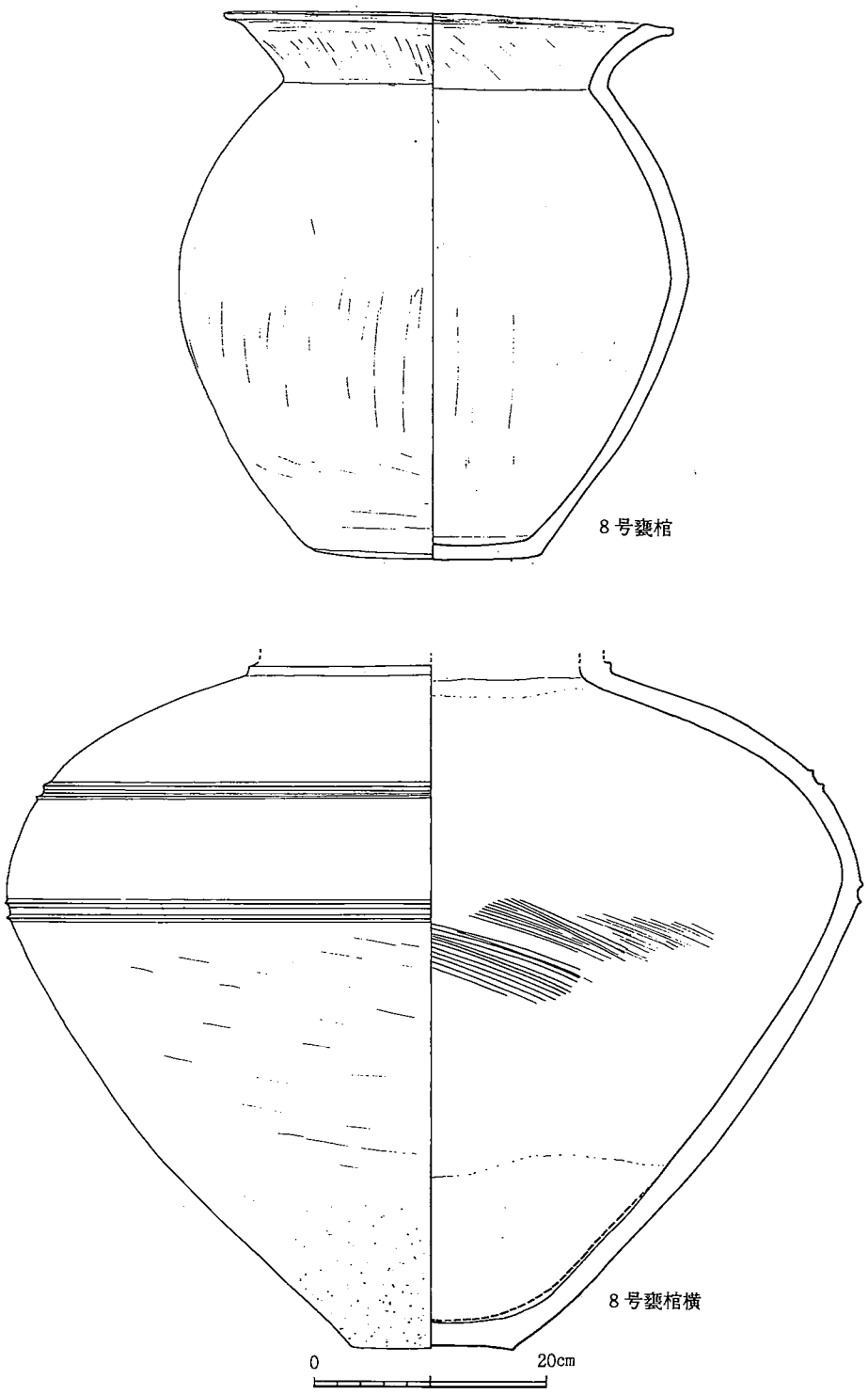
10号棺はA－3区の道路に臨んだところから発見されたが、上甕の大部分は破壊されていた。この小形甕棺も、合口の部位に粘土の目張りが一部残っており、N－81°－Eの方向を向け、約28°の傾斜をもって埋納されていた。

10号棺の上甕は壺の口縁を欠ぎ取り蓋として使用していた。この壺には肩に二条の突帯があり、器面は磨研のうえ丹彩りを施していた。壺の残欠から平底で倒卵形の器体が考えられる。

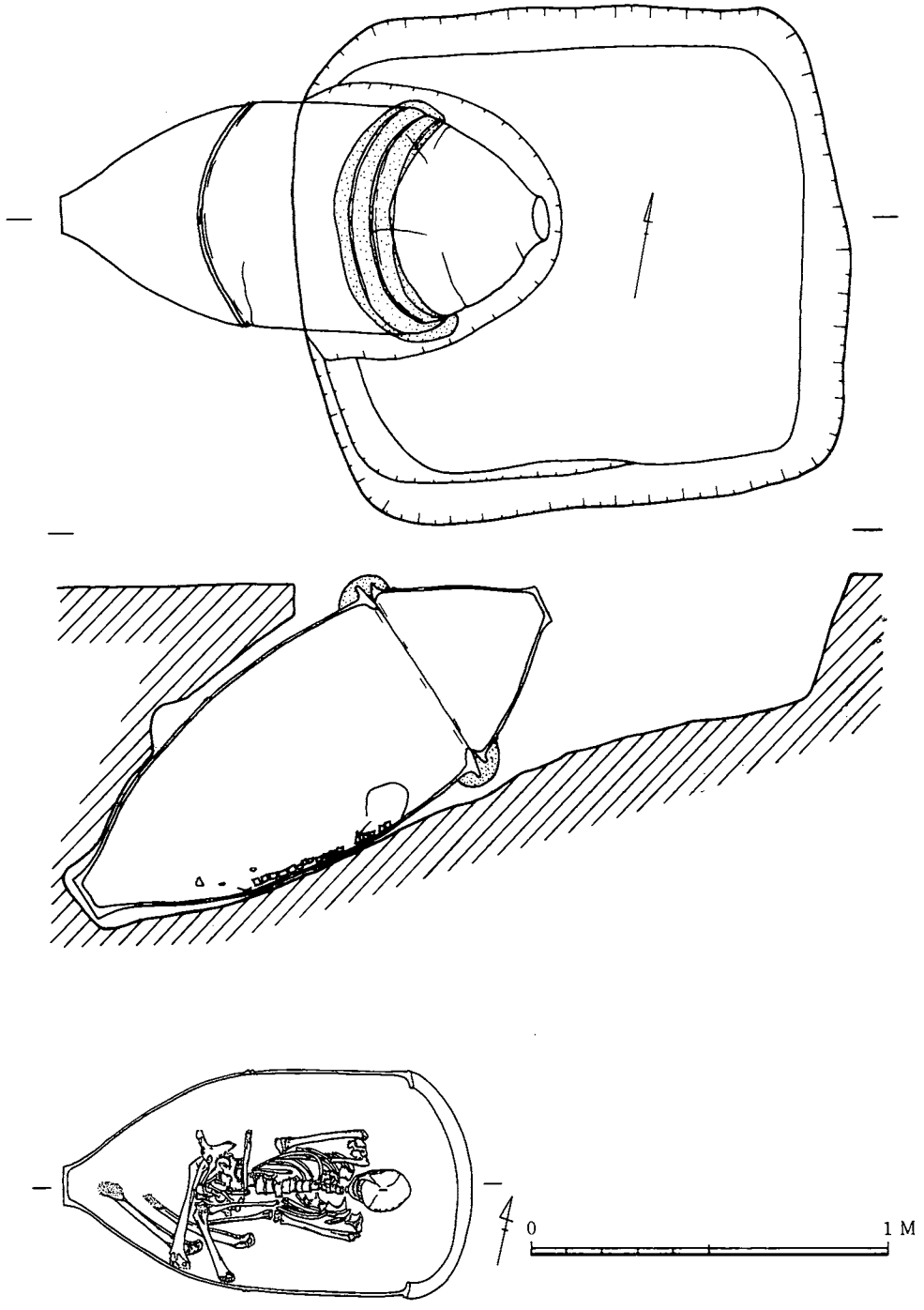
下甕は口縁上端が平坦面をつくり、口縁下に突帯一条をもっており、底はわずかに揚げ底と



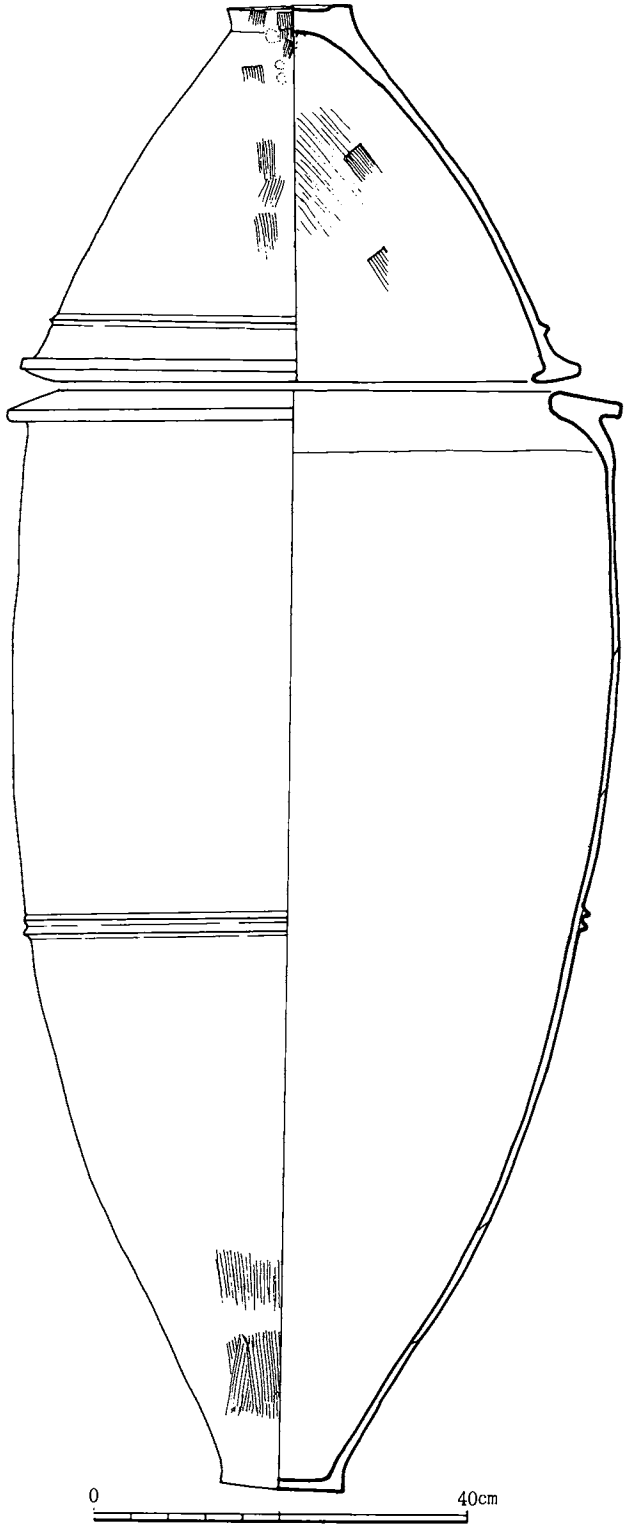

**第92図　第四調査区8号甕棺出土状態**




第93図　第四調査区 8 号甕棺




第94図　第四調査区 9 号甕棺と人骨出土状態

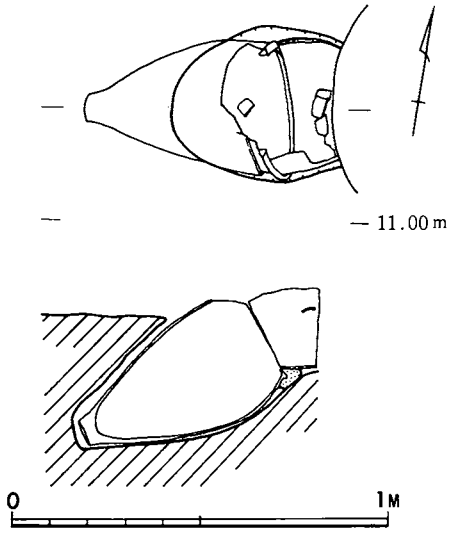



第95図　第四調査区 9 号甕棺

なっている。器面は粗い刷毛目の斜方向の調整痕があり、底内面及び口縁部はなでによる仕上げである。また甕は全体が歪んでいて、胴部には煤が付着している。底径7.7cm、口径32.2cm、高さ62.6cmである。

**11号甕棺**（第97、98図）

11号棺はC－3区の4号棺の西側から発見された大形甕棺である。この甕棺ははじめに、220




**第96図　第四調査区10号甕棺出土状態**

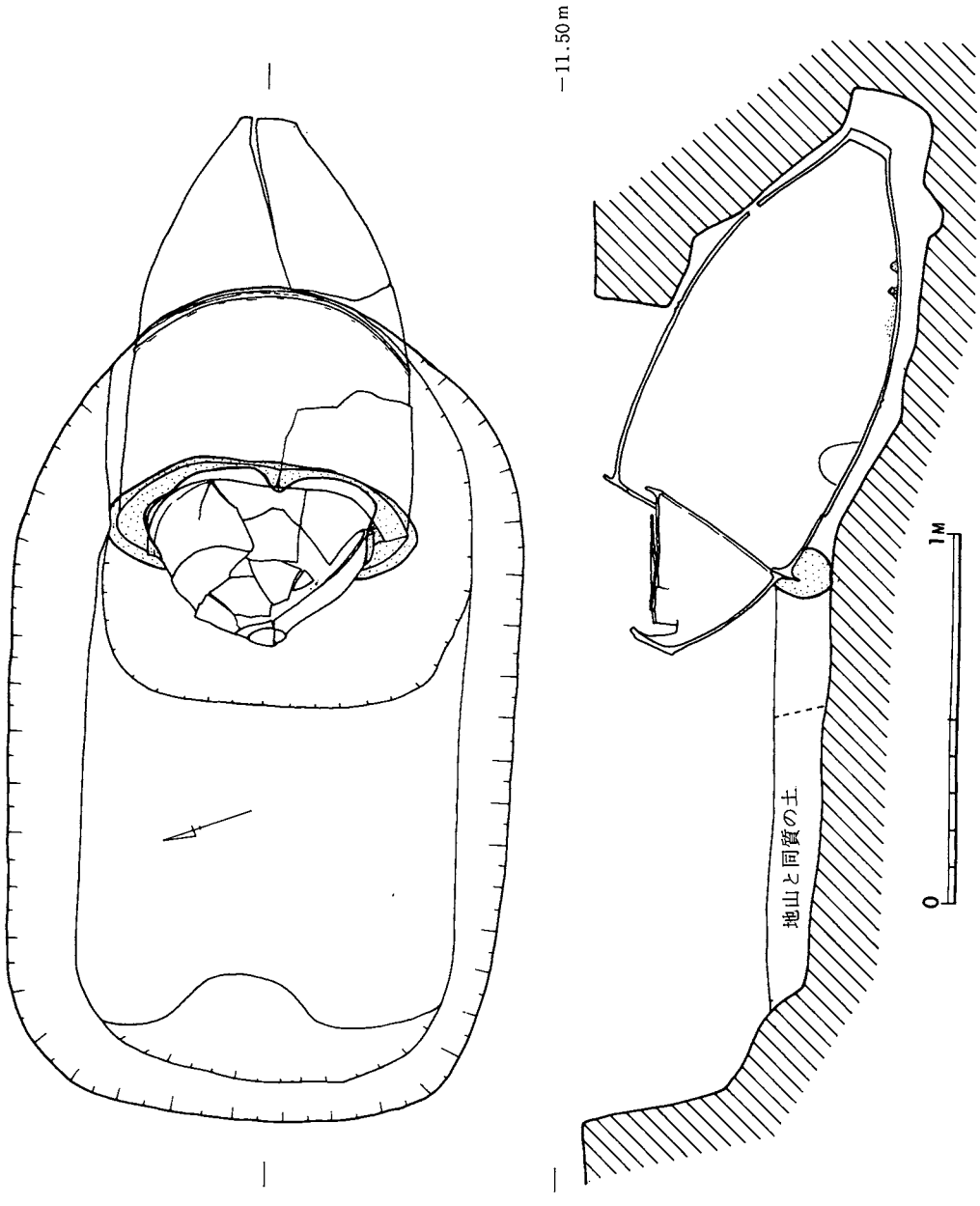
cm×140cmの隅丸長方形の土壙が掘られ、東側の壁を斜めに掘下げて下甕を埋納し、上甕を覆っての後粘土の目張りがされていた。この甕棺は土圧により破損していたが、中の人骨は頭骨と四肢骨が残っていた。甕の埋納方向はN－72°－W、角度は29°を測った。

11号棺の上棺は鉢形で、断面T字形の口縁をしていて、底部近くに器面調整の粗い刷毛目を残している。仕上げは大部分なでによる仕上げで、器面の色調は黄褐色をしている。底部は平底であるが、いく分揚げ底気味となり、中央部が厚い。底径13.6cm、口径49.6cm、高さ32.1cmである。

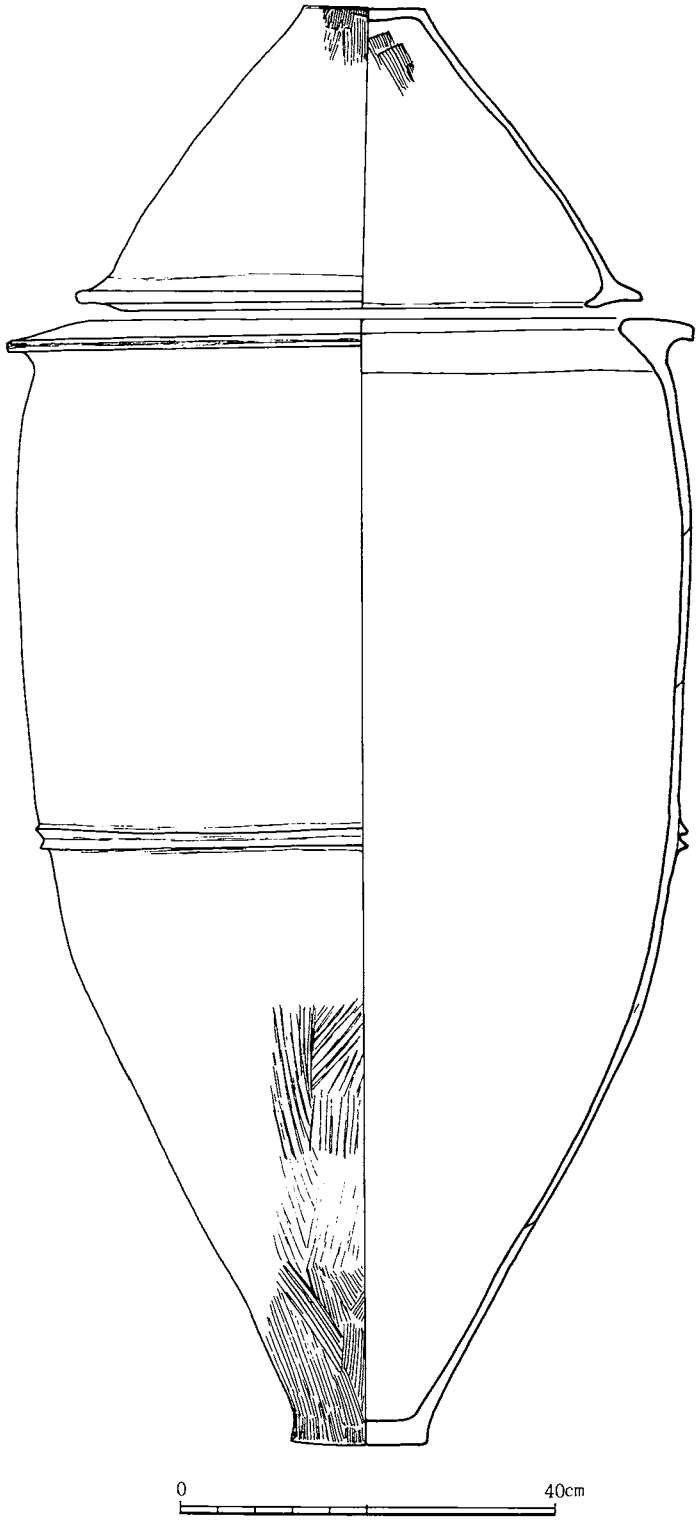
下甕の器形は、7、9号甕棺の下甕に近く、口縁上面の平坦面は斜に傾き、内側にまる味をもって突き出している。この口縁下の接合部が厚いのはこの甕の特徴となっていて、器高の1/2位のところに二条の貼付け突帯がくる。器面調整痕は粗い刷毛目が器体の下部にのこるが、全面的になでによる仕上げがなされている。底は平底で径14.6cm、口径57.0cm、高さ118.0cmの赤焼きの土器であるが、器面の一部に煤が付着している。

(5)　第四調査区遺構以外の発見遺物（第99～103図）

第四調査区の覆土中及び排土中から多数の弥生式土器が出土している。第99～103図の注記




第97図　第四調査区11号甕棺出土状態




第98図　第四調査区11号甕棺

したもの以外の土器がそれで、この中には元々甕棺として使用され、それがのち破壊散乱したと考えられるものもあるが、ここに一括して取上げることにする。

**甕形土器**　口縁部と底部を図示したが、2・4・7・10・11・13・15～17・23～25・27・31のように口縁断面の上面が平坦もしくはいく分ふくらみのあるものがあり、19・20のようにいく分上面がしゃくれたのがある。30は中形の胴張りのある甕棺の破片とみられるものである。

34・35・37・38・43・45・46・50はいずれも甕形土器の底部で、いずれも脚台を付している。一般的傾向として時代が下がるにつれ、脚が開くものとみられる。そして器面調整の手法として、刷毛目の条痕が繊細になるのも特徴の一つといえる。また口縁下に沈線一条をもつ17と突帯一条をもつ事例があるが、これを欠ぐものが多い。45の甕は器形のうえから何の変哲もない脚台であるが、内面及び脚台の内側に丹彩を施しており、事例的に珍らしい。40は甕というより深鉢に近く、器面は磨研により平滑に仕上げられている。類型的なものとして41・42があげられるが、これらは平底になるものとみられる。

**壺形土器**　53～59は複合口縁をもつ壺で、ここに一つの類型がみられる。頸部外面にはたて方向の暗文があり、58には胴部に刻み目をもつ突帯があることから、63～65もこの種の壺とみることが出来る。67は「く」の字形口縁と俗称される壺で、突帯一条が頸部にあり、ここにあげた資料の中では新らしい様相とみることが出来る。68は胴部に僅かながら稜線があり、沈線のうえに刻み目を付しているところから、重弧文土器の一つとみることが出来る。事例として、すでに神水遺跡から重弧文を描いて長頸壺も出土している。71はC－1区覆土中より出土した完好な壺で、長くのびた頸の外面には暗文がある。胴部には二条の突帯があるが、シャープさを欠いている。この壺は精整磨研のうえ、丹彩を施しているが、丹はまだらになり全面に及んでいない。

**高坏形土器**　69は高坏の破片で、坏と脚の一部を失っている。

## 2．歴史時代の遺構と遺物

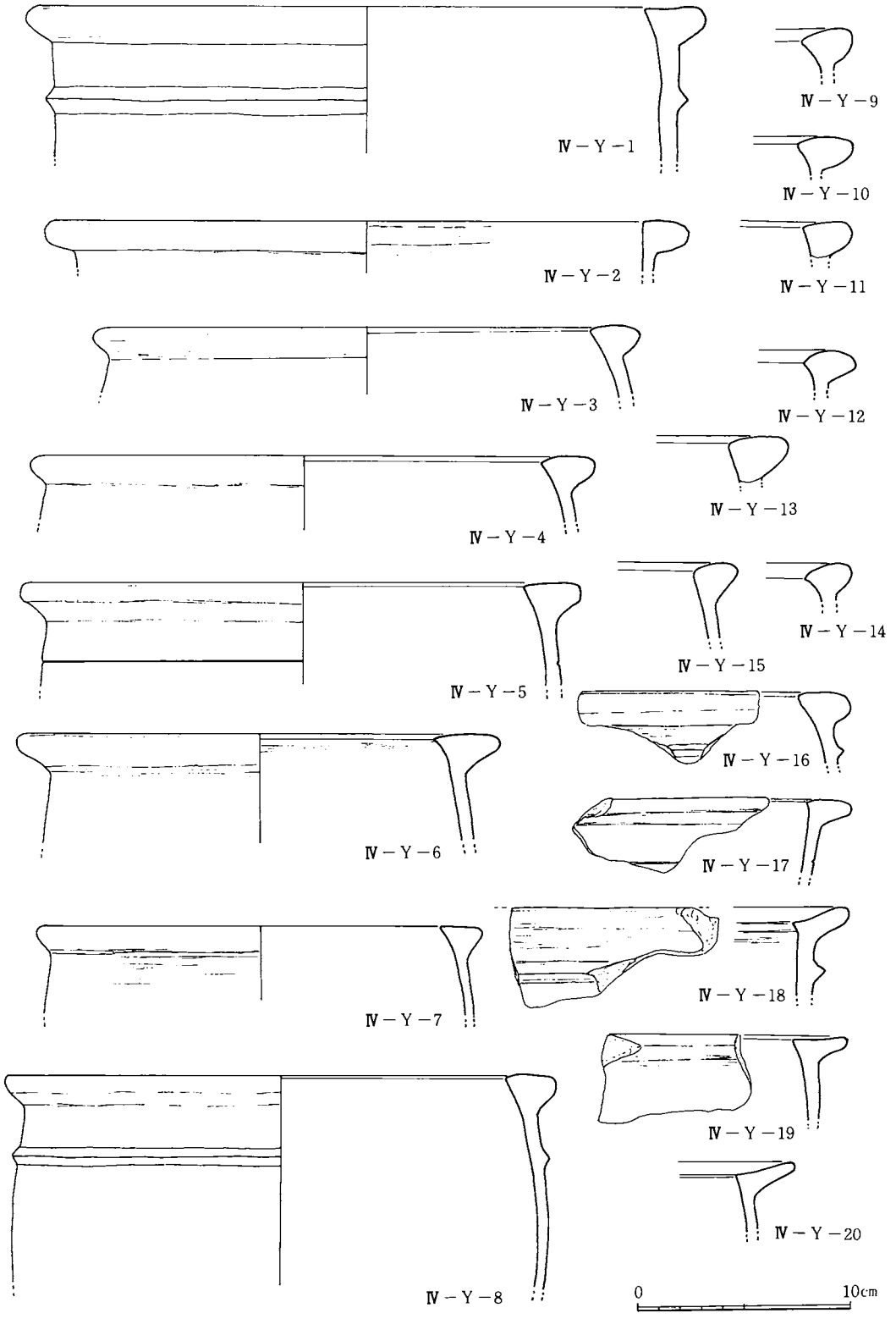
第四調査区から発見された歴史時代の遺構として道路遺構、溝及び土壙がある。これらの各遺構及び遺物について、遂次説明したい。

### (1)　道路遺構（第104図）

幅40～50cmの硬化面をもつ遺構5条が第四調査区排土の段階で発見された。一定の硬化面の幅をもつ直線的に延びているところから道路と考え、これを道路遺構として処理した。

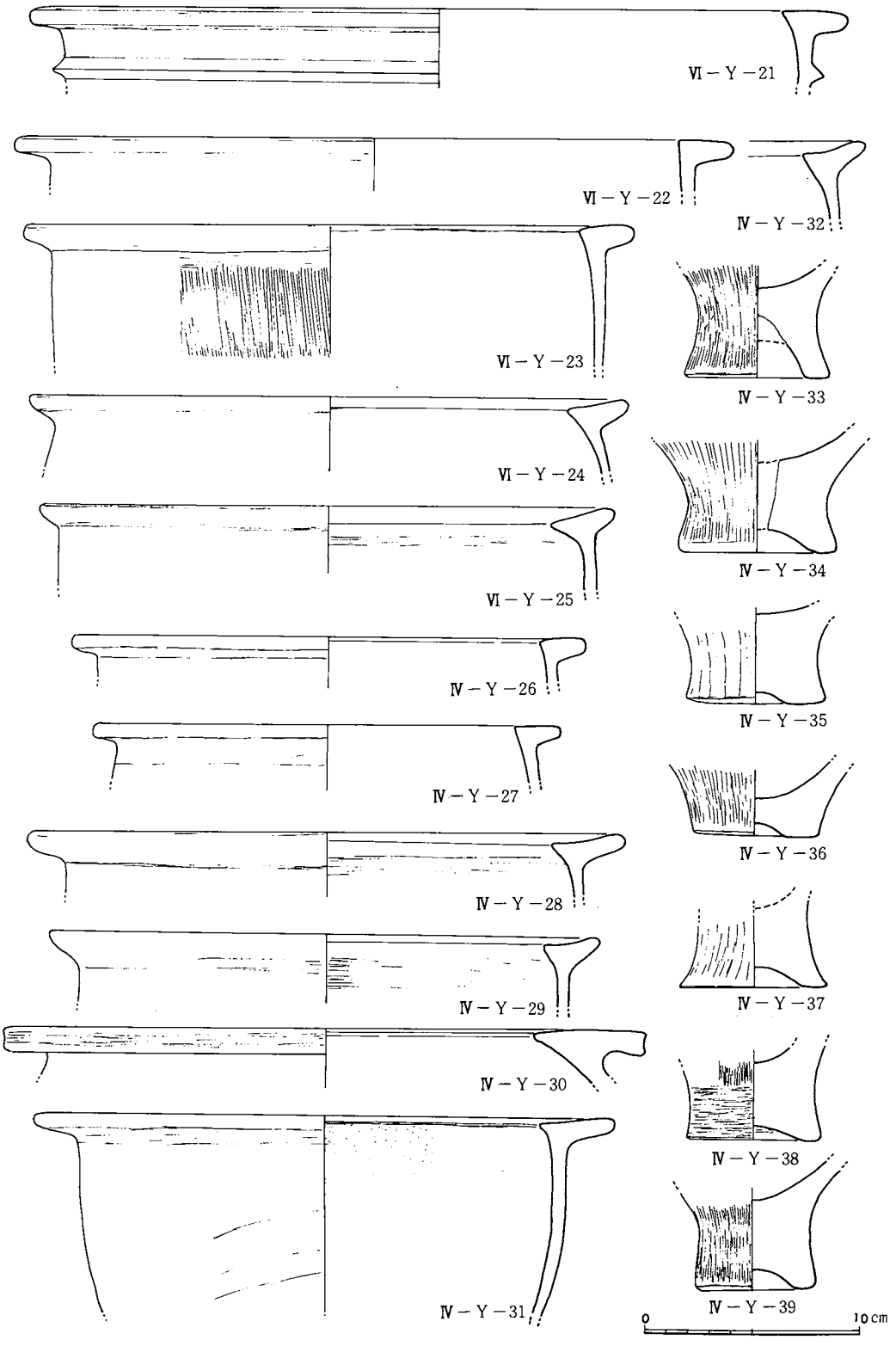
道1は他の4条の道と延長方向を異にし、A－2区の東即ち、第三調査の方から道2、3と交叉する形をとっている。検出した硬化面の幅は40～50cm、長さが約5m確認された。路面はほぼ平坦で、東端で標高11.65m、西端で、11.93mといく分西の方が高い。この道路遺構の下から7号甕棺が、その後発見されている。

道2はB－3区からA－3区を横切りA－2区から更にA－1区へ抜けるものとみられるが



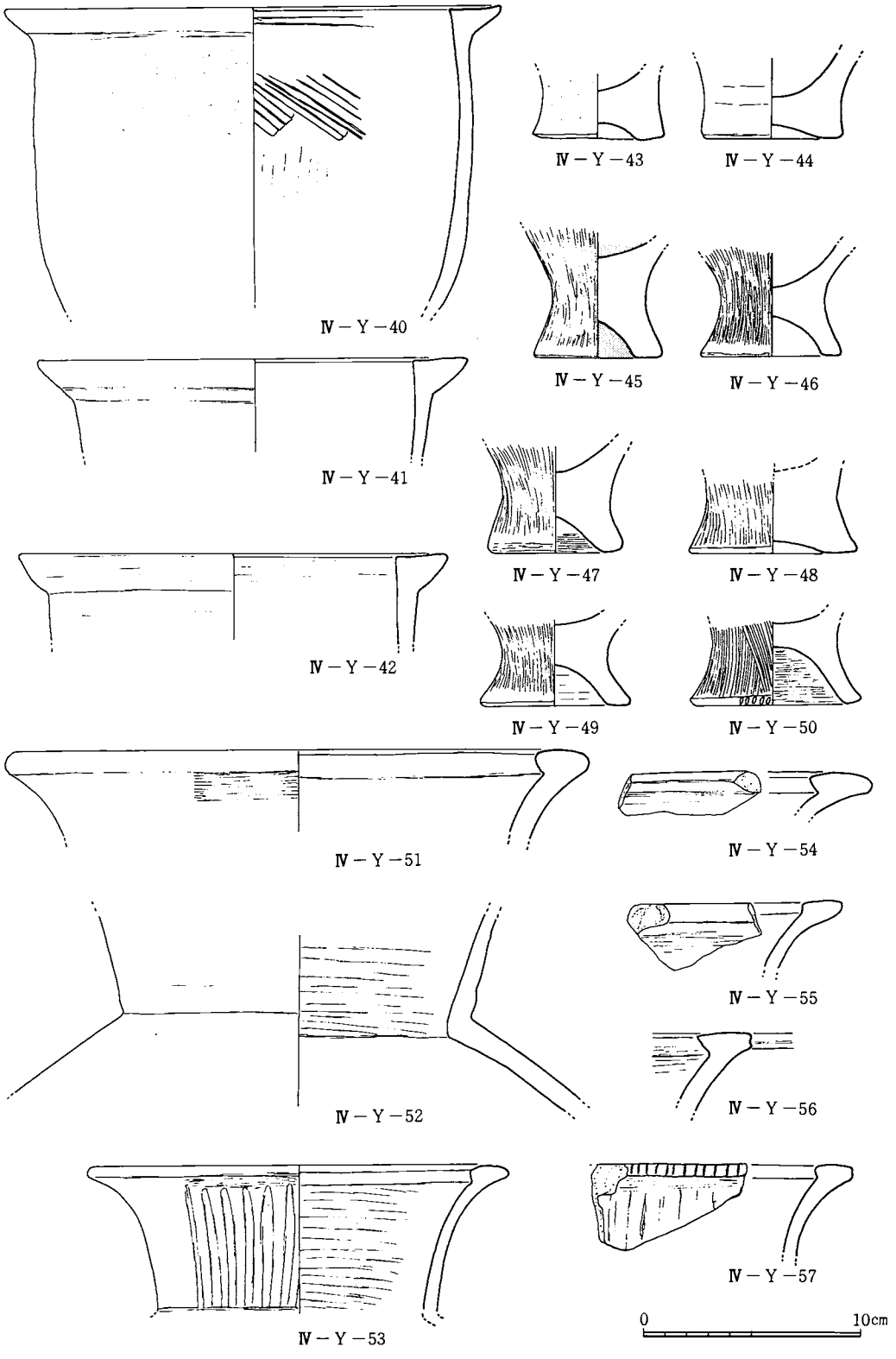

**第99図　第四調査区弥生式土器 1**

1号木棺　9, 12, 14, 18
溝5周辺　1, 3, 5, 6, 8
17号土坑周辺

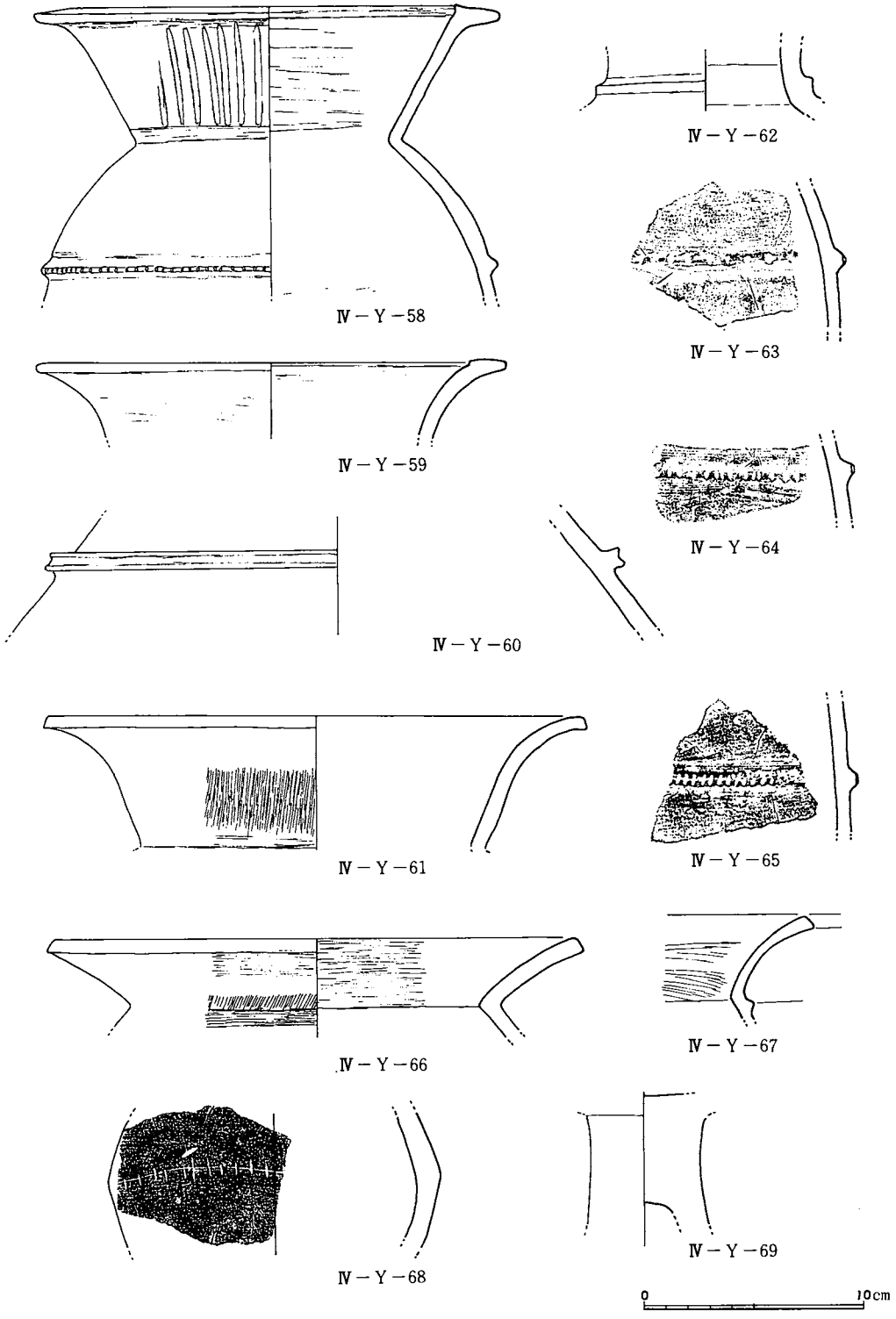



**第100図　第四調査区弥生式土器 2**

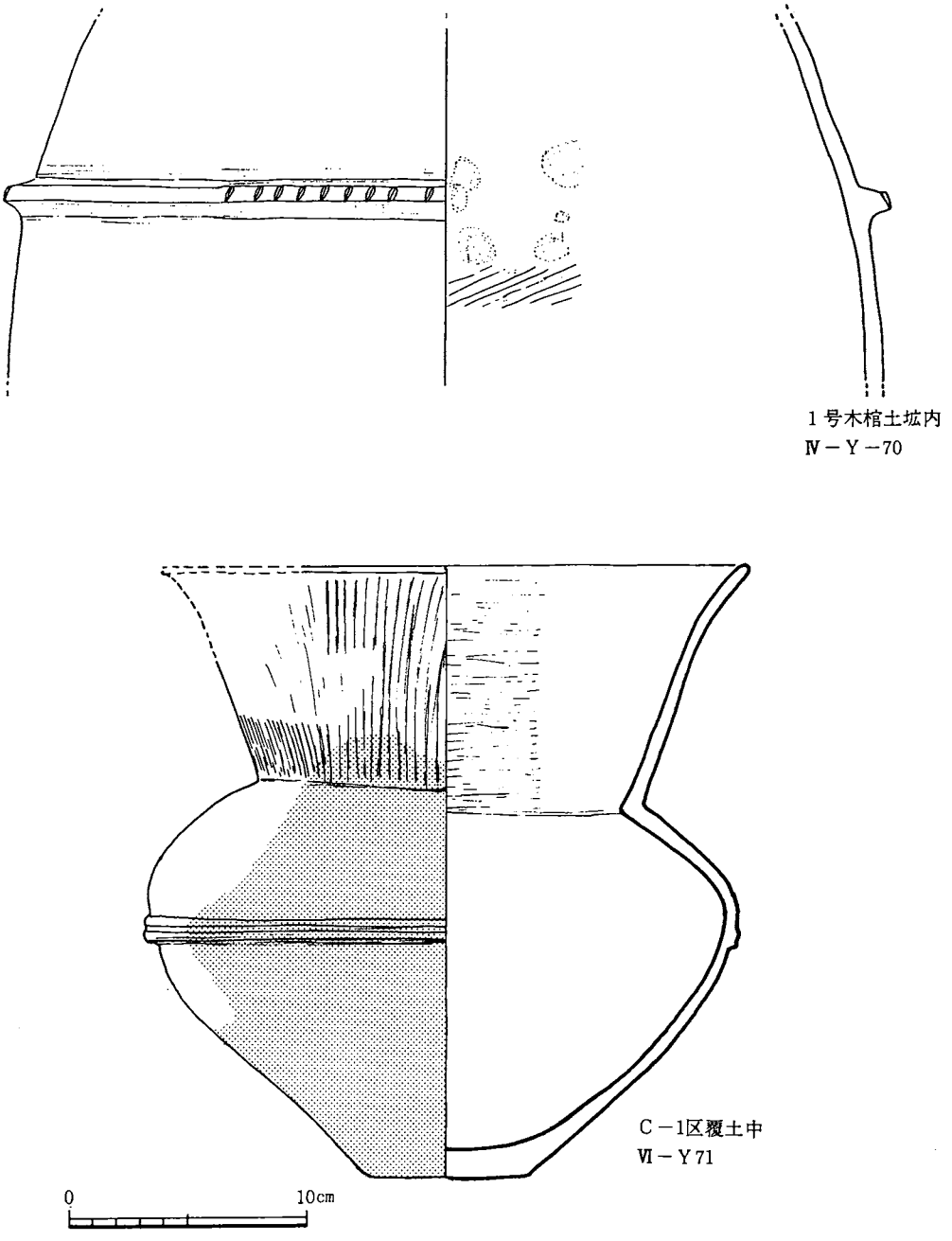
溝 5 周辺　21, 22, 26
29, 36, 39
17号土坑周辺焼土　32, 33, 28




**第101図　第四調査区弥生式土器 3**　溝 5 周辺41, 42, 44, 47～49　51, 52




**第102図　第四調査区弥生式土器 4**　溝 5 周辺　60, 62, 66




第103図　第四調査区弥生式土器 5

## 表1．弥生甕棺墓一覧

| 甕棺番号 | 種別 | 埋納 方位 | 埋納 角度 | 上甕 器種 | 上甕 口径 | 上甕 器高 | 下甕 器種 | 下甕 口径 | 下甕 器高 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | cm | 現高cm | | cm | cm | |
| 第二調査区 | 合口 | N-30°-E | 32° | 壺 | —— | 14.8 | 壺 | 25.5 | 45.7 | |
| 第四調査区 1 | 合口か | N-60°-N | 35° | — | —— | —— | — | —— | —— | |
| 2 | 〃 | S-84°-W | 42° | — | —— | —— | 甕 | 38.0 | —— | |
| 3 | 〃 | S-52°-E | 42° | 甕 | —— | —— | 甕 | —— | —— | |
| 4 | 合口 | N-79°-W | 43° | 鉢 | 51.8 | 32.2 | 甕 | 59.2 | | |
| 5 | 〃 | N-76°-W | 4° | 甕 | 40.0 | 64.0 | 甕 | 38.6 | 60.0 | |
| 6 | 〃 | S-60°-W | 0° | 壺 | —— | 40.6 | 甕 | 28.8 | 44.6 | |
| 7 | 不明 | N-70°-E | 24° | 鉢 | 55.5 | 38.0 | 甕 | 60.8 | 112.8 | |
| 8 | 合口 | N-46°-E | 25° | — | —— | —— | 壺 | 19.2 | 23.1 | |
| 9 | 〃 | N-79°-E | 32° | 鉢 | 48.8 | 38.8 | 甕 | 49.5 | 115.8 | 30代後半 女性 |
| 10 | 〃 | N-81°-E | 28° | 壺 | —— | —— | 甕 | 32.2 | 62.6 | |
| 11 | 〃 | N-72°-W | 29° | 鉢 | 49.6 | 32.1 | 甕 | 57.0 | 118.0 | 成人男性 |
| 12 | 単棺 | N-71°-W | 4° | 木蓋 | —— | —— | 甕 | 64.0 | 113.4 | |
| 13 | 合口 | N-53°-W | 31° | 鉢 | 51.6 | 42.5 | 甕 | 52.8 | 107.4 | 15～16歳 女性 |
| 14 | 〃 | S-76°-E | 35° | 鉢 | 55.5 | 40.2 | 甕 | 56.4 | 120.7 | 若い女性 |
| 15 | 〃 | S-62°-E | 17° | 壺 | 30.8 | 31.7 | 甕 | 27.8 | 68.0 | |
| 16 | — | —— | | | —— | | | —— | | |

北の方は消滅して未確認である。道1とA－2区の中で交叉するものとみられるが、ここでも道1の延長が途中で切れはっきりしない。

この道も硬化面の幅が40～50cmで直進し、約20mを確認することが出来た。硬化面上の標高は南端で11m75cm前後、A－2区では12m前後と余り高さに差がない。硬化面上に布目瓦破片なども検出されている。

道3は道2の西側に並行して延び、幅40～50cmの硬化面が15mにわたって検出されている。こちらは硬化面の高さが11m83cm～12m位である。この道3は土壙8、溝2及び1号甕棺の上にのっていた。

道4、道5はB－2区、B－3区に並行して走る道路遺構で、硬化面の状況も他と変りない。道4はゆるいカーブをもち、途中切れているが17m余りの延長を、道5は12m余りを検出した。この道路遺構も他の遺構も重復していて、道5の下に2号甕棺と土壙6があった。また硬化面の高さも他の道路遺構と殆んど変りなく南側で11m80cm、北側が12m余りである。

道1～5の道路遺構と同類の形状の遺構は第二調査区及び第三調査区でも確認されている。

道路遺構の周辺に近世遺物の発見はなく、布目瓦出土の例からして土壙との重複を考えても古代を下ることはなかろう。

(2) 溝　遺　構（第104図）

歴史時代の溝遺構とみられるものに溝1、溝2がある。発見順に番号を付したため、1、2としたが、実質的に同一溝の延長とみて差支えない。

この溝は、45～60cmの溝幅をもち、深さ10～15cmの浅いU字溝で、確認したのは17m余りで、A－3区からB－2区へかけてまるく弧をかいていた。この溝の中には布目瓦破片6片、土師器4片及び弥生式土器3片が発見されており、歴史時代の溝と見て差支えない。

(3) 土　壙（第104図）

第四調査区で発見された19の土壙のうち、3基の弥生時代土壙（15・17・18の各土壙）を除いて他は歴史時代のものとみられる。

ここで土壙としたものは、その果す機能、性格が必らずしも同じではないが、1号と3号及び7号土壙は土壙の形状から同種の機能をもつ土壙とみられる。また9号と16号は形状からして、第三調査区で発見された貯蔵穴と同種のものと考えられる。そのことを含みのうえで、以下各土壙について説明したい。

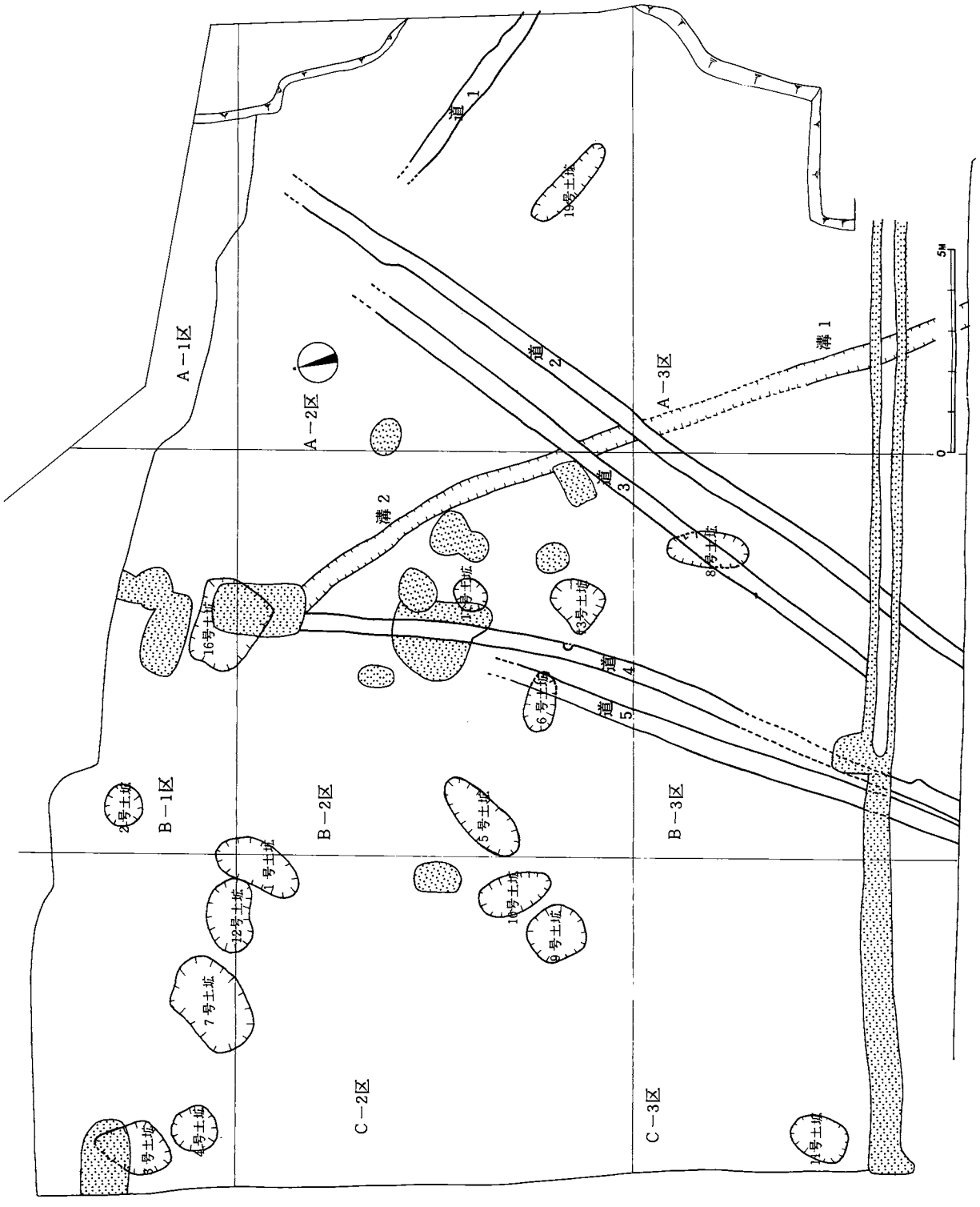
**1・3・7号土壙**（第105～107図）

1号土壙（第105図）はB－1、2区及びC－1、2区の交点附近で発見された最大長2.20m、幅1.10mのじん臓形をした土壙で、発見時全面に灰が詰まっており、この中に焼土が混在し、とくに中央部付近には焼土がかたまりをなしていた。この土壙は断面がレンズ状に浅く掘込まれていて、検出面からの深さは中央部で18cm位であった。土壙中には土器片のほか、布目瓦、礫が混入していた。土器には土師器、須恵器があり黒色土器も含まれていた。

3号土壙（第106図）はC－1区の西端から発見され、土壙の北側は現代の掘込みのため破壊されていた。

この土壙は不正長方形をしていて南北約160cm、東西約130cmを測る。土壙は急角度に掘込まれ、深さは確認面から約16cmであった。またこの土壙の特色として中央部の110cm×70cmの範囲に硬化面のあることで、しかもその中心に35cm×30cmの炉址状をした深さ5cmの皿状掘込みがあり、その中に灰がたまり木灰が残されていた。また土壙中には多数の布目瓦があり、それに数個の礫及び土師、須恵の破片もあった。

**7号土壙**（第107図）はC－1区にて発見された不正楕円形の土壙で、長軸の東西方向で約2m50cm、短軸の南北方向が約1m70cmである。土壙の掘込みは比較的急で、一番深いところで40cmを測る。土壙の中には径20cmばかりの礫2個のほかに多数の布目瓦、ついで土師器の椀及び須恵器の破片のほか鉄器1点があった。なお、この土壙中にも焼土が点在し、とくに中の掘凹んだところが焼けていた。さらに柱穴は土壙内外から検出されているが、土壙内の中央付近の



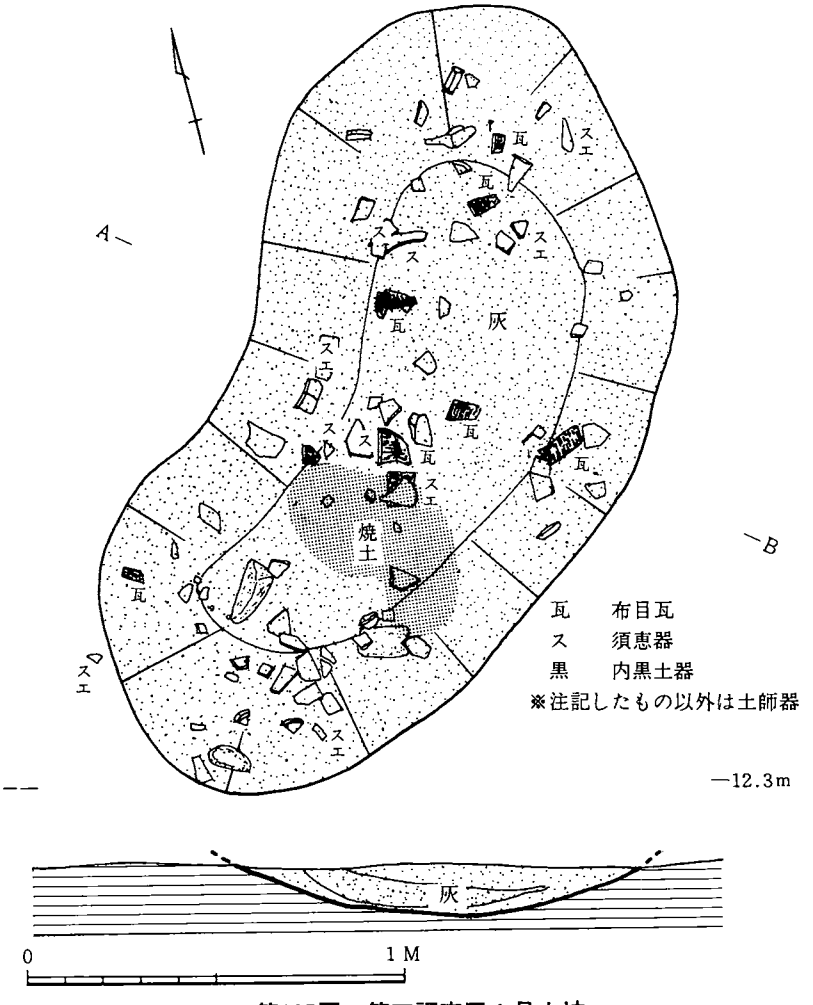

第104図　第四調査区歴史時代遺構

柱穴に灼けた平石が入っていた。

出土遺物としてすでに述べた様に、1号土壙中に布目瓦など多数出土したが図示にたえる物が少なく、土師器と黒色土器各1点を取上げた。第114図21と第115図黒4としたのがそれで、21は口径12cm鉢形土器で、底部に高台を付すものとみられる。口縁への立上がりは直線状であることも、椀というより鉢というように印象づける。

黒4は椀形をした内黒土器の破片で、土器中央部の焼土の横から出土した。体部はまるく、口縁部がわずかに外反する。内側は滑らかでくろく、そのくろい部分が口縁部の外に及んでいる。口径13.6cmを測る。なお鉄器については第64図34に図示した。断面四角の小鉄片である。

3号土壙内から多数の布目瓦が出土しており、その一部を図示した。布目瓦のうち第117～119図にあげた28・42～44・47がそれで、大形の破片が少なくない。これらはいずれも平瓦である

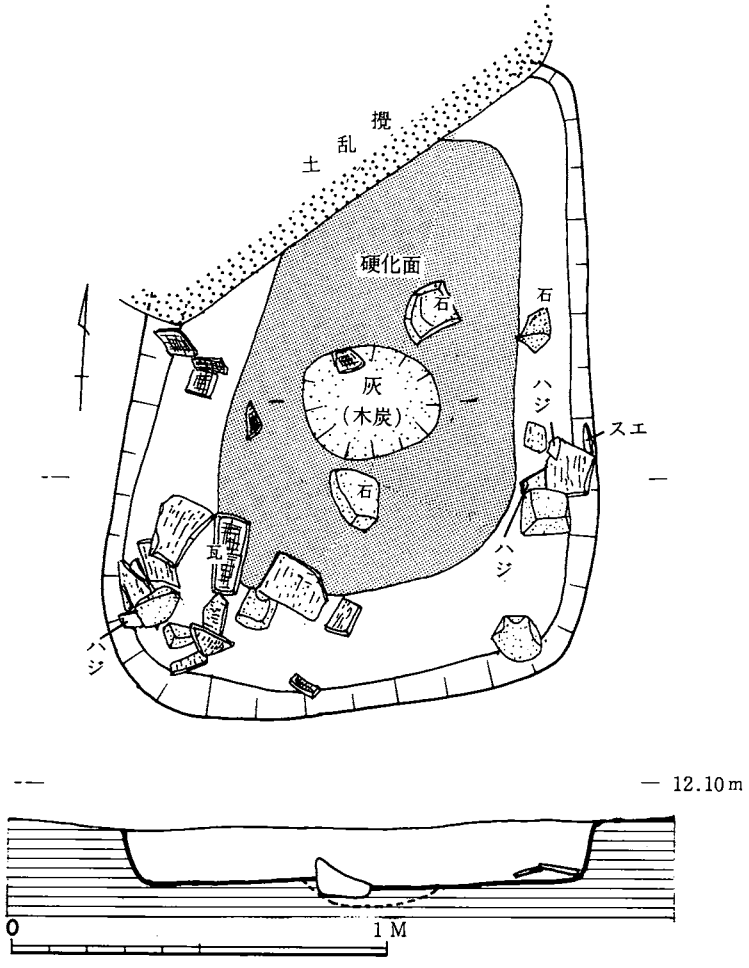



第105図　第四調査区1号土坑

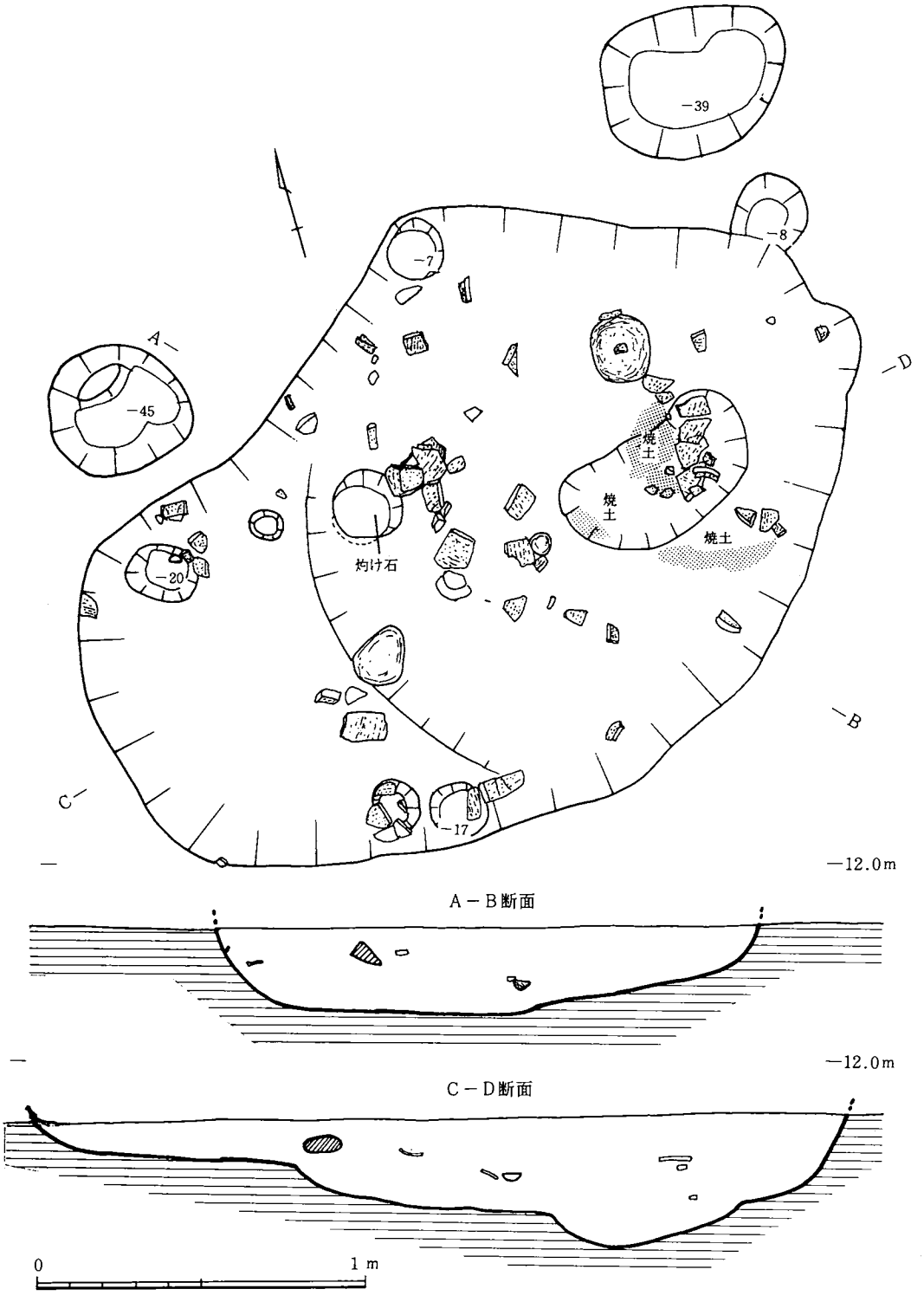
が丸瓦の破片も出土している。平瓦のうち、28のように厚さ4cmに達する厚手の瓦があるのが注目される。ここの瓦には縄目の叩打痕がある。第115図50は3号土壙中発見の土師器で、口径12.6cmの平底の鉢形土器とみられる。

7号土壙内から多数の遺物が出土した。第117、118図に図示した31・32・34・35及び38・40は布目瓦で、これらは40を除きいずれも平瓦である。ここでも厚手の瓦が多い。ここでは外側の叩打痕に縄目のもののほかに格子目（35）のものがある。さらに38には布目や叩打痕が認められず形状からして熨瓦かもしれない。

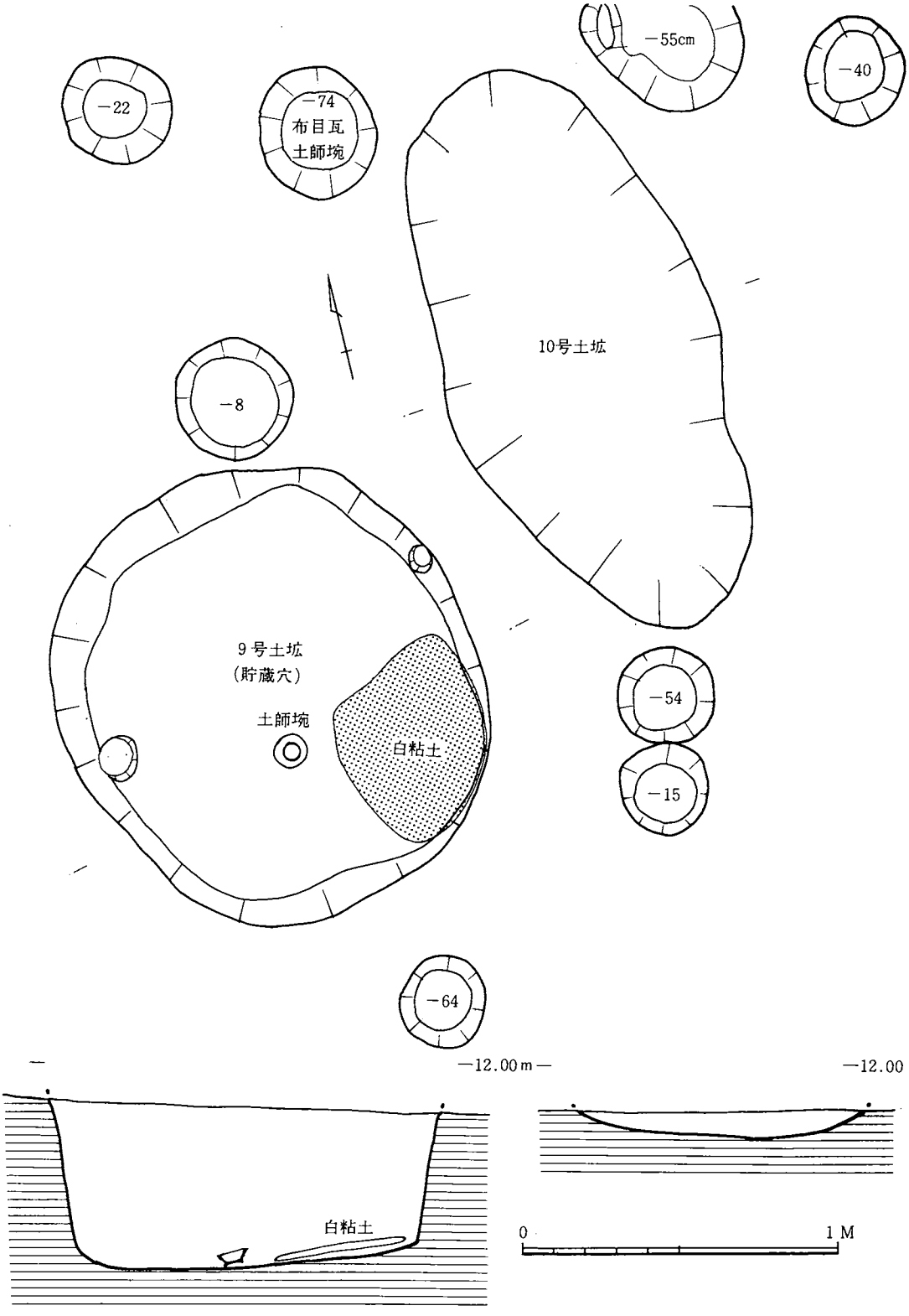
1・3・7号の各土壙には木炭、灰、焼土、或は灼け石といった直接火の使用と関連のあるものが出土している。土壙中には布目瓦をはじめ須恵器の破片が埋っていて、またこの中に、大小の礫の混入も確認されている。以上の共通の現象が、土壙のもつ機能と関連があるものと考えられるが、今それを直ちにどういう性格のものであるかは今後の事例研究を俟たねばならない。



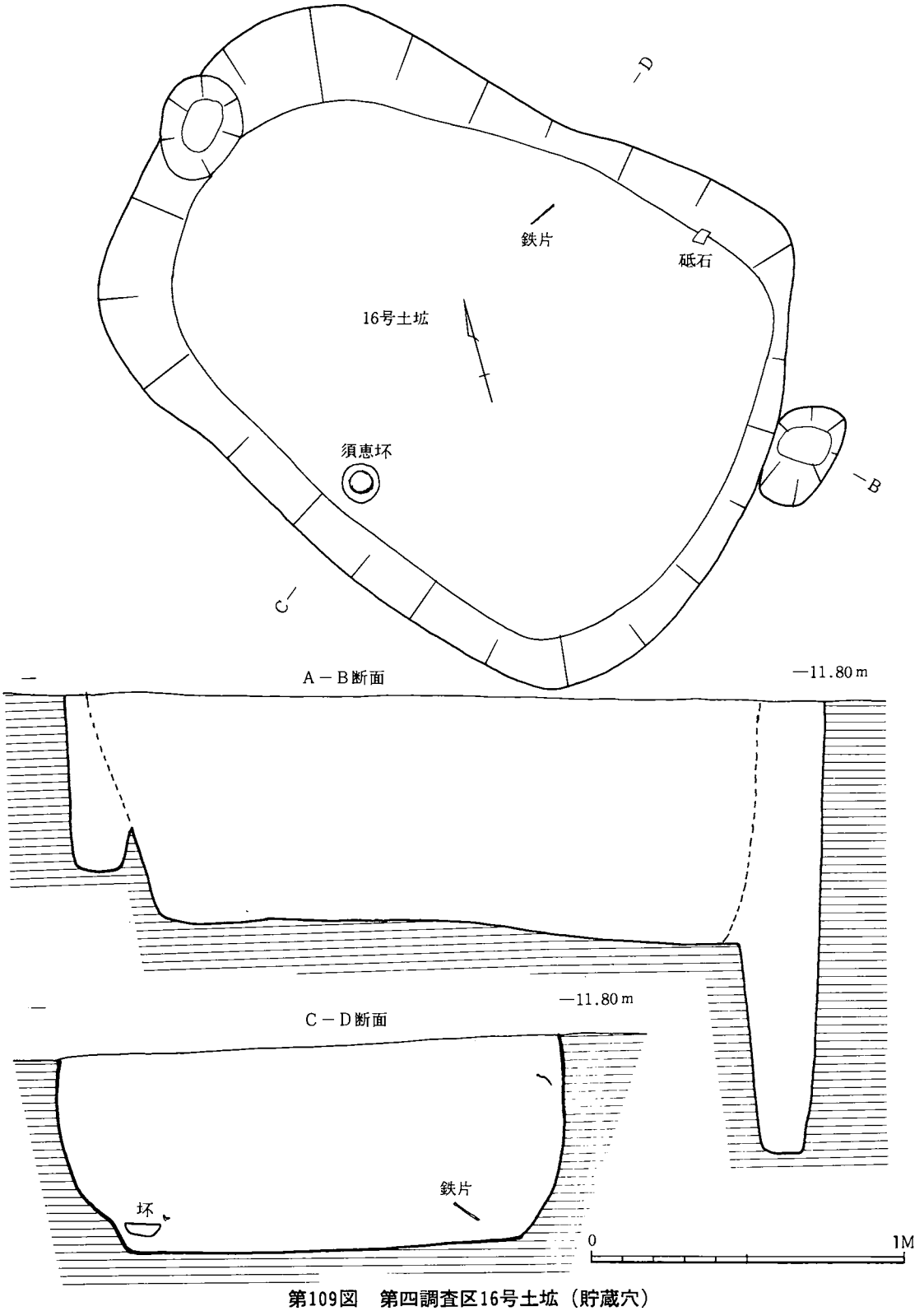

第106図　第四調査区3号土坑



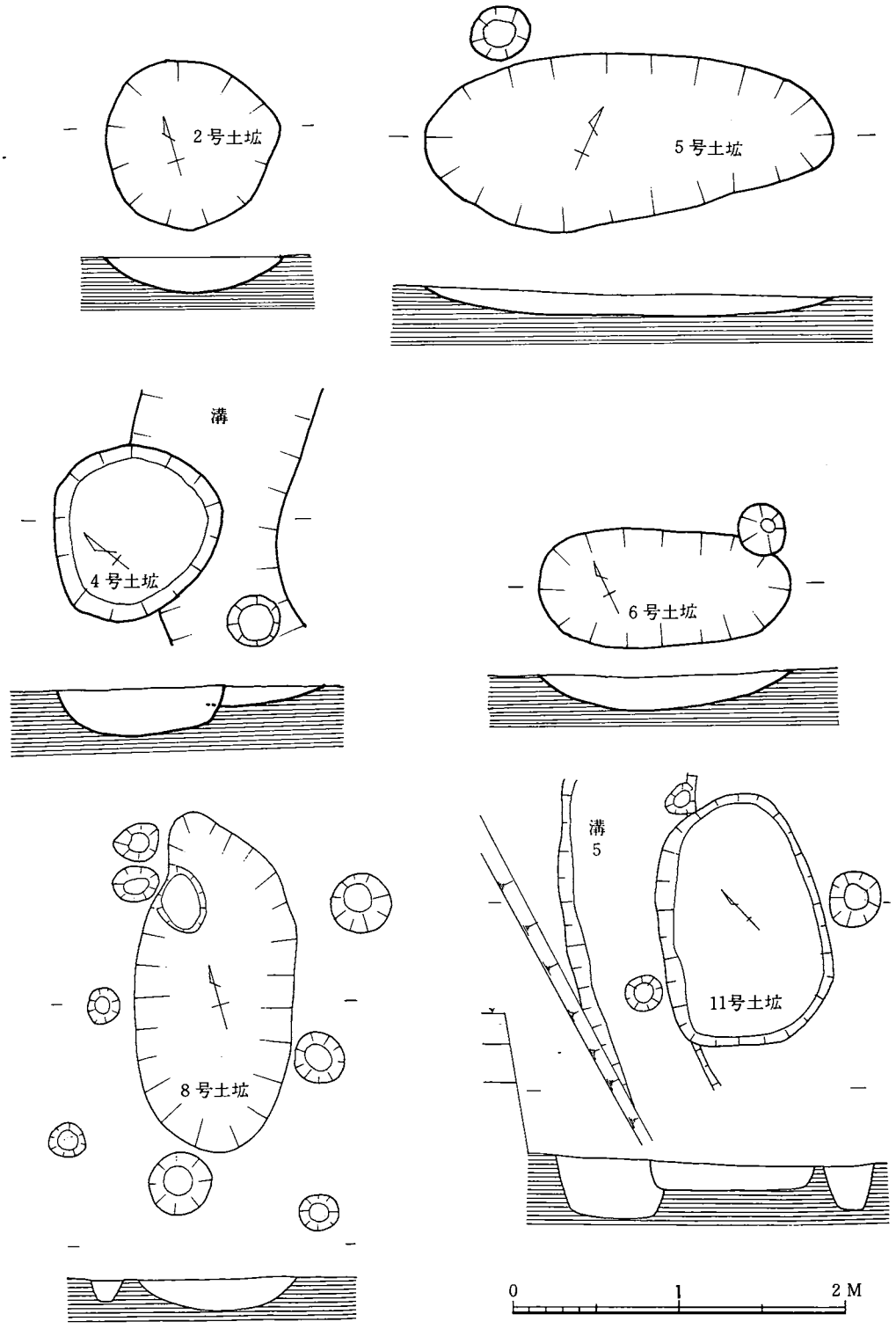

第107図　第四調査区７号土坑



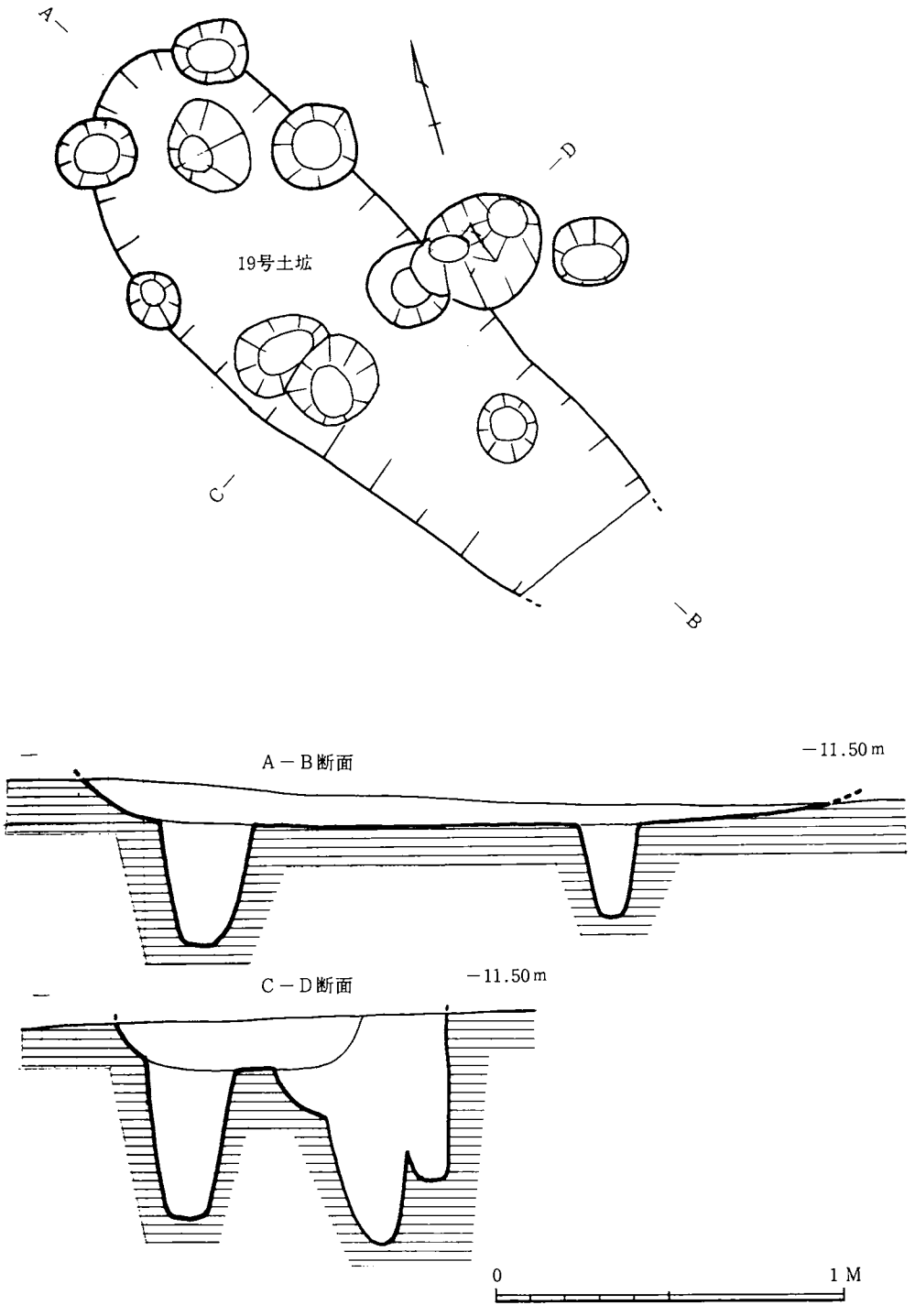

第108図　第四調査区9・10号土坑




第109図　第四調査区16号土坑（貯蔵穴）




第110図　第四調査区 2，4，5，6，8，11号土坑




第111図　第四調査区19号土坑

**9、16号土壙**（第108、109図）

いずれも貯蔵穴とみられるもので、他の土壙と識別してここに取上げることにする。

9号土壙（第108図）はC－3区から発見された。141cm×131cm確認面からの深さ52cmの隅丸方形の土壙で、土壙内の東西壁下に二個の柱穴があった。また床面には白粘土が敷かれており、その様は第三調査区発見の5号貯蔵穴に類似していた。さらに土壙底には完形の土師埦などが出土していた。

9号土壙出土の遺物は、第115図45、52の土師器の埦があり、45は口径10.5cm、底径7.0cm、高さ5.0cmの完形土器で、52は口径10.8cm底径7.3cm、高さ4.8cm4.8cmの埦で、全体の約1/2を残している。

土壙16（貯蔵穴）はB－1区とB－2区をまたいで発見された。土壙上面は現代の撹乱による土層の乱れがあり、プラン確認に手間どった。この土壙はおよそ222cm×155cmの隅丸長方形をしているが、短軸の西側（135cm）に対して東側（172cm）が長い。土壙の長軸の両側に二本の柱穴が発見されたことも、この土壙の機能と関連あるものと考えられる。

土壙から完形の坏、鉄片、砥石各一個が出土した。

16号土壙出土遺物としては第116図6に図示した完形の須恵器がある。口径11.4cm、高さ4.7cmの丸味をもった平底の坏である。この他に石器と鉄器がある。第16図2に図示したのがそれで、流紋岩製の3.0cm×3.8cm×5.6cm位、重さ120.2gの四面に使用痕のある砥石である。

鉄器は第64図32に図示した断面長方形、長さ10.8cmの先端を切損した釘状の鉄片である。

**その他の土壙**（第110、111図）

第四調査区からこれまであげた土壙以外に性格不明の土壙が多数出土した。ここに一括して取上げることにする。

2・4～6・8・10～15・17～19の土壙がそれで、概要を示せば次表のとおりである。

表2にみる様に土壙中から各種の土器が出土しているが、第112～116図に図示したものとして補足説明すれば、114図の30は丹塗りの土師器である。高台を付した坏で口縁を欠失している。その他の土壙中の出土遺物については、細片であるため図示しなかった。

その他の第四調査区出土の遺物について図により説明したい。

**土師器**（第112～115図）1～12は甕形土器で1～7・9・11は口径23～26cmで、外面は粗いたて又は斜方向の刷毛目による器面調整、内面は概ね削りの手法がみられる。8は口径11.8cmの小型の甕で内外面に丹彩がなされ、10・12はそれぞれ口径16.8cm、11.4cmの小型の甕である。13は甑の底部付近の破片で、恐らく中央にベルト状のさながつくものとみられる。前に揚げた甕形土器としたものに、あるいは甑である可能性もあろう。口縁だけの状態では識別困難であるからである。14の把手も甕、甑の両方につくことがあり、何れの器形とも判じ難い。

15～44は土師の鉢、又は埦とみられるもので15・16はとくに口径が大きい。これらは高台を付し、その高低、器形にかなりの変化がある。この24・25・30・34・37・43・44は丹彩してある。

第115図45～55は埦、または坏とみられるもので、いずれも平底である。このうち48・53・54は丹塗り土器。56は高台付皿でほぼ完形、皿は浅く口径12.6cm、低い高台がつく。底径7.6cm、高さ2.0cm。57は高坏で、脚は外に開くものとみられ、先端を欠失している。口径14.2cm、58・59も57と同形の高坏である。

60～63は皿形の土器で、60が全体の1/4、61が1/6、62が1/8、63が1/2位の破片からの図示復元である。それによると口径14.0cm、12.8cm、13.8cm、12.2cmをそれぞれ測る。64はこれらと同形のものとみるが口縁を欠いている。

65は蓋形土器で、中央に低い宝珠形のつまみがあり、全体が粗いつくりである。

**黒色土器**（第115図）　黒１～５は黒色土器で、１はほぼ完形の埦形土器で器形が歪む。内面は磨研され、口径13.7～14.0cm、底径6.5～7.0cm、高さ5.4cm。

黒２も埦形土器で６号甕棺周辺から出土した。内側は平滑に仕上げられ内側の黒い色が外側口縁上面に及んでいる。口径12.3cm、底の高台を欠失している。全体の約1/8の破片。

黒４は２個の破片を図示により復元したもので、口径11.6cmの埦で、外面がくろく煤けている。黒５も内黒土器の破片である。高台のつけ方が他と違っている。

**須恵器**（第116図）　１は甕で焼成良好、頚径23cmを測る。２は鉢で体部にロクロ挽きのあとが数条のこっている。３は２とほぼ同形の鉢とみられ、４は埦形の器形、７は胎土稍不良の須恵器である。底は箆切り、丸い胴部の破片から壺又は埦形の器形が考えられる。

この他第四調査区から墨書土器が二点出土している。第58図115と黒６がそれで、115は外面に二文字の墨書があるが判読困難である。黒６は内黒土器で外面に墨字の跡があるも判読困難。

**陶磁類**（第61図）　第四調査区から各種の土器のほかに越磁と緑釉陶器が出土している。２～４、７～10は青磁で、いずれも舶載の越州窯又は越磁と言われている碗である。

２の底部は畳付の部分かいく分が尖り気味で中心部が薄く、揚げ底気味になっている。内外面に青緑色の釉がまだらになっているが、体部の下半分は生地のままである。また内面には白い目地跡をのこしている。これは第三調査区出土の６に極めて似ている。

３、４はいずれも蛇ノ目高台の碗で、内外面に灰緑色の釉をかけている。底には砂目（貝）をのこすが、本遺跡出土の中では優品である。

７～10、13はいずれも碗の破片でいずれも灰緑色の釉が器面にかかっている。

14は本遺跡出土の唯一の緑釉陶器で、14号甕棺のまわりの覆土中から発見されている。器面に淡い緑色の釉をかけた埦の破片である。

**布目瓦**（第117～120図）　第四調査区から多量の布目瓦が出土した。28～49として図示した

瓦のうち、28・42～44・47は3号土壙より、また31・32・34・35・38・40は7号土壙より出土したことは各土壙の中で述べたとおりである。ここではその他の布目瓦について説明したい。このうち46と48が丸瓦で他は平瓦である。平瓦のうち49はC－3区ピット中出土の軒平瓦で、今回の調査で唯一の軒瓦である。平瓦のうちでは、縄目の叩打痕のものが大部分を占めるが36のように格子目の叩打痕のものもある。ここで49の軒平瓦について多少説明したい。

これは120図の拓図に見る様に、11cm×13cm位の瓦片で、一側に文様を付している。この瓦は上に珠文帯をもつ均整唐草文があり、珠文は上に4個、下に3個が残っているが、いずれの珠文は菱形につぶれた形をしている。この種の瓦は、今のところ肥後国分寺、国分尼寺などでの出土例は知られていない。

**鉄器類**（第62～64図）　第四調査区から多数の鉄器類が出土した。第62～64図に図示した4・7・8・20・27・28・32・34～38・40・41の14点がそれで、これらの遺物について説明をしたい。

4は鑿(のみ)頭式の鉄鏃で、C－2区のピット中より出土した。全長5.6cm、鑿頭が幅1.8cmである。

7・8・35は刀子とみられるもので、7はC－1区のピット中から、8はB－1区から、また35は鉄滓と共に11号甕棺への落込みの中から出土した。7は刃先と柄の基部が欠損しており、35は柄の基部とみられる。

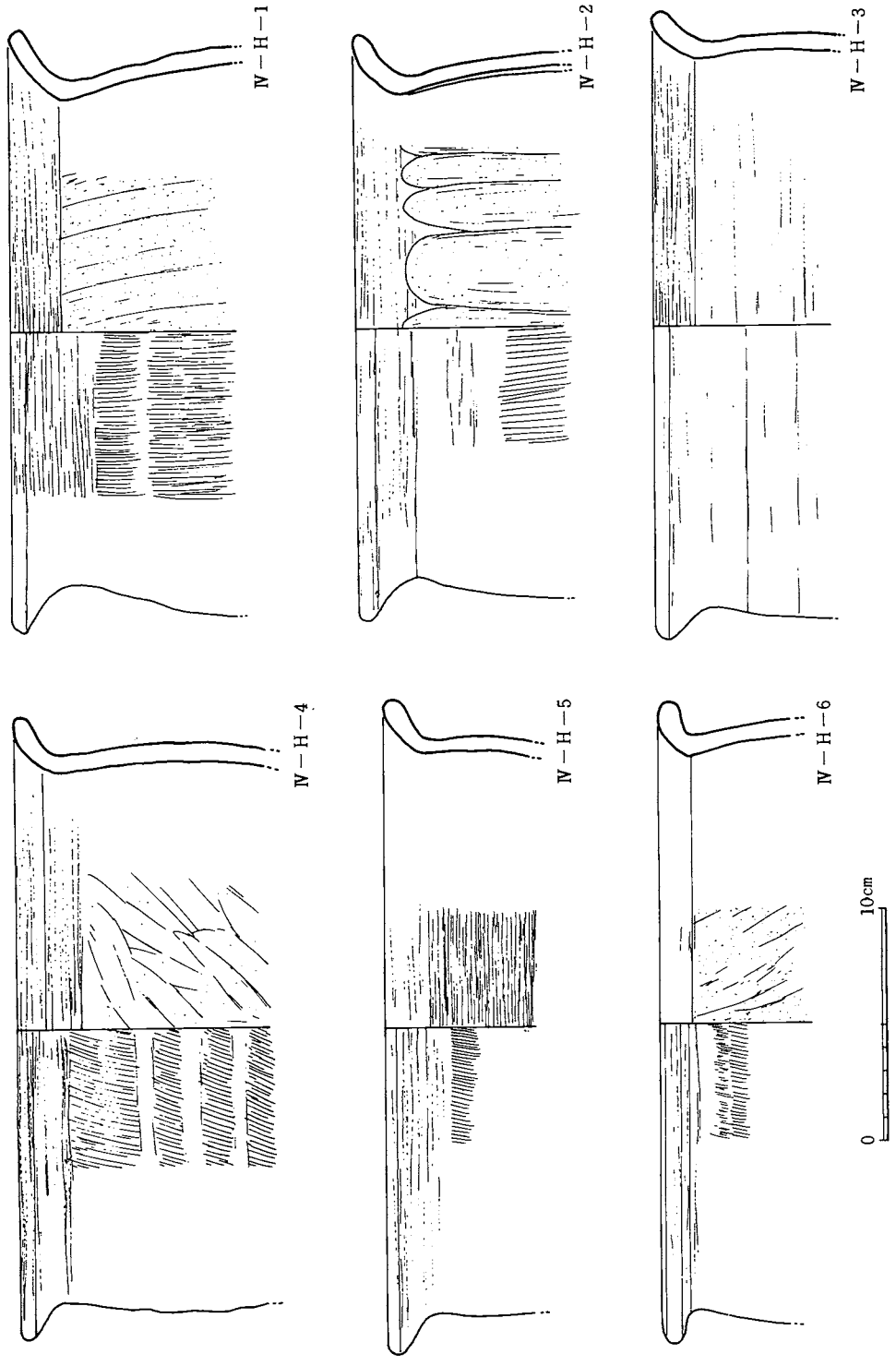
20・27・28はいずれも鉄釘の破片とみられ、これはいずれも覆土中から出土した。

32については、出土した16号土壙のところで述べている。34・36～38は釘様の鉄片で、34はC－2区の7号土壙中より出土したもので、36・37はB－1区覆土中から出土、38はC－1区のピット中から発見されている。40・41は板状の鉄片であるが、如何なる鉄器かについては不明。

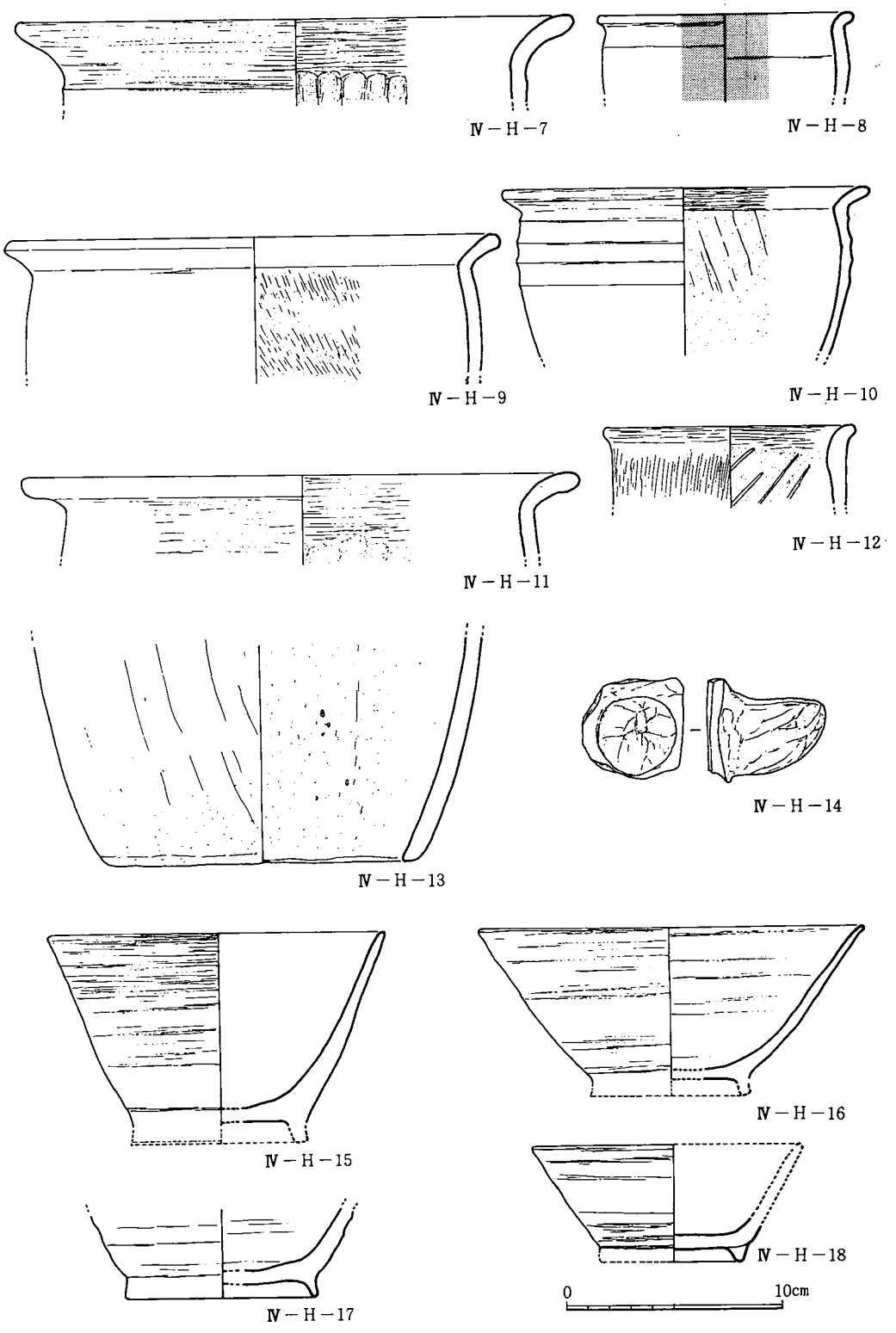
なお、第四調査区から鉄滓2点が発見されている。1点は11号甕棺への落込みから、他の1点は14号甕棺への落込みの中から検出されている。この他第四調査区出土遺物の中に数点の石器がある。第16・17図に図示した石器のうち、2～4・6・22がそれで、2の砥石については既に16号土壙のところに述べたとおりである。3は玄武岩質の石斧で片刃の抉入石斧の刃の部分である。4は完形の磨製石斧重量69.4g。6は砂岩質の石包丁破片である。22は黒曜石の打製の石鏃で19号土壙中より出土している。

## 表2．第四調査区各土壙計数

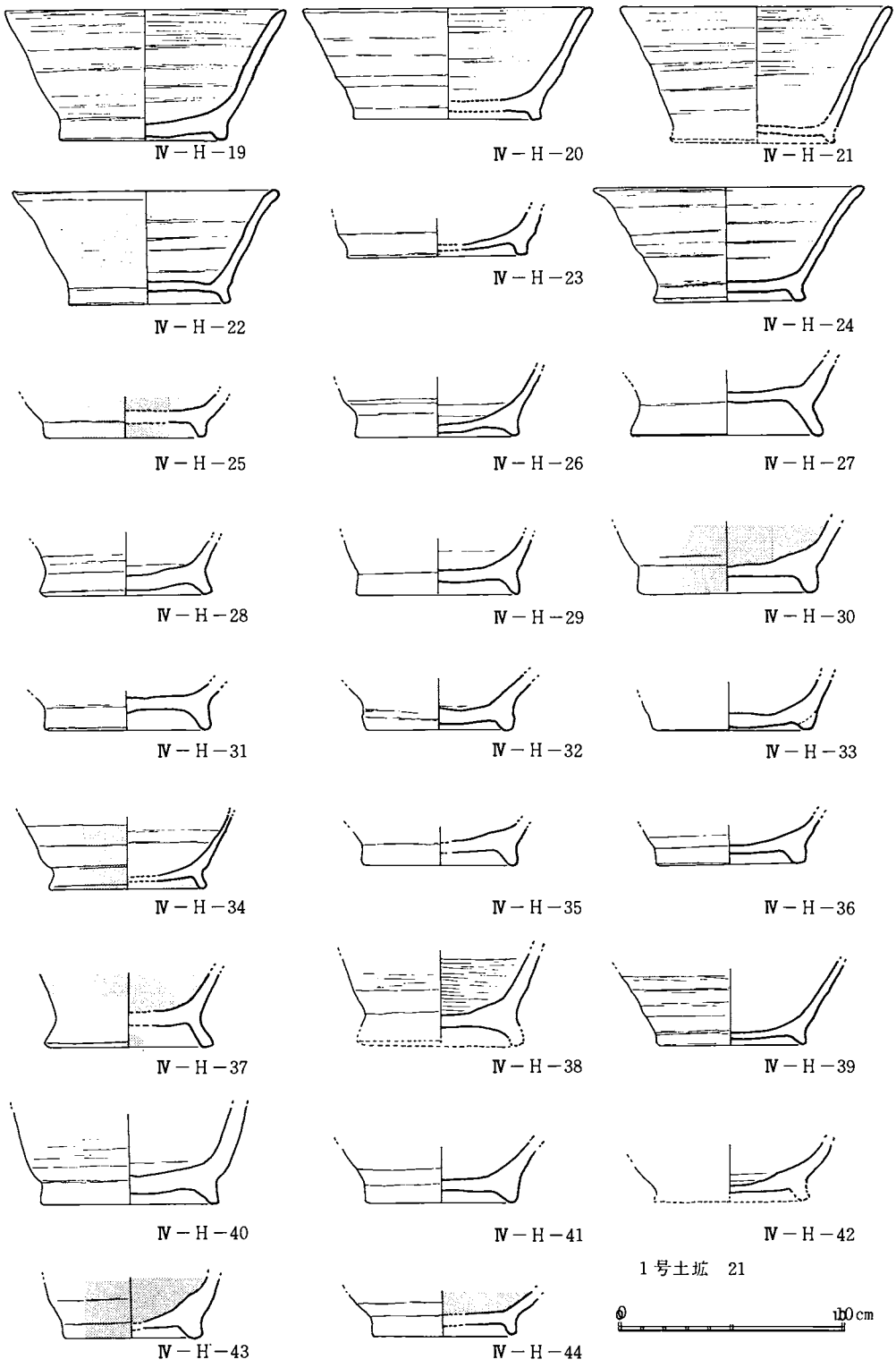
| 土壙番号 | 形　状 | 長径(cm) | 短径(cm) | 深さ(cm) | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 不 正 形 | 220 | 110 | 18 | 土師・黒色土器・瓦片・弥生土器・ビニール大袋一ぱい分出土 |
| 2 | 円　　形 | 106 | 100 | 23 | |
| 3 | 不 正 形 | 160 | 130 | 16 | 須恵・土師器片ビニール中袋一ぱい分出土 |
| 4 | 不正円形 | 106 | 100 | 26 | 須恵・土師器10片・弥生土器3片出土 |
| 5 | 長楕円形 | 247 | 100 | 14 | |
| 6 | 〃 | 153 | 68 | 22 | |
| 7 | 不 正 形 | 250 | 170 | 40 | 土師・須恵器・布目瓦コンテナ2はい分出土 |
| 8 | 長楕円形 | 203 | 96 | 19 | 弥生土器2片 |
| 9 | 隅丸方形 | 141 | 131 | 52 | 貯蔵穴・布目瓦2・須恵器3片・土師器30片 |
| 10 | 長楕円形 | 185 | 90 | 8 | 土師器11片・須恵器5片・弥生土器1片 |
| 11 | | 222 | 155 | 15 | |
| 12 | 不 正 形 | 183 | 104 | 22 | 須恵・土師器・黒色土器小袋一ぱい出土 |
| 13 | 不正円形 | 132 | 125 | 18 | 須恵器7片・土師器3片 |
| 14 | 円　　形 | 83 | 77 | 72 | 弥生土器2片・縄文土器1片 |
| 15 | 〃 | 102 | 100 | 70 | 弥生 |
| 16 | 隅丸長方形 | 222 | 155 | 72 | 貯蔵穴・土師器・弥生土器7片 |
| 17 | 瓢　　形 | 190 | 100 | 50 | 弥生土器・甕口縁1 |
| 18 | 溝　　状 | — | 130 | 50 | 弥生土器約20片 |
| 19 | 溝　　状 | — | 140 | 28 | |



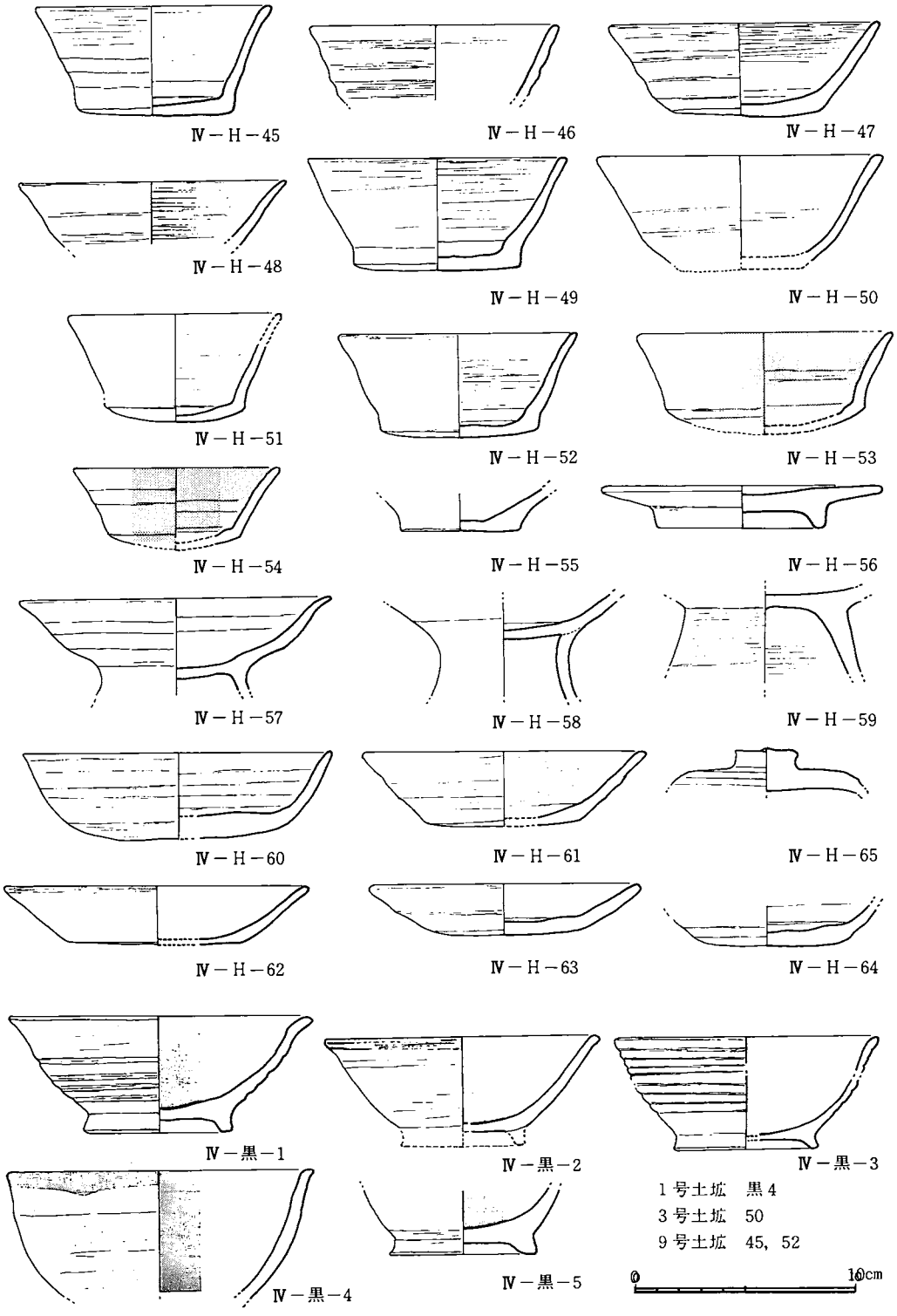

第112図　第四調査区出土土師器 1



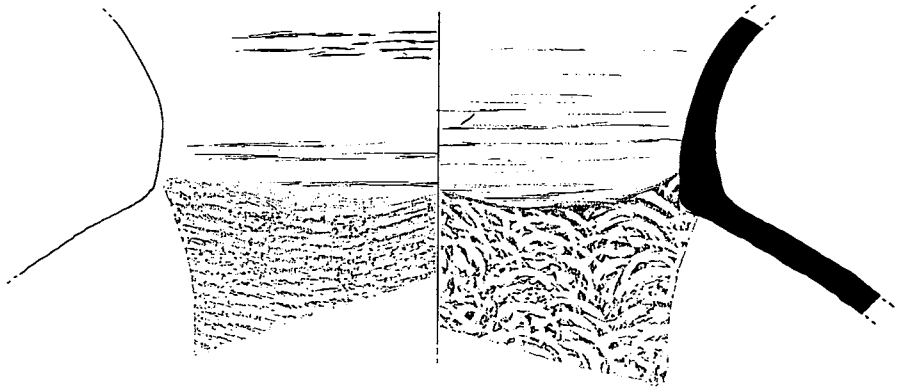

第113図　第四調査区出土土師器 2



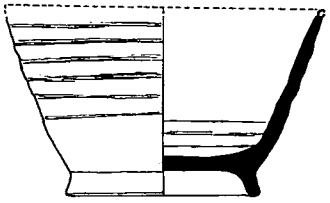

**第114図　第四調査区出土土師器 3**




**第115図　第四調査区出土土師器4，黒色土器**

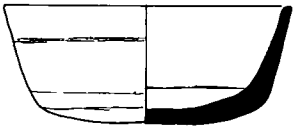


Ⅳ－S－1

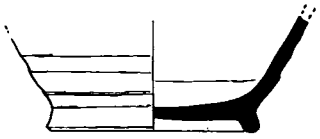


Ⅳ－S－2

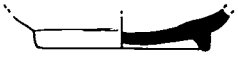
Ⅳ－S－5



Ⅳ－S－6



Ⅳ－S－3



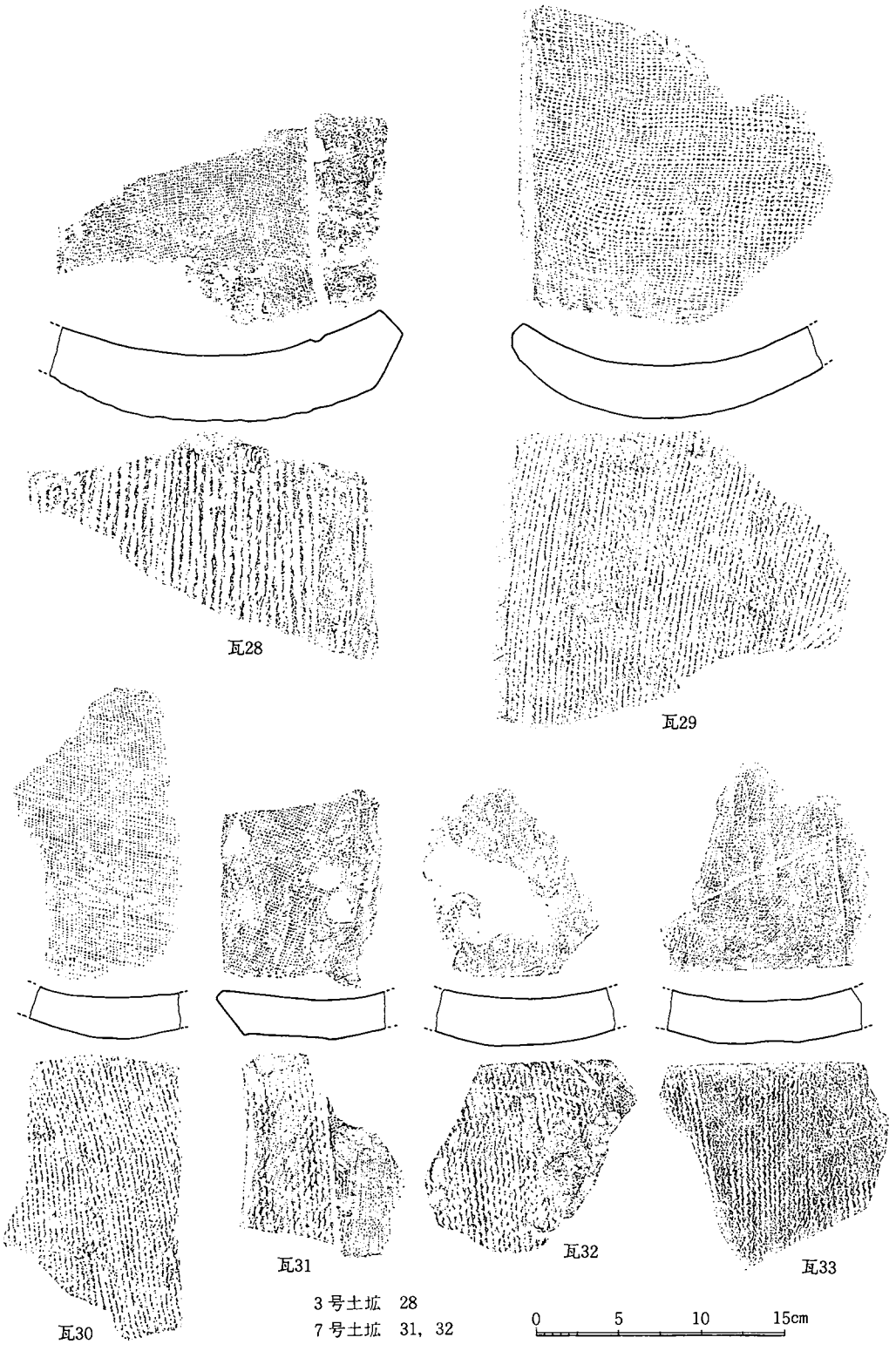
Ⅳ－S－4

Ⅳ－S－7

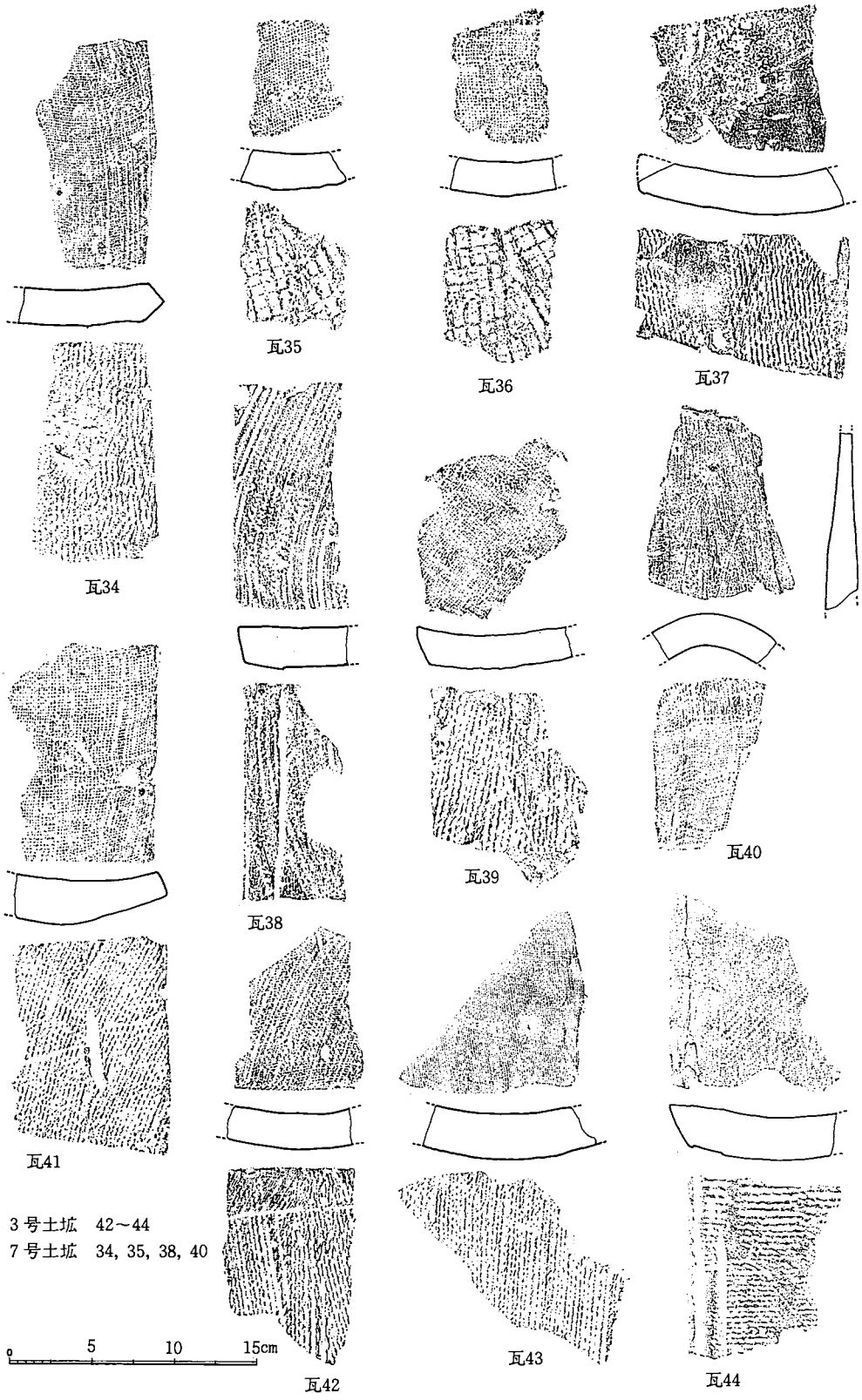
16号土坑　S 6

0　10cm

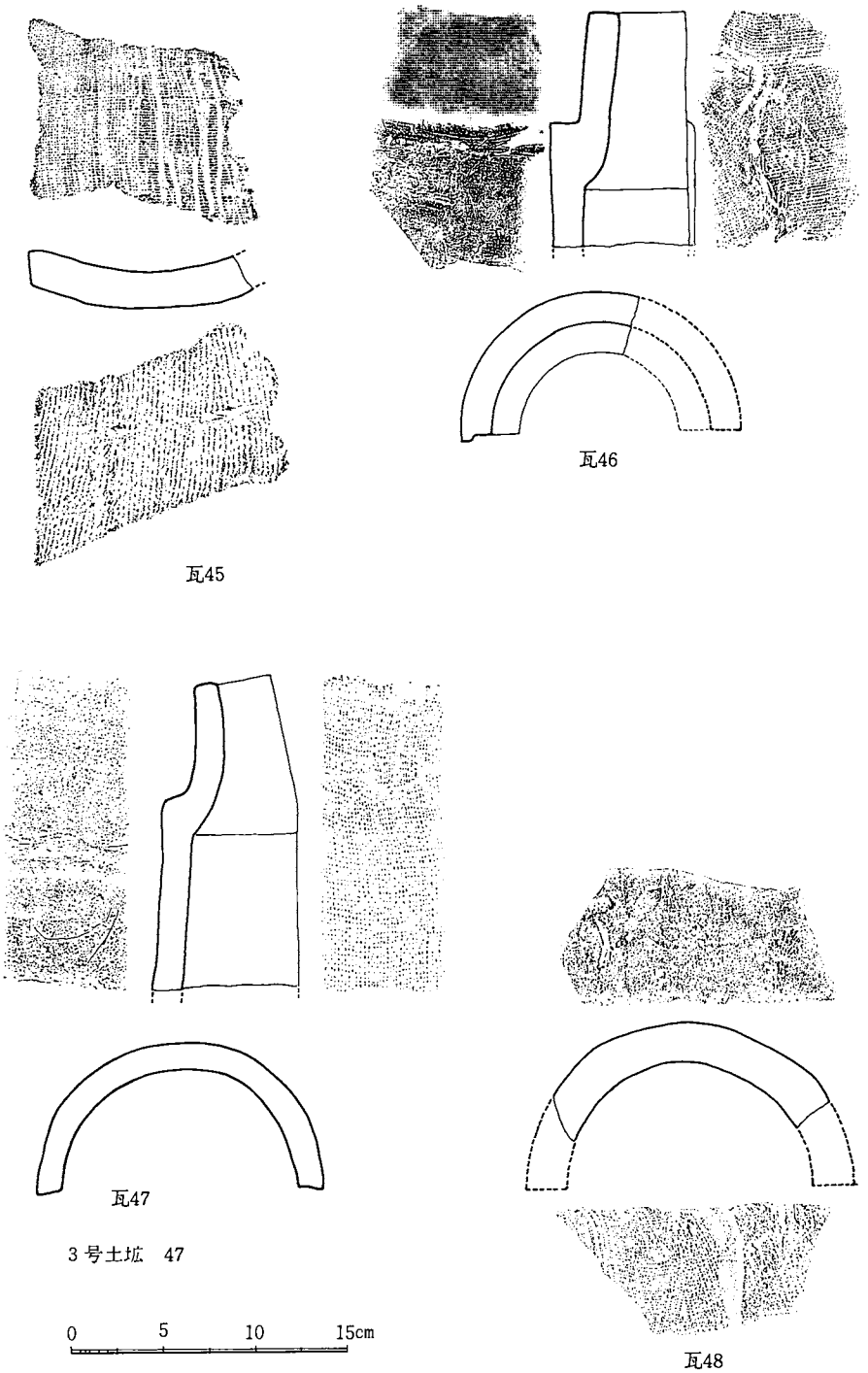
**第116図　第四調査区出土須恵器**



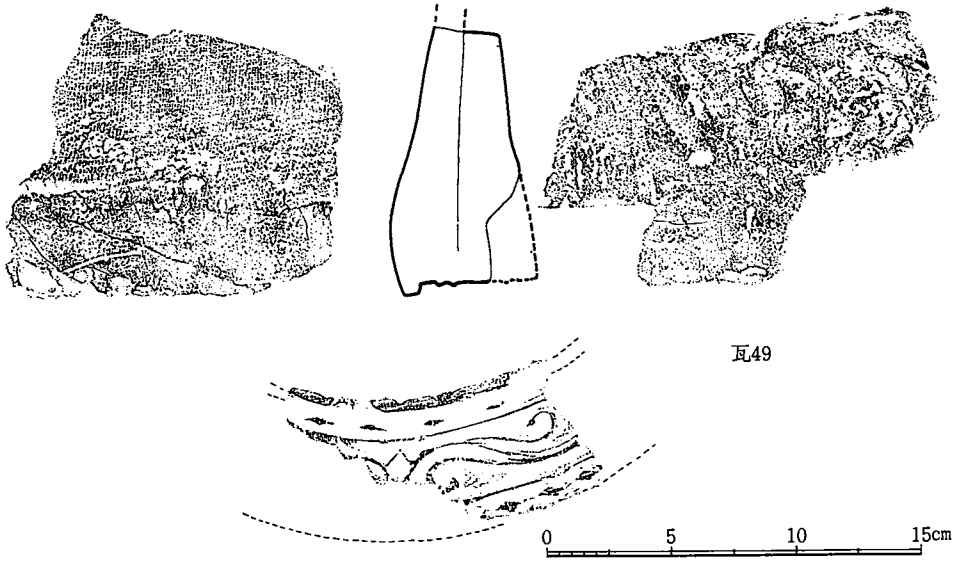

**第117図　神水遺跡出土瓦 4（第四調査区）**




第118図　神水遺跡出土瓦５（第四調査区）




第119図　神水遺跡出土瓦 6（第四調査区）




第120図　神水遺跡出土瓦７（第四調査区）

## 神水遺跡出土の縄文土器

昭和57年３月、第一調査区の北側に４ｍ方眼のグリッドを設け、３つのグリッドを発掘したこの際遺構検出の上位で発掘を止めたため、遺構そのものの確認に至っていない。

しかし、この際多量の弥生式土器片に混り、少なからぬ縄文土器の存在を確認した。この時出土した約30片の縄文土器のうち、数点を除き曽畑式土器であった。そこで今回の調査ではそれらの縄文の遺構の発見が期待されたが、各調査区では断片的に土器片が発見されるに止まった。

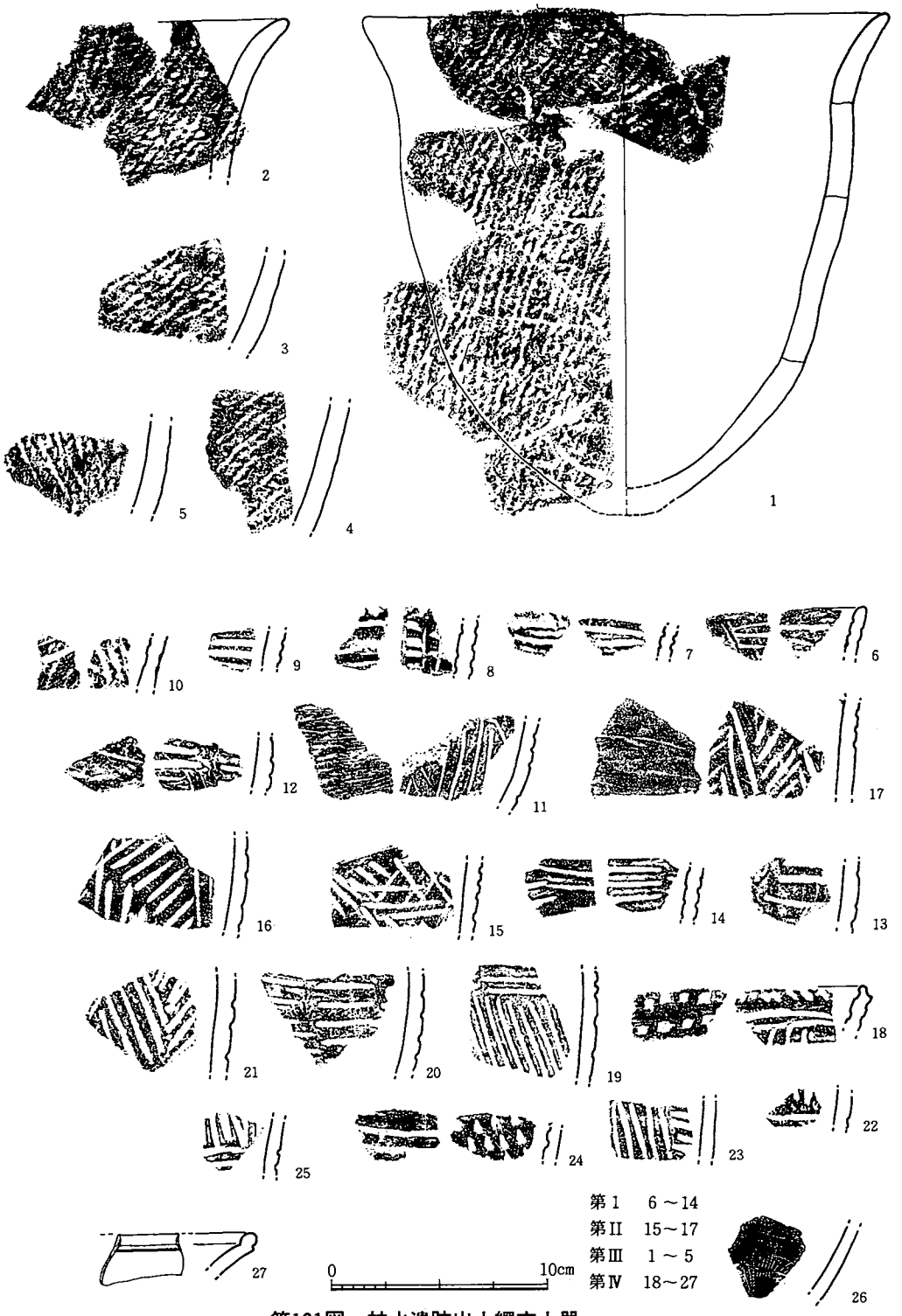
第121図に図示した各土器はいずれも縄文土器で、１～５は第三調査区、６～14は第一調査区、15～17は第二調査区、18～27は第四調査区からそれぞれ出土したものである。

１～５は同一個体の破片で、外面は全面斜行縄文が施文されている。破片は接合の結果、全体の約1/2がある。図示すれば口径24.0cmに復元出来、約５cm間隔に粘土の接合面が観察される。底部は丸底が考えられ、口縁下５cm位のところで外に開く。推定高22.7cm。

６～25は土器の文様構成から曽畑式土器と呼称されるもので出土量が最も多い。このうち16は胎土に滑石を混入している。

26、27は黒色磨研土器である。26の器形は小片のため定かでないが、外面に箆描きの文様がある。文様は二重の円（弧）の間に放射状の線が入るもので、筆者は今のところ類例を知らない。27は浅鉢で普通一般に熊本周辺でみかけるものである。

ここで年代観に触れれば１～５の斜行縄文は縄文早期、６～25の曽畑式土器は縄文前期、26、27の黒色磨研土器は縄文晩期とみてよかろう。




第121図　神水遺跡出土縄文土器

# 第四章　神水遺跡調査の成果と課題

これまで縷説した神水遺跡における発掘調査の概要を述べ、問題点を指摘して調査のまとめとしたい。

今回の調査では、工事の進行に伴い、第一調査区から第四調査区まで順次発掘調査を実施した。調査結果のうえで、第一調査区と第二調査区、第三調査区と第四調査区の間には、類似の遺構や遺物が検出されたことは、位置的関係からみて蓋し当然の帰すうと言えるかもしれない。

## (一)　調査の成果

第一調査区では、弥生時代の竪穴住居址5基のほか一条の溝と多数のピット群が発見された。この地点では、後世の（むしろ現代）の攪乱がはげしく、消滅した遺構も少なくないと考えられる。3、4号住居址から多量の土器が検出され、また石包丁などの石器も出土した。発見の遺構は出土遺物の様態からして弥生中期を降るものではない。

時代が降って、東西方向に延びる一条の凹道が発見され、硬化面上の布目瓦等の検出状況から、恐らく奈良―平安期を降らない遺構とみられる。

第二調査区では、弥生時代の竪穴住居址6基、貯蔵穴、円形周溝及び溝、さらに甕棺墓1基が発見された。このうち一条の溝は第一調査の溝の延長とみられる。ここで発見された遺物には、例えば貯蔵穴中のものに弥生後期ではないかと思われる土器片もあるが、いずれも概して弥生中期を降るものはない。多量の土器と共に鉄器、そして勾玉、石包丁、磨製石鏃、磨製石剣破片、さらに青銅製鉇の発見は本遺跡の重要性を倍加したものとみられる。ここでは新しい歴史時代の遺構として、布目瓦を伴う時期とみられる踏分け道一条も検出されている。

第三調査区では主として歴史時代の遺構が発見された。面的にひろがりをみせる硬化面は、ある時代の生活の場を意味するものとみられ、人の動きが生の感触として伝わってくる。そこに掘られた5基の土坑、これについて貯蔵穴としての機能を与えることは、発見例が少ないことから多少ともためらいがないでもないが、中国を例にとれば時代こそ違え、「我国古代地下儲粮之研究」[注]などに類例を見ることが出来る。その様な意味を含めて本稿では貯蔵穴として処理した。貯蔵穴は第三調査区の5基のみならず、第四調査区で2基（土坑9・16）が発見された。

出土遺物には埦を主体とする土師器、須恵器があり、黒色土器や丹塗りの土師器も出土した。さらに墨書土器。これを裏打ちするかのようによく磨耗した瓦硯（須恵円面硯）が出土している。文人墨客ならずとも、少なくとも文字を解し、書くことのできる人の往来を意味している。よく研ぎ減りした刀子・砥石とて例外でなく、遺跡としての性格をあらわしている。滑石製石鍋、石製紡錘車、燧鉄といった生活に密着した遺物も、現地での人の動きを察知させずにはおかな

い。かなりの量に上る布目瓦は果たして何を意味するのであろうか。柱穴とみられる多数のピット発見は、掘立柱家屋を意味しても、それが瓦葺きの建造物の存在を示すほどのものではない。鉄釘は総量で20数本が発見された。頭を片側にまげた1cm角ばかりの角釘で、長さ15cmをこすものがある。釘の用途として垂木釘、それとも瓦釘ということが考えられるが、この地域に瓦葺き建造物が確かめられないとしたら、一体どういうことだろうか。ここで一つ注目すべきことに焼土とスラッグ（第三調査区3点、第四調査区2点）の発見である。この鍛治滓とみられるスラッグは必然的に鍛治場を想定しないでおかないが、この近くで鉄の加工、例えば釘などの製作があったとしても不思議ではなかろう。

第四調査区C－1区で発見した土坑のうち1、3、7の各土坑には、中に布目瓦等の遺物を蔵し、焼土や灰などが存在するなど共通の要素があり、同種の機能を有する遺構とみられる。その中にスラッグの発見がないところから、これを直ちに鍛治場とみるのは困難である。今のところその意味するところの答についての持ち合せはないが、今後の事例研究をまつほかない。

ここでもう一つ重要な遺物として、舶載の中国青磁がある。第三調査区で5点、第四調査区で8点、そして第一調査区で1点合計14点出土している。これら本遺跡出土の青磁はいずれも越州窯で明時代まで下るものはなく、9世紀末から10世紀初めとみられるものである。この時期に舶載の青磁が数多く出土したことは、この遺跡の性格づけにもかかわる要件であろう。ここではただの1点であるが緑釉陶器が第四調査区から出土している。

第三調査区では溝・道路遺構の発見もあり、同種の遺構が第四調査区にも発見されている。人の生活空間、動きを知るうえに手掛りを与えるところの遺構である。第三調査区では弥生時代の遺構や遺物は少なかった。しかし集石と共に、C－4区から弥生後期とみられる土器が一括出土し、またD－5区でも弥生中期とみられる遺物が一括出土している。

第四調査区は第三調査区同様、歴史時代の土坑、貯蔵穴、ピット群、溝・数条の道路遺構が発見された。これらの遺構や遺物についてすでに触れたことで多くをここでは語らない。しかし、神水遺跡第一、第三調査区の発掘で多量の布目瓦が出土した。この中には平瓦、丸瓦等の破片があるが、一点の軒瓦の出土すらなかった。しかるに第四調査区では、破片ではあるがその一点の軒平丸が出土した。瓦の文様は均整唐草文で、上下に珠文がつく。ただし珠文は円というより楕円又は菱形に変形している。この瓦の文様からいっても平安時代まで下ることはあるまい。

第四調査区で弥生時代の甕棺墓群が発見されている。総数16基、周辺への墓域が拡がることが考えられるので、全墓域を網羅しての調査でないことはいうまでもない。このうち大形甕棺は7基で、他9基は小形甕棺であった。また大形甕棺のうち1基を除いて合口甕棺で、12号甕棺のみ木の蓋を用いた単棺であった。小形甕棺のうち、15号甕棺はむしろ中形甕棺であるが、その他の小形甕棺について残りが悪いところから断言することは困難であるが、壺と甕又は上

下共甕を用いた合口甕棺であることが考えられる。これまでとくに県北の鹿央町などで甕棺群の調査がなされ、正式の報告が待たれるところであるが、今回の神水遺跡の調査域に限って言えば、大形甕棺の占める割合の比率が多い様に思われる。それは或いは小形甕棺が埋納層位が浅いこともあって、神水遺跡のような状況下では、後世の攪乱により消滅したことも考えられる。

ある程度限定された状況下であっても一定の墓域を発掘した現在、グルーピングについても言及しないわけにはいくまい。俯瞰(ふかん)的に甕棺群の分布を捉えた場合、3・5号の小形の甕棺と12～15号の大形乃至中形の甕棺がひとつのまとまりをもっていることが知れる。このうち下甕の口縁部を西に向けているのは5・12・13号甕棺で、他の3・14・15号甕棺は反対の方向を向いている。ただし12号甕棺は単棺であって、頭位は東（甕の底の方）を向いている。この甕棺の方位性はともかく、一つの方向性をもって互いに侵すことなく並ぶということは、相手被葬者を意識しての所措と考えられ、或いは甕棺埋葬後、何らかの地上標識があったとしても不思議でない。これらの集まりが集団の中の家族墓であるかについては、今後の考証が求められるところでもある。もう一つ、本墓域内でまとまりらしいのが考えられるのは、4・11号及び1号木棺墓である。木棺墓埋土中の土器の所在は、木棺墓が甕棺埋葬の時期と大して違わないことを意味しており、ここでその先後関係にどれほどの意味を有するか、問題があるところでもある。これまた県北地区の調査で、甕棺墓域に多数の木棺墓の所在することが知られており、葬法の違いが果たして何を意味するか未解決の問題でもある。

他の多くの甕棺及び木棺は散発的に発見され、それぞれが単独、或いは二基まとまって分在している。ここで一基の甕棺について奇異なる現象を問題とし取上げねばならない。

すでに第四調査区の報告の中に述べたように、6号甕棺の在り方について、遺物整理の段階で興味ある現象を見出した。6号甕棺は上甕に頚部より上の口縁を欠いだところの壺を使用し、下甕にはごく普通の甕形土器を使用していた。壺は横に縦に数条の突帯をめぐらしていて、これまた興味ある資料であったが、問題は上甕の上を覆う形で乗せてあった壺の口縁である。この壺の口縁がどうも第二調査区で出土した上甕の壺と接合しそうだということで、胎土、成形技法、焼成が同一個体とみなしてよく、しかも大きさまで同じである。残念ながら頚のつけねが二次調整のためそのまま接合するに至らなかった。この第四調査区6号甕棺を覆う破片が第二調査区の上甕とが同一個体であると認められるならば、甕棺群の構成は勿論、住居址、集落との有機的人の結びつき、動きを具体的に語る資料として注目されよう。

注 『農業考古』 1982第二期～1983第二期

## (二) 弥生時代の遺構と遺物について

神水遺跡第二調査区１号住居址から銅鉇が出土した。この種の鉇は、これまで我が国の遺跡から出土例がなく、その年代観について不問に付すわけにいかない。そこでこの問題から取上げることにする。

銅鉇の出土事例を海外に求めれば、朝鮮半島金海貝塚などに事例を求めることが出来る。そのことは『朝鮮古文化綜鑑』[注1]一の中に「金海貝塚甕棺又箱式棺」として、図版と共に紹介されている。その記事からの文章表現を借りれば「……発見された古墳中甕棺は三個あって、うち二個は合甕式に属して、その一はやや長手の方形竪穴内に埋葬せられて、内部から既に解説した（図版第二七）管玉一個、而して甕棺の下から二口の細形銅剣と七本分の銅製尖頭器とを発見した」と記されている。この銅製尖頭器こそ、ここで取上げるところの銅鉇である。

その後、榧本杜人氏は『考古学雑誌』[注2]第43巻第１号の中に、「金海貝塚の甕棺と箱式石棺」と題し、―金海貝塚の再検討―の副題のもとに銅槍鉋（銅鉇）についても論及しておられる。

それによると、第三号甕棺についての記載の中で「碧玉の管玉二は掘りあげた土のなかから発見したのであるが、もとは外甕の口辺で発見した碧玉とおなじ位置にあったであろう」とし、続けて「銅剣二と銅槍鉋一括とはいずれも鋒を東にむけて、内外の甕の下にならべておいた。もちろん副葬したのであろう」として、銅槍鉋についてくわしく述べられている。またこの中で榧本氏は、銅槍鉋の類品として、朝鮮半島北部の平安南道大同郡大鳳面反川里、及び京畿道楊州郡九里面四老里の事例をあげておられる。

神水遺跡出土の銅鉇は国内では初の出土例ということになるが、白銅質の鉇はみるからに舶載品と思われる。奈良文化財研究所の工楽善通氏からの連絡によると、海外での銅鉇の分析値が定かでないため、定量分析のうえから神水資料が舶載品であると決定づけることは困難である、ということであった。

榧本氏の金海貝塚で銅鉇を出土した甕棺は「遠賀川Ⅲ式、あるいは須玖第一式」ということになっている。ここで図示された第三号甕棺は現在北九州では金海式と汎称される甕棺で、弥生前期末に年代的位置づけされている甕棺である。一方、神水遺跡出土の銅鉇は、第二調査区１号住居址から出土している。この住居址から石皿のほか多数の土器が発見されている。土器には黒髪土器とみられるもののほか、形式的にこれより古いとされる土器も含まれている。

ここで神水遺跡での銅鉇が黒髪式土器との共伴を認めることになると、従来の形式観念からすると金海貝塚出土事例に比べ編年的位置づけとは大きくずれることになる。ずれという言葉はあいまい表現で、そのずれが何程であるかはにわかに決定し難い。

銅鉇はもともと工具としての性格機能をもっている。神水遺跡では破片（住居址は一部発掘）が出土し、銅鉇がどの様に使用されたかが明らかでないが、状況的には何れかの土器と共伴す

る可能性は強い。

ここで神水遺跡調査にからみて、遺構と遺物との関係を検討してみたい。

これまで調査された県内の弥生時代住居址について報告事例の中から、遺構と遺物との関係の取扱いについて注目してみよう。まず『谷頭遺跡』[注3]では「出土土器の検討」という項目を設け、土器の分類についての方針を示している。それによると「……熊本県の弥生土器編年の現況を察すれば、独断的分類は避けるべき」としながら、出来る限りの分類を試みる必要性を述べ、「……遺構の切り合いの先後関係による遺物の形態比較が出来なかった」とし、住居址内の遺物も「……床面直上まで縄文晩期の土器等が数点であるが混入し」「覆土中のものと床面直上のものに分けるについては疑問」を差しはさんでいる。

ついで『矢護川日向遺跡調査報告』[注4]では、各住居址の中で遺物の出土状況について触れている。とくにa地区の表の中では「土器の大半は覆土中より出土」したことを述べ、同一遺構から出土した遺物（土器）についても弥生中期、後期後半、或は土師器としてのおおまかの時代判定をもとに遺構の時期推定に役立てている。

また県文化財調査報告の中から出土遺物の取扱いについて、『梅ノ木遺跡』[注5]では大半の資料は覆土中から出土しており、確実に住居跡に伴うもの、いわゆる一括遺物として認定しうる資料は……24号住居跡を除けば、ほとんどない」とし、更に「……床面直上ないしは覆土下位の土器」に、「……土器の形態的特徴に大きな差異」が認められないとして、甕形土器を「形態的特徴によって分類し、他の遺跡との比較によって大きな年代観を得る」ことにしている。

この様に、住居址内出土遺物の取扱いについても、判断がまちまちのように見受けられる。私自身、これまで多数の住居址の発掘を手がけているが、遺構と直接結びつくようなものは殆んどなかったと言ってよい。住居内から土器片がたくさん出る、それは直接遺構に結びつかない何よりの証拠で、古代人がそこで生活しようとするなら、まず土器排除した上で住みつくことになろう。慣例的に床直などと呼んで遺物を処理しているが、それが遺構に直結するという保証はどこにもない。

生活の場を同じくする場合、新しい遺物の中に、古い土器片が混入することはあり得ることで、『谷頭遺跡』の中で縄文晩期の土器の混入があっても別段不思議でなかろう。

さて、出土遺物に対して年代的位置づけを与えるのに編年作業があるが、私はかつて熊本県における状況をもとに、次の様[注6]に述べた。

昭和40年代に入り、各種の開発事業に伴い埋蔵文化財の発掘調査が累増した。そこでは、広域調査によって、これまで観念的操作により編年がなされていたのが、遺跡における具体的状況として捉えることが出来るようになった。これまで、昭和30年代まで編年作業は、先進地と目される地域の編年をモデルとして、それとの比較検討を主なテーマとしていた。

この様な研究方法は今でも踏襲されているが、研究というより啓蒙であり、遺跡、遺構を離

れた遺物の積木細工よろしく、徒らにスコラ的弁証を重ねると言われても仕方があるまい。

我々としては、現実の遺跡、遺構における状況をもとに、それを出発点として組立てねばならない。かつて文化の単純層が話題となったこともある。例えば、北九州で縄文から弥生への移行期に「夜臼式」という土器の形式名が設定されている。そこで〝夜臼の単純層[注7]が発見された〟などと報告されたことがある。たまたま調査地点で、単純層が見つかったというのならまだしも、仮にそれが生活の実体であるとするなら、北九州における縄文から弥生への転換期の文化は停滞していると言われても仕方がなかろう。

私は人間の生活態様というものは多様性をもったものと見ている。ある時点での生活断面をとってみても、古い様式のものと新しい様式のものが混在するのがむしろ常態で、長い眼で見れば変化の方向がたどれるということになろう。そこで銅鉇を出土した神水遺跡第二調査区の1号住居址の土器が、必ずしも新旧入り混じっての攪乱だと定めつける訳にはいかない。何度も繰返すが、人間の生活にはバリエーションがあるもので、一部の考古学者に見られる様に、一つの形式から次の形式へと推移するのでなしに、時に急速に、またある時には緩やかに遷移するものと思われる。黒髪式土器については、稿を改めて論及しなければならないが、一つの土器様式が定形化するには、各遺跡における伴出関係と共に形と技法の問題を研究する必要がある。

注1　梅原末治　藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』第一巻　昭和21年

注2　『考古学雑誌』第43巻第1号

注3　『谷頭遺跡』1978　谷頭遺跡調査団。西原村教育委員会。

注4　『矢護川日向遺跡調査報告』1980　九州電力ＫＫ。日向遺跡調査団。

注5　『梅ノ木遺跡』熊本県文化財報告第62集。1983　熊本県教育委員会。

注6　『免田式土器の編年』連合学会資料　1984

注7　土器の形式設定に関して、とくに若い研究者の中には、仮に純粋形式という表現をとれば、分類された土器形式がそのまま生活の実体であるかのような錯覚している嫌いがある。具体的事実をもとに、研究者の叡智により抽象分析することにより純粋化したのが形式観念であるとするならば、そのまま遺構における遺物の実際の姿と異なるのは当然で、文化が単一形式のまま純粋培養されることは、寧ろ不思議であり、不自然である。

## ㈢ 歴史時代の遺構、貯蔵穴に関して

すでに触れたことであるが、歴史時代の貯蔵穴が七基発見されている。問題に入る前に参考資料とし取り上げる余扶危、葉万松の「我国古代地下儲粮之研究」の意見に耳を傾けることにしよう。

これらの地下儲粮の生まれる諸条件の中で、古代中国の北部で窖穴による地下儲粮が開始された理由として、地下水位が低く、土質が乾燥しているなどの自然的条件を示している。そして、これら地下儲粮の歴史を、初期・発展・成熟及び完善と衰退の各段階に分けて説明している。

神水遺跡発見の７基の貯蔵穴は、形態的特徴として円形、不正円形、隅丸方形、或は隅丸長方形をしており、口径1.23～2.22m、深さ0.52～1.2mで、壁が垂直乃至はいく分外傾するものが多い。中国での事例の中からひろえば、裴李崗では直径１m前後、深さ0.2～１mと口径0.5～2.2m、深さ0.37～１m、これはいずれも不規則円形である。また、峨溝では円形、楕円形、不規則形として多数の窖穴が発見されており、円形の21基の事例として口径0.6～1.96m、深さ0.22～1.28m、楕円形の13基の事例として口径1.08～2.28m、底径0.92～2.18m、深さ0.24～0.80m、また不規則形として10基の事例として口径0.64～3.10m、深さ0.24～0.70mであるとしており、特徴として壁の立ち上がりや底の状況を示している。

以上は早期窖穴の事例で、この他鞏県鉄生溝、密県馬良溝、河北磁山を例としてあげている。この時期のものとして、口が大きく底が小さいのや、壁が垂直に近いもののほか、少数の袋状のものがある。

窖穴の形態的な特徴は時代と共に変化するが、中期に至り、防湿のため西安半坡115号 窖穴にみられるように、壁に粒子の細かい厚さ１cmの黄土を塗る例があり、また窖底に穀灰を敷くも

### 貯 蔵 穴

| 貯蔵穴 | | 形状 | 直径 | 深さ | 壁の立上り | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第三調査区 | 1 | 長円形 | 1.92m×1.6m | 1.2m | 垂直 | 土師器(埦)・須恵器・布目瓦・鉄器等、柱穴3個、スラッグ |
| | 2 | 不正円形 | 1.23m×1.28m | 0.7m | 直乃至僅かに外傾 | 土師器・須恵器・布目瓦・鉄器・石器等 |
| | 3 | 円形 | 1.75m×1.65m | 0.85m | 外へ約10度の傾き | 土師器・黒色土器・鉄器 径0.25m 深さ0.7mの柱穴 |
| | 4 | 隅丸方形 | 1.54m×1.57m | 0.80m | 外へ25～30度の傾き | 土師器・黒色土器・須恵器・鉄器、柱穴３個 |
| | 5 | 長円形 | 1.77m×1.45m | 0.87m | 垂直 | 土師器、柱穴４個 |
| 第四調査区 | 9号土坑 | 隅丸方形 | 1.41m×1.31m | 0.52m | 外へ約10度の傾き | 柱穴２個 |
| | 16号去坑 | 隅丸長方形 | 2.22m×1.55m | 0.72m | 直乃至し袋状 | 須恵器・石器・鉄器 柱穴両側に各１個 |

の、壁や底にスサ入りの練り土を塗ったものや、更に火で焼いたものがあらわれる。以上のような地下儲粮の初期段階についての窖穴について説明がなされているが、神水遺跡での貯蔵穴の中に底面に粘土を塗った事例がある。第三調査区5号貯蔵穴と第四調査区の9号土坑がこれで、前者は厚さ5～10cmの白粘土があり、木炭と灰がひろがっていた。これは防湿のための漆喰効果のためとみられる。後者（9号土坑）では厚さ4cmの粘土を敷いていた。

これらの貯蔵穴での粘土は、中国の窖穴にみるように防湿のための予備的所措とみることもできよう。また貯蔵穴の底面の高さは第三調査区で標高約10m、第四調査区で約11mであった。加勢川の水位が標高約7mであることを考慮に入れば、季節により地下水位に変動があるとしても、現地が高燥の地域で、水はけのよい土質であることは言うまでもない。また底面に数個の柱穴が発見されていることは、貯蔵穴上に覆家のあったことを想定することも困難でない。

神水遺跡発見の貯蔵穴は、少なくとも奈良時代末とみられる。これと比較する意味で中国古代の地下儲粮の事例を挙げその機能について考察したが、傍証に用いた中国での事例は新石器時代であり、その時代の懸隔をどうするかという疑問がないわけでもない。日本における地下儲粮の実体に迫るには、これを口火にして今後具体的事例の中で説き明かすしかない。

神水遺跡で奈良～平安期とみられる遺構と遺物が多数発見された。これらの遺構と比較的近い距離にある同時代の遺跡、国分寺、国分尼寺との関係はどうか。これが無縁の遺構でないことは勿論、むしろ大いに関係があるに違いない。これは重要な問題であり、今後、調査資料の積み重ねの中で検討さるべき課題でもある。

注　余扶危　葉万松「我国古代地下儲粮之研究」上・中・下『農業考古』1982年第二期～1983年第二期
なお『農業考古』にその後も、古代儲粮に関する論考として、「我国古代粮倉的起源和発展」正・続、として1984年第二期、1985年第一期に上載されている。

北から（中央右端第一・第二調査区）

西から（ブロック塀の向うが第三調査区）

**神水遺跡調査前景観**

図版2

遺物出土状態（3・4号住居址）

1号住居址

3・4号住居址

第一調査区（東から）

遺物出土状態（3・4号住居址）

5号住居址

3・4号住居址（南から）

**第一調査区　弥生時代住居址**

道路遺構上の遺物

西側土層断面

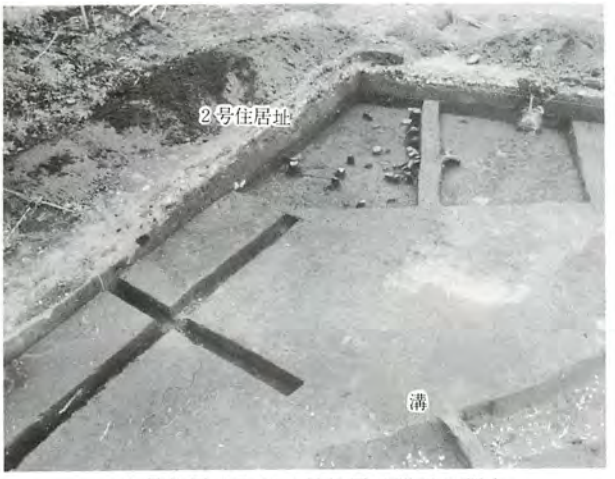
**第一調査区　道路遺構**

上土除去作業

撹乱層と遺構の検出作業

遺構検出作業

**第二調査区　遺構の検出確認作業**




1号住居址及び2号住居址附近の調査

上・下は遺物出土状態

1号住居址遺物出土状態

1号住居址出土鉈

1号住居址発掘完了

発掘風景

第一調査区　1号住居址

図版6

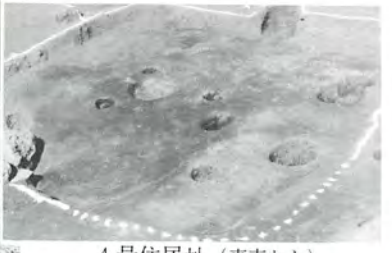
左二枚は南及び南東からの各遺構

円形周溝と貯蔵穴

（北東から）

**第二調査区の各遺構 1**

4号住居址（西から）

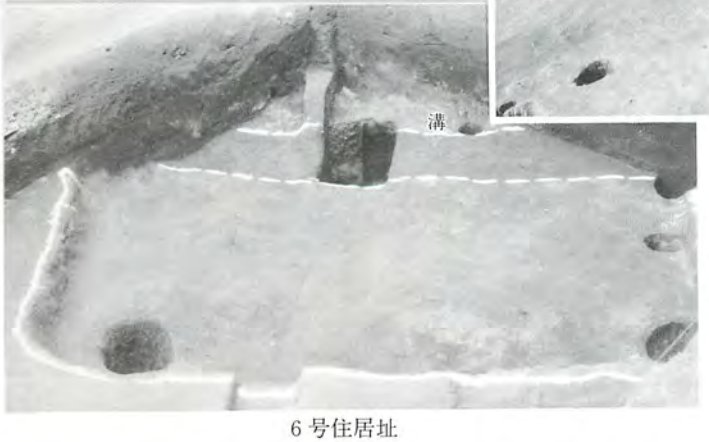


4号住居址（東南から）

貯蔵穴

甕棺墓

円形周溝と貯蔵穴




6号住居址

**第二調査区の各遺構2**

図版8

発掘前（市街地を望む）

上土除去作業

遺跡景観（南から）

遺跡景観（南東から）

第三調査区　遺跡景観 1

南東から

東から

南西から

南から

5基の貯蔵穴

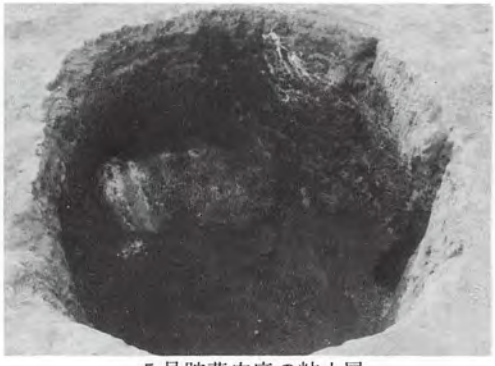
東から

東から

第三調査区　遺跡景観2

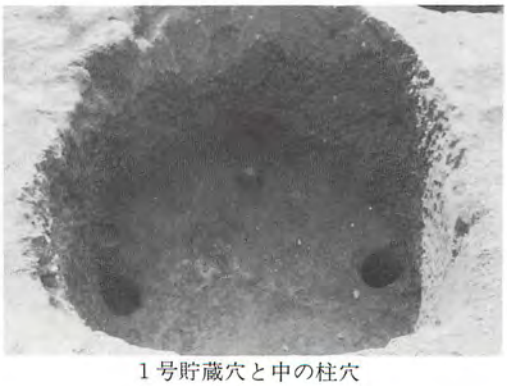
1・2・3号貯蔵穴発掘状況（南から）

4号貯蔵穴の断面



5号貯蔵穴底の粘土層

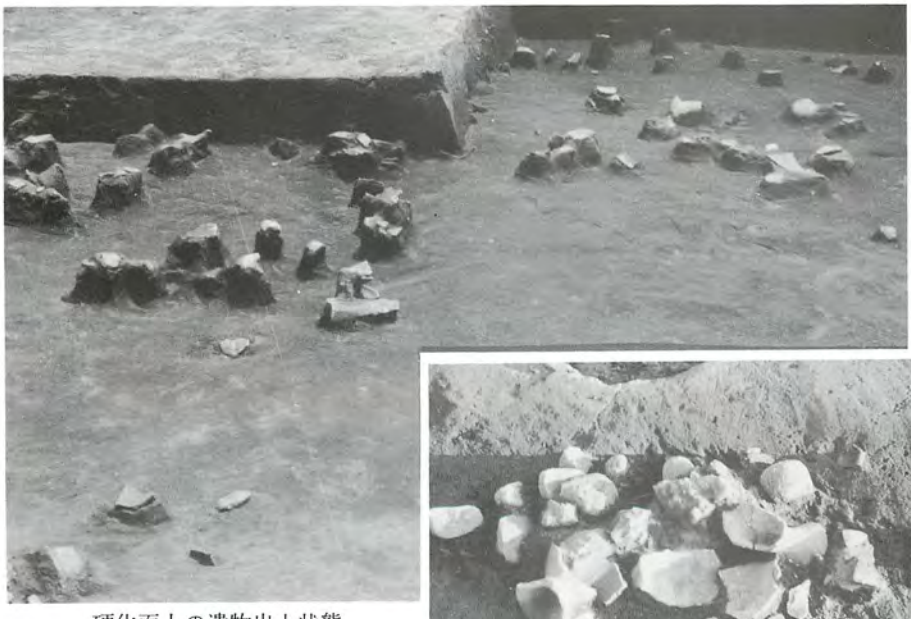
4号貯蔵穴の断面と遺物



1号貯蔵穴と中の柱穴

**第三調査区発見の貯蔵穴**

溝4の掘込み



硬化面上の遺物出土状態

弥生時代土器出土状態

**第三調査区　溝4と遺物出土状態**

図版12

1号甕棺

2号甕棺

5号甕棺

3号甕棺

10号甕棺

6号甕棺

7号甕棺

第四調査　甕棺出土状態1

9号甕棺

12号甕棺口縁の木蓋あと

11号甕棺

12号甕棺

13号甕棺

15号甕棺　　14号甕棺

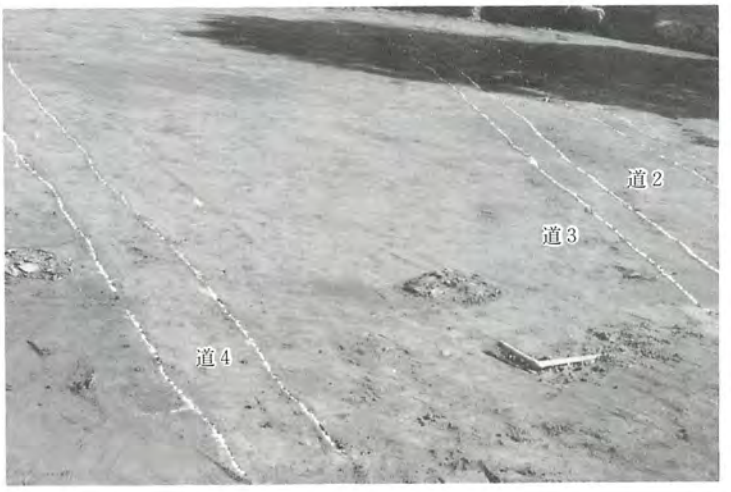
**第四調査区　甕棺出土状態 2**

図版14

1号木棺墓

3・2号木棺墓

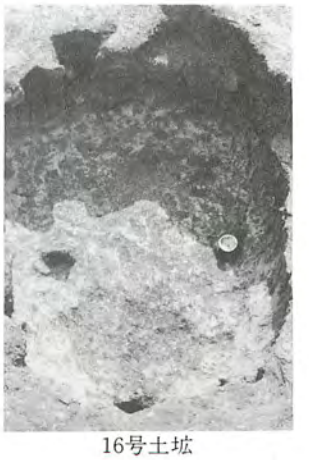
第四調査区発見の木棺墓



上 道路遺構

右9号土坑

7号土坑



16号土坑

第四調査区　道路遺構と土堀

図版16

1
（燧鉄）

2

3
（鏃）

4
（鏃）

6
（刀子）

5
（刀子）

10

12

15

16

26

24

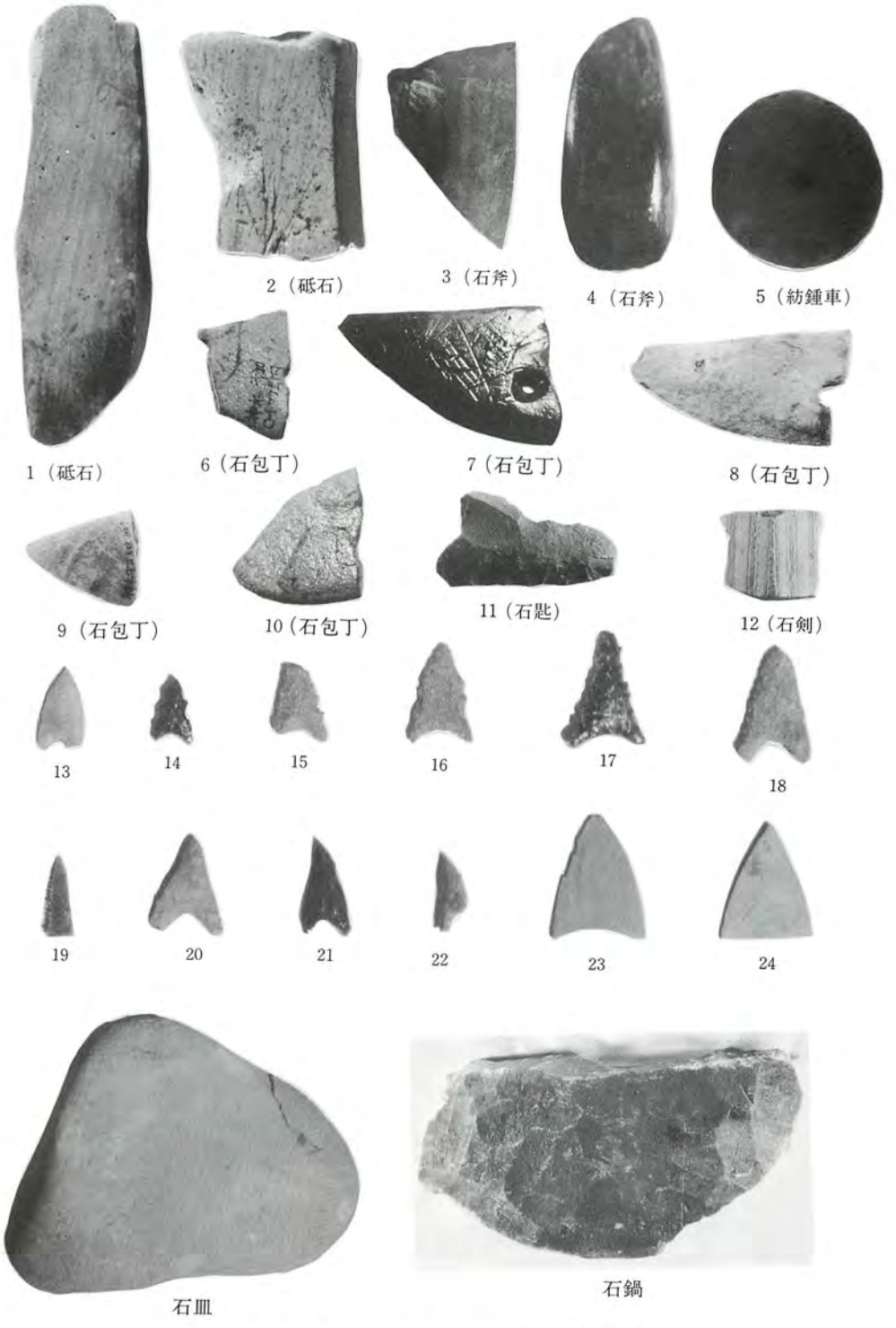
11

44

スラッグ

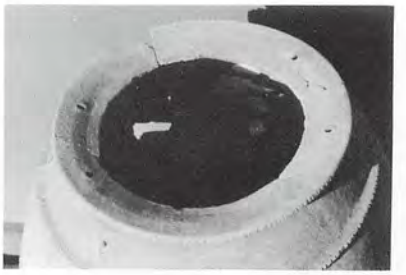
0　2 cm
銅　鉈

**神水遺跡出土金属器他**（ナンバーは実測図の遺物ナンバーと対応）




神水遺跡出土石器他（ナンバーは実測図の遺物ナンバーと対応）

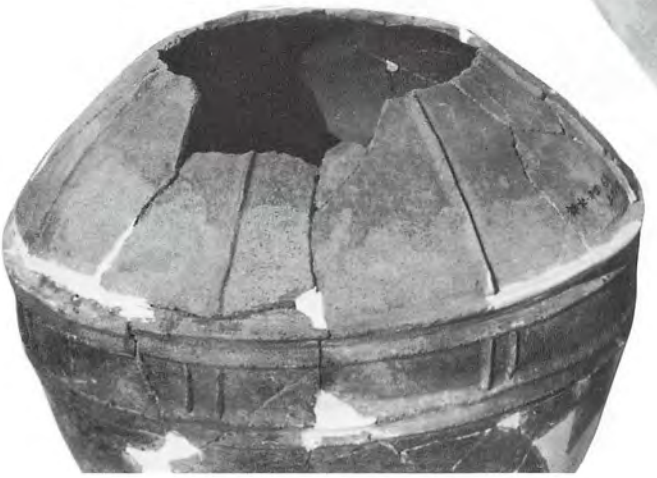
図版18



上甕

第二調査区出土
甕　棺

下甕



6号上甕

第四調査区出土
甕　棺

6号下甕

**神水遺跡出土甕棺**

Ⅲ－H18

Ⅲ－H19

Ⅲ－H23

Ⅲ－H25

Ⅲ－H26

Ⅲ－H27

Ⅲ－H28

Ⅲ－H53

Ⅲ－H55

Ⅲ－H58

Ⅲ－H91

Ⅲ－H109

Ⅲ－H111

Ⅲ－H112

Ⅳ－H4

Ⅳ－H15

Ⅳ－H18

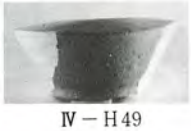
Ⅳ－H19

Ⅳ－H22

Ⅳ－H24

Ⅳ－H45

Ⅳ－H47


Ⅳ－H49

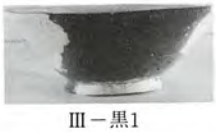
Ⅳ－H52

Ⅳ－H56

Ⅳ－H113

Ⅳ－H115

Ⅳ－H14


Ⅲ－黒1

Ⅳ－S1

Ⅳ－S6

Ⅳ－S17

Ⅲ－S2

Ⅲ－S6

Ⅲ－S3

**神水遺跡出土 土師・黒色土器，及び須恵器**

Ⅲ，Ⅳは各調査区
H 土師器　S 須恵器　黒 黒色土器

図版20

縄文土器（斜行縄文）

縄文土器（曽畑式土器）

Ⅲ－Y9

Ⅲ－Y12

Ⅱ－Y86

Ⅳ－Y71

Ⅳ－Y58

Ⅳ－Y70

Ⅱ－Y85

Ⅳ－瓦49

神水遺跡出土縄文，弥生土器及び布目瓦

付　論

# 熊本市神水（くわみず）カメ棺弥生人骨

産業医科大学解剖(人類)学
教授　北　條　暉　幸

昭和61年2月15日

# 目　　次

本　文
緒　言
神水遺跡と人骨出土状況
人骨所見

挿　図
図1　神水9号カメ棺人骨出土状態
図2　神水11号カメ棺人骨出土状態
図3　神水13号カメ棺人骨出土状態
図4　神水14号カメ棺人骨出土状態

写真図版
1．神水9号人骨、梨状孔下縁に前鼻溝
2．神水9号、下顎骨
3．神水11号頭蓋上面観
4．神水11号人骨脛骨（ヒラメ筋線が後縁に観察される）
5．神水13号人骨（骨端軟骨が観察される）
6．神水13号、下顎骨
7．神水14号、前頭骨、頭頂骨矢状縫合下顎骨（一部）

付　論

# 熊本市神水（くわみず）カメ棺弥生人骨

産業医科大学 解剖(人類)学
教授　北　條　暉　幸

## 緒　言

表記の人骨は、昭和59年4月から昭和60年3月まで、熊本県教育庁文化課が、熊本市神水遺跡（江津湖公園建設地）を発掘した際、出土したもので、筆者にその研究が依頼されたものである。

中部九州弥生人骨の発掘例は少ない[1-2]。しかし、多数の弥生カメ棺が、宇土市（うとし）付近を南限とし、これより以北に発掘されているが、宇土市以南にはカメ棺の発掘例はない。また、中部九州では、これらのカメ棺に弥生人骨が残存していることは稀である。阿蘇の火山灰による酸性土壌のため、弥生人骨が残存し難いからである。

特に、中部九州弥生人の研究には根気が要る所以もここにある。

弥生人骨の研究によって、得るところは大きいと思う。彼等の身長、体つき、顔つきなどの特徴、さらに日本人の起源の解明に寄与することもあり、現代人との比較もできよう。

現在までのところ、筆者のもとで、完全かまたはほぼ完全な弥生人骨を多くはないが、研究中である。

今回、ここに発表せんとする神水カメ棺弥生人骨中、顔面全体が得られた個体はないが、顔面の一部、あるいは下顎骨の形態の観察と計測を行うことができた。

ここに、神水カメ棺弥生人骨の特徴を明らかにし、中部九州の他の遺跡（玉名市立願寺カメ棺[3]、宇土市畑中カメ棺[4]、熊本市小山カメ棺[1-2]、北部町鶴羽田山際カメ棺[2]、八代平野小川町大坪貝塚[5]）出土の弥生人骨の特徴と比較検討し、報告する。

## 神水遺跡と人骨の出土状況

人骨の発掘は、熊本県教育委員会によって、同委員会文化課緒方勉氏の協力を得て、昭和60年1月末から2月初めにかけて行われた。本遺跡は、熊本城を健軍町へ向けて真東に進んだ水前寺近くの台地の辺縁に位置し、合計16基の弥生中期カメ棺（須玖式および黒髪式）が発掘されたが、中の人骨の保存状態は悪いものが多く、実際に観察および計測に耐えた人骨は、9号、11号、13号および14号の4体であった。

人骨の出土状態は、図1～3に示されている。また、カメ棺の分布状態は、遺跡全体の発掘責任者である熊本県教育委員会文化課の緒方勉氏の記載を参照されたい。

## 人骨の所見

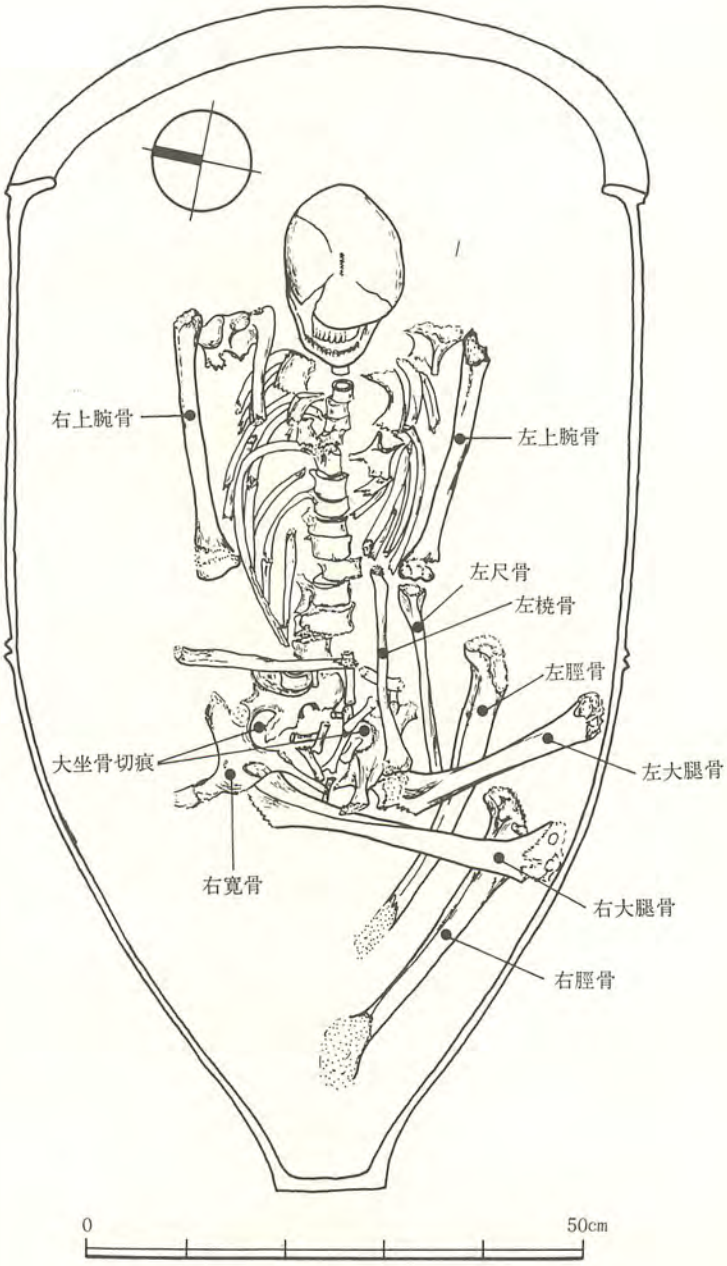



図1　神水9号カメ棺人骨出土状態

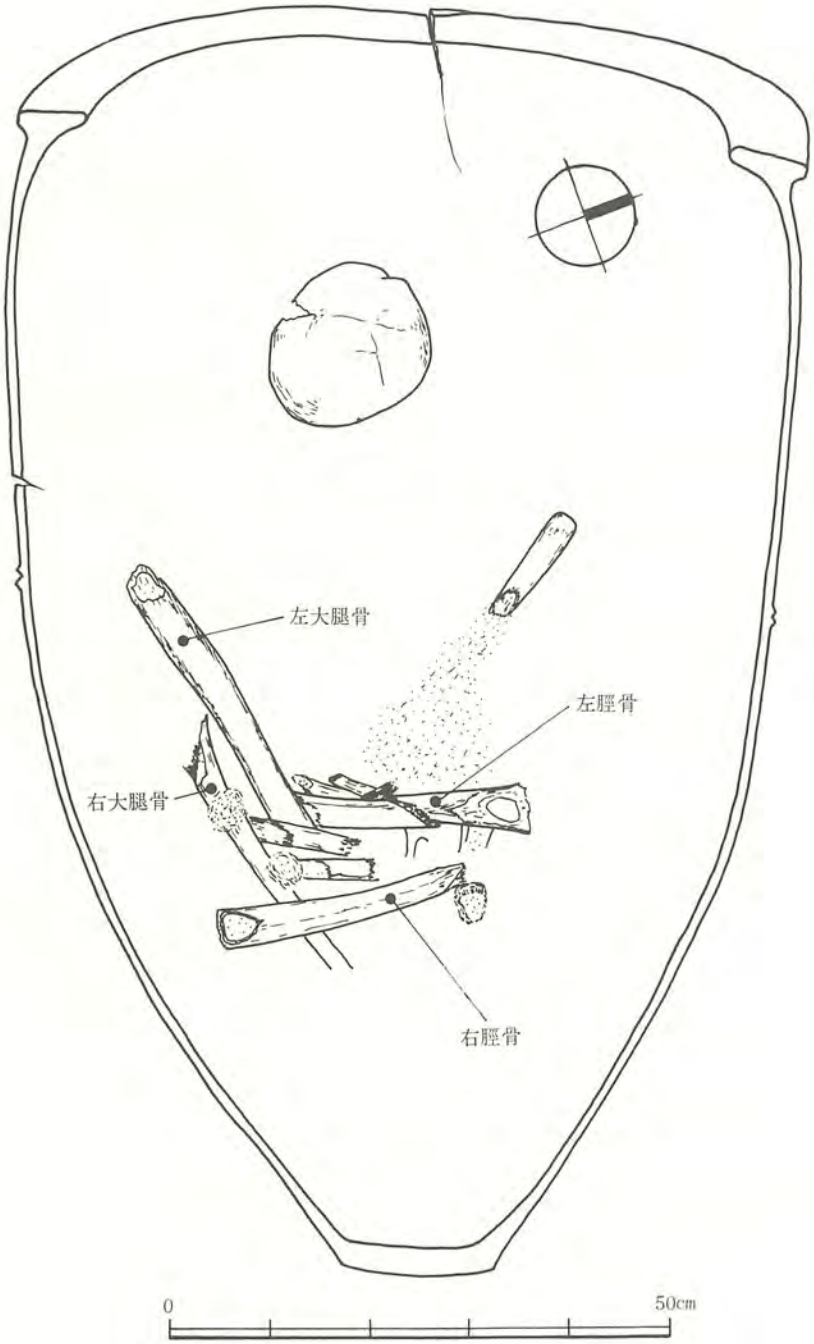



図２　神水11号カメ棺人骨出土状態

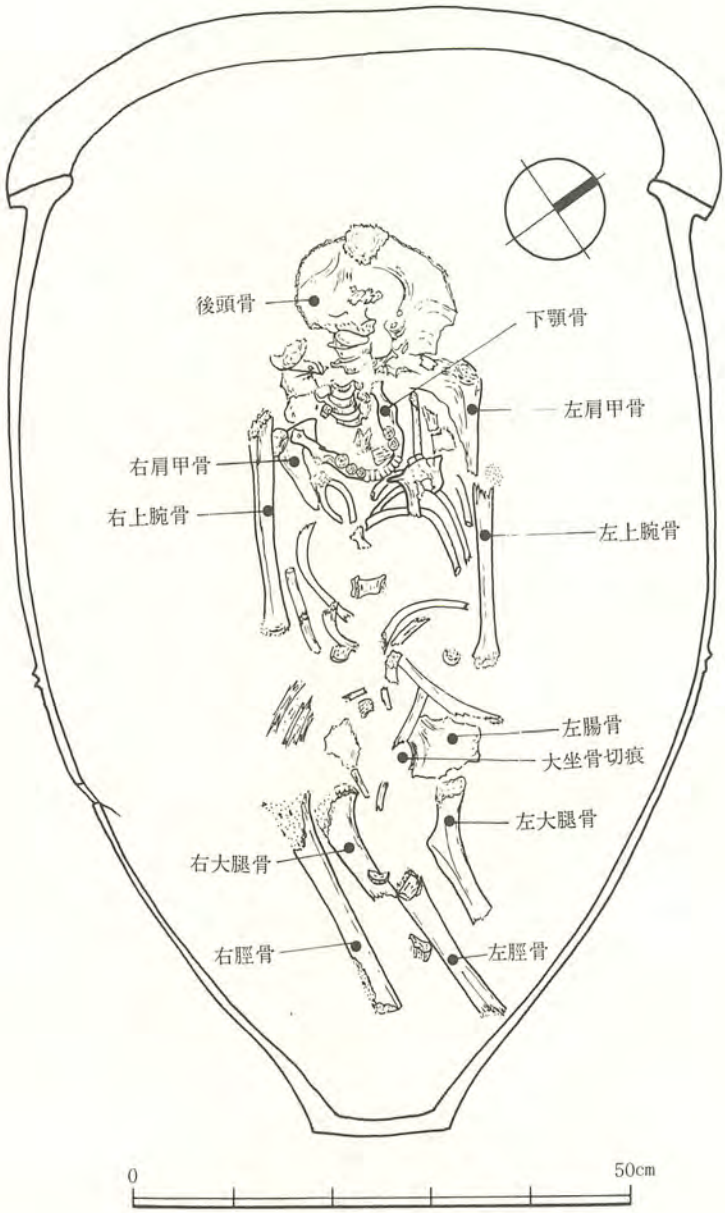



図3　神水13号カメ棺人骨出土状態

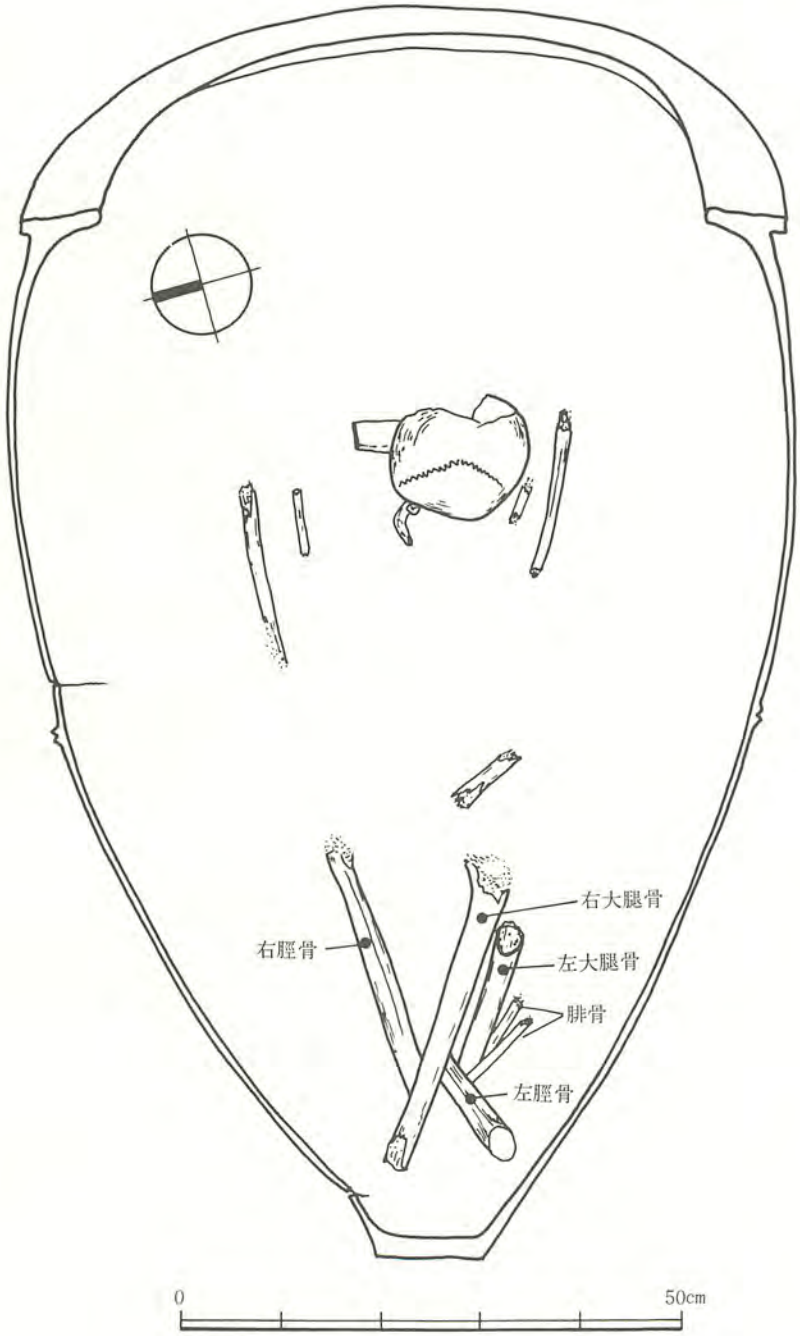



図 4　神水14号カメ棺人骨出土状態

1．9号人骨（図1、写真1、2）

頭蓋は残存するが、もろく、全体の復元は不能であった。外後頭隆起は小さく、乳様突起も小さい。細く、きゃしゃな右鎖骨、大きな大坐骨切痕（寛骨）などから、本人骨は女性と推定される。仙腸関節付近の関節傍溝は浅いが、4㎜の幅を示す。

恥骨結合の残存部を含む骨の各部から、30才代後半の成人と推定されるが、下顎骨の左右大臼歯は脱落し、歯槽は閉鎖している。また残存する歯の咬耗は甚しく、切歯および犬歯の咬耗は3度を示し、歯の酷使が原因と推定される。また、歯の脱落の状態などは、歯槽膿漏が原因と考えられ、栄養不良も考慮すべきであろう。

上肢骨である尺骨の骨間縁は鋭く、また下肢骨の脛骨のヒラメ筋線は著明な2条の隆起を形成する。脛骨中央矢状径は左右とも28㎜、同横径左右とも18㎜、同横断指数左右とも64.3であって、扁平脛骨 platycnemy である。実際、強い扁平性のために脛骨は鎌のように鋭く見える。

左大腿骨の最大長390㎜（推定）から、ピアソンの式による推定身長は、728.44＋1.945×390として計算すると1486.99㎜すなわち148.7㎝である。

顔面部は、上顎骨の一部と下顎骨を残存する。上顎骨の鼻孔下縁、すなわち梨状孔下縁は著明な前鼻溝を形成する。

下顎角幅101㎜、右下顎枝高62㎜は、筆者の報告した宇土市畑中（はたけなか）遺跡カメ棺弥生中期女性人骨の下顎角幅95㎜より大きく、アゴの幅が広く、エラの張った顔であることを示している。

上顎、下顎の歯は前へ突出した傾向があり、反っ歯である。

左寛骨の仙腸関節前端（同関節が弓状線の延長と接する点）から恥骨結合面後端までの距離は108㎜で、骨盤は比較的小さい。

2．11号人骨（図2、写真3、4）

全体に保存極めて不良。頭骨は厚く、大腿骨粗線の高まりは強く、脛骨のヒラメ筋線の高まりが強い。かように頑丈な骨格を所有するから、本例を男性、成人と推定できる。

頭部について、同最大長181㎜、同最大幅151㎜、同長幅指数83.4で、典型的な短頭型であって、立願寺カメ棺人骨の79.8、小山カメ棺人骨78.1よりも大きい。

左脛骨は残存し、中央矢状径32㎜、同横径19㎜、同横断指数59.4は強い扁平性を示し、扁平脛骨 platycnemy である。

3．13号人骨（図3、写真5、6）

寛骨のY字軟骨が存在していることは、左腸骨と左坐骨との間のギザギザの結合面の存在で明らかであり、年令は15～6才位と推定される。

左大坐骨切痕の大きいこと、左乳様突起の極めて小さいことから、女性と推定される。

蝶形後頭結合の未骨化、左肩甲骨関節窩および左大腿骨骨頭部にも未骨化の部分がある。ま

た下顎骨第３大臼歯は左右とも未萌出である。

下顎骨の保存がよく、下顎角幅は98㎜である。脛骨中央矢状径右28㎜、左26㎜、同横径右22㎜、左21㎜、同横断指数右78.6、左80.8は、広脛であり、扁平性はない。

大腿骨、脛骨の最大長は計測できず、身長の推定は不能である。

４．14号人骨（図４、写真７）

保存状態が悪く、もろい。眉弓が弱く、前頭骨は薄く、矢状、人字両縫合は開離しており、若い女性と推定される。

下顎骨の前部に歯が残存して、この部が残存し、歯の咬耗が強く、２～３度である。オトガイの形成は明らかである。

なお、４号カメ棺には人骨の破片がわずかに残っていたが、保存が悪く性別などの推定はできなかった。また12号カメ棺にも頭骨の一部が残っていたが、保存不良であって、採り上げが困難で、性別の推定はできなかった。その他のカメ棺には人骨が遺残しなかった。

## 考　　按

以上、記した神水遺跡人骨の特徴をまとめ、従来、筆者その他によって報告された九州弥生人の結果と比較検討する。

保存されていたのは、９号、11号、13号および14号の各人骨であった。このうち、11号は成人男性、９号、14号は成人女性、13号は15～６才の女性と推定された。

身長推定の可能であったのは、９号のみで148.7cmである。これは、あくまで大略の推定値であるが、筆者の研究による宇土市畑中（はたけなか）カメ棺人骨（女性）のピアソンの式による推定値146.9cmと大差はなく、この２例の平均値147.8cm、標準偏差1.27である。

本遺跡出土の男性人骨の身長は推定できなかったが、中部九州弥生人男性の身長について、筆者その他が行って来た研究結果をリストアップすると

| | |
|---|---|
| 玉名市立願寺（りゅうがんじ）カメ棺人骨[3] | 164.1cm |
| 熊本市小山（おやま）カメ棺人骨[1-2] | 165.6cm |
| 北部町鶴羽田（つるはだ）山際（やまぎわ）カメ棺人骨[2] | 160.0cm |
| 小川町大坪遺跡弥生後期人骨[5] １号 | 157.8cm |
| 13号 | 168.0cm |

５例、平均値163.1cm、標準偏差　4.15

以上の身長平均値を、九州内および土井ヶ浜弥生人の平均値と比較してみると、

| | 男性 | | 女性 | |
|---|---|---|---|---|
| | 例数 | 平均値(cm) | 例数 | 平均値(cm) |
| 中部九州弥生人（北條） | 5 | 163.1 | 2 | 147.8 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 三津弥生人　（牛島[6]） | 7 | 161.98 | 2 | 151.91 |
| 土井ヶ浜弥生人（財津[7]） | 18 | 162,81 | 16 | 149.97 |
| 西北九州弥生人（内藤[8]） | 16 | 158.79 | 8 | 147.91 |

中部九州弥生人は、西北九州弥生人より男性は高く、女性はほぼ同じであり、北部九州弥生人より男性は少し高い傾向があり、女性は少し低い傾向がある。しかし、中部九州弥生人の例数の増加をまって、さらに確かな比較研究を行いたい。

なお、上記の小川町大坪遺跡後期弥生人骨には、ゴホウラ貝製貝輪を左手首に着装していたことに注意したい[5]。

頭骨については、11号（男性）の頭骨長幅指数は83.4で、短頭型であった。

顔面部は保存不良であったが、下顎枝高は9号（女性）で62㎜、宇土市畑中人（女性）で53㎜、下顎角幅は9号で101㎜、13号（女性）98㎜、畑中人95㎜であるから、畑中人よりも少しアゴの張った顔つきである。

上顔高、中顔幅については、神水弥生人の計測値は得られなかったが、小山弥生人（男性）、畑中弥生人（女性）の上顔高、中顔幅はそれぞれ66㎜、101㎜；60㎜、88㎜であって、ウィルヒョー上顔指数はそれぞれ65.3および68.2である。この両指数値は、低上顔型であるが、西北九州弥生人平均値男性64.84；同女性63.49に比べると男性は僅かに高く、女性は明らかに高い。これを土井ヶ浜弥生人平均値男性70.0、同女性69.3に比べて、男性は明らかに低く、女性は少し低い。

中部九州弥生人の顔つきを論ずるには、未だ、いささか例数が少い。北部九州弥生人よりは低顔の傾向を示しているように見えるが、今後の研究成果をまって検討したい問題である。

神水弥生人の脛骨には、扁平性が認められることに注目したい。9号（女性）は左右とも64.3、11号（男性）の左は59.4の脛骨横断指数を示す。ともに現代中部九州人には認められない程の強い扁平性であって、弥生人の特徴となっている。

## 引　用　文　献


1．北條暉幸(1980)：熊本地方人頭骨形態の時代的変化の概観。熊本県文化財調査報告、第46集（川田京坪遺跡）　付論2．19―23

2．北條暉幸（1985)：中部九州における弥生人。第181回肥後考古学会例会講演論文（昭和60年3月10日、於熊本市立博物館）

3．里一郎・横手荘介・本田重明（1959)：熊本県玉名郡立願寺発掘の弥生時代人骨について、熊本医学会雑誌、33：2483―2491

4．北條暉幸・平山修一・木下洋介（1981)：宇土市松山町畑中遺跡出土の甕棺、宇土市史研究2：1―10、付図

5．北條暉幸(1986)：熊本県八代平野小川町大坪貝塚出土の弥生後期人骨について、第91回日本解剖学会総会抄録、於昭和大学医学部
6．牛島陽一(1954)：佐賀県東背振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究、人類学研究、1巻、273—303
7．財津博之（1956)：山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて、人類学研究、3巻、320—349
8．内藤芳篤（1971)：西北九州出土の弥生時代人骨、人類学雑誌、79巻、236—248

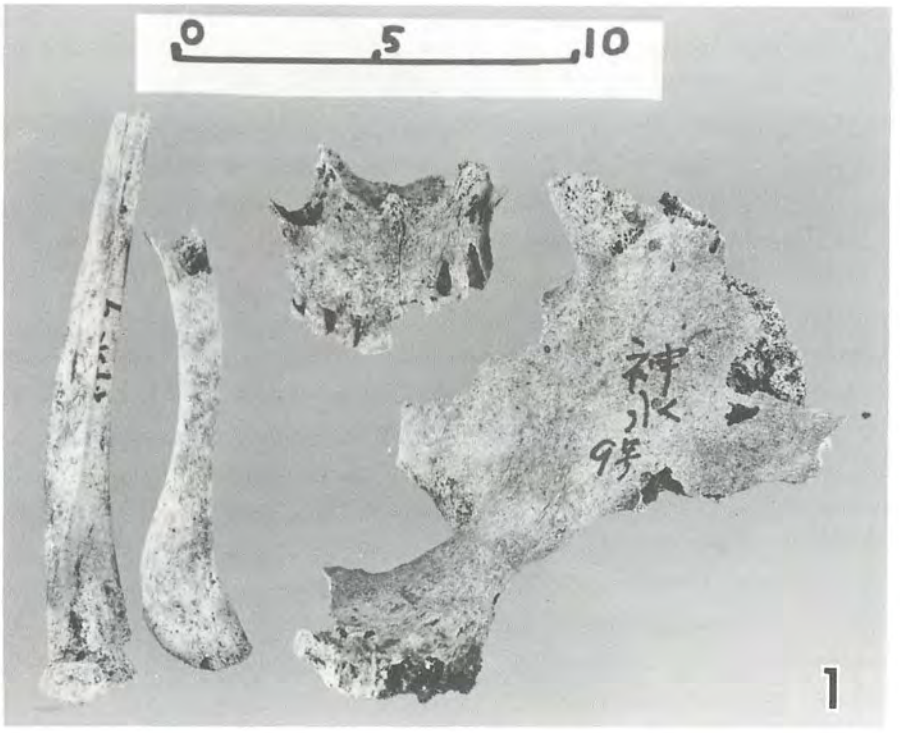



写真１．神水９号人骨梨状孔下縁に前鼻溝

写真２．神水９号下顎骨

写真３．神水11号頭蓋上面観

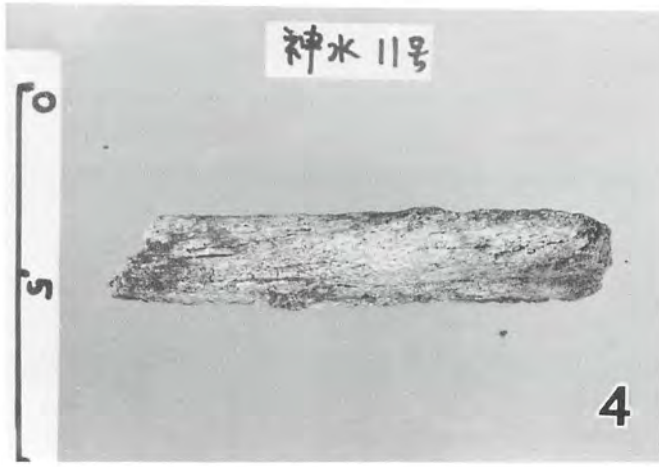



写真４．神水11号人骨脛骨（ヒラメ筋線が
後縁に観察される）

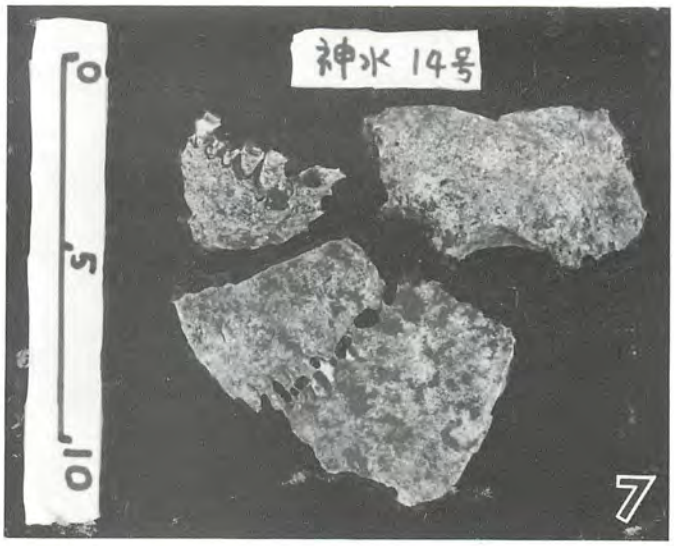



写真７．神水14号前頭骨頭頂骨矢状縫合
下顎骨（一部）。

写真５．神水13号人骨（骨端軟骨が観察される）

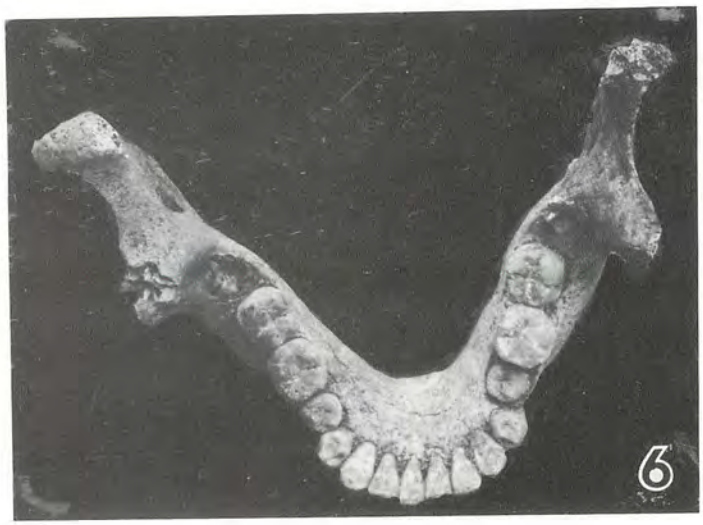



写真６．神水13号下顎骨

# あ と が き

神水遺跡、中でも第一・第二調査区の遺物を整理、執筆するに及んで遺構と遺物との関係、共伴遺物をどう考えるか、という古くて新しい命題につきあたった。とくに銅鉇と同住居址出土の土器の編年上の位置づけについては、金海貝塚における同種の遺物ともからんで断定するに至らなかった。これに関して、戦後まもない昭和25年、来日したトインビー一行に加わり講演した米国ペンシルバニア大学のクーン博士の話の一節を思い出さずにはいられなかった。

博士の話は、たまたま中近東あたりの発掘調査の内容にふれ、「事故にあった住居址」は大変都合がよいとの説明のあと、続けて「何故なら、生活の復元に役に立つ」といった主旨の説明があったと思う。

本稿の中にも述べたが、これまでの調査で事故で覆滅した住居址にほとんど出合っていない。そこで多くの場合、習慣的に過去の形式観念の中で遺物を処理することが多いが、それだけのための調査では、多額の費用をかけて調査することの意味が減殺するのではなかろうか。（緒）


**神 水 遺 跡 II**

熊本県文化財調査報告　第82集

昭和61年３月25日　印刷
昭和61年３月30日　発行

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　コロニー印刷
〒860 熊本市二本木３丁目12－37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 82 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：神水遺跡 2
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/